
街の事務員の日常

滝田TE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

街の事務員の日常

【Nコード】

N5792X

【作者名】

滝田TE

【あらすじ】

とある街のとある商店に勤める新米事務員は、現代日本から異世界にやってきた頼りなさそうな男だった。

上司に叱られ、夜は友人たちと飯を食いながら笑い合い、ちょっとだけ仕事をする頼りない新米事務員。

事務員と言いつつも事務仕事の描写は殆どなく、血沸き肉踊る戦闘シーンも、陰謀に巻き込まれることも（多分）ない、ごく平和な日常を送る事務員は、今後どうなるのか。

そんな、事務員と、それを取り巻く人々との遣り取りを書いた日常モノです。

第一話 事務と魔法（前書き）

基本的に、この作品では残酷な戦闘シーンや、過激な性行為を描写する予定はありませんが、一応、今後描写の可能性のあるものとしてR-15のタグを付けさせていただきました。

また、誤字・脱字・日本語としておかしな表現等がありましたら、ご指摘いただけると幸いです。

2011/10/14追記

投稿する際、誤って種別を「短編小説」に設定しておりました。読んでくださった方、評価してくださった方、お気に入り登録してくださった方には申し訳ないのですが、一度削除し、再度「連載小説」として投稿させていただきます。

一晩経つてから気付くとか……。緊張していたとか、舞い上がっていたとか、色々言い訳はできるのですが、手違いは手違いです。本当に申し訳ありません。

第一話 事務と魔法

アルタスリーア王国一の商業都市アーセナクトに本社を構える商店の一つに、マリポーという店がある。

レンガ造りの二階建ての建物に、大陸公用語で“マリポー商店”と書かれた看板を掲げ、入り口の上には、鍋とペンを象った銅製の意匠看板を吊り下げている。

主に、日用品や事務用品を取り扱っており、他に、僅かながら隣国のルザル王国産の茶や煙草といった嗜好品も店先に並ぶこともある。要するに雑貨屋であった。

従業員は店主のマリポー・ワットの他に十三人。大半が人間族であるが、中には獣人族や妖精族と呼ばれる種族も働いている。

店内部署は、仕入れ、流通、販売、在庫管理、事務に分けられ、仕入れは主に店主のマリポーとその息子ブルソーの二人が担当し、流通は人間族・獣人族合わせて五人、販売には人間族・妖精族合わせて三人、在庫管理には人間族・獣人族の二人、事務には人間族が二人といった配属になっていた。

アーセナクトに限らず、アルタスリーア王国には人間族以外の種族も多い。

猫人族、犬人族、鳥人族、狼人族、虎人族、獅子人族といった獣人族。

土の妖精族ノーム、岩と金属の妖精族ドワーフ、森の妖精族エルフ、草原の妖精族ハーFRING、水辺の妖精族ピクシー、海の妖精族ネレイド、街の妖精族ブラウニーといった妖精族である。

獣人族は妖精族に比べ、環境適応性が高いのか大抵の街に何れかの種族が暮らしているが、妖精族はその属性により、街によって住んでいる種族が偏る。

西の工業都市アーラドルにはドワーフやブラウニーは居るが、エルフやネレイドは殆ど居ない。逆に南の港湾都市ダリンにはピクシーやネレイドが多いが、ドワーフやハーFRINGグやハ滅多に見かけない。

街の北にそれなりの大きさの森が存在し、東には平原が広がっているアーセナクトには、ノームやエルフ、ハーFRINGグ、ブラウニーと、他の街に比べ多種の妖精族が生活している。

マリポアの店に勤めているのは、犬人族が二人、鳥人族が一人、エルフ族が一人であった。

事務室の扉を勢い良く開けながら、極々簡素な白いシャツと草色のズボンを履いた犬人族が入ってくる。

「おい、シユー。アーラドルからの商品が届いたぜ。中身と数量は確認済みだ」

人間と同じく二足歩行で、体型も人間と殆ど変わらない。体つきは鍛錬を重ねた人間の剣士のように機能的な筋肉質で、その体躯を茶色の毛皮が包み、ズボンの尻の辺りに開いた穴から同じ色の毛に覆われた尻尾が生えていた。

また頭部は人間のそれとは違い、その名の示す通り、犬の頭が乗っていた。

事務室で忙しそうに木箱を抱えて歩き回っていた人間族の男性に歩み寄る。

「で、コイツが納品板」

男性の傍で立ち止まると、犬人族はそう言いながらズボンのポケットから一枚の手の平サイズの金属板を差し出しながらそう告げた。

「ああ、ご苦労様ですゼリガさん。イルーさんには、こちらから在庫板を渡しておきますね」

シューと呼ばれた男性は、犬人族の名前を口にすると笑顔で応える。

柔らかな笑みを湛えた、纏まりの悪い黒髪に黒い瞳の人間族の男性は、身長こそ頭一つ分ほどゼリガより高いが、体つきは良く言えば細身、悪く言えばひよる長く、力仕事とは無縁のように見えた。

青年と言うには言動がやけに落ち着いており、壮年と言うには線の細さやどこか幼さの残る顔つきが気になる。

その長身を、紺色長袖の木綿の上着に前掛け、上着と同色の長ズボンで包んだ男性は、受け取った金属板より二周りほど大きな金属板を、机の端に置かれていた木箱から取り出した。

「すみません、ソーンリヴさん。お願いしていいですか？こちらが納品板と在庫板です」

ゼリガから受け取った納品板と自分の机から持ってきた在庫板、二枚の金属板を持って、シューは隣の机で作業していた人物に話しかける。

深い藍色の髪を肩口で刈り揃え、髪と同じ色の瞳の目はややきついものの、伶俐な顔立ちをした人間族の女性で、シューと同じ紺色長袖の上着に前掛け、同色の長ズボンという出で立ちである。

おそらくこれが、この店での事務員の制服なのだろう。

「分かった。……しかし、いい加減なんとならないのか？ シュウ

イチロウ」

片手で作業しつつ、後輩事務員から金属板を受け取ったソーンリヴと呼ばれた女性は、作業を止めることなく視線だけを傍に立つ男に向けた。

人間族の女性にしては少しばかり凹凸……特に凸の乏しい体つきと、堅苦しい口調が、飾り気のない制服と相俟って、男性的な雰囲気彼女に纏わせている。

年齢はシューーだのシューイチロウだのと呼ばれている人間族の男より三〜四歳年上に見える。

「ええ、私としてもなんとかしたいんですけどね……。幾度か魔法院にも相談に行っただんですが、どうも私には魔術の素質がないようですよ。」

かと言って、術石を使うにも、値段的にとてもじゃないですが私の給金では気軽に買えそうにありませんし……」

ははは、と苦笑し頬を指で掻きながら、彼は言葉を続ける。

「やはり、私が異世界人だからでしょうかね。」

魔法院の導師様にも、普通の人間族にあるはずの魔術の素質が、体内に存在しないというのは有り得ないとまで言われましたから」

「有り得ない……ね」

彼女からしたら頼りなさげな笑いを浮かべている同僚に、何か言いたいことでもあるのだろう。

ふんとばかりに鼻を鳴らして、受け取った二枚の金属板を机の上に並べた。

「ま、あんたらが言うところの獣人族である俺らにも、多少の魔力はあるからなあ。お前さん、ある意味竜族よりも珍しい存在なんじやねえか？わはははは！」

人間族二人の遣り取りを聞いていたゼリガが、豪快に笑う。

「まったく……」。

毎度毎度思うけど、うちの雇い主は何のつもりでこんなのを雇ったのやら。これじゃ私一人で事務やってると変わりやしない」

ソーンリヴは愚痴を零しながら、二枚の金属板に片手をかざした。すると、納品板に刻まれていた二つの数字のうちの一つが消え、その空いた場所に『受領』を表す文字が新たに刻まれる。

同時に、在庫板にずらりと並んでいる様々な商品のうち、一つの商品の数字が、納品板から消えた数字の分だけ増加し、商品名の横に『入荷』を表す文字が浮かび上がる。

この店だけでなく、アルタスリーア王国内で一般的に使われている魔法を利用した出納板である。

『明かり』や『発火』といった初步魔法よりも少ない魔力で、記入・消去・書き換え・数値管理が出来る代物であり、小売業だけでなく問屋業も行う商店には必ずと言っていいほど見かける事務用品である。

この世界に生を受けた種族であれば、大小の差はあれ魔術の素質、即ち魔力を有しているため気軽に扱える出納板も、魔力を持たないシュウイチロウ……地球という惑星の日本国出身である安来修一郎やすきしゅういちろうには扱えないのだった。

「はい。じゃあシュウイチロウ、後は任せたよ」

納品板は『確認済み』と書かれた専用の木箱に納め、在庫板だけ

修一郎に戻しながら、ソーンリヴは自分の机に向き直ると作業を再開した。

「ありがとうございます。」

あ、ゼリガさん、ダリンへの荷はもう出ましたよね？」

ソーンリヴから在庫板を受け取って礼を述べると、何かに思い当たったように修一郎はゼリガに尋ねた。

「おう、ダリンの荷は昼一で出発したぜ？なんだ？何か積み忘れてもあつたか？」

修一郎の言葉に、ゼリガは怪訝な表情を浮かべながら問い返す。

「いえ、積み忘れはありませんよ。」

では、ゼリガさん。アーラドルからの荷物を倉庫に運んだら、今日はもう上がっていただいで結構ですよ。」

犬人族は猫人族や虎人族などに比べ、表情が豊かで、感情の起伏も人間のそれと大差ない。

当初は戸惑っていたものの、今では修一郎もこの気さくな犬人族と接することができている。

「ん？そりゃ有難いけどよ。王都からの荷はどうするんだ？アレも今日到着予定だろ？」

「ああ、それについては先ほど“社長”から言伝がありました。」

白出納板と羊皮紙の仕入れ数調整に手間取って二日ほどずれこむそうです。」

白出納板とは種類分けされてない、所謂まっさらな出納板のことだ。

これに簡単な魔法を付与することにより、出納板、納品板、在庫板、売上板と、それぞれの性質と機能を与えることができるもので、修一郎の世界で言う補助簿に近い。

ちなみに、金銭出納簿と、修一郎の世界で言うところの預金出納簿にあたる資産出納簿、売掛・買掛簿は、市販の羊皮紙製を使用することになっており、こちらは修一郎とソーンリヴが分担して記入した後、主人であるマリポーに、週に一度確認してもらい検収済みであるサインを書き込んでもらうことで、一連の作業は一区切りがつくようになってる。

「お、また向こうの言葉かい？確かシャチョーってのは店の主人とか一番偉いヒトって意味だよな？」

覚えたぜ？と言わんばかりの表情でゼリガが修一郎に笑いかける。

「まあ、そんなところです。どうにもこの店の規模からして個人的に社長と呼ぶのが一番しっくりくるもんで、つい。」

店長とお呼びするには店が大きすぎますし、私は秘書でも召使でもないので旦那様というのもちょっと……」

「ヒシヨ？これまた新しい言葉だな。ヒシヨってなあどういう意味だ？」

「ああ、また。気をつけてるつもりなんですけどね、いかなあ。秘書というのはですね、その組織の長または組織全体を補佐することを専業とする役職……貴族で言うと執事、国で言うと宰相に近い感じでしょうか」

厳密に言つと三割方正解で七割方間違になるのだが、修一郎は元の世界での実際の秘書の扱いを思い出してかなり大雑把に説明するに止めた。

この世界には、元々会社という概念がないうえ、修一郎たちのような事務員という職業自体もここ数年で耳にする機会が増え始めた状態である。

これからもつと人口が増え、商業が成熟して有形無形に関わらず今まで以上の多種多様な商品や情報が取引されるようになり、組織が複雑化すれば、自ずと秘書や専務といった役職も生まれてくるのだろうが、現段階では何処の商店や組合にも秘書という役職は存在しない。

「へえ。宰相様ねえ……。ま、確かにうちの店じゃそんなお偉い肩書きのヒトはいらねえわな」

そう言つて再び笑うゼリガだったが、これは思うところがあったわけではなく、単純にアーセナクトに数ある商店の中での、マリボ―商店の規模を考えてのことだろう。

「まあ、私もあの雇い主のことを旦那様とは呼びたくはないな。悪い人じゃないんだが……」

二人の会話を聞いていたソーンリヴが作業の手を止めないまま、会話に加わる。

「それはともかく、シュウイチロウ。アーオノシユの荷物の件は、私は聞いてないぞ？いつ、連絡があつた？」

「あ、すみません、ソーンリヴさん。実は先ほど昼食から戻る際に、店先でちょうど早伝役そうでんえきの方に会いまして」

早伝役とは魔法院が国からの要請を受けて、公的に行っている業務で、『伝達』の魔法が付与された『伝達板』を利用した遠隔地との意思疎通を可能にするものだ。

ある程度魔力を有する者ならば、独自で『伝達』を使うことができるが、一般市民にはそこまでの魔力を持たない者が殆どであるため、魔法院がその代行を請け負うことになっている。

ただし、誰でも利用可能というわけではなく、騎士団、警護団、医術士、王都若しくはアーセナクトに本拠を構え且つ総従業員が二十人を超える商人、アーラドル、ダリンに事務所を持ち総従業員又は団員が三十人を超える工房、組合にしか利用は許可されていない。

利用許可の登録は、規定の書式に必要事項を記入し、申請費用を魔法院に納付すると、専用の伝達板が作成されて登録済みとされる。その際、最低二名の使用者を登録し、登録された者以外は使用できなくするための魔法が掛けられる。

基本的には伝達板は二枚になるのだが、追加料金を納付すれば三枚以上の保持が可能となる。

ただし、この伝達板は一年で効力を失うため、継続利用するためには毎年登録申請時と同額の料金が必要となり、その額も馬鹿にならないこともあって、本当の意味での一般市民にはあまり利用する機会はない。

また、実際に利用するにあたって、必ず魔法院直属の担当者が監視役として付く。

これは犯罪や謀略のために利用されることを防ぐためだ。

その担当者のことを、一般的に早伝役と呼ぶのだ。

そして、伝達板は早伝役立会いの下でないと発動できない仕組みとなっている。

そのため、連絡が入ったその場に偶然早伝役が居たりしない限りは、利用者はわざわざ魔法院か早伝役駐留所まで出向かなければな

らなかった。

それでも早文や早馬を使った連絡方法に比べれば、信頼性や所要時間の短縮などの恩恵に与ることができる早伝役は、それなりに利用されているようだ。

このあたりのシステムは、修一郎の居た『元の世界』では電話や携帯電話に相当するものなのだろうが、システムの簡略化に関してもう少しなんとかならないのだろうかと修一郎は思っている。

「ああ、伝達板は今週はシュウイチロウが当番だったな。

だが、連絡が入っていたのに呑気に昼飯食ってたのか？」

理由を聞いて、ソーンリヴは納得したが、その後の修一郎の行動を疑問に思ったのだろう、少しだけ口調に叱責の気配を滲ませて問い掛けた。

「もちろん『至急』の表示があれば、すぐさまこちらから早伝役を探したでしょうけどね。

何も表示がなかったもので、一度事務所に戻ってからと思いましたが」

「で、運よく店先で早伝役に出会えた」と

「ええ。どうやらウチの店でお茶を買われた帰りのようでした。

結構ちよくちよく寄ってくださるそうで、お得意様のようでしたよっ。」

何が可笑しいのか、笑みを絶やさぬまま聞いてもいないことまで説明する修一郎に、ソーンリヴは眉間を親指と人差し指で摘むように押さえながら、先ほどよりもトーンを落とした声で呟く。

「そうじゃなくてだな……」

なんで上司の私が何も知らなくて、新入りのシュウイチロウが指示を………はぁ………もういい」

「まあまあ、ソーンリヴも細かいことに拘るなって。」

俺らが帰つちまう前に“シャチョー”からの指示も分かったことだし、それでいいじゃねえか」

取り成すように割って入ってきたゼリガの言に、ソーンリヴもこれ以上は時間の無駄だとばかりに、片手を挙げると手のひらを振った。

「分かった分かった。さっさと倉庫に行ってイルーに在庫板渡してきな。」

流通はこれで上がりだろうけど、他はそうじゃないんだからな」

そう言いつつ、何かに思い当たったようにソーンリヴは修一郎を睨む。

「まさか、この件以外でも何かマリポーさんから指示が出てるんじゃないだろうっね？」

普段から目つきの鋭い印象のあるソーンリヴの表情が、さらに険しさを増す。

「いえ。社長から承った指示は流通部門に関してのみです。」

他は通常どおりに勤務するようにと………」

「そうか。じゃあゼリガ、あんたは他の流通の面子にそのことを伝えておいてくれ。」

倉庫への搬入が終わったら一度事務所に顔出してくれよ。勤務表に書いとかないといけないからね」

「了解だ。んじゃ、シユー。行こうぜ」

「はい。」

では、ソーンリヴさん。ちょっと倉庫まで行ってきます」

「はいはい」

面倒臭そうに忍えながら、既に先輩事務員は自分の作業に集中すべく、机の上の各種金属板と羊皮紙製の帳簿に向き直って、忙しく手を動かしていた。

事務室を後にしたゼリガと修一郎は、従業員用の狭い通路を通過して店舗裏にある倉庫へ向かった。

小売業だけでなく問屋業も営んでいるマリポー商店の倉庫は、天上、奥行きも広く、修一郎が働いている事務室の優に十倍の広さがあった。

壁の随所に明り取りの窓が設けられているが、それでも室内の隅々まで外光が射し込むはずもなく、全体的にぼんやりと明るい程度である。

その中を、人間族の男性と鳥人族の男性が、忙しそうに動き回っている。

倉庫の入り口に立った修一郎は、大きな声で在庫管理部門の担当者の名を呼んだ。

「イルーさん！アーラドルからの荷が届きましたー！搬入を始めますが宜しいですか？」

名前を呼ばれた鳥人族が、倉庫の隅から文字通り飛び上がると、その特徴である背中の翼を羽ばたかせこちらにやってくる。

「……遅かったな。荷物は疾うに到着していたのではなかったか？」

ゼリガと同じ白のシャツに、こちらは水色のズボンを履いている。犬人族とは違い、背格好も顔つきも人間とまったく変わらない鳥人族だが、性格はあまり社交的とは言えず、感情も表に出すことは滅多にない。

かと言つて他種族と交流を持たないかと言えば、そうでもない。必要最小限の社交性は持ち合わせているようである。

これが狼人族になると、そうはいかない。他種族から『孤高の種族』と揶揄されるように、己が種族以外とは殆ど交流を持つとしないのだ。その性格からか、狼人族を街中で見かけることはまず、ない。

精々が、冒険者または探鉱者と呼ばれる連中がたむろしている酒場で極々たまに見かけるくらいだ。

「ええ。まあちよつと。」

すぐに搬入していただきます。ゼリガさん？」

実に日本人らしい曖昧さで言葉を濁しつつ、修一郎がゼリガを見遣ると、心得たとばかりにゼリガは建物裏の荷卸し場へ向かって駆け出して行った。

「それから、これが在庫板です。アーラドルからの、筆器具類、顔

料、銀製食器、木製食器類になります。

月末が近いので、入荷量はそれほどでもないようです」

修一郎は小脇に抱えていた金属板をイルーに差し出すと、鳥人族の男は真面目な顔でそれを受け取った。

くすんだ金髪を短く刈った、彫りの深い顔立ちの鳥人族は、出納板に薄茶色の視線を落とし、商品名と入荷数を確認する。

年齢は三十一歳と聞いているが、修一郎からすると十ほど年上に見える。

「了解した。先ほど販売部門から顔料の蔵出しを頼まれたところだ。数量の調整をやっておいてくれ」

淡々とした口調で、そう告げられた修一郎は、先ほど事務所でのインリヴに見せた情けなさそうな苦笑を再び浮かべ、イルーに告げる。

「そのことなんですが、すみません……」

私は出納板全般が扱えないので、イルーさんにやっていただけると非常に助かるのですが……」

「ああ、そうだったな。すまない。」

分かった、私のほうでやっておこう」

「お手数をおかけします。」

その代わりと言ってはなんですが、その顔料は私が“表”まで運んでおきますよ」

「では、頼む。」

在庫板はその休憩用長椅子の上に置いておくから、帰りに持つ

て行つてくれ」

イルーが視線で示した先には、まさしく作業員が休憩時に使う長椅子があった。

イルー個人の拘りなのか、鳥人族の癖なのかは分からないが、どうやらイルーは、言葉を略したり職場内での略称を使うことを良しとしないようである。

生真面目な鳥人族の男にありがとうございますと応えて、修一郎は顔料が保管されている棚へと足を向けた。

「販売部門から言われた顔料は、バンルーガ王国産の赤色と紺色を二箱ずつだ。間違えないでくれ」

「はい。バンルーガ産ですね」

何度か倉庫での作業もこなしたのだろう、修一郎は然して迷うこともなく、言われたとおりバンルーガ産の顔料が詰めてある木箱の並べられた棚から、赤と紺の木箱を抜き出していく。

自分の手のひらより二回りほど大きな木箱を四つ抱えた修一郎は、“表”、つまりはマリポー商店の店頭へと向かって行った。

従業員専用扉から、修一郎が姿を現したとき、丁度店頭には客の姿はなかった。

裏方である倉庫や事務室などに比べ、店内は十分な照明に、櫛に似た光沢を持つ木材が床、壁、天井に使われており、この店を訪れる客層に合わせた洒落た造りになっている。

店内の広さは修一郎のいた世界の単位で言うと、横幅が約5メートル、奥行きが約6メートル、天井までの高さが約2・5メートルと、他の同規模の店と比べ若干広いと言えなくもない。

しかし、魔法を用いた間接照明を取り入れていることと、床材に木を使っていること、無闇矢鱈に商品を並べるようなことはせず、必要最小限を陳列し、雑貨店にありがちな雑然とした雰囲気を払拭したことが、店主であるマリポーが他店とは違うと自慢するところでもあった。

一般的な店では、照明はランプか術石を用いた燭台の直接照明のみであり、床材は資材として豊富であることや手入れのし易さから砂岩を使用していることが多く、商品は単純に積み上げるか並べるか、良くて棚一杯に陳列して品揃えの豊富さをアピールするからである。

マリポー商店の陳列方法に関しては、修一郎が初めて店内を見た際に、思わず洩らした一言を聞きとがめたマリポーが、試しに修一郎の言う通りに陳列してみたところ、商品自体が見易くなった・圧迫されるような雰囲気はなくなった・どこことなくお洒落な感じがする等の感想が客から寄せられたため、正式採用された。

「お疲れ様です」

店内に居た販売部門の女性二人に声をかけると、修一郎は運んできた木箱を顔の高さまで揚げて尋ねる。

先ほどまで客が居たのだろうか、一人は会計用カウンターで作業しており、もう一人はそこから少し離れたところで陳列棚の商品を暇そつに弄んでいた。

二人が身に着けている衣装はこの店の販売員用制服なのだろう、淡い青の生地を基調として襟と馬乗り（後身頃の腰の辺りの部分）に緑のワンポイント、袖が白といった上着に、上着と同じく淡い青の生地で作られたストラップスで統一されている。

販売員は店の顔だけあって、修一郎たち事務員が着ている地味な制服とは違い、機能性を考慮しながらも、清潔感を出すように配慮がなされていた。

さすがに絹は高価なため、上質ではあるが木綿を使用している点に関しては事務員の制服と然程変わらないのだが。

「言われていた顔料です。赤二つに紺二つ。

レナヴィルさん、これで間違いありませんか」

二人のうち、修一郎の近くに立っていた店員の人間族の女性に声をかけた。

「あら、ありがと。イルーが持つてくるものとばかり思ってたわ。

悪いけど、その棚まで運んでくれるう？」

緩やかなウェーブを描く赤い髪を頂のあたりで切り揃えた、修一郎の世界で言うところのショートボブに近い髪型をした女性である。

接客していないときは、茶色の瞳の半分ほどを瞼に隠すような眠そうな目で、物言いも尊大なものであったが、いざ客を目の前にすると、見事な営業スマイルを顔に貼り付け、耳に心地よい声で嫌味にならない程度に客を褒めちぎることで客の財布の紐を弛ませる。

彼女の特殊技能とも呼べるその振る舞いは、販売部門の他の二人には到底真似出来ないレベルにまで達していた。

加えて、豊満な胸に、細くくびれた腰、形の良い尻、長身であるはずの修一郎とほぼ同じ身長と、修一郎の世界であればトップモデルも充分務まるであろうスタイルは、男性客だけでなく女性客も見惚れることがあるくらいだ。

ソーンリヴ曰く、こんな中流の店でなく貴族相手の店でも充分にやっていけるだろうに。とのことである。

修一郎がレナヴィルに指示された棚に顔料を補充していると、もう一人の店員、クローフルテが近づいてきた。

クローフルテは、森の妖精族エルフの女性である。透き通るような銀髪を腰のあたりまで伸ばし、前髪を小さな飾りの付いた木製の髪留めでまとめている。

淡い空色の瞳につり目がちの切れ長の目、すつと通った鼻筋に形の良い唇と、エルフ族最大の特徴である、長く尖った耳。

スタイルはレナヴィルほどでないにしろ、出る所は出て、引っ込むところは引っ込んでいる。

細身が多いエルフ族にしては珍しいと言えるが、世間一般に言われている「エルフ族には美男美女しかない」との噂を裏付けるには充分な美貌の持ち主だった。まあ、飽くまでも人間族主観でのことだが。

余談だが、レナヴィルもクローフルテも、そして今日は休日となつているもう一人の店員も、販売部門担当者三人の年齢は皆不詳となつている。

長命な種族と言われるエルフ族のクローフルテはともかく、他の二人は人間族であるにも関わらず、誰に訊いても明確な答えが返ってくることはなく、本人たちも答えようとしなかった。

代わりに返ってきたのは「女性に年齢を訊くとは失礼極まりない」というお叱りの言葉と冷たい視線であった。

世界は違えど、こういった女性の反応に関しては共通しているようだ。

「手伝います」

そんな年齢不詳のエルフ族の女性は、木箱を挟んで修一郎の向かいでしゃがみ込むと、無表情で木箱から顔料を取り出し、丁寧に棚に並べていく。

「ありがとうございます、クローフルテさん」

「……マイヤック」

礼を言う修一郎に、クローフルテは無表情のまま呟いた。

「……クローフルテ・マイヤックです」

「あー、シュウイチロウ。」

彼女、家名……んー、エルフ族の場合は氏族名だっけー？で呼ばないと機嫌悪くなっちゃうわよお」

二人をに気だるげに眺めていたレナヴィルが、面倒臭そうに声をかける。

接客時と平時でここまで態度が違う人も珍しいのではないだろうかと思いつつ、修一郎は素直に訂正することにした。

「すみませんでした、クローフルテ……マイヤックさん。助かります」

「……別に敬称は必要ないです。それに怒ってもいません」

“さん”付けは必要ないというクローフルテに苦笑しながらも、修一郎は宥めるように言う。

「まあ、そこは大目に見てくださいよ。まがりなりにも四ヶ月も先輩なんですから。クローフルテさんは」

「クローフルテ・マイヤックです」

相変わらず無表情で修一郎の言葉を訂正するクローフルテだった。

商品の補充を終え、倉庫にて在庫板を受け取った修一郎が事務室に戻ると、仕事が一段落ついたのか、ソーンリヴが左手で右肩を叩いているところだった。

「戻りました。お茶でも淹れましょうか？」

小さく笑いながら、修一郎がそう告げる。

「ん……？そうだな、頼む」

そう言つて、ソーンリヴは眉根を寄せると修一郎を凝視した。睨まれた修一郎は、微かに首を竦めながらも事務室内に設けられた小さな流しへと足を向ける。

「それ程遅くなつたつもりはないんですが……。すみません」

流しの近くにあるランプから焚きつけ用の小枝に火を取つて、小型の簡易竈に向かう自分を凝視したままのソーンリヴに、謝罪の言葉を口にする修一郎。

修一郎の謝罪に一瞬何のことか思い当たらなかったソーンリヴだったが、少し考えて部下である修一郎が言わんとしていることを理解して、訂正する。

「別に怒つてなどいないが？」

……ああ、悪い。睨んでいたわけじゃない。少しばかり目が疲れただけだ」

「そうでしたか。そういえば最近、ソーンリヴさんちよくちよく疲れ目だと言ってますか？」

竈にやかんをかけ、ポットに茶葉を入れながら、振り向くことなく修一郎が問い掛ける。

修一郎から視線を外し、上を向いて目頭を指で揉んでいたソーンリヴは、その仕草を続けたまま、口の端を少しだけ吊り上げて答えた。

「そうだな。誰かさんのおかげで余計な仕事も増えたからな。おかげで私の目は悪くなる一方だ」

「それはいけません。医術士に診てもらったらどうです？」

あとは、目に良い物を食べるとか。たしか、ニンジンやカボチャ、レバー、チーズ、ブドウあたりが良かったはずですよ。

……あ、それとブルーベリーも目に良いと言ってたかな……ただ、こつちの世界にあったかどうか……」

ソーンリヴが半分皮肉、半分冗談で言った台詞の前半部分を見事に聞き流して、修一郎は上司の心配をする。

実際のところは、修一郎が来たことで増えた仕事など殆どない。魔法を使う作業を任せられないだけで、それ以外の仕事に関しては修一郎はそこそこ役に立っている。

むしろ、それまでソーンリヴが一人でこなしていた雑事を修一郎に割り振ることで、彼女自身の仕事は捗っていると云っている。

「疲れ目程度で医術士なんぞにかかれるか。馬鹿高い診察料と紹介

料を取られて調薬士に回されるのが落ちだ」

修一郎の天然ボケにも既に慣れたのか、皮肉が通じなかったことを気に留めるでもなく、藍色の髪をわずかに揺らしながら先輩事務員は天井に顔を向けたまま答える。

医術士とは、魔法と医学全般及び薬草学を修めた者が就ける職種で、王国と魔法院、双方の許可がないと医術士とは名乗れない。

調薬士とは、初歩医学と薬草学を修めていれば、所属する都市の市長の許可のみで開業することができる。

前者はその資格を得る条件の厳しさから、王国全体でも十数人しかおらず、王都や各都市はまだしも、地方の小さな街や辺境の村となるとまず見かけることはない。

また、医術士は、各分野の知識と技術と、難関を潜り抜けたという多少と言うには大きすぎるプライドを持つ者が多く、治療代金が高額であるのが常であった。

だが、身体の部位欠損や骨折、重篤の患者もほぼ完治させることができるため、その分治療代が高いのは仕方がないと言われているのも事実である。

後者は、薬草に関する知識があれば、後は簡単な医学に関する講習を受けるだけで開業できるため、王都や各主要都市はもちろん、地方都市や小さな街にも大抵二〜三人はいる。

極端なことを言えば、その辺りの薬草摘みの娘が調薬士組合に行つて講習を受け、市長の署名の入った許可証を受け取れば、その日から調薬士になれるのだ。

そういったことから、街には何人もの調薬士がおり、開業までの手間の少なさや要求される知識の程度、他の調薬士との価格競争、あと少しばかりの調薬士本人の良心から、治療代金は庶民が利用できるレベルに抑えられている。

重い風邪や、軽度の裂傷や打撲であれば、大抵の者が調薬士を頼

る。

「それに、ニンジンやカボチャはともかく、レバーは臭いがダメだ。チーズはあの歯触りが好きじゃない。」

そしてブドウは時季じゃない」

漸く目頭を揉み解すことをやめ、視線を修一郎に戻し、即答に近い早さで答えたソーンリヴだったが、未だ視界がぼやけているのか、眉間に皺を寄せたままだ。

「しかし、よくそんなことを知っているな、シュウイチロウ。」

もしかして向こうの世界では調薬士のような仕事をしていたのか？

あと、ブルーベリーというのはどんな食べ物だ？」

「まさか。元の世界でも私は事務員をやってましたよ。普通の事務員でした。」

ただ、食べ物に関しては、本や……まあ色々なところから見たり聞いたりしただけです。」

専門的な知識があるってわけじゃないですよ」

テレビやインターネットと言っても通じないことは分かっていたので、適当にぼかしながら答える。

しかも適当に流し読みしていた中に、そんな記事があったという程度なので、もっと真面目に読んでおけば良かったかなと苦笑を浮かべる修一郎だった。

「で、ブルーベリーとは？」

先ほどの修一郎の台詞の最後は、殆ど呟きに近いものだったが、この目つきの悪い女性上司は確りと聞いていたのだろう、執拗

に訊いてくる。

「ブルーベリーというのは、木の実というか一応果物……かな？ 灌木に小さな実をつけるんですが、色はブドウに似て、味はブドウより若干酸味が強かったと思います。」

私はそのまま食べるよりジャムで食べるほうが多かったですね。パンに塗って食べてましたよ。

ですが、この国でも北のバンルーガでも西のルガルでも見かけたことがありませんから、おそらくこちらの世界にはないと思いますよ。」

自分とソーンリヴ、それぞれのカップを用意し、あとは湯が沸くのを待つだけの修一郎は、腰に両手を充てたまま、やかんを見つめていたが、視線をソーンリヴに向けて説明する。

「なるほどな。まあ、機会があれば食べてみたいものだ」

こちらの世界にないと言われ幾分興味が失せたのか、気のない返事をしつつ、ソーンリヴは椅子にもたれるように座っていた姿勢を正して仕事を再開する。

それに合わせたかのようなタイミングで湯が沸いたので、修一郎は竈からやかんを取り上げてポットに湯を注ぐ。

湯気と共に、嗅ぎなれた茶の香りが事務室内に漂い始める。

ポットの蓋をして、茶葉を蒸らしていると、通路から何者かが歩いてくる音がした。

「ソーンリヴ。荷の運搬は終わったからよ、上がらせてもらっぜ？」

これまたタイミング良く、ゼリガが事務室の扉を開けて入ってくる。

「」苦勞さん。じゃあ流通はこれで上がり……と。今、何時なんどきだ？」

薄い木板でできた勤務表に何やら書き込みながら、ソーンリヴは事務室の壁に設けられた小さな窓を見遣る。

透明感のない、曇りガラスのようなガラスが詰め込まれた窓からは、夕暮れの赤い陽射しが申し訳なさげに射し込んでいた。

ソーンリヴの机まで歩いてきたゼリガは、机に両手をついた格好で、ソーンリヴの手許を覗き込みながら答える。

「ちょっとばかり前に親鐘三つに子鐘四つ鳴ったから、子鐘四つ半つてとこじゃないか？」

「分かった。親鐘三つに子鐘四つ半にしとくよ」

「おいおい……。自分で言っというてなんだが、いいのかよ。そんな適当で」

「構わんさ。店主直々に上がっていいと言われてるんだらう？」

子鐘一つもない差なんて気にするほどのことでもない」

そんな会話を交わしているゼリガとソーンリヴの前に湯気の立ったカップが置かれた。

「今から休憩でお茶でも飲もつてことになってたんですよ。ゼリガさんもどうです？」

そう言って柔らかな笑顔を浮かべた修一郎は、自分のカップと一緒に持つていたものを先輩事務員に渡す。

「あとこれはソーニンリヴさんに。しばらく目に当てておくといいですよ」

そう言っ
て渡されたのは、沸かしたお湯の残り
で温めた小さなタオルだった。

第二話 晩飯と新商品

商業都市アーセナクトの中心部にある、市庁舎の親鐘が低く、だ
が遠くまで透る鐘の音を四つ響かせた。

それを聴いて、一部の店を除いた大多数の店が、一斉に店内の照
明を落とし始める。

一部の店とは、これからの時間帯が書入れ時である酒場や食堂、
宿屋といった店だ。

また、この街には少ないが、冒険者や探鉱者、騎士や兵士といっ
た荒事に携わる者を相手にする武具屋や雑貨屋もそれに含まれる。

この街に限らず、アルタスリーア王国では、二種類の鐘の音で住
民に時間を知らせるようになっていた。

王城若しくは市庁舎やそれに類する主要建築物に付随して建てら
れた鐘楼にある親鐘が、午前零時を起点に六時間毎に鳴らされ、教
会にある子鐘が一時間毎に鳴らされる。

人々は、修一郎がいた世界のように厳密な二十四時間制で時間を
表すわけではなく、親鐘が幾つと子鐘が幾つといった言い方で凡そ
の時間を知り、それに従って生活している。

親鐘一つと子鐘五つ（午前五時）に起き出して、親鐘二つと子鐘
一つ（午前七時）までに朝食を摂り、それぞれの仕事場へ向かう。

親鐘三つ（正午）で昼食を摂り、親鐘四つ（午後六時）で仕事を
終え、夕食を摂り、親鐘四つと子鐘四つ（午後十時）に床に入ると
いった具合だ。

修一郎たちの勤めるマリポー商店も、大多数の店と同じく親鐘四
つ（午後六時）を閉店時間と定めている。

店主のマリポーの指示通り、流通部門の従業員たちは既に仕事を

終え、帰途についている。

仕入れ担当であるマリポーは、王都アーオノシユで仕入れ商品の数量調整に手間取ったため、今日は王都に滞在することになった。

もう一人の仕入れ担当であり、マリポーの息子であるブルソーは、北にある国境都市ゴステアに昨日旅立ったばかりだ。

在庫管理も既に就業後の清掃を終え、帰宅の準備を進めているだろう。

真面目な鳥人族のイルーは、在庫管理部門の責任者でもあるから、まだ残っているのかも知れない。

そんなことを思いながら、修一郎が本日分の出納板の数字を羊皮紙製の帳簿に書き写していると、事務室の扉が軽くノックされた。

返事をする待つことなく、扉から顔を覗かせたのはレナヴィルであつた。

接客用の表情ではなく、普段の眠そうな目つきで、気だるげに告げる。

「じゃ、あたしたち上がるから。おつつかれえ」

「はい。お疲れ様でした、レナヴィルさん」

「……お疲れさん」

修一郎とソーリヴがそれぞれの返事をしたところで、レナヴィルの後ろに居たのだろう、クローフルテが事務室に入ってくる。

「これ、今日の売上現金と売上板です。売掛は発生しませんでした」

相も変わらず無表情のまま修一郎に歩み寄ると、銀髪の女性エルフは、皮製の売上金回収袋と金属板を修一郎に手渡す。

「はい。ありがとございます、クローフルテ・マイヤックさん。それでは、お疲れ様でした」

「ご苦労さま」

「はい。お疲れ様でした」

軽く一礼すると、クローフルテは修一郎たちと雑談するでもなく、そのまま事務室を出て行くこととする。

クローフルテが事務室から出て、扉を閉めようとしたとき、丁度イルーが上がる場所であったようだ。

「では、私もこれで終業とさせていただきます。もう一人の作業員は既に終業し帰宅した」

クローフルテの頭越しに修一郎にそう告げると、イルーはそのまま従業員出入口に向かって歩み去った。

それを黙って見つめていたクローフルテは、もう一度軽く礼をすると事務室の扉を閉めた。

これで店内に残るのは修一郎とソーンリヴだけなのだが、事務員はこれからが一仕事である。

まだ週末ではないので、実地棚卸をする必要はないのだが、売上板、納品板、出納板、在庫板の数量チェックと、売上金の確認作業が残っている。

また、売上金と売上板、釣銭を照らし合わせて、過不足金が発生していないか確認する必要もある。

「じゃあ、さっさと済ませるぞ。

出納板は私ができるから、シュウイチロウは売上金の確認と過不足金の確認をやってくれ。

それが終わったら、記帳も頼む」

「分かりました」

出納板に関連する作業は、魔力を持たない修一郎はできない。

自然と、出納板のチェックをソーンリヴが一手に引き受け、それ以外を修一郎が担当することになっていた。

出納板に手を伸ばしかけたソーンリヴは、何かを思い出したように机の引き出しから木製の勤務表を取り出すと、各従業員の退出時間を書き込んでいった。

「うーん……。やっぱり羊皮紙は書き辛いですね。あと羽ペンも」

売上金と過不足金の確認を終え、帳簿に向かっていた修一郎が、顔を上げて独り言のように呟く。

「もっとこう……、すらすらと書けるとありがたいんですけどね」

「仕方ないだろう。シュウイチロウには記載術は使えないし、そもそも記載術用の帳簿は値段が高すぎてウチのような規模の店においてそれと使えるような代物じゃない。

それに羽ペン以外となると木ペンしかないが、あれは羽ペン以上に使いづらいぞ?」

出納板のチェックを終えて、自らも記帳作業に移っていたソーンリヴが、またかと言いたげな表情で、愚痴を零している修一郎を見る。

「分かってはいるんですけどね。」

手書きの記帳は向こうの世界でもやっていたので、それは別段苦にはならないんですか……」

洋紙と万年筆の組み合わせに比べると、羊皮紙と羽ペンはどうしても書きづらく感じてしまう。

慣れてしまえばそうでもなくなるのかも知れないが、こればかりは慣れるまで我慢……と言うより我慢して慣れるしかなく、ソーンリヴの言う通り仕方のないことだった。

そもそもが、この世界にある物品はこの世界の住人のために作られ、改良され発展してきたものだ。

そしてその住人は、多かれ少なかれ体内に魔力を持ち、魔法を操ることができる。

魔法を使えることが当たり前の世界であり、身の回りの品々や公共システム、戦に関する武具や戦術まで、魔力を使用することが前提で作られている“モノ”が多い。

その反面、こんなものにもまで魔法を使わずともいいだろうと思う場面に、修一郎は何度も出くわすことがあった。

その一つに、ソーンリヴが口にした『記載術』と呼ばれる魔法を利用する羊皮紙製の帳簿も含まれる。

専用の術が施された羊皮紙に、魔力を使い文字を記載していくのだが、帳簿に手をかざして記載したい内容を頭に思い浮かべると、それが瞬時に書き込まれるため、一文字一文字書いていくより遥かに早く、記帳ミスも少ない。

ただし、専用の帳簿作成にかかる手間がそれなりに必要であるらしく、普通の羊皮紙製帳簿に比べると値段は十〜十二倍と高額になる。

記載術用帳簿一冊で修一郎が楽に一月暮らせる金額なのだ。

修一郎の世界では一冊千円前後で買える帳簿も、こちらの世界では羊皮紙製帳簿ですらちよっとした金額になる。

それ以外となると、安価な木板製の帳簿になるが、保管に場所を

取ること、強度的に不安があること、記帳に手間がかかること、そして何よりみすばらしいといった理由で、小規模の商店が経費節約のために使う程度である。

術の有り無しは別として、羊皮紙か木板か、その二種類しかない。目玉が飛び出るような高価な帳簿を使うくらいなら、普通の羊皮紙製帳簿でいいじゃないかと思うのだが、事務作業の効率化を図っているのか、単なる見栄なのか、記載術用帳簿は大規模商店では結構使われているらしい。

確かに、マリポー商店のような中規模の店に比べれば、取り扱う商品数も動く金額も、それに伴う事務処理も遥かに多いのだから、作業の効率化は経営者としても担当事務員としても必要なのだろう。

それでも、と修一郎は思う。魔法に頼らなくても作業量を減らせる方策があるのではないかと。

そんなことを考えながらも、修一郎の手は止まることなく動いている。

暫くして、全ての記帳を終えた修一郎が顔を上げると、丁度彼の上司も記帳が完了したところであった。

「終わりました」

やや疲れた声で、そう報告する修一郎に、ソーンリヴが大きな息を吐きながら応える。

「ああ、こつちも終わった。やれやれ、やっと今日の業務も終了だな」

「お疲れ様でした。後は『施錠』して終わりですね」

気の抜けた声で呑気に言う修一郎にため息をつきながら、ソーンリヴは自分が記帳した帳簿と、修一郎から受け取った帳簿をまとめると、売上金の入った皮袋を持って金庫に向かった。

金庫にかけられた『施錠』の魔法を解除し、帳簿一式と皮袋を中に収めて金庫の扉を閉めると、再び『施錠』の魔法をかける。

これも魔法を使った仕掛けで、事務員のソーンリヴとマリボー、マリボーの息子ブルソーにしか『施錠』を解除することは出来ないようになっていいる。

その間に修一郎は、事務室内の窓の戸締りや竈の火の点検を行い、「他を見てきます」と言い残し事務室から出て行った。

最終的に、店の建物全体にも『施錠』をかけるのだが、それでも荷物搬入口の施錠や窓の閉め忘れ、ランプの消し忘れなどを確認しなくてはならない。

一階部分の店頭、倉庫、流通、そして各部署の従業員控え室を一通り確認した修一郎は、二階に上がる。

二階は商談用の応接室とマリボーの個室しかなく、マリボーの個室は部屋の主が専用の『施錠』をかけているため、確認するのは応接室のみだ。

とりあえず自分ができる箇所全てを点検した修一郎が一階に戻ってくると、通路の先に従業員用出入口からゼリガとクローフルテが入ってくるのが見えた。

「どうしました？ゼリガさんにクローフルテさん。何かありましたか？」

何事かあったかと思い、小走りに駆け寄る修一郎にエルフ族の販売員が無表情のまま本日三度めの訂正をする。

「…………クローフルテ・マイヤックです」

そんなクローフルテに苦笑を浮かべながら、ゼリガは傍まで来た修一郎に説明した。

「いやあ、俺はなんでもないっちゃあなんでもないんだけどよ。

マイヤック嬢ちゃんが忘れ物したらしくてな。

出会った場所もちと離れてたし、もう日も暮れちまったから一応、な」

一応とは、夜の街中を歩くクローフルテのことを案じたということなのだろう。

国内でも治安の良い街として知られているアーセナクトでも、強盗や人攫いなどの犯罪が皆無というわけではない。

「忘れ物、ですか？」

目を二、三度瞬かせた後、修一郎はクローフルテの顔を見つめる。

「はい……。お手数をおかけしますが、どうしても今日持って帰らなければならぬものなのです。

控え室までお付き合い願えませんか」

表情からは分からないが、口調からは切実な想いが伝わってくる。余程大事な物を置き忘れてきたのだろう。

修一郎についてきて欲しいと要請したのは、忘れ物をしたのが事実であることを確認して貰うためと、自分がおかしな行動を取らないことを修一郎立ち合いの元、明確にさせるためだ。

先ほど見回った際には、テーブルや椅子の上などにはそれらしき物がなかったはずだが、修一郎は笑顔で快く引き受けた。

「構いませんよ。それでは控え室に行きましょう。」

あ、ゼリガさん。申し訳ないんですが、事務室のソーンリヴさんに建物内に異常はなかったことを伝えておいて貰えますか。

あと、ソーンリヴさんの忘れ物を取りに従業員控え室に行くことも」

「ああ、いいぜ。もうお前らも帰るところだったんだろ？さっさと忘れ物取ってこいよ」

そう言つて、犬人族の男は事務室に歩いていった。

修一郎が、無事忘れ物を見つけたクローフルテと共に事務室まで戻ってくると、ゼリガとソーンリヴが入口で待っていた。

「よう。えらく時間がかかったじゃねえか？

あんまり二人の邪魔しちゃ拙いだろうから店に『施錠』かけて帰ろうかって話してたことだ」

にやにやと笑うゼリガに、修一郎は慌てて弁明する。

「ち、違いますよ！確認しなければならぬとは言え、販売員用の控え室は女性専用ですからね。」

見回り時ならともかく、クローフルテさんが居るのにずかずか入るわけにもいかないじゃないですか」

実際は、閉店後に戻ってきた目的が間違いなく忘れ物であったことを確認させるために、共に控え室に入れと頑なに主張するクローフルテと、制服などの着替えが収められている販売員専用、つまりは女性専用控え室に女性と一緒に入るわけには行かないと固辞する修一郎の間で一悶着あったのだが、それには触れない。

「……マイヤツクです」

修一郎の言葉に訂正を加えようとするクローフルテの声も、からかわれたのが分かつているのだろう、表情を変えることはなかったが、その声量は聞き取れないくらいに小さい。

やたら説明口調になってあたふたしている修一郎を横目に見ながら、ソーンリヴが呆れたように言う。

「従業員同士の恋愛にとやかく言うつもりはないが、私はさっさと帰りたいんだ。」

逢引なら外でやってもらえると助かるんだがな」

心なしか周囲の温度が下がったように感じた修一郎は、いつもの柔らかな笑みを浮かべる余裕もなく、

「だから違いますって!」

と声を大にして叫ぶのだった。

その横では、クローフルテは相変わらず無表情で佇んでいた。

「『施錠』」

四人が建物から外に出て、従業員用出入口の扉に普通の鍵で施錠をした後、私服に着替えたソーンリヴがマリボー商店全体にかけられた『施錠』の魔法を発動させる。

一瞬、建物全体が淡い光を発するが、すぐにそれは消え、一見日中と変わらない様子に見えた。

実際は、前もって登録された従業員以外が『施錠』を解除しようとしたら、第三者が強引に『施錠』を突破しようとする、すぐさま街の警備団に異常を知らせる連絡が入るようになっていた。

このあたりは向こうの世界のセキュリティシステムよりも優秀そうだなあ……などと修一郎が感心していると、ゼリガから声を掛けられた。

「おい、シユー。お前さん、これからどうするんだ？」

ゼリガの問いに答えようとしたとき、市庁舎の親鐘四つに少し遅れて教会の子鐘が一つ鳴り響いた。

ふと、官庁地区にある教会へと目を向けるが、晩秋の陽は既に落ち、教会の建物は所々に小さな光の点があるだけの、ただの黒い影にしか見えない。

アーセナクト中央に聳える市庁舎や、北の居住地区、南の商業地区にある飲食街といった場所は、煌々と明かりが灯り、空から控え目に下りてきつつある夜の闇を押し返しているようにも見える。

それでも、吹いてくる風は陽光の支配から解放された喜びを主張するように冷たく、店の制服から黒地の長袖シャツに青地の麻の長ズボンといった私服に着替えた修一郎は、夜風に首を竦めながら応じた。

「そうですね。いつもの食堂で晩飯食べてから帰ります。

このまま帰っても家じゃ料理できませんし……」

どこか残念そうに答える修一郎に、

「そうかそうか！俺も晩飯まだなんだ！一緒に食うとするか！」

ゼリガが嬉しそうに修一郎の肩を勢い良く叩く。
ふと目を遣ると、ズボンから生えた尻尾も勢い良く左右に振られていた。

「ソーンリヴさんとクローフルテ・マイヤックさんもどうですか？」

勢いの良すぎる肩への連打に、苦笑を浮かべつつ顔を僅かに顰めるといふ地味に器用なことをこなしながら、修一郎は女性陣二人に尋ねる。

「いや、私は辞退するよ。まだ目の疲れも取れてないしな。さっさと寝たい。」

ああ、夕食はニンジンとカボチャのスープでも作るとするかな」

にやりと笑ったソーンリヴは、修一郎たちに背を向けて歩き出しながら「あまり飲みすぎるといけないぞ」との一言を残して去って行った。

「おう、お疲れさん」

ソーンリヴに向けて声を掛けるゼリガの横で、修一郎はもう一人の女性に顔を向ける。

「クローフルテ・マイヤックさんはどうします？」

あ、でも忘れ物がありますから、早く家に戻ったほうがいいですかね」

それが彼女が言っていた忘れ物なのだろう、小脇に抱えられる程度の布製の袋を両手で持っていたクローフルテは、無表情のままゼ

リガと修一郎に一度ずつ視線を向けると一言口にした。

「いえ、お付き合いします」

目的の店に向かいながら、修一郎は隣を歩くクローフルテにちらりと視線を遣る。

彼女も他の従業員同様、店の制服から私服に着替えており、膝下まである長めの深緑色のワンピースを腰の辺りに巻いた布紐で縛り、その上に厚手の生地で作られた木綿製の水色のジャケットを羽織っている。

足元は、脛の辺りで折り返した布製のロングブーツという出で立ちだった。

お洒落よりも動きやすさを追求したようなコーディネイトにも見える。

ともすれば地味に見えなくもないが、深緑のワンピースにクローフルテの流れるような銀髪が映え、すれ違う人々の視線を集めていた。

表情は蠟で固めたように無表情のままだが、どこか嬉しそうに感じるのは修一郎の気のせいだろうか。

そのクローフルテを挟んで反対側を歩くゼリガは、上着だけは着替えたものの、ズボンは作業時と変わっていない。

ゼリガ曰く、犬人族は汗を掻かないから埃などで汚れない限りは、あまり頻繁に着替える必要などないとのことだった。

他愛のない会話を交わしながら歩いていると、目的地である食堂の看板が見えてきた。

周囲の店からも食欲をそそる匂いや、酒の匂いと共に客の喧騒が聞こえてきていたが、三人は迷うことなく、目指す食堂に入っていく。

「あら。シューイチロー、いらっしやい。女性連れとは珍しいわね」

店内に設置された、大小合わせて十脚ほどの木製のテーブルの間を忙しく動き回っていた、猫人族の女性が修一郎たちに気付く。

茶と灰と黒の、修一郎の世界で言う“藤猫”のような毛皮に、白いシャツと黄色のエプロン、赤いスカートを履いた出で立ちで、両手に盆を掲げて料理や酒、空になった食器を載せている。尻尾はどうやら邪魔になるらしくスカートの中にしまっているようだ。

表情はゼリガと同じように、猫の頭部が人間に酷似した体の上に乗っかっているため、慣れないと判断がつきにくいのだが、修一郎はこの店の常連であり、今では喜怒哀楽程度なら分かるようになっていた。

この店は飲酒よりも食事をメインにした店で、食事を楽しむ客の笑い声や話し声こそ飛び交って少しばかり騒然としているものの、酔客の叫び声などは聞こえてこない。

おかげで大声で喋る必要はなく、修一郎はいつもの調子で猫人族に話しかけた。

「こんばんは、プレルさん。席、空いてます？」

「ああ、空いてるよ。」

クリュ！シューイチローを席に案内して！」

プレルが店の奥に向かって叫ぶと、テーブルとほぼ同じ高さの位

置を小さな毛皮の塊が駆け寄ってくる。

「いらっしやい！しゅーちろー！」

店内の喧騒に負けなくらい大きな声で挨拶したのは、プレルの娘であり同じ猫人族のクリユだった。

プレルと同じ毛色の小さな身体に、ピンクのシャツ、クリユ用に作り直されたのだろう黄色のエプロン、尻尾用の穴の開いた赤いスカートという格好だ。

小さな耳と尻尾をしきりに動かして、満面の笑顔で修一郎を見上げている。

「こんばんは、クリユちゃん。ばんごはんたべにきたんだけど、だれもつかってないテーブルってどこかな？」

長身の修一郎がやや体を屈めながらクリユの頭を撫でてそう尋ねると、猫人族の少女は嬉しそうに目を細めて「こっち！」と走り出した。

「こら！クリユ！店の中では走っちゃダメだって言ってるでしょ！」

後から飛んできた母親の叱責も、お気に入りの人間族に会えて上機嫌のクリユには聞こえてないようであった。

クリユが案内した先には、確かに誰も席についてない五人掛けの丸テーブルがあった。

「はい。おしながき！」

背伸びをして店のメニューが書かれた木板をテーブルに置いたクリュは、厨房兼カウンターに向かってこれまた大声で叫ぶ。

「ラローズにーちゃん！こっちちゅーもんおねがーい！」

人間で言うと四、五歳に見えるクリュが一所懸命に店を手伝っている様子を見て、修一郎が小さく笑っていると、クリュの声が聞こえたのだらう、カウンター内で料理の盛り付けをしていたらしい従業員が顔を上げて、修一郎たちがいるテーブルを見る。

「わかった。すぐ行くよ！」

然程待つことなく、ラローズと呼ばれた人間族の男性が、修一郎たちのテーブルにやってきた。

茶色の髪を短く切った碧眼の青年は、素朴な顔立ちをしていた。決して美青年と言えるものではないが、人好きのする顔である。着ている物は、プレルやクリュと同じく、白いシャツに黄色いエプロンに赤い長ズボンで、これがこの店の制服なのだらう。

「いらっしやい。シュウイチロウさん、ゼリガさん。そちらのエルフの方は二度目……でしたよね？」

テーブルについた一行を順繰りに見渡しながら、それぞれに話しかける。

「……………はい」

「よう、ラローズ。どうだ？仕事には慣れたか？」

「ええ、まあ。親父さんに怒鳴られながらもなんとかやっていますよ」

「パノーバさんは料理には厳しい方ですからね。でもローズさんなら大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。ご期待に添えるよう頑張ります」

四人は話ながらも、それぞれが料理を注文していく。

この食堂は、商業地区の中でも酒場通りよりも商店通りに近い場所に位置しており、基本的には商店で働く従業員の昼食や夕食を見込んだメニュー構成である。

酒類もあるにはあるが、軽めの果実酒や精々がエールくらいしか置いてない。

料理が来るまでの間、仕事の話や王都の最近の出来事、従業員の失敗談などに花を咲かせていたゼリガと修一郎に、時たま相槌や短い言葉を返していたクローフルテだったが、修一郎がふと気になったことをゼリガに尋ねた。

「そういえば、ゼリガさん。晩飯は家で食べないんですか？奥さんに怒られますよ？」

ゼリガは妻帯者で、しかも子供も三人ほど居ると聞いたことがある。

犬人族は狼人族と同じくらい家庭を大事にすると言われており、愛妻家であっても恐妻家であっても家庭を蔑ろにする個体は居ないことで有名だ。

クローフルテは独身だと以前レナヴィルから聞いていたので、外食するのも分かるのだが、ゼリガは修一郎の知る限り朝食、夕食はおるか昼食も一度帰宅して摂っているほどで、外食をするゼリガに疑問を持つのも仕方ない。

「あー。それなんだがよ……。
ウチのカーチャンが、その、今……な？」

普段は、快活と豪快が毛皮と服を纏って歩いているようなゼリガだが、修一郎の疑問には妙に歯切れが悪かった。

「奥様と喧嘩されたのですか？」

様子のおかしいゼリガに、クローフルテも気になったようで、表情を変えないまでも、声にゼリガを案ずる色を滲ませて問い掛ける。

「いやいや！喧嘩なんてしてねえぞ！？」

むしろ……その、今……カーチャン、発情期……でな？」

普段のその逞しい体を羞恥のため小さくしながら呟く犬人族の言葉に、人間族の男とエルフ族の女は思わず見つめ合ってしまう。

「だから、ガキどもが寝るまでは家に戻れないというか……」

人間族であつたら、おそらく顔を真っ赤にしているであろうゼリガは、言い辛い話題から逃げるように「早く酒持ってきてくれよお！」とカウンターに向かって叫んだ。

修一郎はというと、漸く家庭を大事にする犬人族が言わんとしていることに気付いた様子で、決まり悪そうに

「そ、そういうことでしたか。そ、それは確かに帰りづらいですねえ」

などと、頭を掻いている。

一方、ゼリガを心配していたクローフルテは、その理由を聞いて珍しく頬を染めて恥ずかしげに俯いていた。

人間族や、人間族まではいかなくとも、“その気になれば”年中そういった行為に及び子を為すエルフ族たちと違い、犬人族や猫人族、狼人族などは年に数回の発情期にしか相手を求めることはせず、仮にその時期以外に“行為”を行ったとしても妊娠することはない。その代わりに、発情期になると男性女性共に激しく求め合い、確実に子を宿すことになるため、これ以上子供をもうける気のない夫婦や、既に子供が生まれている夫婦は、色々と苦労する時期でもあった。

言いようのない気まずい雰囲気支配するテーブルに、注文した料理と酒を盆に載せてラローズがやってきた。

「お待たせしました、皆さん。……あれ？どうかされましたか？」

場の雰囲気がおかしいことに気付いたラローズが尋ねる。

「い、いえ、なんでもないですよ」

「そ、そうそう！なんでもねえよ！それより飯だ！」

「……………」

三者三様に反応するが、顔を赤くして俯いたまま無言のクローフルテが気になったのか、ラローズがさらに言葉を重ねる。

「エルフの方は具合でも…………？」

大丈夫ですか？」

心配するラローズの声を聞いて、その長い耳まで真っ赤にしたクローフルテが、

「い、いいえ！大丈夫です！」

と、普段出さないような大きな声で、首を勢い良く左右に振るといふ、滅多に見られないどころか初めて目にする仕草に、目と口を大きく開けて見入ってしまった修一郎とゼリガだった。

注文した料理は、どれも豪勢とは正反対の質素なものばかりであったが、食べ飽きることのないよう控え目の味付けで丁寧に調理されたものばかりだった。

ジャガイモのパンケーキに摩り下ろしたニンジンと干しブドウのソースをかけたもの、キノコと鶏肉の炒め物、赤カブと数種類のハーブに柑橘系の果汁を使ったドレッシングをかけたサラダ、川魚のぶつ切りとハクサイに近い野菜を煮込んだ塩味のスープ、黒胡麻入りのパンといった料理が、テーブルに並べられている。

酒は、ゼリガがエール、修一郎が梨を使った果実酒、クローフルテがザクロのジュースをそれぞれ頼んでいた。

肉類はあまり好きではないというクローフルテのために、追加で注文した干したトマトを一度もどしてタマネギとチーズを乗せてオーブンで焼いた料理は、その香ばしい匂いに釣られたゼリガが半分近くを食べてしまうという出来事があったりしたが、ご愛嬌である。クローフルテは酒類を頼むことはなかったが、それでもそれなりに会話に加わるようになり、賑やかに話は弾んでいた。

開けっ放しの食堂の入口に、一人の人物が立っていた。

年老いた老人のように長く伸ばした髭、丸く大きな鼻、一般的な人間の半分程度しかない背丈、木屑や鉄片の付着した麻の上着に、長年使い込んでいられると思われる木の皮を編んで作ったジャケット、灰色の麻のズボン。

伸びるに任せた黒に近い茶色の頭髪には所々白いものが混じっているが、その髪の間から覗く茶色の眼光は鋭く、店内を物色しているようだ。

その人物に気付いたプレルが声をかけるが、「おう」と一言だけ応え、店内にいる客に視線を巡らせている。

しばらくして、探している相手が見つかったのか、その人物はすたすたと店内に入って行く。

プレルはいつものことなのか小さく肩を竦めると、他の客の注文を伝える為に、カウンターへと向かった。

「シュウイチロウ！探したぞい！」

いきなり三人の会話に大声で割り込んできたのは、土の妖精族ノームであった。

「なんだあ！？つて、レベック爺さんじゃねえか」

驚きと相手の不躰さに声を上げたゼリガだったが、闖入者が見知った顔だったので拍子抜けしたようである。

「こんばんは、レベックさん。こんな時間に珍しいですね」

突然現れたノームに驚いた様子もなく、いつもの笑顔を浮かべな

がら話しかける修一郎。

「……………」

クローフルテは黙って軽く頭を下げただけで、無表情のままだ。

「こんな時間もへったくれもないわい。お前さんから頼まれとったモノが出来上がったんでな。

一刻でも早う欲しいじゃろうから街中探し回っておったんじゃ。やれやれ、とんだ一苦労じゃったわい」

言葉とは裏腹に疲れを感じさせない口調でそう言うと、三人の様子を気にも留めず、レベックと呼ばれたノームはさっさと空いた席に座ってしまう。

「おい、坊主！エール追加じゃ！つまみはふかしたジャガイモでええからの」

ラローズに向かって勝手に追加注文をするレベックに、ゼリガは苦笑を浮かべながら「相変わらずだねえ、この爺さん」などと小声で呟いており、クローフルテは黙ったまま瞳に好奇心の光をちらつかせつつノームの行動を観察しているようだ。

「頼んでいたものと言うと、アレが完成したんですか!？」

当事者の修一郎といえば、レベックの言葉に喜びの表情を浮かべ、声まで弾ませている。

「うむ。お前さんの要求全てに応えることができたわけじゃないがの。

それでもなんとか使えるモノにはなつたわい」

そう言いながら、テーブルに残っていたパンケーキとサラダとパンを遠慮なく口に運ぶレベック。

鶏肉の炒め物も残っていたが、それには見向きもしない。

土の妖精族ノームは森の妖精族エルフ族以上に肉食を避ける。

大地に実る或いは生えるものは食べるが、大地の草を食べる家畜や水の生物である魚などは一切口にしないとされている。

チーズや牛乳ですら彼らは避けるのだ。

ちなみに、遠慮のなさは種族としてではなく、レベック個人の性格である。

「で、じゃ。これがソレなんじゃが……」

口の端についたパンケーキのソースを、着ていたジャケットの袖で拭いながら、レベックがもう片方の手でジャケットの懐から何やら取り出そうとしたとき、ラローズがエルとふかし芋を持ってやっってきた。

「ちょ、ちょっとレベックさん！ここじゃ拙いです。場所を変えましょう」

慌てて修一郎がレベックを止め、歳若い青年に尋ねる。

「ラローズさん。今、個室は空いてますか？」

アーセナクトは商業都市であつて、様々な人が流れ込んできては出て行く。

当然、その中には隊商や行商人もあり、成り行きで食事をしながら商談をすることも少なくない。

そんな人々のために、大抵の食堂や酒場には数部屋の個室が用意されている。

この店にも、一部屋しかないものの個室があった。

「個室ですか？はい。確か空いてたと思いますが……。一応、使えるか女将さんに訊いてみますね」

ラローズが、カウンターから厨房に向かって客の注文を伝えているプレルの元へ行き、一言二言話をする、暫くしてプレルが個室の鍵を持ってやってきた。

「シユウイチロウが個室を使うなんて珍しいわねえ。何か良からぬことをしてるんじゃないでしょうね？」

「まさか。ちょっと私的な用件ですよ」

プレルの言葉が冗談であることを理解している修一郎は、笑顔を浮かべる。

「あ、それとラローズさん。申し訳ありませんが、こっこのテーブルの料理を個室に移したいんですが」

「ええ、構いませんよ」

「ああ、ならあたしも手伝うよ。もちろん追加注文してくれるんだろうしね！」

笑いが弾ける四人とは対照的に、レベックは鍵が開けられた個室へとさっさと移動してしまい、クローフルテは修一郎がラローズに頼む前に、既に料理の皿を持って移動し始めていた。

全員が個室に移り、追加で注文した料理や酒が来たところで、先ほどの続きと言わんばかりにレベックが口を開く。

「さつきもちと言ったがの。一、二、三の点を除けば凡そはシュウイチロウの希望通りになっとるはずじゃ」

そう言いながら、今度こそ本当にジャケットからソレを取り出した。

「なんだこりゃあ……？」

レベックが大事そうにテーブルに置いた、小さな金属製の箱を眺めて、ゼリガが声を上げる。

大きさは修一郎の手の平より二回りほど小さく、素材は鉄で出来ているようだ。

親指一本分の厚みを持った長方形で、箱の長辺のほぼ中央あたりに箱の周囲を一周するように切れ目が入っている。

それ以外は、魔術が施されたような跡もなく、突起物も穴もない、つるりとした印象で、穴がないことを除けば修一郎の故国である日本で使われていた触媒式懐炉のようにも見える。

「……………」

クローフルテは先ほどよりさらに好奇心を掻き立てられたようで、凝とテーブルに置かれた物を見つめている。

そんな玩具を前にした子猫のようなクローフルテにちらりと視線をやって、当人に気付かれないように笑みを浮かべると、修一郎は

レベックが作ったそれを手に取った。

「お前さんが最初に言うておった開閉部分の蝶番じゃが、やはり小型化は無理じゃった。」

あと、内部の“バネ”やら言う部品もの。

じゃから代案じゃった方式を採用しとる。それでもお前さんが要求しておった大きさがぎりぎりになってしもうた。

わしも細工師としてまだまだ修行が足らんということかの」

木製のジョッキに残っていたエールを一気に飲み干すと、それが苦い薬であったかのように顔を顰めながらレベックが語る。

依頼人の要求に完璧に応えることができなかった事実が、細工師としての己が矜持を傷つけているのだろう。

今はどんな言葉をもつてしても、この土の妖精族を慰めることはできないと感じた修一郎は、まずは完成品の検品を済ませることにした。

箱の下部を右手で持ち、左手で上部を摘んで引っ張ると、箱は切れ目から二つに分かれ、中から煙突のような形をした金属製の筒が現れた。

どうやら外側の金属製の箱は、ケースであり蓋であり、品物の本体は、半ばまで剥いたゆで卵の殻から頭を出した白身のような状態のこの筒らしい。

金属製の筒には、所々小さな穴が穿たれ、筒の片側には、同じく金属製の車輪のようなものが筒に添うように取り付けられている。

「はあ……」

「……………」

ふと、ゼリガとクローフルテに目をやると、二人とも興味津々といった様子で、修一郎の右手に持たれた奇妙な形をした筒を凝視し

ている。

修一郎は視線を“筒”に戻し、それこそ煙突の上から下を覗くように、筒の内部を確認する。

筒の中には、ランプに使われている芯が、筒に取り付けられた金属製の車輪からほんの少し離れた場所に固定されている。

その金属製の車輪の周囲には、斜めに交差するように細かな溝が彫られ、鑢状になっていた。

視点をずらして車輪の下を見ると、車輪の幅より少しだけ細い窪みに、黄土色の小さな石片が埋め込まれており、車輪の外周部に僅かに接触するように位置が調整されている。

「レベックさん、点けても？」

そこまで確認してから、修一郎はレベックに問う。

「無論じゃ。わしも一応動作確認はしとるかの」

嬉しそうにそれを眺める修一郎を見て、幾分気が晴れたのか、先ほどより表情を和らげたレベックが答える。

それを見て小さく頷くと、修一郎は“筒”に取り付けられた車輪に親指をかけた。

車輪を回転させるように勢い良く親指を滑らすと、石と石を擦り合わせたような音がして筒の中に向け火花が散る。

次の瞬間、ぼつつという音と共に筒に火が灯った。

「おおっ！？」

「え……っ！？」

息を呑む同僚二人を他所に、修一郎は満足げな表情を浮かべると、左手に持っていた箱の上部で、横から素早く被せるように蓋をする。

すると、火が漏れることも爆発するようなこともなく、レベックがテーブルに置いたときと変わらない金属製の箱が修一郎の右手に納まっていた。

「うん！ありがとうございます、レベックさん。充分すぎるほどの出来ですよ！」

満面の笑みでそう告げる修一郎に、言葉を返そうとするレベックを遮って、ゼリガとクローフルテが興奮した声をぶつけてきた。

「おい、シユー！なんだ今のは！？」

お前、『発火』……いや、ありゃ『火炎』か？魔法が使えるようになったのか！？」

「私も一瞬、魔法を使ったのかとも思いましたが……。もしかしてそれはほくち箱に類するものなのでしょうか？」

「落ち着いてください、ゼリガさん。」

私は魔法なんて使ってませんし、使えませんよ。それから、クローフルテさん。」

仰るとおり、これはほくち箱のようなものです」

身を乗り出すようにして一斉に質問してくる二人に、苦笑しながらも修一郎が説明する。

「これは“ライター”と言います。」

私がいた世界の言葉で、本来は『火や灯りを点けるもの』といった意味ですが、私が生まれたときには既に“ライター”という言葉自体がこういった機巧を指すものになってました。

この“筒”の中に、ランプ用の芯を通して周囲に綿を詰めたのち、油を綿に染みこませます。」

そして、この火打金代わりの金属の車輪と火打石を擦り合わせて火花を発生させて、それを芯に当てて火をおこす仕組みです。

火打金と火打石を使ってますから、ほくち箱の変り種と言ってもいいかも知れませんか」

再びライターの蓋を開けて、“筒”の上部を持つとゆっくりと引き抜く。

穴の開いた煙突状の筒の下は、ライターのケースと同様に鉄で作られており、それを引っ繰り返すと、確かに修一郎の言う通り綿が詰められていた。

「ほく……なんだって？」

ライターについては理解したようだが、途中で出てきた“ほくち箱”という耳慣れない単語に、再び疑問の声を上げるゼリガ。

「ほくち箱です。火打金と火打石、それにおが屑や綿屑を一つにまとめたものです。

形状はその名の通り箱状であったり、皮袋に入れてある場合もあります。

確かに街中ではあまり見かけませんし、必要ともされませんが、行商人や冒険者といった長旅をする者の中には、火をおこす際の予備の手段として携行している者もいます」

修一郎に代わって、クローフルテが淡々と説明する。

ゼリガはアーセナクトで生まれ、アーセナクトで育った犬人族だ。街中で育ち、他の都市などへの泊り掛けの旅も経験したことがなく、周囲の者も魔法を扱うことからほくち箱の存在を知らないのも無理はないことだった。

クローフルテはこの街の生まれではないとソーンリヴから聞いて

いたので、おそらく長旅の経験があり、ほくち箱を手にしたか見たかしているのだろうと修一郎は推察する。

彼女の口調から、既にいつもの冷静さを取り戻したかに見えるが、修一郎が名前で呼んだことを訂正しないあたり、まだ多少は混乱しているのかも知れない。

「そうです。実際に私もほくち箱は持っていますが、あれって結構取り扱いが面倒ですし、慣れないとなかなか火をおこせないんですよ。

それに私は魔法が使えませんから、常にそういった物を持ち歩かないといけませんし。

そこで、レベックさんをお願いして、これを作っていたいただいたというわけです」

想像以上に出来が良かったことと、懐かしい品に触れることができたからか、修一郎は嬉しそうに再びライターの火を灯した。

そんな様子を見ながら、レベックが修一郎を補足する。

「シユウイチロウが依頼してきたのは、ライターっちゅうやつを蝶番で留めて開閉させるものじゃった。

じゃが、指定された大きさがぎりぎりまで頑張ってみても、強度的に辛いものがあったの。

無理に蝶番をくつつけても三十回も開閉せんうちに、心棒が歪むか折れるかして使い物にならなんだ」

ふんと鼻を鳴らして、レベックが個室の入口へ歩いて行く。

扉を開けると、カウンターのラローズに向かって大声でエールの追加を注文する。

その様子を黙って見ていた三人だったが、レベックが自分の椅子に戻るとゼリガが口を開いた。

「へえ……。爺さんなら作っちまいそうなもんだがねえ」

「ふん！いくらわしでも出来んこともあるわい。」

それに、もう一つシユウイチロウが出した案の“バネ”は、わしどころか今のこの国の……いや大陸の技術じゃ無理じゃ」

忌々しげに吐き捨てるレベックが「エールはまだか」と声を上げたタイミングで、個室の扉がノックされラローズがエールを持って入ってきた。

修一郎はさりげなくライターを持った手をテーブルの下に隠し、ラローズに見られないようにしている。

エールを置いてラローズが退室すると、レベックが再び口を開く。

「棒状にした鋼を螺旋状に巻いて、反発力を利用して火打石をせり上げる仕組みはたいしたもんじゃが、あの大きさに収まるように作るのはわしには到底できやせん。」

工業都市アーラドルの同族やドワーフにやらせても無理じゃろくな。

じゃから適切な大きさに切り揃えた石を詰め込む方式にさせて貰うた。

……じゃが、あの“バネ”は面白いの。大きさに拘らんなら、色々応用は利きそうじゃ」

渋い顔で説明を続けていたレベックであったが、最後の一言でにやりと笑うとジヨッキを呷った。

「レベックさんの腕を疑ったわけではないのですが、あの二つの案はそうなればいいなといった程度のもので、これで充分ですよ。」

おかげで、長屋に帰っても貰い火をしなくて済みますし」

はは、と情けなさそうな笑いを浮かべながらも、修一郎は手の中でライターを弄んでいる。

魔法が一切使えない修一郎は、アーセナクト市民用の長屋を借りて住んでいるのだが、照明はランプか蠟燭、台所は竈しかなく、帰宅してから火をつけるのに苦労することが多かった。

魔法が使えるれば『着火』で一瞬なのだが、修一郎はほくち箱を使わないと火をおこせない。

しかも長雨でおが屑などが湿気ると、隣近所の住民にお願いして火種を貰わないといけないのだ。

その点、オイル式のライターであればライター自体が水に濡れない限りは容易に火をおこせる。

そこで、昔の伝で面識のあったレベックにライター製作を依頼したのだった。

「いや、じゃが今回の仕事は、わしも色々学ぶことができたわい。

火打石の中でも脆くて使えんと思われておった石のほうが、ライターのように擦ることで真価を発揮することや、わしらノームの間で”種火草”と呼ばれる焚きつけにしか使えんかった草から精製した油が、あれほど燃えやすい性質を持つておったこととかの。

流石は異世界の行商人の知恵といったところかの？」

「レベックさん」

そう小さく発した修一郎の言葉に、レベックは少し慌てたように、商売の話に移った。

「お、おお。そうじゃったの。して、代金の話じゃが。

素材は基本的に鉄と鋼しか使っておらんし、他も簡単に手に入る

ものばかりじゃった。

それに次善案でしか作れなんだし、さっき言ったように今まで捨てておったような物の使い途も見つかった。

加えて、“バネ” ちゅう新しい技術も教えて貰うたしの。既に貰うておる手付金で充分じゃ。

……と言いたいところじゃが、それではお前さんが納得しそわないいのう。

よし、ここの飯代で手を打とうじゃないか。

あと、火打石と油の補充は、格安で提供してやるわい。それでどうじゃ？」

やたら饒舌になった細工師に、胡乱な視線を向けていたゼリガとクローフルテだったが、修一郎の次の言葉に再び驚くことになる。

「いいえ、それではこちらは応じかねます」

慌てて修一郎を見る二人を他所に、当の本人は珍しく真剣な顔つきでレベックを見据えていた。

「ほう。では、どうするんじゃ？」

対するレベックは好奇心を湛えた瞳で、口の端を吊り上げて笑う。

「まずですね……………」

そうして告げられた内容に、個室にいた一人は呵呵と笑い声を上げ、一人は感心したように呟き、一人は何かを考え込むように黙り込む。

急遽設けられた商談の席で、条件を提示した修一郎は、いつもの柔らかな笑みを浮かべたまま、愛おしそうにライターの表面に触れて

いた。

第三話 昼飯と旧友

「ふーん……。で、その“ライター”を売るっていうのか？」

ソーンリヴが作業の手を止めて、修一郎の持つ金属の箱を見つめる。

「ええ。社長が意外にもというか案の定というか、乗り気でして」

心の中で思っていることを表に出すことはなく、いつもの柔和な笑みを浮かべて、修一郎はお茶の準備をしている。

マリボー商店で売っている高級品ではなく、街の市場で買ってきた庶民が飲んでいる茶だ。

「あの人は新しいモノ好きだからな」

やれやれといった表情と口調で、深い藍色をした髪の女性事務員は小さく頭を振った。

「それで？販売価格や仕入方法といった取り決めはどうなったんだ？」

新しいモノだろうが珍しいモノだろうが、それを店で売るとなると実務が発生する。

仕入れに伴う流通・在庫管理各部門への周知、運搬に係る人足の確保に伴う経費の支払い、出納板への新規登録、販売部門への商品の概要説明及び販売価格の周知といった手続きは、事務員であるソーンリヴと修一郎の業務となるのだ。

仕事の顔つきになったソーンリヴが修一郎に問い質したのは当然

のことであつた。

「はい。それらについては先ほど社長と話したのですが……」

ソーンリヴと自分のカップにお茶を注ぎながら、修一郎は説明を始めた。

「ヤスキ。お前、何やら面白いものを手に入れたそうじゃないか」

マリボアの個室に呼び出された修一郎に、部屋の主が開口一番そう言った。

修一郎の世界で言うと、横6メートル、奥行き5メートル、高さ2メートルの、事務室の倍はありそうな広い部屋の床には濃い緑色の絨毯が敷き詰められ、部屋の中央には小ぶりのソファとローテーブル、奥にはマリボアの執務用机が置かれている。

入口から見て左側の壁には、華美に過ぎない程度に裝飾が施されたキャビネットが置かれており、中には高級そうな酒瓶やら彫刻品といったものが並べられていた。

右側の壁には、アーセナクト商人組合の組合旗が掛けられ、その隣には、羊皮紙製の書物が十冊程度と、ルザル王国製の壺が一つ収められた小さな書棚が据え付けられている。

入口の正面の壁は、事務室の窓とは違い、透き通ったガラスの詰められた大きな窓が、晩秋の控え目な陽射しを室内に招き入れている。

その窓の前には、マリボアのお気に入りだという、豪華さよりも機能性を重視しつつ、それでもある程度の威厳を感じさせる机が鎮

座していた。

部屋の主のマリボーは、ソファーに腰掛けて、修一郎に対し笑みを浮かべているが、それは商売の話をする時の笑みであることを修一郎は知っている。

相変わらず耳聡い人だなと思いつつも、修一郎はいつもの頼りなさげな笑みを浮かべて答えた。

「王都から戻られたばかりなのに良くご存知ですね、社長」

ソファーの傍までやってきた修一郎に、「まあ座れ」と勧めながら、マリボーが口を開く。

修一郎が“社長”と呼ぶことに関しては、あちらの世界での意味を説明するといたく気に入ったようで、言い直させたり咎めたりすることはない。

むしろ、この店の中ではそう呼ぶようにと、マリボーから半ば命令に近い指示を受けているくらいだ。

「商人なら当たり前だ。

で、その“ライター”とか言うのはどういうものだ？今も持っているのだろうか？」

問われた修一郎は、素直にポケットからライターを取り出して、二日前にゼリガたちに説明したことをマリボーにも話す。

「……と、いったモノで、魔力のない私は非常に助かっています。ただ、こちらの世界の人にはあまり必要とはされないと思います
が」

修一郎の説明を黙って聞いていたマリボーは、ライターから視線を外すことなく、矢継ぎ早に質問を重ねる。

「なるほどな。」

それで、消耗品の補充はどうするつもりなんだ？

ライター製作にかかる日数は？

日に、あるいは週にいくつ製作可能だ？」

「基本的な消耗品は、火打石と油になります。これはレベックさんの工房で生産できます。」

それ以外の消耗品、綿やランプの芯ですが、これは既存のものを流用可能にしています。」

製作日数は、コレは飽くまでも試作品ですので、一週間……五日程度かかっています。」

このまま量産を行うとしても、外側の器、内部の筒に関しては打ち出しで一つ一つ製作していますので、工房を全稼働させても一日二個が限度だろうとのこと。です。」

それ以外の部品については、試作品の鋳型が保管されているとのことでしたので、それほど時間は掛からないと思われ。ます。」

これらのことから、仮に量産化を依頼した場合、最高で一日二個、一週間で八〜十個程度でしょうか。」

質問内容を予測していたのであろう、修一郎は淀みなく答えた。

「ふむ……」

マリポーは口ひげを指で弄びながら思案している。

マリポーは人間族の五十になったばかりの男で、恰幅の良い体つきに、砂色の髪に砂色の目をしている商人だ。

髪の毛は、今は七三分けに近い髪型をしているものの、日によっては五分分けになったりと納まりが悪いようだが、あまり頓着している様子もない。

髪と同じ色の立派な口ひげを生やしており、本人のちょっとした自慢でもある。

普段は温和な中年男性といった風貌で、性格も善良と呼んでいいのだが、商売の話となるとあからさまに表情が変わる。

同業者からは、飢えた狼のようだと言われ、怒られることもあるが、ぎりぎりの線で上手く立ち回って敵を作るような真似はしない。

そういった強かさがなければ、この商業都市でマリポー商店をそこそこ名の売れた店にまで大きくすることなどできなかったであろうが、あまりの豹変ぶりに慣れない従業員がいるのも確かである。ソーンリヴが「悪い人ではないんだが……」と言葉を濁したのもこのあたりに関することを言いたかったのだろう。

「ヤスキ。お前はどうか考える？」

修一郎の対応に、既にこの新入事務員が何やら腹案を用意していることに気付いたマリポーは、値踏みをするような視線と言葉で発言を促す。

「はい。確実に売れる商品とは言えないでしょうが、多少の需要は見込めるのではないかと思います。」

基本的に、この世界は魔法を中心に成り立っていますが、ほくち箱のように魔力を使わずに火をおこすための道具も現に存在していますし。

行商人や冒険者、探鉱者の中には予備として欲しがるお客様もいらっしやるでしょう。

それでも週に二〜三個売れば良いといった程度でしょうか」

そう答える修一郎に、「あと一歩だな」と評価を下し、マリポーが付け加える。

「それに、貴族様や好事家も考慮に入れないとだめだ。彼らは新しい物、珍しい物にはほぼ無条件で飛びつくからな。例えそれが、実生活で使えない・使わない物でも、だ。俺の考えだと、週に五〜六は売れる」

マリボアの口調から、ライターは既に新商品として販売することが決定したようだった。

ならばここからだ、修一郎は姿勢を正す。

「それは、当店で取り扱うということでしょうか」

「ああ。目玉商品と行かないまでも、それなりにお客を呼ぶ材料にはなるだろう」

「分かりました。では、それを踏まえたうえで、お願いがあるのですが」

「なんだね？叶えるかどうかは別にして、要望があるのなら聞こうじゃないか」

これも予測していたのか、マリボアは僅かに笑って口調を少しだけ柔らかくすると、修一郎の顔を見つめる。

「まず一つ。」

レベックさんの工房は、本来は木工品や石細工の製作を主に扱っている所です。金属加工は飽くまでも装飾の補佐として行っているに過ぎません。

ですから、一週間あたりの仕入れ数は四個を限度にしてくださいのたいたいのです。

これはレベックさん本人の要望でもあります」

「……いいだろう。数量を限定して希少価値を高めることも狙えそうだしな」

寸時の黙考の後、マリポーは了承した。

「では二つめ。

専用の消耗品……火打石と油ですが、販売開始から暫くの間はレベックさんの工房から当店が全て買い取る形を取り、ライター本体がある程度広まった段階で、他店にも卸すことを認めてください。

これは、下手に当店が独占すると、模造品や粗悪品が出回る可能性が高まり、ライター自体の評価が落ちることを避けるためです。

火打石は見る者が見ればどの種類かはすぐに分かるでしょうが、油は今のところレベックさんの工房でしか精製できない物で、他の油を使った場合、火付きが悪くなったり下手をすると爆発する恐れもあります」

尤もそこまで心配するほど売れる商品かどうかは分かりませんが、と修一郎は苦笑しながら付け加える。

「うちの店で継続的に一括仕入れするわけにはいかないのかね？」

修一郎の“他店に卸す”との言葉に、一瞬眉を動かしたマリポーが諮るように問い掛ける。

「商売ですから、自らの利益を第一に考えるべきであることは理解しています。

しかし、先ほども申し上げたとおり、当店以外で手に入らないとなると、ほぼ間違いなく類似品を作ろうとする者が出てくるでしょう。

そしてそれを使ったお客様が、十分に機能しないライターに使用しないという烙印を押し、それが口伝えて広まるのは色々と拙いと思います。

後は、これは余計な心配かも知れませんが、全てを当店に集中させて、下手に同業者の悪感情を買っようなことを避けたほうがいいのではないかとの考えもあります」

答える修一郎の顔は、いつもの柔和でそれでいてどことなく頼りなさそうな表情ではなく、一端の商人のそれになっている。

修一郎がこの街にやってくるまでの経緯を知っているマリポーは、満足そうな笑みを浮かべると、「分かった」と頷いた。

「それでは最後に、これは要望というよりも提案なのですが。

当店でライターを販売する際、外側の器のこの辺り……に、レベックさんの工房の名前と当店の名前、それに通し番号を彫り込んではどうでしょうか。

そうすることで、両者の存在をアピール……当店やレベックさんの工房を知らないお客様に知らしめるといった意味ですが、ことができますし、このライターが元祖であるということも主張できるのではないかと思います。

また、通し番号を入れることにより、正規品と模造品の区別が容易になります」

そう言いながら、修一郎は自分のライターのケース下部を指でなぞる。

「ほう！面白いな。

そんなことをやっている店は見たことがない。いいじゃないか」

マリポーは一つ膝を叩くと、目を輝かせた。

この世界に、未だ広告という概念は殆どない。精々が店の看板と口コミ、後は店先での呼び込みくらいだ。

また、個人の所有物に名前を刻むという行為は、一部の冒険者や騎士が己の武器に施す程度で、市井で生活している人々には縁のないことであつた。

製造・販売元を明確にすることと、それを所有している者の周囲の興味を惹くことを兼ねた、こういった手法は、修一郎の世界では極々当たり前に行われていることなのだが、こちらの世界では未だ誰も取り入れていない。

仮に、本当に仮にだが、ライターがそれなりに世間に受け入れられ売れた場合、当然起こり得るだろう模造品の出現は、下手をするとな祖の評価を落とすことになりかねない。

マリボーには言っていないが、単に同品質の競争相手なら現れてくれても構わないと修一郎は考えている。

困るのは、見た目を似せただけのような粗悪な模造品を作られて、元祖ライターの、ひいてはそれを製作したレベックの工房や、それを販売するマリボー商店の評判を落とされるような事態になることだ。

色々ともりボーに要求したのは、その一点を案じているからに他ならない。

元々は修一郎が日常生活を送るうえで、利便性の向上を目的として個人的に作って貰った品である。

マリボーの予想に反して売れなくても、それはそれで仕方ないし、問題ないと思っている。

既に試作品の製作費用と手数料は、依頼の段階でレベックに渡してあるのだ。

例えばライター数個と消耗品が不良在庫となつても、いざとなれば修一郎が買い取ればいい。

修一郎にとっては、非常に助かる物であることは事実だし、今後も使い続けることになるのだから。

「ちよつと貸してみる」

マリポーは修一郎からライターを受け取ると、火をつけた。手の中にある鉄の箱から立ち上る小さな炎を暫く見つめたあと、蓋をして修一郎に返す。

「よし。仕入れ価格や方法については、俺が直接レベック爺さんに話をしよう。

爺さんの所とは今までも何度が取引しているからな。

向こうの負担にも損にもならないようにするから心配するな」

今までの修一郎の態度から、もっともらしい理由を付けながら、その実レベックを氣遣う心情に氣付いていたマリポーは、口の端を上げて告げる。

「お願いします、社長。

上手く行けば、もう二―三商品化できるモノがあるので、レベックさんとは良い関係を築いたほうが良いと思います」

既に依頼している物が一つ、材料が揃えば依頼したい物が二つあると言う異世界から来た男に、マリポーは笑みを深くして「まかせておけ」と応じた。

「なるほどねえ。あの人相手に駆け引き紛いのことをするとは……。シュウイチロウ、お前ここに来る以前は何をやってたんだ？」

修一郎の淹れたお茶を飲みながら、ソーンリヴが探るように睨む。

「別におかしなことはしてませんよ。

行商人の真似事みたいなものを数年やっていた程度です」

苦笑を浮かべて答える修一郎に、まだ何か言いたげなソーンリヴであったが、鼻を一つ鳴らして、再びカップを口に運ぶ。

マリポーは早速レベックの工房へと出かけて行ったので、今日中には仕入価格や販売価格が決まるだろう。

商品を実際に仕入れるのは明日以降であろうから、とりあず出納板に登録しておけばいいか。

そう結論付けると、目つきの悪い事務員は仕事に戻ることにしたのだった。

ライターの販売が始まって三日経った。

売れ行きは、初日は売れず、二日目に二つ、三日目に一つ売れている。今日はまだ売れていない。

三日で三個。品物が品物だけに上々の売れ行きと言えるだろう。

販売価格も、マリポーが上手く交渉したのか、従来のほくち箱とまではいかないにしろ、庶民でもちよつと無理をすれば買える程度に納まった。

その“ちよつと”がどこまでの金額を指すのかは、人によって議論が分かれるところだろうが。

予想通り一般市民はまず必要としないためか、陳列されているライターを珍しそうに眺めはするものの、手に取る者はおらず、購入

したのは冒険者が二人、貴族が一人であった。

レベックの工房では、新たに人を雇ったらしく、ライター専門の製造ラインが作られたそうである。

それでもケースの強度を損なうことなく店名等を彫金する技術を持つ者は、工房の主であるレベックしかおらず、生産ペースは一日一個に落ちてしまったようだ。

とりあえず現状は、大きな問題もなく好調と言えるだろう。

「じゃあ、私は食事に行つてきます」

大鐘の音が三つ響いたところで、修一郎が席を立った。

「ああ、シュウイチロウ。すまないが、何か適当に食べられるものを買ってきてくれないか。

ちよつと昼を食べに外に出る余裕がなさそうだ」

未だ自分の机に向かつていたソーンリヴが、顔を上げてそう告げる。

「まだ仕事が残つてるんですか？でしたら私も手伝いますよ」

「手伝ってもらえるならそうしたいところなんだがな。

出納板の設定に手違いがあつたようなんだ。今週分の出納板をーから確認し直してるんだが……。

お前、できるか？」

そう言つて人の悪い笑みを浮かべたソーンリヴは、制服のポケットから財布を取り出す。

魔法が使えない修一郎では、出納板の再設定や調整はできない。

「そうそう、別にすぐじゃなくていいぞ。お前の食事を済ませてから帰りに買ってきてくれて構わないからな」

仕方なくソーニンリヴから昼食代を受け取る修一郎に、先輩事務員はそう付け加えた。

従業員出入口から外に出て見上げると、雲ひとつない晩秋の青空が広がっていた。

通りを吹く風は、日中でも僅かに寒さを感じさせるが、十分な外光が取り込まれていない薄暗い事務室にいた修一郎には、それでも爽快に感じられる。

風がなければ、外で食事をしても良いと思えるほどだ。

通りを見ると、同じように昼食に向かう他店の制服を来た店員らしき人々が、思い思いの場所へ向かって歩いている。

アーセナクトの中央には市庁舎があり、その周りを一周するような大きな街路が敷かれ、その周囲に幅約75メートルの街路の延長のような円状の広場が設けられている。

ドーナツ状の広場の市庁舎通り側の半分は緑地帯になっており、丈の低い広葉樹や芝生が植えられ、所々にはベンチもある。

残りの半分には、様々な露店が軒を連ねていた。

上空から市庁舎を中心に見ると、市庁舎の周りに街路があり、その街路を囲むように緑地帯があり、その緑地帯の外円部に露店が並ぶ広場があり、市庁舎を三重の円が囲んでいる形になる。

昼時ということもあり、露店では様々な軽食が売られていた。

串焼きにされた肉や、干しブドウや木の実を練りこんで焼いたパン、程よい焼き目と照りのついた鳥の腿肉、リンゴに良く似た果物をバターと砂糖で焼いたもの、何かの肉に小麦粉でつくった生地を巻きつけて焼いたものと、空腹を刺激する匂いがそこかしこから漂

ってくる。

緑地帯のベンチに目を遣ると、そこに腰掛けて露店で買った軽食を食べている者も居るようだ。

ソーンリヴに買っていくのはこれらの中から選ぶと決めた修一郎は、まずは自分の食事を済ませることにして、石畳の街路を歩きながらプレルの店に向かった。

修一郎がプレルの店に入ると、そこは軽い修羅場と化していた。ホール内に十脚あるテーブルは全て埋まっており、僅かにあるカウンター席も満席状態だ。

「うわ……。こりゃあ、今日は無理かな」

そう思い、踵を返そうとした修一郎に、プレルの声が飛んでくる。

「ああ、シューイチロー！ちょうど良かった！

悪いけど厨房手伝ってくれない？お願い！」

ホール内を一人で飛び回っていたプレルが、修一郎の姿を見つけて小走りに近寄ってくる。

「ええっ！？私は今日は非番でもなんでもないんですよ！？」

慌てて声を上げる修一郎だったが、プレルの押しは強い。

「子鐘半分……。いえ、ラローズが戻ってくるまででいいから！ね？頼むよ！」

そんなことを言われても、現在修一郎は店の制服を着ているし、早めに食べてソーンリヴの昼食も買って帰らないといけない。

事情を説明しようとした修一郎だったが、その相手はテーブルの客に呼ばれたため、既に目の前にいなかった。

「まいったなあ……」

仕方なくカウンターへ向かうと、両手に水の入ったコップを持ったクリユが居た。

「あー！しゅーちろーだー！」

嬉しそうに両手を振って修一郎を迎えてくれたが、勢い良く手を振ったためにコップの水が周囲に飛び散る。

「わぷっ！」

ついでにクリユにもかかったようで、慌てて袖で顔についた水を拭いている。

「こんにちは、クリユちゃん。ラローズさんいないんだって？」

いつものように長身を屈めてクリユに話しかける修一郎に、クリユは元気良く答えた。

「うん！カブリスさんのところからにもつがとどいてなくて、ラローズにいちゃんがおとうさんにおこられて、そしたらしょくざいがたらなくなりそうだから、おかあさんがいそがしくなって、カブリスさんのところにラローズにいちゃんがはしっていったの！」

必死に説明してくれているのだが、今一つ要領を得ないため、少しばかり考え込んでいた修一郎だったが、大体のことは察すること

ができた。

要は、今日カブリスという卸業者から仕入れる予定だった食材が、何らかの手違いで未だ配達されておらず、急遽ラローズが食材を受け取りに向かったのだろう。

で、厨房兼ホール担当のラローズが抜けたことで、プレルも、プレルの夫であり店主であり調理長であるパノーバもてんでこ舞いと相成ったというわけだ。

「わかった。じゃあ、クリユちゃんはそのコップにおみずをいれなおして、おきやくさんにもっていつてくれるかな？」

修一郎は笑いながら、クリユの頭を二回ほど撫でる。

くすぐったそうに目を細めながら、「わかった！」と言うと、若い猫人族は厨房へと走っていった。

その姿を微笑ましく思いながら、修一郎もカウンターをくぐり厨房へと入る。

厨房の中では、修一郎よりも頭一つ低い、灰色一色の体毛を纏った猫人族の男性が忙しく立ち働いていた。

猫人族にしては逞しい体躯に、白い長袖の上着、白いズボン、頭には同じく白いつばのないシルクハットのような帽子を被り、しきりに竈の火力や、鍋の中身を確認しつつも、その間の僅かな時間で食材を刻んでいる。

あの帽子はやっぱりコック帽なんだろうかと思いつながら、修一郎はすぐ傍の流しで念入りに手を洗う。

「パノーバさん、手伝います。このエプロン借りますね」

近くにあった、おそらくはラローズのものであろうエプロンを手早くつけながら、調理台へと近づくと修一郎。

「すまん。こんなに立て込むとは予想してなかった。
おまけに発注に手違いがあつてな」

そう言いながらも、パノーバは修一郎に振り返ることなく、手を動かしながらも、パノーバは修一郎に振り返ることなく、手を動かして続けている。

「いえ。いつもお世話になってますから、少しくらいは……」

そう言い掛けたところで、クリュが再びコップに水を注ぎ終えたのだろつ

「いってきまーす!」

と、元気良く駆け出して行った。

「ころばないようにね」

彼女の小さな背中に一言投げかけると、パノーバに顔を向けて確認する。

「私は何をすればいいですか?」

「ああ、とりあえずチーズのティエルミを五つ作ってくれ!あと、トルマーバを六皿、それが済んだら干しブドウパンを三人分ほど切つて軽く火で炙つておいてくれ!」

チーズのティエルミとは、先日修一郎たちがここで食事をした際に追加注文した、水で戻して柔らかくしたドライトマトとタマネギとチーズをオープンで焼いたものだ。

トルマーバとは、同じく修一郎たちが注文した、塩味の川魚のス

ープをベースとして、香辛料を加えた少し辛目のスープである。

「分かりました」

食器棚からオープン料理用の深皿を五つ取り出し、調理台に並べると、次に水で戻されたドライトマトとタマネギをまな板に載せる。ドライトマトは適当な大きさに切り、タマネギは薄く輪切りにして、深皿にタマネギ、ドライトマトの順に盛り付けていく。

その後はそれらに軽く塩・胡椒を振り、バジルに似たハーブを散らして、最後にチーズを包丁で薄く切り、深皿の上に被せるように乗せる。

一連の行程が終わったら、五つの深皿をオープンに入れて、今度はスープ用の皿を食器棚から持ち出す。

まるで自分の家の台所のように、手際よく仕事をこなす修一郎を横目に見ながら、「やっぱり惜しいな……」と呟いた猫人族の店主の声は、作業に集中する人間族の耳には届かなかった。

その後もパノーバから指示を受けて忙しく動き回っていた修一郎であったが、客の数が減ったのか厨房内もなんとか落ち着いてきたようだった。

「正直助かった。ここまで忙しいのは滅多にないんだがな。」

……「つたく、ラローズの野郎戻ってきたら少しばかりきつく言うておかんとな」

「まあまあ。初めてならばそこまできつく叱らなくてもいいんじゃないですか。」

二度目なら……「まあ、そこはパノーバさんにお任せします」

鼻の頭に皺を寄せて怒っているパノーバを宥めながら、修一郎が

苦笑する。

そんな遣り取りをしていると、店の裏口から当事者の声が聞こえてきた。

「すみません！戻りました！」

息を切らせながら戻ったラローズの手には大きな木箱が抱えられている。

「バカヤロウ！お前が確認を怠ったおかげでこっちは大変だったんだ！

そのせいで昼に出せるはずだった料理は出せなくなるわ、配膳に手間取るわ、おまけにシユウイチロウにまで手伝わせるはめになっちまった。

食堂やつてる者なら、お客を待たせるような真似は絶対にやつちゃいけねえんだ！」

どうやら修一郎のフォローは効果がなかったらしく、戻ってきたばかりのラローズの頭上に大きな雷が落ちた。

「す、すみません……」

項垂れるラローズに何か声を掛けようかと迷っていた修一郎だったが、カウンター越しのプレルから、今度はパノーバに向かって叱責が飛ぶ。

「店にはまだお客さんがいるんだよ！怒鳴るならお客さんがいなくなっただけにしてちょうだい！」

然して大きくもない声だったが、効果は覲面だったようで、今ま

で威勢の良かったパノーバはぴんと立っていた耳を寝かせて「すまん……」と小さく呟くのだった。

頂垂れる二人を見て、再び苦笑する修一郎だったが、ソーンリヴと自分の昼食のことを思い出して慌て始める。

「あ、拙い！昼飯買って帰らないと」

突然声を上げた修一郎に、パノーバが不思議そうな表情で尋ねる。

「なんだ？シユウイチロウ。もしかしてお前まだ昼飯食ってないのか？」

「食っていないも何も、昼飯食べようとここに来たらプレルさんに捕まったんですよ。」

拙いなあ……。今から食べてたら休憩終わってしまうだろうし……」

「す、すいません、シユウイチロウさん。僕のせいでご迷惑をおかけしてしまつたようで……」

何やら考え込んでいる修一郎に、ラローズがさらに頂垂れて謝罪する。

「手っ取り早く食えるモノといたら、燻製肉とトルマーバの残り」とパンくらいしかないが……。」

持ち帰りとなると、トルマーバは難しいな。あとは」

同じように考え込んでいたパノーバが、現状を口にしようとした時、修一郎がいきなり顔を上げた。

「パノーバさん。厨房お借りしてもいいですか？」

「あ、ああ。それは構わんが。」

料理に使える食材なんて殆ど残ってないぞ？」

「いえ、なんとかなると思います」

パノーバの許可を得た修一郎は、早速調理に取り掛かる。

余っていた干しブドウ入りのパンを、先ほどよりさらに薄く四枚ほど切り分け、片側の表面を軽く焦げ目がつく程度に炙る。

燻製肉とチーズも同様に薄くスライスし、干しブドウパンの焦がした面の上に燻製肉、チーズの順に重ねていく。

チーズの上に軽く胡椒を振り、半分干した状態でオリーブオイルに漬けてあったトマトを乗せ、塩を振る。

そうしたパンと片側を焦がしただけのパンを一つの金属トレイに乗せ、オーブンに入れる。

その間に、生で食べることの出来るサニーレタスに良く似た葉物野菜を水洗いして、パンと同じ大きさになるように数枚手で千切り、オレンジを二周りほど小さくした柑橘系の果物を半分に切って、絞った汁をその上に振り掛ける。

ちょうど頃合になったのか、オーブンからトレイを取り出し、チーズが熱でとろりと溶けたのを確認すると、その上に先ほどの野菜を乗せ、キツネ色に焼けたもう一枚のパンをその上に乗せる。

「これでいいかな」

ふうと一息吐いた修一郎を、パノーバとプレルは、さも面白そうに、ラローズは呆気にとられた表情で見つめていた。

「すみません、パノーバさん。かなり好き勝手に食材使わせていた

いただきました」

つけていたエプロンを外しながら、修一郎が申し訳なさそうに言う。

「なあに、手伝ってもらった上に面白いモンまで見せて貰ったんだ。礼を言うのはこっちだよ。

で？“コイツ”は何て料理なんだ？」

既に何度か、少なくとも一回は修一郎がこの世界にはない料理を作る場面を見ているのだろう、パノーバは修一郎の作ったモノを興味深げに見ながら訊ねてきた。

「これは“サンドイッチ”と言います。

パンで食材を挟むだけなので、比較的短時間で作ることが出来ますし、色々な食材を挟むことで味の変化が楽しめますよ。

あと、片手で食べることが出来るのも利点としてありますね」

「へえ。そりゃ面白そうだ。

なあ、シュウイチロウ。“コイツ”をウチの店で出してみたいんだがどうだろう？」

「え？それは構いませんけど……。

そうだ。だったら」

パノーバの申し入れに何か思いついたのか、修一郎が口を開きかけたとき、市庁舎の親鐘が三つ鳴り響き、遅れて教会の子鐘が一つ鳴った。

「あ！いかん、休憩時間が！

パノーバさん、これの代金なんですけど……」

言いかけた修一郎にパノーバが笑って答える。

「ああ、いらんいらん。

さつきも言ったように、手伝ってもらったし、新しい料理も教えてもらったしな。

それからほれ、それを裸のまま持ち帰るわけにもいかんだろう？
これを使え」

そう言って、調理台の横に積まれていた箱から、バナナの葉のような大きな植物の葉を二枚取り出した。

魚の蒸し焼きに使われる葉で、サンドイッチ程度なら充分包むことができる大きさだ。

「ありがとうございます！お言葉に甘えさせてもらいますね」

手際よくサンドイッチを包んだ修一郎は、厨房を後にしようとして、振り返った。

「そのサンドイッチのことですが、ちょっと私に考えがあるので、今夜にでも話しましょう」

それだけ言うと、その長い足をもつれさせるように走って店を出て行った。

「また何か面白そうなことでも思いついたみたいね。

あの子が来るようになってからウチの店は世話になりっぱなしだわ」

そんな修一郎を微笑ましい眼差しで見っていたプレルは、楽しそうに呟いた。

「まったくだ」

既に別の調理を始めるため調理台に向かっていたパノーバは、背中越しに答える。

「え？あの、シュウイチロウさんって一体……」

未だ状況が掴めていないラローズに、詳しく話そうとプレルが口を開きかけたその時。

「おかあさんもラローズにいちゃんもなまけてたらだめじゃない！」

厨房の入口で、腰に両手を充ててご立腹のクリユの姿があった。

修一郎が事務室に戻ったとき、ソーンリヴは様々な理由で機嫌が悪かった。

一つ、休憩時間が終わったというのになかなか帰ってこなかった修一郎に対して。

一つ、今日に限って朝食を抜いてしまつて空腹が限界に近かったことに対して。

一つ、漸く戻ってきた修一郎が持ってきた昼食に、嫌いなチーズが入っていたことに対して。

一つ、休憩時間が終わる直前、修一郎の知人だと名乗る女冒険者

が事務室を訪れ、やたら偉そうな態度を取っていることに対して。

一つ、その冒険者の容姿が、どう控え目に見ても自分とは比べ物にならないくらいに美しかったことに対して。

そういったことから、事務室に戻ってきた修一郎が一喝されるのはある意味必然だったのだろう。

最後の事柄については、八つ当たり以外の何ものでもないのだが。

「シュウイチロウ！お前はどれだけ昼食に時間をかければ気が済むんだ！

頼んだ物も、どこまで行って買ってきたのか知らんが、私は適当でいいと言っただろう！」

「すみません」

どんな理由であれ、遅れたのは間違いない。ソーンリヴの叱責は甘んじて受けるつもりで修一郎であった。

そこに第三者の声が割って入る。

事務室を訪れていた冒険者だ。

「そこまで怒る必要はないでしょう！？修一郎にも遅れる理由があったのかも知れないじゃない！」

そもそも修一郎は、余程のことがない限り時間は守る人よ！」

興奮しているのか若干高くなっただけはいるが、良く透る鈴のような声だった。

「え？」

ソーンリヴの剣幕のせいでも今の今まで気付かなかったのか、修一郎が間の抜けた声を上げる。

「やつ！修一郎」

事務室入口から横にずれた場所で立っていた女冒険者に漸く気付いた修一郎が、声のした方向……右斜め後方に向くと、相手は笑顔で片手を上げて軽い調子で挨拶した。

腰上まで伸ばした流れるような黒い髪は、上質の絹糸を黒く染め上げたようで、この薄暗い事務室においても殆どその光沢を失っていないように見えた。

その黒い髪から少しだけ飛び出ている耳は、人間族の耳ともエルフ族の耳とも僅かに違っており、やや尖った形状は犬人族の耳に似ているが体毛は生えていない。

髪と同じ黒い瞳と吊り目がちの目、卵型の顔に、適度に高い鼻と小ぶりの唇といった造形は、大多数の者が美しいと感じることだろう。

歳の頃は二十歳前後くらいだろうか。そのままであればもう少し年上にも見えるだろうが、彼女の幼さの残る言動が年齢の特定を難しくしているようだ。

細身の体は、修一郎より若干低い程度で、人間族の女性であれば充分に長身だと言える。

ソーンリヴより幾分かは大きめな胸、くびれた腰、大きすぎない臀部に、女性らしさを残しつつ引き締まった体を覆う皮鎧と皮の籠手は、夏の草色に染められ、部分的に露出している小麦色にやけた肌は傷一つなく滑らかだった。

足には同じく夏草色の皮の脛当てと、冒険者が愛用する靴底・つま先・踵部分を鉄で補強したショートブーツを履いている。

本来なら腰に何らかの得物を差しているのだろうが、基本的に街中では冒険者や探鉱者の武器携行が禁止されているため、今は何もつけていないようだ。

旧知の顔を見た嬉しさからか、先ほどまで発していた怒気に近い

感情は消え失せている。

「……フォンロシエさん？」

「もう！ロシエでいいって言ったでしょ！」

「うわっ!?!」

嬉しさを全身で表して、両手を広げて修一郎に飛びつく。

その様子を横目で見ていたソーンリヴが、真冬の吹きすさぶ風のような温度を伴った声でぼつりと呟いた。

「シュウイチロウ……。ここは職場だぞ……」

先輩事務員の纏う怒気と冷気に気付いた修一郎は、とりあえず場所を移すことにする。

「ソーンリヴさん……」。

あの、時間に遅れておいて申し訳ないんですけど、少しの間だけ席を外させてもらっていいでしょうか……?」

おずおずと訊ねる修一郎に、眉間に皺を寄せたソーンリヴは纏う雰囲気と声の温度をさらに低くする。

「とつくの昔に午後の就業時間なんだがな？」

今、この部屋で思い切り息を吐いたら、その息は白く染まるかも知れないなと心中で苦笑しながら、修一郎は言葉を重ねた。

「すぐ済ませますから。このままだと彼女、素直に帰ってくれそう

もありませんし」

修一郎とほぼ変わらない身長の癖に、修一郎の首にぶらさがるように抱きついていていたフォーンロシエが、急に何かに気付いたように声を上げる。

「ん？んん？」

小さく小高い鼻をひくひくと動かしながら、修一郎が未だ手に持っていた濃い緑の葉に包まれた物に視線を動かした。

「修一郎が持つてるのも、もしかしてアレ？」

そう言ってソーニンリヴの机の上に広げられた、包みの中身を指差す。

中身とは、勿論修一郎がプレルの店で作ってきたサンドイッチだ。

「ええ。そうですけど……」

修一郎がそう答えると、フォーンロシエの笑顔が一層輝きを増した。

「やった！あたし、まだお昼ご飯食べてなかったのよねー！」

言うなり、修一郎から葉の包みを奪い取ると、早速開け始める。

「あ、そ、それは私の……」

「うーのうーの。固い」と言いつつなじゅー」

瞬く間に包みを開いたフォーンロシエは、躊躇うことなくサンドイッチに齧り付いた。

「ん〜！やっぱり修一郎の作った料理はおいしーねー！」

長い黒髪から覗く尖り気味の耳をぴくぴくと動かしながら、小さな口を精一杯開いてサンドイッチを頬張っている。

美しいというより、可愛いらしい仕草で食事をしているフォーンロシエを、やれやれとばかりに苦笑しつつ見ていた修一郎に先輩事務員から言葉が飛ぶ。

「分かった分かった。さっさと行って来い。」

事務室でじゃれ付かれても仕事の邪魔になるだけだ」

怒るのも馬鹿らしくなったと言わんばかりの呆れ顔で、ソーンリヴは外に出て話せと促した。

「何よお！感動の再会を邪魔してんのはそっちでしょう!？」

別に子鐘一つほど話し込もうってわけでもないんだからいいじゃないの！

「だいたい客人に茶も出さないなんて、どういう」

ソーンリヴの言葉に、サンドイッチを食べるのを中断し、再び柳眉を吊り上げて反論しようとしたフォーンロシエの耳に、修一郎の固い声が聞こえてくる。

「ロシエ。やめてください」

「あ……。ごめん、修一郎……」

見る間にしよげ返るフォンロシエの後ろに回り込むと、彼女の両肩に手を置いて、事務室の入口へと押しやりながら、修一郎は殊更申し訳なさそうにソーンリヴに告げた。

「すみません。それでは、少しだけ外に出てきます。すぐに戻りますから」

フォンロシエに何か言い返そうと口を開きかけていたソーンリヴは、ため息を一つ吐くと「ああ」とだけ応えた。

扉を開け、通路に出て行こうとした修一郎は、あることに思い当たったように振り返る。

「あ、あとその食べ物ですが、できるだけ温かいうちに食べちゃってください。

チーズが入ってますが、炙って溶かしてありますので、それほど歯触りは気にならないと思いますよ」

そう言い残すと、今度こそ本当に修一郎はフォンロシエを押して店の外へと向かった。

第四話 友人の想い

フォンロシエを伴って従業員用出入口から店の裏手に出た修一郎は、店のレンガ壁に背中をもたせかけて大きく息を吐いた。

既に昼の休憩時間は終わっており、目の前の石畳を、荷を積んだ馬車が大きな音をたてて通り過ぎていく。

太陽は中天にあるが、陽射しは夏のように照り付けるものではなく、控え目に降り注ぐといった表現が適切に思えた。

アルタスリーア王国は、アルベロテス大陸の南東部を占める大陸中二番目に大きな国だ。

北は大陸一の国土を有するバンルーガ王国に接し、西は『遺跡の国』の別名を持つルザル王国に接している。

南西部には大陸中最も狭い国土のウヴェンナツハ王国がある。

国土の形状としては、北に長く南が短い、少し歪なひし形をしていた。

北西の長辺の大半をバンルーガ、残りの長辺と南西の短辺の一部をルザル、残りをウヴェンナツハと、大陸に存在する他三国全てと国境を持っている形になる。

それ以外の方角は海に面しており、北東、東、南東に広がる海を東大海、南に広がる海を南大海と呼ぶ。

修一郎の世界で言う緯度で比較すると、日本よりはやや北に位置する。

フランス北部やオーストリアあたりが近いが、二つの大海に流れる海流の影響によって、アルタスリーアは日本に近い気候になっている。

春には花が咲き緑が芽吹き、夏には強い陽射しで草木が青々と茂り、秋には広葉樹が山を赤に黄に染め、そして冬には雪が国土の大

半に白い化粧を施す。

今は、秋から冬に移りかけの季節だ。

日中はやや涼しすぎるくらいがあるものの過ごしやすく、夜は冬になったかのように寒い。

修一郎の昼食を強奪して、その胃に収めたフォンロシエは満足そうな顔で「ごちさーさまでした」と手を合わせる。

修一郎から教わった向こうの世界の風習だ。

猛抗議を上げる自らの腹の虫を気にしないようにしながら、いつもより深い笑顔で修一郎は旧知の女性に話し掛ける。

「しかし驚きましたよ、ロシエ。この街に来ているなんて。

三年ぶりですか？」

「直前に受けてた依頼が、ティタデラ城砦までの隊商護衛だったからね。」

アーセナクトに修一郎がいるって噂は聞いてたから、会いたくなっついでに寄ってみたの。

「って、もう三年経つんだっけ？はっやいなー」

サンドイッチを包んでいた緑の葉を綺麗に折り畳んで、腰のポーチに入れていたフォンロシエが答える。

「ついでと言うには、結構離れてませんか？」

「ここへは馬車で？」

ティタデラ城砦は、かつてこの大陸で起こった“大戦”時に築かれた砦である。

周囲を二重の城壁と広く深い堀に囲まれた、正確には城塞都市であり、アーセナクトから馬車で五日、国境都市ゴステアから馬車

で二日の距離にある。

アーセナクトとゴステアの間というには、ゴステア寄りだが、それでも一般的にはアーセナクトとゴステアを結ぶ公路の中間地点という認識は強い。

「ううん。徒歩で来たわよ？」

途中、お金になりそうな物も色々手に入れながらね」

そう言つて、軽くウィンクするフォンロシエは、やはりどこか幼く見えた。

ティタデラ城砦から徒歩でここまで来たとなると、二十五日前後は要しているはずだ。

ついでに寄つてみたと軽く言える距離ではない。

となれば、アーセナクトに何かしらの用事があったということなのだろう。

或いは本当に修一郎に会いに来たのか。

「そう言つて貰えるのは嬉しいのですが、本当の用件は別にあるのでしょうか？」

何とはなしに石畳を見つめていた視線をフォンロシエに移して、尋ねる。

「う……」

あっさりと真意を見抜かれて、言葉に詰まるフォンロシエに心の中で苦笑しながらも、修一郎は

「でも、嬉しかったですよ」

と、柔らかな笑顔で告げた。

どうやら店の荷卸し場では、王都アーオノシユよりさらに東に位置する、農業都市ナダルヌから届いた香油や香木の搬入が始まったようである。

ゼリガが部下に指示する大きな声が、ここまで響いていた。

「でも。まさか修一郎がこんな所で働いてたなんて思わなかったわ。

てつきり、小さい商店でも構えて上手くやってるだろうとばかり……」

傍目で見ても強引と分かるほど話題を変えながら、フォンロシエは修一郎の現状に言及する。

「慣れない者が店を持ったところで、上手くやっていきませんよ。行商人と違って、地に足をつけた商売をしなければなりませんし、周囲の競争店との商売上の駆け引きもあります。

子供の頃から修行を積んだ生粋の商人相手には、私のような付け焼刃では到底太刀打ちできません」

自分の店を持つ商人も、各地を廻る行商人も、商売における基本的スタンスは同じである。

客が求めているものを的確に判断し、仕入れ、販売する。その仕入先とも交渉し、少しでも仕入価格を下げさせたり自分に有利な条件を飲ませることに腐心する。商売敵の動向を探りその先手を打つ。もちろん、それをやり過ぎれば表に裏に制裁を食らう羽目になる。

そういったことは変わらないのだが、店を持った商人は、拠点となる“店”があることで、他人を雇うことができる。

他人を雇えば、それまでほぼ一人で行っていた情報収集や仕入れ交渉、決まった流通ルートの確保、接客、売上金の管理などを分担

させることができるのだ。

比べて行商人は、大半が一人ないし二人程度で行動し、行く先々で商品の売買はもちろん、仕入れ交渉や情報収集を行わなければならない。

流通ルートの確保に関しては、そもそも行商人自らが赴くことが当たり前なので問題はないのだが、とある都市で仕入れた品物が、次の街に到着するまでに価値の変動が起こり原価割れを起すといったリスクがある。

簡単に言うなら、単に自分よりも早く他の行商人が目的の街に到着し、同じ商品売り捌いて、自分が街に着いた頃には、客に見向きもされなかったり、安く買い叩かれる場合もあるということだ。

特定の仕入先と販売先を確保した行商人が、その有利さを生かすために都市や町に店を構えるようになることがままあるのは、そういったリスクを嫌ってのことが多い。

「修一郎なら、そのあたりも上手くやっていけそうな気がするんだけどなあ」

それでも何やら言いたそうなフォンロシエに、修一郎は笑みを消さないまま続けた。

「この世界に来る前も、同じような所で事務員をやってましたからね。」

多少の違いがあるとは言え、以前やってた仕事ですし、すぐに慣れることができましたから結果的にはこの仕事で良かったと思っていますよ。

……コタールさんからも色々叩き込まれましたし」

その名前に、フォンロシエは僅かに眉を顰めて修一郎の顔を見るが、修一郎の表情は変わっていない。ように見える。

だが、女冒険者はその変化に気づいていた。

冬が終わる直前の陽射しのように、頼りなげなそれでいて柔らかい、修一郎の特徴とも言える微笑が、強引に顔に貼り付けたように見えて、彼の内心を覆い隠しているように感じられる。

やはり言うしかないのか、そう心の中で大きくため息を吐いたフ
ォーンロシエは、暫し逡巡した後、その一言を告げた。

口調も今までとは違うものになっている。

「テイタデラ城砦に行く前にね、王都に寄ったの」

その言葉に、修一郎の表情が僅かに揺れる。

「そうですか」

その一言を発すると、雲一つない秋の空を見上げる修一郎。

また一台、修一郎たちの目の前を積荷を満載した荷馬車が通り過ぎていく。

「そういえば、ロシエはこの街にしばらく居るんですか？

ロシエが居るということは“彼”も居るのでしょうか？」

いつもの笑顔に戻って明るい声で、今度は向こうから話題を変えてきた修一郎に、彼女も乗ることにしたようだ。

「そうね。それなりにお金も貯まったし、一週間くらいは滞在するつもり。」

ここに来る道中、売れる物もそこそこ手に入っただしね。

今はそれを“アイツ”に売りに行かせてるのよ」

そう言って、修一郎の横に並び、同じように壁に背中をもたせか

けるフォーンロシエ。

短い沈黙が二人の間を流れるが、フォーンロシエがそれを破る。

「それで、どう？今の生活は楽しい？」

言われて横を見ると、修一郎を案じている色を浮かべた瞳が目に飛び込んでくる。

お互い不自然なまでの話題の転換に加え、先ほどと同じような質問なのだが、修一郎は素直に答えることにした。

「ええ。毎日楽しくやってますよ。」

この店の先輩方や街の方々にも親切にしてもらってますし」

「そうみたいね」

笑って答える修一郎の表情に、嘘はないのだろうと感じたフォーンロシエは、安心したような、寂しいような複雑な表情を見せた。

「この街に、永住する気なの？」

何の気なしにという体を装って発したそれは、先ほどはぼかしていた質問を直截的にしたものであり、フォーンロシエが二番目に訊きたかった質問。

かつて、修一郎が属する隊商を護衛しながら大陸中を旅したことは、フォーンロシエに取って忘れられない思い出となっている。楽しくて苦い、そんな思い出である。

「……まだ、決めかねています。」

けれど、ここに腰を落ち着けてもいいかも知れない、とも思っています」

それが修一郎の隠さない本音だった。

先ほど作ったばかりの笑顔は消えている。

フォンロシエも笑顔を消して、ぽつりと呟く。

「……王都で、クレルミロン夫人に会ったよ」

「……いつ頃ですか？」

「ん。半年前」

「ハーベラさんは？」

「幸せそうだった」

「お子さんは？」

「四人とも元気だったよ。上の三人は成人して、騎士と警護団員と医術士になってた。四人目は学校に通ってるって」

「そうですか……」

フォンロシエは、修一郎が安堵の息を漏らした音を確かに聴いた。

「会いに……行ってあげないの？」

躊躇いながらも発したその言葉こそ、彼女が一番訊きたかった問いだった。

それは以前にも修一郎に投げ掛けた問いであったが、その時の答

えはいつも拒絶だった。

訊ねるたびに、修一郎の顔から表情が消える。いや、微かに表情は読み取れる。

しかし、それは後悔や怒り、悲しみといった負の感情が、極々僅かに分かるだけで、前向きな感情が表に出ることはなかった。

そんな表情を見るのが嫌で、その問いを修一郎に投げつけることに、フォンロシエは少なからぬ勇気が必要とした。

だが、彼女たちがアーセナクトを訪れたのは、このことを告げるのが目的だったのだ。

「彼女も会いたって」

それが、クレルミロン夫人の依頼。

旧姓ハーベラ・アペンツェル、コタール・アペンツェルの妻であった女性だ。

ハーベラ・クレルミロン夫人の依頼は、修一郎に自分の現状と、再会したい旨の伝言、そしてそれに対する返答を持ち帰ること。

期限は決められていなかった。

依頼の半分を果たしたフォンロシエは、黙って修一郎の返答を待つ。

「そうですね……。できれば、もう少し時間をいただきたいところです」

いつもの口調に戻った修一郎の表情は、笑顔こそなかったものの固さは消えていた。

「ですが、そう遠くないうちに会いに行きますよ」

「え……？」

半ば色よい返事を諦めていたフォンロシエは、驚きを込めて修一郎を見つめる。

「もちろん、今すぐというわけにはいきません。

この仕事に就いてまだ二ヶ月しか経っていませんし、漸く街での生活にも慣れてきたところですから。

ですが……そうですね、来年の春あたりに時間が取れれば、王都に遊びに行きますよ」

「……本当？」

「ええ」

「その場凌ぎの返事とかじゃない？」

「誓ってもいいですよ」

「ありがとう、修一郎！」

目尻に涙を光らせながら礼を言うフォンロシエに、修一郎は慈しみを込めた笑顔で告げる。

「お礼を言うのはこちらですよ、ロシエ。

ありがとう。ハーベラさんや私を気遣ってくれて」

「うっん！そんなことない！本当に嬉しいんだよ、私！」

修一郎に向き直り、両の拳を胸の前で握り締めて喜びを力説するフォンロシエは、今にも修一郎に抱き付きそうだ。

「では、ハーベラさんにはそのように伝えておいてください。
そろそろ私は仕事に戻らなくてはいけません。
怖い先輩が牙を研いで待ち受けているでしょうからね」

少しおどけて言う修一郎に、小さく笑い返ししながら「あの人怖そうだもんね」とフォンロシエは応じた。

今までの張り詰めた雰囲気はなく、事務室で再会した時のように幼さを感じさせる言動に戻っている。

「一週間ほどこの街にいるなら、また夜にでも一緒に食事をしまし
よう。」

もちろん“彼”も交えてね」

そう言いながら、逗留する宿の名前をフォンロシエから教えて貰うと、修一郎は店の中へと入っていった。

依頼としても、個人的感情からしても、最高に近い結果を得られた黒髪の女冒険者は跳ねる様な足取りで、パートナーの待つ広場へと消えて行く。

そして、事務室に戻った修一郎が見たのは、今まさにサンドイッチの最後の一片を食べようと口を開けたソーンリヴの姿だった。

フォンロシエが修一郎を訪ねてから三日。

いつもの通り仕事を終え、いつもの面子でプレルの店に来ていた修一郎は、フォンロシエの襲撃を受けた。

店にやってきたその女冒険者は既に出来上がっているようで、初

対面のはずのゼリガやクローフルテに、古くからの友人のように馴れ馴れしく接し、二人の目を白黒させている様は、正しく襲撃という言葉が相応しい。

あまり騒がしくすると店を追い出されるかも知れないな、と考えながら、修一郎は彼女の連れに一応確認しておく。

「ロシエにお酒を飲ませたんですか？」

問われた相手は、疲れた口調で謝罪を口にした。

「すまん。いつの間にか勝手に注文されていたのだ」

「はあ……。ロシエを止めるのは貴方の仕事でしょうか？グラナ」

「返す言葉もない」

そう言っただきな体を小さくしているのは、狼人族の男性だった。青みのかかった灰色の毛皮に包まれた体は、同席しているゼリガより一回り大きく、腕などはちよつとした丸太のような太さがある。体つきは犬人族や猫人族同様、人間族と同じだが、首の上には狼の頭部があり、耳は正に叱られている犬のように伏せられていた。

武器こそ佩いてないものの、上半身は部分部分を鋼板で補強された皮鎧を着込み、下半身は冒険者が愛用する厚手の皮のズボンに鉄靴を履いている。

皮のズボンの尻には穴が開けられており、そこから尻尾が覗いているのだが、今は耳同様に小さく萎れたままである。

彼の座る椅子の横には円形の盾と背囊が置かれており、冒険者の完全武装に近い状態だ。

「とりあえず。ロシエは、これ以上、お酒を飲んでは、いけません

からね？」

一言一言噛み締めるように言う修一郎に、当の本人は「はい」などと呑気に答えている。

「すみません、ゼリガさん、クローフルテ・マイヤツクさん。

この二人は、私の古い友人なんです。

彼女のほうは、ちょっとお酒が入っていて騒がしくなるかも知れませんが、大目に見てあげてください」

そう言って謝る修一郎に合わせて、グラナも頭を下げる。

「迷惑をかける」

そんな二人を見て、ゼリガとクローフルテは慌てていた。

特に狼人族に頭を下げられた犬人族のゼリガの慌て様は、普段見たことがないものだった。

「いえ。私は気にしていませんので、お気になさらず」

「あ、ああ！お、俺も気にしちゃいね……していませんから、頭を上げてくれ……ください」

「ゼリガ殿。俺は狼人族の中でも変わり者と呼ばれている。種族間の因習は気にしなくていい」

ゼリガとグラナの遣り取りは、この世界では珍しいものと言える。数ある獣人族において、その中に上位種族と呼ばれる者たちがいる。

犬人族に対して狼人族がそうであり、猫人族に対して虎人族がそ

うであるように。

獅子人族に関しては、滅多に都市や街といった雑多な種族が暮らす場所に姿を現すことがないため、他種族との関係は良く分かっていないが、上位種族に位置することだけは確かなようだ。

そして、その上位種族は自らの下位種族に対して、服従に近い態度を要求することで知られている。

他種族に対しても、あまり変わらず友好的と言うよりも尊大な態度で接する者も多い。

一般的には、今回のように犬人族と狼人族が同じテーブルにすることはなく、もしそのような事態になった時は、犬人族が席を譲るのが常であった。

クローフルテもそれを知っているので、グラナの態度にかなり驚いている。

表情は然程変わってはいなかったが。

「わ、わかった。とにかく頭を上げてくれ。

あと、俺のことは呼び捨てで構わねえからよ、グラナ……さん」

「そうか。では、俺のことも呼び捨てで構わん。

それに、俺は冒険者だ。堅苦しい会話は苦手だ」

そう言うグラナの口調自体、ゼリガや修一郎からすると堅苦しいと感じられるのだが、これは本人の普段の言葉遣いであった。

だが、同僚にイルーという、似たような喋り方をする者がいるため、彼と接する時と同じようにすればいいかとゼリガは思うことにした。

「そおよおー。あたしたちはあ、ぼーけんしゃなんだからー。

もおっと気楽に喋ればいいのよー」

ゼリガとグラナの会話を聞いていたフォーンロシエが、やや呂律の怪しくなった口調で割り込んでくる。

「だぁーいたい、そおんなこと言つてたらぁー、あたしなんて人間族とお狼人族とおー、おまけにエルフ族の混血うーなんだしー。誰に対してえ、態度を変えるとかー、めーんどくさくてえ、いちち考えてらんないわよぉー」

その言葉に、再びクロールテとゼリガが驚愕する。

「えっ……！？」

「何い！？」

ゼリガのほぼ正面に座っているグラナが、隣に座る酔っ払った相方の後頭部を軽く叩く。

「馬鹿者。酔った勢いで自らの素性を簡単に明かすなと何度言えば分かる」

「いったぁーいつ！なぁにすんのよぉー」

フォーンロシエの抗議を無視して、グラナはそれとなく周囲のテーブルを見渡す。

修一郎たちは、今日は個室ではなくホールにある円テーブルに陣取っていた。当然、周囲には他の客も居る。

しばらく観察して、こちらを窺うような客がいないことに安心すると、狼人族の冒険者は、再度三種族混血の女冒険者の頭を小突いた。

長い鼻の先に少しだけ皺を寄せた渋い表情の狼人族と、「だぁっ

てえー」などとぼやいている人間族・狼人族・エルフ族の血を持つ外見は成人女性の、二人の旧友に顔を綻ばせる修一郎だった。

この世界には様々な種族が居る。

今でこそ、複数の種族が一つの都市や町、村といった共同体に属して暮らしているが、七百年前まではそういった事例は見られなかったことだ。

人間族は人間族だけで集まって町を作り国を作り、犬人族は犬人族だけの集落で暮らす。

それが当たり前であった。

そして、それらの共同体の間では経済的、文化的な交流も皆無に近い状態であった。

結果、当然のように相互理解の不足による偏見や差別意識が生まれ、小さな争いが頻発していた。

ある時、能力的には突出したものがないが、数で他種族を圧倒する人間族が、とある妖精族に対し戦いを仕掛けた。

レプラコーンと呼ばれる大地と貴金属の妖精族で、そこそこの魔力を持つものの、種族全体での個体数も然程多くなく、戦闘に長けた種族でもなかったため、瞬間に彼らは滅ぼされた。

一説には、レプラコーンの固有技能である『金脈探知』に目をつけたある国の王が、欲に目を眩ませ兵を動かしたとも言われている。これが元になったのか、それ以降、大陸各地で決して小さくない戦闘が繰り返られることとなった。

種族間戦争。当初はそう呼ばれていた。

しかし、その戦いは、当時アルペロテス大陸に存在していた人間族の国家間戦争へと発展する。

自らよりも下位の存在であると思っている他種族への対応と、同族である人間族の他国家への対応。

各々の国が、各々の国土に存在する獣人族や妖精族との戦と、隣接する人間族の国々との戦を同時に行うという、まともな思考を持つている者なら、まず選ばないであろう戦略を、何故か各国が採り続けており、泥沼状態であった。

それに関与していたのが、今でも一部の心無い者が使う“異種混血”或いは単に“混血”と呼ばれる人々であった、と記録には書かれている。

どのように関与していたのかは、各国の王族が保管している書物にしか残されていないため詳細は不明である。

噂では様々なことが言われているが、現在まで真相は明らかにされていないし、今後もされることはないだろう。

ともあれ、二十年に亘って続いた種族間戦争と国家間戦争によって、二つの人間族の国が消滅し、三種族の獣人族、五種族の妖精族が滅ぼされた。

そして、長く続いた戦に疲弊した人々の意識が、戦争終結に向きはじめた頃、新たな火種が投下された。

公にはそれまで沈黙して殆ど動きを見せなかった“教会”が、『聖戦』の大義名分を掲げ、異種族に攻撃を始めたのだ。

“教会”によれば、この戦争を引き起こしたのは、獣人族や妖精族であり、彼らは人間族に害悪をもたらす存在でしかない。即ち、それは人間族を慈しみ護ってくださいる神の敵であり、討ち滅ぼすべし。というものであった。

一部の国では、既に異種族に対し和平を結ぶ準備を行っているところもあり、同様に隣国との終戦協定の下地を整えつつあるところもあった。

既に、国が抱える兵の半数近くが戦争によって失われ、戦火によって国土が荒れ、国を支える一次産業、二次産業に従事する国民の数も激減している。

そんな状態で、今更獣人族や妖精族と戦争を続けることは愚策でしかなく、到底許容できない。

そう言つて翻意を促す各国の王に、以前より力を付けてきていた“教会”は、頑なに継戦を主張した。

当時の“教会”は、大陸全土の人間族に対して多大な影響力を有しており、王族ですら、“教会”からして見れば、多少力のある一信者でしかなかった。

それまでも、その影響力で国政にまで口を出してきていた“教会”であつたが、この戦を機に、さらに己が影響力を強めようと考えていることは、国王だけでなく、一般の国民ですら理解できた。

統治者、民共に厭戦意識が高まつている中、狂つた猿のように、獣人族を滅ぼせ！妖精族を消し去れ！と口角泡を飛ばして喚いていた、アルタスリーア国にいた司教が、“教会”の保有する兵を率いて王都から少し離れた森の中あつた犬人族の集落を襲い、殺戮と略奪を行つた。

結果は、その集落の全滅であつた。

その集落には、既に国王の名前で和平を申し入れる旨の書簡が届けられており、族長からそれに応じる旨の返答を得た矢先の出来事だつた。

王に断りも入れず、独自に兵を動かし、首脳部が進めていた計画を台無しにした司教は、凱旋と称し王都に戻ると、自らの行いを神が望んだことだと声高に叫んだ。

その司教を見て、当時のアルタスリーア王は、遂にある決断をした。

大陸に存在する、大小七つに及ぶ人間族の国王、そして五十を超える獣人族と妖精族への統治者へ向けて、“教会”こそがこの戦争を拡大させた張本人であり、“教会”を打ち倒し大陸に平和をもたらすことが最優先であり、アルタスリーアはその尖兵となると、伝えたのだ。

それが行き渡ると同時に、アルタスリーア王は自らが先頭に立ち、教会の最高位者である教皇を処刑した。

教皇を補佐していた大司教や司教は捕縛し、抵抗する“教会”関

係者はその場で斬り伏せ、国内の教会の無力化を一晚のうちにやり遂げることで、他の国家や種族へ行動を持って示し、“教会”に対しての宣戦布告とした。

加えて、“教会”の教皇私室にて彼が不当に溜め込んでいた私財を押収・公表し、隠匿されていた過去十数年の資料から、“異種混血”を用いて、戦争の長期化を図っていたことも突き止め、これを国内に限らず大陸中の国家や各種族に公表した。

これにより、各国及び各種族は、一つの敵のために手を結ぶことになり、執拗な抵抗を受けたものの、“教会”関係者は悉く死罪もしくは投獄されることになった。

そして、捕縛した“教会”関係者を尋問していた兵士から、驚くべき事実がバンルーガ王の下に届けられた。

“教会”が計画していたのは、二段階に分けられたもので、第一段階が、布教活動による人心の誘導、各国国内の有力者である信徒への協力依頼、獣人族や妖精族へ対する敵意の醸成といったものであり、第二段階が、いざ戦闘になった際には、戦場に魔獣を召喚し、さらに戦線の混乱を誘発させ、それを獣人族や妖精族が行ったことに仕立て上げるといったものだった。

魔獣とは魔力に負けて凶暴化した野生生物や、人工的に作られた生物、神話の時代から存在し周囲の者に被害をもたらす存在の総称だ。

これを知ったバンルーガ王は、激怒し、国内の“教会”関係者全員を斬首刑とした。

その後、バンルーガ王は、アルタスリア王に対し、彼の意思に賛同する旨を伝え、彼と同じく国内の他種族の代表者へ向けて書簡を届けさせた。

そうして、アルタスリア、バンルーガと拮がっていった“教会”打倒の気運は大陸中に及び、終には彼らを滅ぼすことに表向きは成功した。

ここに至るまで、実に四十年以上という長い年月を要したことに、

戦いに加わった者たちは様々な感情を抱いた。

“教会”が大陸中に広く深く根を拡げていたことに対する恐怖、一つの組織を壊滅させるのに要した時間に対する驚き、他種族が引き起こした戦いで同族を失うことになった者たちの怒り、そして、未だどこかに“教会”関係者が潜んでいるのではないかという不安。

ああいった輩は、どんなに風潰しにしても必ず少数は生き残る。

そういった者が起す行動は大体二つに一つだ。

組織の再興を諦めるか、地下に潜って力を蓄えつつ再起の機会を窺うか。

まず後者であろう、というのが戦後処理のためにウヴェンナツハの王城に集まった、各国の王と各種族の代表者・統治者の意見であった。

そこでウヴェンナツハ王の提案がなされる。

人々の心の拠り所として、神は……教会は必要である。

だが、今回のようにまた力をつけられ国政に口出しされては困る。そこで、敬う神を変えることなく新しい教会を設立し、一切特別な権限を与えず、人々に奉仕させることにすればどうか。

同時に、魔法院の機能を拡張し、それまで教会が一手に引き受けていた『明かり』や『発火』といった極初歩の魔法の指導や、医療に関する知識と技術、それに類する治癒魔法を、国と魔法院で共同管理してはどうかと。

つまり、新しい教会の権限を最低限に止め、国の監視下に置いて迂闊な行動を起させないようにすれば良いのではないかと言うものだった。

信仰の対象のみの教会であればよい。

力を求めるのはかつての教会関係者のような輩であって、それ以外の者にとっては神を敬うための教会であればいいのだから。

ウヴェンナツハ王の案に賛成したのは、その場に居た全員であったと伝えられている。

そうして、様々な意味を込めて『大戦』と呼ばれる六十年に亘る、

戦は終結を迎えた。

その後、それぞれの代表が集まり、互いの共同体での人的遣り取りや交易、文化交流を頻繁に行うことに同意がなされることとなった。

滅ぼされていない種族で、その場に出席していなかった種族には、『伝達』で予め説明し、後日各国の王が直接現地に赴き、改めて内容を伝えるという形をとった。

ただ、大本の戦は、人間族側が一方的にレプラコーン族を虐殺したことが引き金であり、それが口火となって戦火が拡大することになったのも事実であるため、人間族から獣人族と妖精族へ正式に謝罪することとなった。

また、“教会”に利用された立場の“異種混血”者に対し、戦争責任を問うことはせず、人間族を含めた他種族と同等に扱うことも定められた。

そういった様々な事項を纏めて文章化されたものが“大陸憲章”と呼ばれ、当時の国王、各種族の代表者・統治者へと渡された。

それから凡そ六百四十年。

いくつかの国が平和的に統合され、いくつかの種族は大陸憲章に従うと誓約しつつ、他者の目を嫌うように森の奥深くや高山地域に移っていった。

アルベロテス大陸には四国家しか残っていないが、その憲章は未だ守られ続けている。

六百年以上の長い年月により、人々の意識は変化し、種族間のわだかまりはほぼ無くなったと言っていい。

多くの都市や町、村に獣人族や妖精族が居を構え、ある者は商人に、ある者は警護団に、ある者は職人にと、様々な職業に就き、暮らしている。

一般的な人々は、種族の違いなど殆ど気にしなくなり、中にはフオーンロシエの先祖のように異種族間で結ばれる者たちも居る。

ただ、陽の下で普通に暮らしていても、地に落ちる影は消せないのと同様に、極稀に、“混血”に忌避感を持つ者が居ることは確かだ。

一度は終結しかけた戦争を、さらに拡げる原因となった“混血”者というレットテルは、そう簡単に消せるものではないのかも知れない。

それが、実は裏で旧“教会”が仕組んだことであり、“混血”者自身も被害者であるという事実を理解したうえでも、だ。

単なる興味で見られるだけなら構わないが、酔いに任せて絡んできたり、口にするのも憚られる言葉でいきなり斬りかかって来る者も居ないわけではない。

グラナが心配したのはそういった輩だった。

「大丈夫ですよ、グラナさん。」

この食堂では、プレルさんが絶対者なんです。

おかしな真似をする人は、即刻叩き出されてしまいますから」

旧友を少しでも安心させようと、笑顔を浮かべたまま言う修一郎に、ゼリガが追従する。

「そうそう。ここじゃ盗賊だろうが冒険者だろうが騎士様だろうが、鬼のプレルに敵う奴あ居やしねえからな！」

それにシユーの友人なら俺の友人でもあるってことだ。

いざとなりや盾くらいにやなっぺやるさ！」

そう言って豪快に笑うゼリガの横では、クローフルテも頷いている。

「頼もしいな。助かる」

厳しい表情だったグラナが、緊張を解いたように相好を崩す。その直後、この食堂の又シである猫人族の声が修一郎たちに投げかけられた。

「だあれが絶対者で鬼だつて？」

お望みどおり叩き出してあげようか？ んん？」

その言葉に、修一郎やゼリガはおろか、酔っ払っていたはずのフオーンロシエも背筋を伸ばし硬直した。

心なしかグラナの姿勢も正されているように見える。

ただ一人、いつもと変わらぬ無表情のクローフルテだけが、自分のコップに注がれたザクロのジュースを口に運んでいた。

「では、グラナさん、ロシエ。

ハーベラさん……クレルミロン夫人への伝言、お願いしますね」

今、修一郎たちはアーセナクトの東口にある、路線馬車の停留所に居た。

アルタスリーアの先々代国王の時代から計画・施工されてきた公路の整備と、各都市を結ぶ路線馬車の設置は、冒険者や行商人といった旅行者にとって非常に助かるものである。

石畳で舗装された公路は、大雨が降っても通行可能であるよう排水にも配慮されたうえに、馬車の一日当たりの移動距離に合わせた地点には、修一郎の世界で言うところの宿場町のような集落が設けられ、王国が出資した宿屋と数軒の商店があつて、路線馬車を利用すれば野宿や夜を徹して馬車を走らせる必要もない。

徒歩で移動する者には、路線馬車と同様に、徒歩で一日辺り移動可能な距離ごとに、石造りの休憩施設が建てられ、徒歩の旅行者がそこまで辿り着ければ夜露をしのげるように考慮されていた。

フオーンロシエたちが移動に路線馬車を選んだのは、一日でも早くクレルミロン夫人に、修一郎の返事を伝えるためであり、修一郎から依頼された仕事をこなすためでもあった。

「任せといて！ちゃんと伝えるから！」

そう言つて、やや小ぶりの胸をそらすフオーンロシエの横では、グラナが修一郎の依頼について確認している。

「ナダル又で情報を集めて、可能であればそこで仕入れる。」

ナダル又になれば、ダリンからイレ・マバル諸島に渡つて、同様に情報収集。

これで間違いないか？」

「はい。特徴は既にお伝えした通りですが、もし農産物商に訊いて該当するものがない時は、念のため街の調薬士や周辺の農家にも確認してみてください。」

流通には乗らず、現地で消費されている可能性もありませんから。

それで見当たらないようでしたら、その地域にはないということでしょう。

それと、イレ・マバル行きは無理しなくていいですからね？」

渡航費用もバカになりませんし、危険も伴うでしょうし」

「分かっている。無理はするつもりはない」

穏やかな、それでいてしつかりとした意思を感じさせる眼差しで

答える狼人族に、黒髪の相方が後からおぶさるよつに飛び付いて答える。

正午を少し過ぎた、気持ちの良い青空の下、その長い黒髪が陽光を反射してきらきらと輝く。

「そつちも任せといてよ！しっかり見つけて来るからね！」

「ええ、期待してますよ」

いつもの笑顔で旧友と言葉を交わしているうちに、路線馬車の御者が出発時刻であることを告げる。

「それでは、また」

「ああ、またな」

「それじゃあ修一郎、またね！」

冒険者の別れの挨拶である「また会おう」という言葉で、三人は別れた。

アーセナクトから王都アーオノシユまでは馬車で二日。

アーオノシユに二、三日滞在して、アーオノシユから農業都市ナダル又まで馬車で四日。

ナダル又で修一郎が探すモノが見つからなければ、アーオノシユまで戻ってダリン直行の馬車で三日半。

ナダル又で調査する日程を二日程度と考えれば、イレ・マバル諸島まで行かないと仮定して、二人がアーセナクトに戻ってくるまでは二十日前後かかるだろう。

ダリンから出ている船でイレ・マバルまで渡って戻ってくるとなると、二ヶ月以上はかかるかも知れない。

次に会うのは年明けになるかも知れないな、などと考えながら、
修一郎は自分の職場であるマリポー商店へと戻っていった。

第五話 新たな縁

冬の一月、修一郎の世界で言えば十一月になって数日経ったある日のこと。

前日の売上金を、市庁舎内にある資産保管局に預け入れに行った修一郎が、事務室に戻ってくるなり口を開いた。

「ソーンリヴさん、私に付き合って貰えませんか」

時刻は、もうじき大鐘三つ（正午）である。

昼食を買ったために外に出るつもりであったソーンリヴは、殆ど考えることなく応じた。

「構わんが、何かあったのか？」

「いえ、別に仕事で問題があったわけではないです。

ちよつと行きたいところがあります。

昼をご一緒させて貰って、そのまま向かいたいのですが、いいですか？」

「分かった。だが、その前に入金確認票を寄越せ。

資産出納簿に書き込んでおく」

何やら浮き足立っている様子の修一郎を一睨みして、ソーンリヴは手の平を突き出した。

入金確認票とは、資産保管局が発行する証明書である。

その資産保管局とは、こちらの世界の銀行であり、その名の通り現金や貴金属の預かりや払い戻しを業務としている部署である。

主要都市の市庁舎には必ず窓口が設置され、本部は王都にあり、その他の都市にある保管局は支部となる。

国が運営しているためか、取り扱い手数料は無料だが、毎年決まった時期に使用税として、各々が預けている資産を貨幣換算した二十分の一相当額に、基本料を加算した額を税金として納めなければならぬ。

その資産保管局に金銭を保管依頼……つまりは預け入れした際に発行されるのが入金確認票で、引き出しを行った際に発行されるのが出金確認票になる。

ちなみに、修一郎の世界の銀行のように、口座振込みや自動引き落としといったサービスは行われていない。

「あ、すみません。お願いします」

制服のポケットから、小さな羊皮紙製の入金確認票を取り出してソーンリヴに渡しながらも、修一郎は未だどこか落ち着かない様子だ。

「だいたい、まだ鐘は鳴っていないんだ。

何をそんなに慌てているのか知らんが、少しは落ち着け」

資産出納簿と金銭出納簿に手早く記帳し、専用の木箱に受け取った入金確認票を収めながら、先輩事務員は相変わらず頼りない部下を窘める。

そうするうちに、市庁舎の親鐘が鳴り響き、正午になったことを告げた。

「よし、では行くつか」

ソーンリヴは、椅子の背もたれに掛けてあった薄手の上着を制服

の上から羽織ると、修一郎を連れて事務室を後にした。

手軽に済ませましょうと言う修一郎にせつつかれ、仕方なしに露店で昼食を摂ったソーンリヴは、商業地区の西にある、通称“職人通り”の一角にやって来ていた。

目の前の小さな木造の建物には、レベックの工房と書かれた木製の看板が吊り下げられている。

「なんだ。レベックさんのところじゃないか。

ライターのことでは何かあったのか？」

現在、レベックの工房で最も生産に力を入れているのがライターであり、ライターへの刻印と購入者の口コミの効果があったのか、マリポー商店でもライター本体、消耗品共に入荷後即完売という状況で、本体に至っては二週間先まで予約で埋まっている。

そうだった理由から、レベックの工房へと連れて来られたソーンリヴは、ライターに関して何か新たな事務手続きが発生したのかと考えたのだが、修一郎は逆に不思議そうな表情で訊き返してくる。

「いえ。ライターに関しては順調すぎるくらい順調で何も問題ありませんよ？」

今日、ここに来てもらったのはそれとは全くの別件です」

にこやかに工房へと入っていく修一郎に、首をかしげながらもソーンリヴが続く。

工房の中は、金属加工用の炉が炊かれているためか、外よりも暖

かかった。

鉄を打ちつける鎚の音が室内に響き、その合間を縫うように木材を加工するノミの音が小さく聞こえてくる。

工房は、修一郎たちの職場である事務室と変わらない程度の広さで、奥には職人たちの休憩用と思われる扉のない小部屋が見えた。

板張りの床には、大小様々な形の木片や、石の欠片が落ちており、今日も早くから作業を行っていたであろうことが容易に想像できる。工房内で働く職人は、レベックを含めて五人ほどで、うち三人がノーム族、一人が人間族、一人がドワーフ族で、全員が男性であった。

ライター製作に合わせて雇った者というのは、ドワーフ族の男性のことだろう、今正に炉の傍で一心不乱に鎚を振るっている。

皆、麻のシャツに麻のズボンといった簡素な服装で、背中や首周りや脇の下を汗で濡らして各々の作業に集中しているようだ。

工房の入口に立つ修一郎に気づいたノーム族の中年らしき男が、話しかけてくる。

髭を生やしていなかったことと、その声から中年と判断したのだが、もしかしたら修一郎より若いのかも知れない。

獣人族ほどではないが、妖精族も外見から年齢を知るの容易ではなかった。

「よお、シュウイチロウ。親方なら奥に居るぞ」

工房奥の小部屋を親指で指した男は、そちらに向かって声を張り上げた。

「親方！シュウイチロウたちが来たぞ！」

「おう、待っておったぞ。二人ともこっちへ来い」

小部屋から顔を出したレベックは、手の甲を上にして上下に振り、手招きの仕草をする。

こちらの世界では、人を呼ぶときの仕草は欧米式ではなく日本式なんだなと思いつつ、修一郎は作業の邪魔にならないよう、職人たちの間をゆつくりと通り抜けながら小部屋へと向かった。

小部屋に入ると、予想通りそこは職人たちの休憩所であった。

簡素だが作りのしつかりしたテーブルの横には、蓋をされた大きな水がめと柄杓が置いてあり、職人が自由に水を飲めるようになっている。

アーセナクトを含め、王国内の主要都市には上下水道が敷設されているのだが、レベックの工房は住居兼用ではないためか、水道は通っていないようだ。

部屋の入口から見て左側は、一段高くなっており、板張りの床に草で編まれた莫座のような敷物が敷いてあった。

おそらくそこで横になって休憩したりするのだろうが、今は余計な物は壁際に纏められ、小さな木製の箱と奇妙な形に曲げられた針金が数本、広げられた布の上に置いてある。

休憩室に入ってきた修一郎に、レベックの声がかけられる。

「今回は前にも増して厄介な依頼じゃったわい。

ウチはお前さん専属の工房ではないんじゃないか？」

ぎろりと修一郎を睨むと、レベックは小箱の蓋を開けた。

小箱の中は、中央を薄い木板で仕切られ、左右それぞれに透明な薄い板が十枚ずつ収められている。

その透明な板も、互いに擦れ合って傷が付かないように、木板で一枚一枚仕切られているようだ。

修一郎に遅れて休憩室に入ってきたソーンリヴは、それらの正体に見当がつかないらしく、黙って見つめている。

「それに関しては、本当にお礼を言うほかありません。ですが、ある意味“私たち”にとってはライターより必要なものなんですよ」

そう言つて頭を下げる修一郎に、「まあええわい」と呟くと、レベックは準備に取り掛かった。

「それじゃあ、まずはシユウイチロウからじゃな。」

コイツに一番から十番まで番号がふつてある板を詰め込んで、向こうの壁の文字を読んでみてくれ」

奇妙な形をした針金の一つを修一郎に渡しながら、小箱を目の前に置く。

良く見ると、透明な板の隅には一から十までの番号が小さく書き込まれており、それぞれが微妙に厚みの違うガラスで出来ているようだ。

「コイツは飽くまでも試着用じゃから、基本的な形にしか作っておらん。」

ガラス板は上から差し込めば、簡単に固定できるじゃろうから、早速試してみてくれ」

コイツと呼ばれたための針金は、修一郎の国で使われる片仮名のコの字型に近いが、“コ”の上辺と下辺が長い柄のようになってい

る。“コ”の縦辺には、下弦の月の外側だけを模つたような窪みが横に二つ並んでおり、針金の窪んだ部分には溝が彫られていて、ガラス板を填めることが出来そうだ。

修一郎は一つ頷くと、一番と書かれたガラス板を針金の二つの窪みに詰め込んで、針金を顔に装着する。

長い柄のように伸びた部分を左右の耳の上に乗せると、上手い具合に固定されたようで、ガラス板が左右の目の直ぐ前に来る形になった。

そのまま修一郎は、少し離れた壁に掛けられた木板に書いてある文字を読む。

「うーん……」

ガラス板の填まった針金を顔から外したり、顔の目の前に持ってきて前後に動かしたりしている。

「これはちよつと違いますね」

そう言つて、一番のガラス板を針金から抜き取り、今度は二番と書かれたガラス板を針金に填めて、同じように壁の文字を見る。

「これは結構良いかも知れませんが、少しばかり度が強いかな」

そして次は、三番、それも合わなかつたようで四番と、順番に試していき、六番目で今までと違う口調で修一郎は声を出した。

「うん！これですね。」

視界の歪みもないですし、視点を移動させてもすぐに視界の修正が効きますし」

満足そうに笑う修一郎を見ながら、レベックが手許に持った木板に、“シュウイチロウ 六番”と書き込んでいく。

「では、次はそっちの嬢ちゃんじゃ。シュウイチロウと同じように一番から試してくれ」

修一郎の行動に気を取られていたソーンリヴが、素っ頓狂な声を上げる。

「な、何！？私もやるのか！？」

「当たり前じゃろうが。今回の依頼はシュウイチロウとお前さんの“メガネ”を作ることが目的なんじゃからの」

「メガネ？何だ、それは！？」

無理もないことであるが、未だ状況を理解しきれていないソーンリヴに、修一郎は説明する。

これは修一郎の世界で使われていた、悪化若しくは低下した視力を補助するための装着品であること。

この世界にある拡大鏡を顔に固定するようなもので、常に適度な視力を確保するためのものであること。

ただし、視力の悪化の度合いは人それぞれであるため、ガラス板の凹凸に微妙に変化をつけながら複数枚用意し、その人に合ったものを使わなければ、さらに視力が悪化する恐れがあること。

当然、常に装着している必要はなく、裸眼で問題ない場合は眼鏡を外していてもいいこと。

拡大鏡と違い、使用中は片手が塞がる事が無く、作業や普段の生活に支障を来たさないことなど。

説明が終わる頃には、ソーンリヴの顔にも理解の表情が浮かんでおり、早速試着用の針金に一番のガラスを詰め込んで、様々な角度から壁の文字を見ていた。

結局、ソーンリヴが選んだガラス板は九番と書かれたものであったが、それが最善ではなく、若干の修正が必要であった。

ソーンリヴがそれをレベックに伝えると、老齡のノーム族は了解

した旨の返事をし、工房の隅にある宝石等を加工するための作業台に向かった。

少し手を加えてからそのガラス板を室内の照明にかざし、また手を加える。

それを何度か繰り返し、乾いた綺麗な布でガラス板を丁寧に拭くと、再びソーナリヴの元に戻ってくる。

「これで、嬢ちゃんが望んだ具合になつとるはずじゃ。

もう一度、コイツで確かめてくれ」

言われたとおり、修正されたガラス板を針金に填めて、壁の文字を見たソーナリヴは感嘆の声を上げる。

今まで裸眼ではぼやけてまともに見えなかった文字が、数年前のように鮮明に見えた。

その様子を満足したのか、レベックは手許の木板に、“ソーナリヴ 九番 ただし手直しを要す”と書き込んだ。

その後、ガラス板……レンズの形状はどうするのか、外枠の針金……フレームはどうするのかといった話が遣り取りされ、二人の眼鏡の完成は一週間後になると告げられた。

レベックや職人たちに挨拶をして工房を辞した二人は、並んで職人通りを歩いていく。

もうじき昼の休憩時間が終わるのだろう、若い職人が二人の横を大急ぎで走っていく。

既に午後の作業を開始している工房もあるようで、木を削る音、金槌で何かを叩く音、先輩職人が若い職人見習いを怒鳴りつける声などが、いくつかの建物の中から聞こえてくる。

「しかし……いいのか？ シュウイチロウ。」

あの“メガネ”とか言うものは、製作にかなり手間が掛かるようだが……」

ソーンリヴが気にしているのは、二人分の眼鏡試作費用を修一郎が全額負担すると言ったことについてだ。

それには先ほど使った、調整用メガネの費用も含まれている。

「構いませんよ。」

私も元々目が悪かったんです。あちらの世界でも眼鏡はしていません。したがらね。

こちらの世界に来てからは、一つの街に長く滞在することがありませんでしたし、今のようない日中書類に向き合うような仕事もしていませんでしたから、それほど必要性を感じていなかったのですが……」

苦笑ともとれる笑いを薄く浮かべて、修一郎は続ける。

「流石に、あの十分に明るいとは言えない事務室で目を酷使用する仕事をしていると、やはり眼鏡が欲しいと思ひまして。」

それでレベックさんに依頼していたんですよ。

あのガラス板をレンズと言うんですが、レンズは拡大鏡と同じくガラス板に凹凸を持たせて、使用者が見え易くする仕組みなんです。ただ、拡大鏡とは違って顔に固定する物ですから、先ほども言ったように、使う人によってレンズの凹凸を変えてやらないと意味がないんです。

そうなると予め何種類かのレンズを用意しておかなければ、すぐに対応できません。

それを用意するのに若干手間がかかるだけで、基本は拡大鏡のレンズに少し手を加える程度ですよ。」

丁寧に説明してくれる修一郎だったが、ソーンリヴの言いたかったことに気付いていないようで、先輩事務員はため息を吐く。

「そうじゃなくてだな……」。

拡大鏡自体がかなり高価なシロモノなんだぞ？

それ以上に手間が掛かるメガネを買い取るような金を、私は持つてないと言いたいんだ」

ソーンリヴの言っていることは至極当然のことであった。

現在、この世界……少なくともこの大陸で使われている拡大鏡は、一般市民の四大家族が優に一月暮らせるだけの価値がある。

使っているのは、年老いた王族や貴族、高齢の市庁舎職員、豪商などの裕福な者くらいで、庶民には到底手が出せるような金額ではない。

この世界でガラスが作られるようになって凡そ二十年。

ここ十年で漸く透明で綺麗なガラスが量産され始めているが、ガラスはまだまだ高級素材扱いなのだ。

そして、衝撃に弱く割れやすいガラスを加工する技術を持つ者は、各都市に数名居るか居ないかといった程度である。

この世界の文化レベルや技術レベルから考えると、ガラスの出現がやけに遅く思える修一郎であったが、それが事実であり現実であるため、深く考えないことにした。

修一郎としては、自分や自分の周囲の人々の役に立つことであれば、それでいいと思っている。

別に修一郎は、この世界で成り上がろうとか、世界全体をより良くしようといった野望を抱いているわけでもない。

ただ、自分がこの世界で暮らしていくにあたって、極度に不便であると感じた事象を改善すべく行動しているだけだ。

自己中心的な考えなのかも知れないが、その行動の結果が、多少

なりとも周囲の人々に利をもたらずことであれば、それで構わないと割り切ることにしたのだった。

「ああ、そのことですか。

気にしないでください……」と言うのもアレですが、普段からソーンリヴさんにはお世話になってますから、そのお礼と思っていただければ。

出納板とか『施錠』とか、魔法が使えない私はどうしてもソーンリヴさんをお願いするしかありませんからね。

これからお手数をおかけするお詫びも含めて、ということに納得していただけると有難いのですが」

「それにしたってだな、限度というものがあるだろうが」

「まあまあ、いいじゃないですか。

レベックさんもライターの件で、それなりに繁盛しているようで、今回もかなりおまけしてくれるみたいですし」

「そこまで言うならもうこの話はしないが、いいか？ シュウイチロウ。」

メガネに関する費用は、私には決して話すなよ？

とてもじゃないが、恐ろしくてまともで居られそうもない」

そう言って、突然の寒気に襲われたように両腕で自らの体を抱きしめる仕草で、珍しくおどけてみせるソーンリヴに、笑いながら「分かりました」と答える修一郎だった。

そうやって話しながら歩いていた二人は、広場まで戻ってきてい

た。

もうじき午後一時を示す親鐘三つと子鐘一つが鳴る頃なのだろう、昼向けの軽食を売っていた露店のいくつかは店をたたみ始めている。それに代わるように、砂糖菓子や干した果物といったおやつに摘める類の商品を売る露店が、開店準備を始めており、広場の喧騒は正午頃と然程変わらない。

「おやつか……」。

ソーンリヴさん、お茶休憩用に何か一つ買って帰りますか？」

露店を眺めながら、隣を歩く女性に声をかける。

「いや、私は甘いものはあまり好きじゃないんだ。

シュウイチロウが食べたいなら買って構わんが、私は食べないぞ？」

「そうですね。」

でもまあ、折角ですし何か買って帰りますよ」

そう言つて、修一郎は近くの砂糖菓子の販売を始めたばかりの露店に足を向ける。

その店は、砂糖と胡桃に似た木の实を粉にしたものを練り合わせ乾燥させた、落雁に近いものを売っていた。

「お一ついかがですか？」と、売り物を四半分に分った試食用の菓子を、ハーFRING族の若い女性が勧めて来る。

香ばしい匂いのする菓子は、やや甘すぎるように感じたが、茶と一緒に食べれば丁度良いだろうと思えた。

一袋十個入りのそれを買つと、修一郎はソーンリヴの元に戻り、マリポー商店へと戻つていった。

レベックの言ったとおり、修一郎たちが試作眼鏡の調整をした日から丁度一週間後、二人分の眼鏡が完成したと、連絡があつた。

正確に言うなら、レベック本人が完成品を携えて事務室を訪れたのだ。

フレームは、さすがにチタンはこの世界では発見されていないよ
うで、鉄を焼入れ・焼き戻した鋼で作られていた。

レンズを固定するのに容易であつたため、アンダーリムタイプの
フレームに、鼻が接触するパッドの部分には薄い皮の張られた小さ
な木片が取り付けられ、耳に引つ掛けるモダンの部分は軽い木材を
細い筒状にして被せてある。

レンズは、修一郎が所謂スクエアタイプと呼ばれる四角形、ソー
ンリヴはラウンドタイプに近い楕円形となつていた。

修一郎の世界での眼鏡のように、軽量で耐衝撃性に優れているわ
けでもなく、パッドやモダン部分が幾分野暮つたく見えるものの、
実用には充分であり、早速着用した二人は文字通り見違えた世界に、
驚きと喜びの声を上げた後、感謝の声をレベックに浴びせる。

あまりの嬉しさに修一郎が、眼鏡をかけたソーンリヴを見て「可
愛く見えますね」とうっかり思ったことをそのまま口にしてしまい、

「今まではそうではなかったと言いたいわけか？」

と、詰め寄られて平謝りする場面も見られた。

そんな二人の反応に満足したレベックは、上機嫌で工房へと帰る
うとしたが、あることに思い当たつたようで、修一郎に声をかける。

「シュウイチロウ。」

この後、まず間違いなく起こることについてじゃがな、メガネの製作はウチではやらす、バランダのところに任せようと思うとる」

突然の言葉に老細工師の真意を測りかねたのか、怪訝な表情を浮かべる修一郎に、レベックが説明する。

「お前さんとこのマリボーのことじゃ。

どうせ“それ”も商品として取り扱わせると言い出すじゃろう。

じゃが、ウチの工房は従来の仕事に加えて、ライターの製作も始めておるので、とてもじゃないが人手が足らん。

新たに雇おうにも、工房が狭うてこれ以上はどうにもならんしの。その点、バランダの奴は腕も確かじゃし、何より金属の扱いに長けたドワーフ族だけでやっておる工房じゃ。

あそこなら、充分満足のいく品を作ることができるじゃろう。

あ奴はガラスの加工方法も習得しとるしの。

わしからも言うておくが、シュウイチロウ、お前もマリボーが動く前に、顔見せして説明しておくんじゃな。

あ奴は、ちいとばかり偏屈じゃからのう」

笑いながらそう言うと、レベックは「また飯でも食おう」と言い残し去っていった。

確かに、ライターに比べると眼鏡の需要は相当数あるように思われる。

怪我や病気で一時的に悪化した視力は、医術士や調薬士で治療・回復は可能だ。

しかし、普段の生活の中で徐々に悪化或いは低下していった視力は、魔法でも薬でも回復できない。

精々が目を酷使しないように努め、目に良い食生活を送ることで僅かに回復させるか、それ以上の悪化を防ぐくらいだ。

また、眼鏡自体がこの大陸では未だ作られておらず、尚且つ実用

的な品物であれば、目新しい物好きのマリポーが飛び付かないわけがない。

それについては予想していた修一郎ではあったが、レベックが製作を辞退することには思い至っていなかった。

「レベックさんの言うとおりだな。これ以上あの人に負担をかけるわけにもいかないだろう。」

バルンダというドワーフとは面識はないが、工房の場所は知っている。

後で場所を教えてやるから、昼の休憩時間にも行って来い」

幸い、マリポーは今朝から商人組合の会合で、商館に出向いており、店に戻るのには夕方だと告げられていた。

商館はロントラールとも呼ばれ、商人組合が経営する商工会議所のような施設である。

大中小三つの会議室があり、アーセナクトの商人が話し合いをする際に利用されている。

他に、客の希望する商人の紹介や、営業許可証・露店許可証の発行、開業に関する様々なサポート業務なども行っている。

修一郎の世界で使われている“商館”とは意味合いも機能も違う。

「そうですね……。」

バルンダさんという方が、どのような人物かは知りませんが、なんとか交渉してきます」

もしかしなくても、既に事務員というより仕入れの職掌ではないだろうかと思いつつ、修一郎はため息を吐いた。

結果から言うと、修一郎の交渉はなんとか上手く進めることができた。

商業地区の職人通りから少し外れた場所に、バランダの工房はある。

全体的に黒く煤けたようなレンガ造りの一軒家は、レベックの工房の倍ほどある大きさだった。

入口の上には、鎧と剣を象った看板が打ち付けられ、壁際には水で満たされた大きな樽が二つほど置かれている。

専門的に火を扱う工房に義務付けられた消火用の水だ。

少し屈まなければ頭をぶつけてしまいそうな入口の扉を開けると、中から熱気が勢い良く吹き付けてくる。

それと共に、金属を鎚で叩く音が、修一郎の鼓膜を容赦なく攻め立てた。

開けられた扉の向こうに、人影があるのに気付いたドワーフ族の壮年の男性が、ぶつきらぼうな声を投げかける。

「なんだ、オメエは」

焦げ茶色の髪に、同じ色の瞳。

太い眉毛の下にある大きな目から、相手を値踏みするような視線が修一郎に突き刺さる。

鼻はレベックほどではないが人間族にくらべると大きく、所謂団子鼻で、鼻の下には立派な髭を蓄えていた。

修一郎の三分の二程度しかない身長だが、体の厚みは修一郎の倍はありそうだ。

着ている服は、厚手の木綿で作られたくすんだ白の上下一体型の作業着で、飛び散る火花によって所々に小さな焦げ穴が開いていた。

手には分厚い皮製の手袋をはめており、右手には大ぶりの金槌を持っていた。まだ。

「お仕事中、失礼します。」

私は、マリポー商店に勤めているシュウイチロウ・ヤスキという者です。

レベックさんの紹介で、こちらに伺ったのですが、バランダさんはどちらにいらっしゃいますか」

出来るだけ丁寧に喋る修一郎に、目の前のドワーフ族が声を上げる。

「俺がそのバランダだ。」

レベックのジジイから話は聞いている。

なんでも新しいモンを作れってことらしいな」

「はい。拡大鏡を改良した物で、“メガネ”という、身に付けて使う品物です。」

目の悪い方や、視力が低下した方を補助するための道具で、それを作っていただけなのです」

真剣な表情で説明する修一郎に、黙っていたバランダが言葉を発する。

「確かに俺は、ガラスを弄くる方法は知ってる。だが、それは俺の本業じゃねえ。」

俺の本業は、見てのとおり武器と鎧の製作だ。
修理もやるがな」

言われて室内を見回してみると、壁際に完成したばかりであろう、

剣や斧が置かれており、その横には見事な板金鎧が、腕のない木製人形に着せかけられていた。

バランダの背後では、ドワーフ族の職人が真っ赤に灼けた鉄を金槌で叩いて剣の形に延ばしている。

「そのようですね。」

私もが必要としているのは、硬さと弾力性双方を持ち合わせた鋼製の杵棒を自在に加工できる技術と、ガラス板に凹凸の変化を付けることが出来る技術を持つ職人です。

レベックさんからは、貴方がそうであると聞いています。

不躰なお願いであることは承知しています。

ですが、どうか引き受けていただけませんかでしょうか」

「……ふん。その“メガネ”とやらは持ってきてるのか」

修一郎の言葉に暫し考えて、バランダが現物を見せると要求した。

「はい。こちらにあります」

修一郎から手渡された眼鏡を細部にわたって確認しながら、バランダが口を開いた。

「杵棒に関しちゃまだまだだ。ま、あのジジイは木や石が専門だからな。」

だが、このガラス板の加工は俺でも難しいかも知れん」

現物を見て、即座にそれが難しいと分かる程度には、このドワーフ族は知識も技術も習得しているのだろう。

「……無理でしょうか？」

恐る恐る訊ねる修一郎に、バランダの太い眉が跳ね上がる。

「無理だと？」

オメエ、誰に向かって口きいてやがんだ！

俺は難しいと言っただけで、無理とは一言も言っつてねえぞ」

元々、ドワーフ族は嘘や怠惰を嫌い、技術の吸収に貪欲であり、労働に美徳を感じる種族である。

また、頑固であったり偏屈な性格の者も多い。

そして、それ以上に負けず嫌いでもあった。

ドワーフ族全体が、バランダのような職人であるわけではない。

なかには、探鉱者や警護団で生計を立てている者もあり、戦いの場に身を置く者も居る。

そういった者は、自らの技術を磨き、日々錬成に明け暮れ、戦いに勝利することに喜びを覚える。

ドワーフ族の性格を意識して言ったわけではないのだが、修一郎の言葉に、バランダの職人としての負けず嫌いの性質が刺激されたらしい。

「いいだろう！やってやろうじゃねえか。

ただし、俺の本業は飽くまでも武器製造だ。

コイツの製作は片手間ってことになるが、それでもいいんだな？」

「週にいくつ作ることができますか？」

「二つ……いや、一つだな」

「最低五つは確保していただきたいのですが」

「ああん？オメエ、人の話聞いてなかったのか！？
こっちは片手間でしか作らねえと言っただんだ！」

「いえ、ちゃんとお聞きしていました。」

技術的なことに關しては、私は門外漢ですから、こちらの要求する仕様を満たしていただければ、何も言うことはありません。

しかし、バルンダさんは先ほど、やると仰いました。

ならば、これ以降は取引の話になります。

商売に携わる者として、お互いの利益に關することですから、こちらも妥協するわけには参りません」

ついさっきまでの、低姿勢とも取れる態度を一変させ、修一郎はバルンダの目を見て決然とした口調で告げる。

「……俺の気が変わって、断られるとは考えねえのか」

バルンダの声が低くなった。

「いえ、勿論考慮したうえです。」

ですが、バルンダさんの考えが変わるとも思えません。

メガネは私が発明したものではありませんが、私の居た世界では非常に多くの人が、メガネがあることで日々の生活に支障をきたすことなく暮らせていました。

世界は違いますが、こちらでも多くの人が視力の悪化や低下に悩まされています。

現に、私や私の知人にもそういう方が居ます。

別に慈善活動を行って欲しいと言っているわけではありません。

それだけの需要があれば、相当の利益が見込めるといふことですから」

一気にそこまで言って、修一郎は口を噤む。
跳ね上げた眉はそのまま、黙って修一郎の言葉を聴いていたバラランダが、暫くして口を開く。

「オメエが異世界人だつて話は、どうやら本当のことらしいな。
本来のメガネは、こんな粗末なモンじゃねえんだろ？
オメエの世界は、相当技術が進んだとこなんだな……」

手にしていたメガネを修一郎に戻すと、バラランダは観念したように大きく息を吐いた。

「分かった。週五つで引き受けよう。

どうせ卸し価格やら何やらに関しては、マリボアの野郎が出張ってくるんだらう？

マリボアの野郎もオメエもいけ好かねえが、適当に話付けといてやる」

「そうですか。ありがとうございます。

これで安心して店に戻れますよ」

肩の荷が下りたとばかりに、気の抜けたような表情を浮かべる修一郎に、バラランダが口ひげを震わせながら笑う。

「そういう顔は、相手が居ないところですよ。
ところで、メガネについてだが、こっちでも色々研究させてもらうが、構わんな？

オメエの世界のメガネとまでは行かないだらうが、まだまだ改良の余地はありそうだ」

「ええ。それは構いませんよ。

それどころか、こちらからお願いしたいくらいです。

ただ、仕様の変更があった場合には、こちらに知らせてください」

「当たり前だ。

それと、これからはこういったモンを作ろうとする時は、真っ先に俺んここに来い。

レベックのジジイに先を越されちまったのが、どうにも面白くない」

バランダの機嫌が悪かったのは、それが一因でもあるのだろう。知識を含めた技術の習得に貪欲なドワーフ族らしい反応だ。

工房の主人は、作業着の尻ポケットから半ば潰れた葉巻を取り出して啜えると、近くの炉に突っ込んであった火掻棒で火をつけた。

翌日、バランダと盛大な罵りあいと呼んでもよい交渉をしながらも、なんとか商談を成立させたマリポーは、上機嫌で店頭の陳列棚に並べられた見本のメガネを眺めていた。

ウチの店に、目玉商品が一つ増えたと言いながら。

第六話 雨の日の拾い物

十日ぶりの休日、修一郎は商業地区の通称“衣服通り”を歩いていた。

この世界の一週間は五日であり、一ヶ月は六週間の三十日、一年は十二ヶ月の三百六十日となる。

修一郎の世界の一年と殆ど変わらないことに疑問を抱かないわけではないが、この世界に来て九年。

それに慣れてしまった修一郎は、深く考えないようにしている。

衣服通りには、その名が示すように服飾品を販売する商店が集中していた。

それほど大きくもない通りだが、各専門店が軒を並べ、路上にまで販売台を置いて、道行く客の目を惹こうとしている。

流石に、貴族が身に付けるような服や装飾品を扱う高級店はないが、それ以外であれば、この通りで大抵揃えることができる。

時刻は、大鐘二つに子鐘五つ（午前十一時）を少し過ぎた頃。

もうすぐ昼になる時間帯であったが、薄く空を覆う雲に陽光は遮られ、通りを吹き抜ける風は冬の匂いを含んでいた。

白い長袖の筒型シャツの上に黒い皮のジャケットを羽織り、下は紺色に染められた厚手の麻のズボンといった出で立ちで、修一郎は店先に並ぶ服や髪飾りを眺めながら、のんびりと歩いている。

久しぶりの休日、いつもより遅くに目を覚ました修一郎は、そろそろくたびれてきた普段履きの靴を買おうと思いつき、この通りに足を運んだ。

修一郎を含め、一般市民が履く靴は、基本的に布と皮を縫い合わせた、修一郎の世界で言うワーカーブーツに近い形をしている。

編目の細かい麻の生地と木綿の生地間に、牛に良く似た家畜の皮を挟んだもので作られており、靴底は分厚い獣皮で補強されている。

る。

表面には樹脂が塗られ、一応の防水加工が施してあるが、この世界では強力な接着剤が未だ開発されていないため、縫い目から水が浸み込むこともしょっちゅうで、気持ち程度の効果しか発揮していない。

冒険者や探鉱者といった、岩場を歩いたり、野生生物や魔獣と戦ったりする者は、この靴に金属板を貼り付けたものを愛用している。フオーンロシエが履いていた靴も、これと同じものだ。

他に、木製の靴もあるにはあるのだが、木靴は大抵、都市部から離れた農村などでしか使われておらず、石畳が敷かれた街中では、まず見かけることがない。

木靴は履き慣れるのに多少のコツを要するうえに、石畳の路面を歩くと損耗も激しく、何より滑り易く危険なのだ。

修一郎が今履いているのは、靴底の獣皮がかなり磨耗してきており、走りでもしようなものなら、振動が直接足に響いて足の関節を痛めかねない。

靴底だけを交換し補修することもできるのだが、他の部分もいい加減傷んでいたので、どうせなら買い換えようとなった次第である。目当ての店に入り、馴染みとなった女主人に声を掛ける。

「こんにちは、ケーゼさん」

店の奥に据え付けられたカウンターで、暇そうに片肘を突いていた人間族の少女が顔を上げる。

「や」

頭を包むように巻かれたバンダナから、くすんだ金髪を少しだけ覗かせたケーゼは、どこか呆けたような表情で簡潔過ぎる挨拶を返した。

濃い眉毛の下にある、琥珀色の瞳をした目は常に半目状態で、頬にはそばかすが浮いている。

顔立ちだけ見れば、どこにでも居そうな少女であるが、幼い頃から父に仕込まれた製靴技術は相当なもので、十七歳にして腕のいい靴職人と評判だった。

父親と二人で切り盛りしているこの店は、完全受注生産制で、常連客も少なくない。

ケーゼの父親は、作業場に籠りつきりで、滅多に店先に出てくることはなく、店の殆どをケーゼに任せている。

「同じ?」

主語から何から殆どをすっ飛ばしたような問いに、修一郎は戸惑うことなく答える。

「そうですね。今回も靴底は獣皮二枚でお願いします。

あと、中敷きに兎の毛皮を追加してもらえますか?

これから寒くなりますからね」

「ん」

修一郎の注文を、専用の木板に、細く割られた木炭で書き込むケーゼ。

書き終わると、再び修一郎に顔を向けて僅かに口を開いた。

「代金?」

「ええ。今回も前払いで」

「ん」

傍から見ると、まともな意思疎通が出来ていないとしか思えない遣り取りであったが、この店の客はこれで通じてしまうのだろう、修一郎も当たり前のように靴の代金を払う。

「四日」

「分かりました。それではお願いします」

そう言って店を出ようとした修一郎の耳に、裏の作業場に居る父親を呼ぶケーゼの声が聞こえてきた。

新しい靴の注文を終えて、アーセナクト中央広場にやってきた修一郎は、昼飯をどうするか軽く悩んでいた。

たしか、プレルの店は今日は定休日のはずである。広場では、もうすぐ始まる昼の休憩時間に合わせるように、軽食を売る露店の店主たちが準備に忙しそうだ。

「適当に見繕って、ベンチで食べますか……」

香辛料をまぶした川魚を串に刺して焼いている露店に向かおうとした修一郎の左手が、突然後ろから何者かに掴まれる。

驚いて振り向いた先には、絶好の獲物を見つけたように笑うプレルの姿があった。

「シューイチ口〜。いいとこで会ったわね〜」

しっかりと腕を掴んだまま、笑顔に凄みを増す猫人族に、ふと、猫に捕らえられたネズミ姿の自分を想像して、修一郎は引き攣った笑みを浮かべた。

「ど、どうも、プレルさん。買い物ですか？」

「買い物じゃないわよ？ちょっと、商人組合に用があつてね。今はその帰り」

プレルに限らず、アーセナクトに住む者にとっては、“商館”イコール“商人組合”である。

組織上の商人組合は市庁舎を本拠としているのだが、あそこは半ば組合幹部専用の事務所のようなもので、日々の実務処理は殆どが商館で行われていた。

「今日は休みみたいだね？」

普段とは違う服装の修一郎を見て、プレルが質問というより確認といった口調で問うてくる。

「ええ。ちょっと靴を新調するために、衣服通りまで行ってきたところですよ。」

で、これから露店で昼飯でも買おうかと……」

言いかけて、しまった、という顔をした修一郎を見て、プレルが腕を掴んだ手にさらに力を入れる。

「そう！なら丁度良かったわ！」

ウチの店で食べて行きなさい。そうしなさい」

三角の耳を大きく動かしたプレルは、自分の店に向かって修一郎を引っ張っていく。

「で、でも今日はプレルさんの店もお休みなんじゃ……」

僅かな抵抗を試みる修一郎に、プレルの陽気な声が、それを無情にも打ち砕いた。

「いいのよ。シューイチローの分くらい作ってあげるから。」

それに、ちょっと教えて欲しいこともあるしね」

嫌な予感、嬉しくないことに見事的中したようで、諦め顔の修一郎はそのまま引き摺られていった。

修一郎がプレルに拉致されて、食堂に向かっている頃、商館の大会議室に八名の商人が集まっていた。

アーセナクトでも有数の大店の店主であり、商人組合の要職に就いている者たちである。

見事な彫刻が施された長テーブルは、イレ・マバル諸島よりさらに南部に位置する国で伐り出されたコクタンで作られており、彼らが座る椅子もテーブルと調和するように設えられたコクタン製だ。

入口真正面の奥には、組合旗が三脚式の旗立台に立てかけられており、床には毛足の長い絨毯が敷き詰められている。

テーブルを挟んで四人ずつに分かれて座っている彼らの前には、西の大陸ラングナントから持ち込まれた紅茶が、馥郁とした香りと

湯気を立ち上らせていた。

その香気を愉しみながら、八人の商人たちは、最近の市場の動向、ナダルヌから運ばれてくる今年収穫された農作物の質、近々北のバール王国が公路利用税の引き上げを行うらしいといった、商売に関する話題で談笑している。

そのうち、話に一区切りがついたのか、商人の一人が紅茶の注がれたカップに口を付け、静かに受け皿に戻した。

それが合図であったかのように、会議室の扉がノックされ、女性の声で来訪者があることが告げられた。

日本で言うところの、上座に座る商人が入室を許可する旨の言葉を発すると、一呼吸の間をおいて扉が開かれる。

「お待ちして申し訳ありません」

室内に入って来た男は、テーブルの傍まで歩み寄ると、深々と頭を下げ、良く透る声でそう言った。

「いやいや、私たちもつい先ほど来たばかりですよ」

入室許可を出した男性商人が、笑顔で応える。

テーブルに並んだカップを見れば、その言葉は嘘であることが瞭然なのだが、それを口にするほど男は馬鹿ではないし、事実、予定されていた時間より前に訪れているのだ。

社交辞令であることは百も承知である。

「そうでしたか。」

ですが、この度皆様をお呼び立てしたのは私わたくしです。

本来であれば、私が皆様をお迎えしなければならぬ立場であるのですから、お待たせしたことはありません」

普段からは想像できないほど丁寧な口調で、再度男は頭を下げる。

「あまり気にされることはないでしょう。」

「そう畏まらないでください」

別の商人も、笑顔で座を取り成すように、男に声をかけた。

「ありがとうございます」

頭を下げたまま礼を述べる男の一番近くに座っていた、恰幅の良すぎる商人が、やや棘のある物言いで先を促す。

「そんなことよりも、です。」

今回我々が呼びつけられた理由をお教えいただけませんか。

商売上手な貴方のことだ。

組合に、ひいてはアーセナクトに店を構える商人全体に、良い報せでもあるのではないですか」

言外に、自分が男の目的を察していることを匂わせながら、その商人は他の七人に向けて大仰に笑う。

水を向けられた形の七人も、凡その見当はついているのか、彼の言葉を否定することはなかった。

「まあまあ、マゴールさん。」

「さあ、貴方も席に着かれてはいかがですか。」

「君、彼にも紅茶を差し上げなさい」

上座の向かいに座っている商人が、男を揶揄するような発言をした商人の名を呼ぶ。

最後の台詞は、男を案内した後、入口に待機していた女性組合員

に発したものである。

女性組合員は黙って一礼すると、会議室を出て行った。マゴールと呼ばれた男は、表情を消して紅茶のカップに手を伸ばす。

紅茶は、先ほどまでの香りは失せていたようで、マゴールは僅かに眉を顰めて、すぐにカップを戻した。

「では、失礼して……」

女性組合員が会議室を出て行くと、男は空いた椅子に座る。そこは、この九人の中で最も下座にあたる席だった。

「さて、それではお話を伺いましょうか、マリポーさん。商人にとって、時間は金と等しく尊いと申しますからな」

上座に座る商人が男の名前を呼んだ。

「はい。お話というのは……」

マリポーは、大きな商談に臨む際に作る真剣な表情で口を開いた。

修一郎がプレルから開放されたのは、大鐘四つが鳴ってしばらく経ってからのことだった。

店の外に出て空を見上げると、薄く広がっていた雲は黒さを増して低く垂れ込めており、夜中のように暗い。

このまま行けば、もう間もなく雨が降り始めるだろう。

「参ったな。ここまで時間が掛かるとは……」

周囲に漂う雨の気配に、収まりの悪くなった頭を掻きながら、これからどうするか思案する。

長屋まで走って帰り、自炊することも考えたが、買い置きが食材が殆どないことに思い当たる。

加えて、長屋にある単炉の竈では一度に種類しか調理することができないため、手間が掛かるのであまり使いたくないという気持ちもある。

元の世界では、趣味を兼ねて自炊していた修一郎だったが、仕事で疲れて帰ってきた時や、風邪気味の時などは、コンビニや深夜営業のスーパーの惣菜、デリバリーで済ますことも度々あった。

この時間でこの空模様である。

広場の露店が今もやっているとは思えない。

かと言って、馴染みの店はプレルの食堂しかない。

この街に来て、一番最初に入った店がプレルの食堂で、出された料理の出来に満足してしまった修一郎は、他の店を開拓することを放棄していた。

「仕方ない。」

「適当な店に入ってみよう」

そう決めた修一郎の鼻に、水滴が当たる。

「降りだしたかあ」

あつと言つ間に土砂降りとなった雨に、ため息を吐きつつ修一郎は駆け出した。

全身ずぶ濡れになりながら、宣言どおり適当に見つけた店で食事を終えた修一郎は、彼にしては珍しく機嫌が悪かった。

修一郎の入った店は、プレルの食堂よりも広く、それなりに客も居て、従業員の態度も良かった。

だが、出てきた料理は修一郎にとって不満だらけだった。ある料理は味付けが薄すぎ、別の料理は間違えたのではないかと考えるほど塩が効き過ぎている。

火の通し方も雑で、野菜の炒め物は火の通しすぎで歯ごたえなど皆無であったし、鹿肉の串焼きはレアどころの話ではなく殆ど生に近い状態だった。

この世界の病原菌や寄生虫がどの様なものか分からない修一郎は、この世界に来てから魚肉や獣肉は生で口にしたことはない。

生野菜や果物に関しては、綺麗な水で洗ったものしか食べない。それでも安心できないのが現状なのだが、ここまで気をつけて、それでも感染若しくは発症するなら、それまでだと諦めることにしている。

食べなければ生きていけないのだし、いざとなればこの世界の薬でなんとかするのではないかと高を括っている面もある。

治療用の魔法もあるだろうが、こちらはあまり当てにしていない。ともかく、そういう理由から鹿肉の串焼きは、一口齧って気付いた修一郎が、周囲の者に気付かれないように、素早く吐き出した肉の欠片をポケットに隠した後は、手を付けられることはなかった。そして極めつけなのが、料理の量と値段だった。

はつきり言えば、少なくとも高い。よくこれで客が入るものだと思い、ホールを見渡した修一郎はあつことに気付く。

客の殆どが男性であった。

違和感を覚えて、さらに良く見てみると、接客している三人の従業員は全て若い女性で統一されている。

ご丁寧^ごに、人間族、エルフ族、ハーFRING族と一人一人違う種族を揃えており、どの娘もそれなりに美しく、体つきも世の大抵の男性が喜ぶであろうレベルを保っている。

成人しても人間族の子供くらいの身長にしかないハーFRING族に関しては、多少嗜好の異なる者のために雇っているのかも知れないが。

獣人族を雇っていないのは、獣人族は基本的に一途だからだ。

独身であれば従業員目当てで通う者も居るだろうが、恋人が居る者や妻帯者はまず来ることはない。

独身者が一人の従業員を巡って、店内で騒ぎでも起されたら堪らない。

異種族間での恋愛や結婚の例ははないのだが、稀であることは確かだ。

その辺りまで考えての人選なのかは不明だが、男性客に獣人族が居ないことから、当たらずとも遠からずといったところだろう。

なるほど“そういう店”か、と得心のいった修一郎は、慥然として店を出たのだった。

そして、店を出た今も雨は降り続いていた。

もう半月もすれば、雪になっていいるだろう、氷のように冷たい雨は、相変わらず石畳を激しく打っている。

ここから長屋までは結構距離があるうえに、傷んでいる靴は既に水を大量に吸い込んで歩くたびに不快な音をたてる有様だ。

店に入った時点で、文字どおり頭から水を被った状態であったため、これ以上濡れても何ら変わらない。

ただ、この冷たい雨にあたり続けて風邪でもひいたら馬鹿らしい

ので、脱いだジャケットを傘代わりにして走って帰ることに決めた。通常であれば近寄ることのない、娼館が立ち並ぶ通りを、修一郎は雨で転倒しないように注意しながら走る。

普段だと、一度中央広場に出てから、居住地区へ向かうのが一番安全なルートだ。

しかし、今は一刻も早く家に戻りたかった修一郎は、近道を選んだ。

雨で出歩く者が少ないためか、客引きの姿も通りにはなく、営業中の娼館の明かりが淡く石畳を照らしている。

時折り娼館から、娼婦らしき者の笑い声が聞こえてくるが、それを除けば、雨音と自分の履く靴が濡れた音をたてるだけだ。

あと少しで通りを抜けるという所で、突然脇の路地から小さな影が飛び出して来て、修一郎にぶつかった。

「ごめんなさい！」

小さな影は慌てて謝ると、急いでその場を離れようとする。

「あ、ちよつと待って」

修一郎の手が、ぶつかってきた相手の腕を咄嗟に掴んだ。

「それは困るんですよ」

掴まれた腕の先には、ぶつかった際に取り取ったのだろう、修一郎の財布があった。

「明日から暮らしていけなくなります」

しっかりと掴んだ修一郎の手を、なんとか振り解こうともがきな

がら、その影は声を荒げる。

「離せよ！」

「貴方が、それを返してくれれば離しますよ」

小さなスリを捕らえたために、手から落ちた傘代わりのジャケットが、石畳の上で水気を含んだ重い音をたてた。

「くそっ……！」

声変わりに至っていないと思われる少年が、小さく悪態をついた次の瞬間、軽い衝撃波が修一郎を襲う。

「うん？」

その衝撃波は修一郎を弾き飛ばしたりするどころか、よろけさせることもなかったが、一瞬何か違和感を覚えたように、怪訝な表情を浮かべる修一郎。

「嘘だろ……」

自分が予想していた結果と違う事態に、少年が呆然として呟く。

衝撃波を放ったのは、他ならぬ自分なのだ。

それは彼が持つ固有能力の一つで、呼気として放たれる衝撃波と共に、相手の精神に恐怖や混乱をもたらすものだった。

しかし、人間族の男は表情を変えはしたものの、平然として立っている。

混乱して少年の腕を離したりもしていない。

人間族に限らず、大抵の種族ならば、この能力で、少なくとも怯

ませることができていたのに。

全く効いていない相手に混乱しそうになりながらも、それでも何とかして目の前の男から逃げようとする少年は、再度、その能力を使うべく口を開いた。

その様子を見て取った修一郎が、少年の腕を掴んだ手に力を込めようとしたが、それは未然に終わる。

突然、糸が切れた操り人形のように、少年がその場にへたり込んだ。

腕を掴んだままなので、片腕だけ上に伸ばした奇妙な姿勢で、足元に寄りかかってきた相手に驚きながら、修一郎はその顔を覗き込む。

フードを無理矢理縫い付けたようなぼろぼろの貫頭衣で顔が殆ど隠れていたことと、周囲に明かりがない暗がりであったため、表情までは分からなかったが、どうやら気を失っているらしい。

「猫人族……？」

ちらりと見えた顔には、茶色と黒の縞模様があった。

「君。しっかりしなさい」

声をかけてみるが、当然返事はない。

周囲を見回すが、他に家族や仲間のような影も見当たらない。

「困ったな」

ふと、警護団の詰め所に運び込もうかとの考えが頭を過ぎるが、修一郎はすぐにそれを却下した。

この国では、子供であろうが窃盗を犯した者には、厳罰が処される。

良くて重労働刑か、下手をすれば片腕を切り落とされ、国外追放となる。

修一郎の故国の刑法から考えれば、厳し過ぎるのではないかと思わなくもないが、それがこの国の法律で定められたことなので、仕方がない。

子供にそこまでの罰を与えることにひと役買う立場になることは、躊躇われたのだ。

そして何より、ここから警護団詰め所までは遠い。

正直なところ、この雨の中、長い時間歩きたくない。

この場に置いて立ち去ろうかとも考えたが、この時季のこの雨に加えて、辺りの店は皆閉じており、人通りもない。

獣人族の少年の体力がどれほどあるのか分からないが、気を失ったまま一晩屋外に放置されれば、おそらく死に至るのではないか。

日中でも肌寒かったのに、夜になったことに加え、大雨で気温がさらに下がったため、修一郎の吐く息は白い。

流石にそれはしのびない、と修一郎は思う。

さしあたって、一晩だけでも自分が面倒見るしかないか、と決めた修一郎は、気を失っても財布を離さない逞しさに苦笑しながら、少年を片腕で抱え上げた。

修一郎の腰あたりまでしかない身長の子供は軽かった。

次いで、落としたジャケットを少年の上に被せる。

本当は背負えばまだ楽なのだろうが、少年は気絶しているし、手伝ってくれるような人も周囲に居ない。

「困ったなあ……」

再度そう呟く修一郎は、これ以上濡れようがない長身を、さらに雨に打たせながら、自らの住む長屋へとゆっくりと歩いていった。

長屋に戻った修一郎は、取り敢えず少年を居間に寝かせ、自らは濡れた衣服を脱ぎ捨て、体をタオルで拭くと、手早く部屋着に着替えた。

新しいタオルを持つてくると、小さな獣人族の貫頭衣を脱がせる。少年は、貫頭衣の下には、長いこと洗っていないのが一目で分かるような汚れたシャツと、短パンを身に着けただけだった。

どちらも酷い悪臭を放っており、全部着替えさせるしかないと判断した修一郎は、寝室にある簡素なクローゼットへ自分の下着を取りに向かう。

当然、少年の体に合うサイズのものなど持っていないため、適当に着古したシャツとパンツを見繕い、居間に戻った。

居間で寝かせていた少年は、その間に目を覚ましていた。何時の間にか知らない場所に寝かせられていた少年は、探るように辺りを見回している。

「気が付きましたか」

その声にびくりと体を震わせた少年は、警戒心の籠った目で修一郎を睨む。

「……オレをどうしようってんだよ」

「そうですね……」。

取り敢えずは、その汚れた服を着替えてもらいます」

言いながら、手に持っていた着替えを少年に向かって放る。下手に近寄って、少年を刺激しないためだ。

「タオルはそこにあります。
まずは雨で濡れた体を拭いたほうがいいと思いますよ?」

目の前に放られた衣服と、頭の横に置いてあつた綺麗なタオルを見た獣人族の少年は、何故か更に警戒心を深めたようだ。

「なんでそんなことをしなくちゃいけないんだよ。
お前、何考えてんだ」

「なんでって、私のような人間族と違って、君の体は毛に包まれていますからね。」

自然に乾くのを待っていると、風邪をひきますよ?
だからタオルで拭きなさいと言つたまでです」

いつもの笑顔を浮かべて、修一郎は答えた。

「それに。君、臭いますよ」

付け加えた言葉に、獣人族は恥ずかしさを覚えたようだ。

「よ、余計なお世話だ!

第一、オレは臭くなんかない!」

大きな声を張り上げる少年に背を向け、修一郎は台所に向かう。

「大声を出さなくても聞こえています。」

今、お茶を淹れますから、その間に着替えてください」

竈に火を付け、水を注いだやかんを置く。

「生憎、君の体に合うような大きさの服はありません。少しばかり大きいでしょうが、我慢してくださいね」

「……………」

何かお茶請けになるようなものはあっただろうか、と食器棚を兼ねた小さな収納棚を漁ってみるが、あったのは酒のアテに買ったビーフジャーキーに似た干し肉だけ。

我ながら色のない生活を送っていることに苦笑しつつ、茶を淹れるだけにした修一郎に、少年が再び問いを発する。

「警護団に突き出さないのかよ」

幾らかは警戒心を解いた声音に振り向くと、獣人族の少年は素直にも渡された服に着替えて、床に胡坐を組んで座っていた。

傍にあるタオルは、黒く汚れていて、体もちゃんと拭いたようだ。そんな少年に、気付かれないように小さく笑うと、修一郎は告げた。

「突き出して欲しいのなら、そうしますよ？」

今からだと、また雨に濡れてしまいますから、明日の朝にでも一緒に行きましょうか」

「ぐっ……………」

言葉に詰まる少年を見て、今度は笑い声を上げて続ける。

「安心してください。」

結果的に君はスリに失敗して、財布は私の元に戻ってきたのです

から、そんなことはしませんよ」

からかわれたことに気付いた少年が、鼻の頭に皺を寄せながら、最初に口にした質問を繰り返した。

「じゃあ、オレをどうするつもりなんだ！」

興奮しているのか、少年の声は高い。

もう夜なのでそれから少し静かにしてください、と少年に注意してから修一郎は答えた。

「どうもしません。」

あのままあそこで君を放っておいたら、君は死んでいたでしょうから連れて来ただけです。

一晩だけ、ここに置いてあげます。
後は君が決めるといいでしょう」

笑いを収めて、真面目な表情になった修一郎がそう言うと、少年は黙り込んでしまった。

「まあ、まずはお茶でも飲んで落ち着きなさい。
色々和讯きたいこともありますし。」

それから考えても、別に問題はないでしょう」

沸いた湯をポットに注いで、修一郎は居間へと移動する。

「……別に言うことなんてねえよ」

不貞腐れたような表情で、木のコップに茶を注ぐ修一郎を見る少年の瞳は、金色だった。

「もしかして、虎人族……ですか」

「虎人族で悪いかよ！」

思わず口に出して呟いた修一郎に、語勢を荒げる少年。

「すみません。虎人族に出会ったのは初めてだったので、他意はありませんよ」

素直に謝る修一郎を見て、虎人族の少年は戸惑った。

彼の然して長くはない、これまでの生の中で、こういった反応をされたことはなかった。

「な、ならいいんだ……」

「では、許してもらえたところで、お茶を飲みましょうか。

これで冷えた身体も温まることでしょう」

他人事のような口調で、柔和な笑みを浮かべる修一郎に毒気を抜かれたのか、少年は言われるままに茶を口にした。

確かに、修一郎の言うように熱い茶が胃に収まると、身体中が温かくなるのを感じる。

修一郎の淹れた茶は、知り合いの調薬士に頼んで調合してもらったハーブティーだ。

胸のすく香りと、ほんの僅かな渋みがあるそのハーブティーは、精神を落ち着かせる作用と温熱作用がある。

そしてもう一つ、消化器系を刺激する作用があった。

それが確りと働いたようで、暫くすると虎人族の少年の腹が小さな可愛らしい音をたてる。

「何か作りましょうか。」

実は、私も晩飯をまともに食べてないんです」

そう言って、修一郎は再び台所へ向かった。

第七話 虎人族の少年

少年は、ルキドウと名乗った。

アーセナクトにやって来たのは六日前。

それだけ言う口を噤んだ。

どうやらそれ以上、自分のことは話すつもりはないらしい。

その後修一郎は、台所の収納棚にあった干し肉とタマネギで出汁を取ったスープに、輪切りにしたサツマイモを放り込み、緩く溶いた小麦粉を少量ずつ流し入れて、日本の水団のような汁物を作った。味付けは干し肉の塩分と少量追加した塩のみだ。

料理に使えるような食材が、それしかなかったのだ。

決してご馳走と呼べるような代物ではなかったが、そこそこの腹にたまるものであったし、何より温かい汁物が、冬の雨に打たれた二人には十分に満足できるものだった。

その証拠に、ルキドウはその汁物を食べることに集中し、食事中は一切言葉を発していない。

少年が三杯おかわりをしたところで、修一郎の作った水団もどきは綺麗になくなった。

居間に置かれた卓袱台のような、円形のローテーブルに向かい合って座っている二人は、修一郎が新たに淹れ直した茶を飲んでいる。これは、修一郎やソーンリヴが職場で飲んでいる、一般的な茶だ。

「それで、ルキドウ君。

明日からは、どうするつもりなんですか？」

コップの茶を一口啜って、テーブルに置きながら修一郎が尋ねる。少年が着ていた服の汚れ具合や、修一郎から財布を掏り取るうとした手口から、この街に来てからまともな生活をしていたとは思え

ない。それ以前もどうだか怪しい。

だが、修一郎は今も過去の根掘り葉掘り訊くより、これから目を向けることを選んだ。

こちらから解答を用意するつもりはない。
決めるのは少年自身であるべきだ。

「……………」

虎人族の少年は、両手をコップに添え、中の茶に視線を落として
いる。

その姿は、必死に考えているようであり、途方に暮れているよう
でもあった。

時刻は既に大鐘四つの子鐘四つ（午後十時）を過ぎており、一段
と冷え込んできている。

この部屋にはストーブのような暖房器具はなく、ソファや椅子
のような家具もない。

床に縦横2メートルほどの正方形の敷物を敷いて、そこに直に座
っているだけだ。

修一郎は立ち上がると、再び寝室のクローゼットへ向かった。

そこから、同じような色合いの木綿製の長袖開襟シャツを二着引
っ張り出すと、居間に戻って、一着を少年に手渡す。

「冷えてきましたからね。これでも羽織っててください」

そう言って、自分もシャツに袖を通す。

ルキドウも素直に着たようだが、なにぶん修一郎の体に合わせた
サイズの服である。

下のシャツも開襟シャツも、腕の部分が長すぎて、袖を何重にも
捲っているのだが、それでもかなり余る始末で、少年の指先は袖の
中に隠れていた。

「……………」

外から聞こえてくる雨音は、一向に弱まることなく、少なくとも明け方までは降り続くと思われた。

修一郎はルキドウの言葉を待ち、ルキドウは未だ答えを出せていない。

少年の金色の瞳は伏目がちにコップを見つめたままだ。

「……………オレは」

暫くしてから、漸く少年が口を開く。

「オレは、何もしない……………」

「何もしないとはどういう意味です？」

虎人族の少年の言葉に、眉を少しだけ動かして、修一郎が問い返す。

俯いていたルキドウは、やにわに顔を上げて修一郎を睨んだ。

「今までと変わらないってことだよ！」

この街で何日か過ごして、危なくなったら他所の街にでも行く。そうやって生きて行くだけだ！」

予想していた台詞に、修一郎は深いため息を吐いた。

「それで捕まって罰を受けるわけですか……………。
最悪、片腕を失って、この国を追放されますよ？」

「ハン！そうならたらオレの運はその程度だったってことだろ」

自嘲気味に笑うルキドウの姿と、自分がこの世界に来た直後の姿が重なる。

あの頃の自分はこんな表情をしていたのか、と苦笑を浮かべそうになるのを抑え、修一郎は呆れた表情を作る。

「まあ、自棄にならずにもう一度じっくりと考えてください。

明日の朝まで、考える時間は充分ありますからね」

空になった自分のコップを台所まで持って行き、居間に戻ると告げる。

「では、そろそろ寝ましようか。明日は仕事なんです。

今日は色々と疲れましたから、早く寝ないと」

その言葉に、一瞬体を強張らせたルキドウだったが、すぐに挑戦的な笑みを浮かべる。

「お前が寝ている間に、オレが逃げ出さないように縛りでもするかい？」

それが虚勢であると分かっている修一郎は、笑いながら寝室へ向かう。

「ついでに金目の物を盗んで行くかも知れないぜ！？」

相手にされていないと感じたルキドウは、さらに修一郎を煽るように声を上げた。

だが、寝室へ片足を入れた状態で、居間へと体を向けた修一郎の

表情は変わらない。

「出て行くなら、引き止めたりはしませんよ。」

それにこの家に金目の物なんて殆どありません。

財布くらいですね」

「い、いいのかよ！」

この服も！このコップも！あの鍋も！皿も！全部持って行っちまうぞー！」

「服は着古したものですし、他もがらくたみたいなものです。」

全て売り払ったところで、一日分の食費にもなりませんよ」

この人間族の男は頭がおかしいのか、それとも余程のお人よしなのか、はたまた世間慣れしていない田舎者なのか。

判断がつかない虎人族の少年は、混乱しつつも犯行を予告してみたのだが、それすら軽くあしらわれてしまった。

「さあ、寝室はこつちです。うちで一晩過ごすつもりなら、入ってください」

修一郎が借りている長屋は、玄関、便所、居間、寝室、それぞれが扉で仕切られているだけで、廊下はない。

台所にいたっては、居間の床から一段低くなっているだけで、扉すらなかった。

風呂は、それ自体がこの世界に存在せず、体の汚れや垢を落としたいなら、水か湯で濡らしたタオルで体を拭くか、水浴びするか、大きなタライに湯を張り湯浴みするか、サウナに入るか、である。

寝室の扉は、先ほどから修一郎が何度か行き来しているので、開けられたままだ。

「……なんでそっちに行かないといけないんだ」

体と表情と声を硬くして、警戒の色を露にしたルキドウに、当たり前のような口調で修一郎が答える。

「何故って、ベッドが寝室にあるからですよ」

「ベッドで寝るのか！」

「そうですね？生憎、ベッドは一つしかありませんからね」

「オレに、一緒に“寝る”と言うつもりなんだな！？」

修一郎とルキドウの会話は、その言葉の意味する内容が食い違っていた。

修一郎は、単純に一つのベッドで二人が眠るという意味で言っていたのだが、ルキドウは修一郎を“そういう趣味”の奴だと思いつみ、その相手に自分を選ぶのかという意味で言っている。

スリを働こうとした自分を、態々介抱し、着替えさせ、食事まで与えたのは、何か裏があるに違いないと思っていたのだ。

無論、修一郎に“そういう趣味”はない。

「当たり前でしょう。」

こんな寒い夜に、大人である私がぬくぬくとベッドで眠って、子供の君を床に寝かせるなんて非常識な真似はできませんよ。

かと言って、ここは私の家ですから、主の私が床で寝るのもおかしい話です。

だったら、一緒に寝るしかないじゃないですか。

第一、来客用の布団など家にはありませんしね」

やっぱりコイツはどこがおかしい。

修一郎の言わんとすることを理解して、安堵しつつも、ルキドゥはそう思った。

眠っている間に殺されるかも知れないとは考えないのだろうか。

ルキドゥが子供とはいえ、無防備に寝ている人間族の成人男性を殺すくらいはできる。

台所に行けばナイフくらいあるだろう、少なくとも包丁はあった。だが、差し当たっては大人しくしよう、と心に決めると、ルキドゥは寝室に向かうべく立ち上がった。

腹がふくれたことと、体が温まったことで、少年に眠気が訪れており、さらに、久々にまともな寝床で眠ることが出来るという誘惑が、虎人族の少年の警戒心を簡単に打ち砕いてしまったのだ。

立ち上がると、着替えた短パンが膝下あたりまで届いているのに気付いて、ルキドゥは微妙な表情になる。

人間族の大人で、しかも長身の修一郎の丈に合わせたサイズであるため、仕方がないのだが、これでは少し短いだけのズボンに見える。

「まあ、いいや」

修一郎に聞こえないように小さく呟くと、ルキドゥは寝室へと入っていった。

清潔なシーツに、ふわふわとは言えないまでも柔らかな布団、頭が半分くらい埋まってしまいそうな枕。

昨日までは、硬い石畳の上か、どこかの家の納屋といった場所で寝ていたルキドゥにとって、修一郎のベッドは天国とも言えた。

「お前、本当は金持ちなんじゃないか？」

隣で横になっている、修一郎の体に触れないようにしながら、ルキドウは思ったことを口にした。

「なんで、そう思うんです？」

布団の中で、修一郎が僅かに動く。

返ってきた声は、静かで、そして優しくかった。

「……何となく」

あまりにベッドの寝心地がいいから、とは言えず、言葉を濁す。

「見てのとおりですよ」

「分かんねえよ」

既に寝室の明かりは消されて、部屋には闇の幕が下ろされていた。日付が変わったことを知らせる、市庁舎の大鐘一つがつい先ほど鳴ったばかりだ。

雨足は少しだけ弱まったように思える。

「普通、ですよ。」

普通に働いて、普通にお金を稼いで、普通に食べていける、その程度です」

「……………」

それは、自分の両親が生きていた頃と同じなのだろうか。

父が猟で仕留めた獲物を持ち帰り、母と自分がそんな父を笑顔で出迎える、そんな昔。

三人で暮らしていた頃は、それがルキドウにとっての“普通”だった。

ルキドウの父は腕のいい猟師だった。と思う。

まだ外の世界を良く知らないルキドウには、父が基準だったから。母も、父のことを誇らしげに語っていた記憶がある。お父さんはこの辺りで一番の猟師なんだから、と。

そんな父が、猟の最中に命を落とした。

教えてくれたのは、家に何度か来たことのある、近所の猟師仲間だった。

狩りの最中に、魔獣に襲われたらしい。

普段であれば、一人で狩りを行っている父だったが、その日は二人で狩りをしていた。

それが、この猟師仲間だった。

父の腕であれば、大抵の魔獣なら退けることができたが、運悪く仲間が魔獣によって怪我を負った。

五匹で群れを成していた魔獣から、仲間を逃がすために、父が困になったとのことだった。

父の働きで、その仲間はなんとか集落まで辿り着いて事情を説明し、周囲の者に父の救助を頼んだ。

集落の者が、二人が魔獣に襲われた場所に行ってみると、五匹の魔獣の死骸と、木の根元で座るように息絶えた父の体があったと聞いている。

すまない、とその猟師仲間は何度も母に謝っていた。

母は、何か言っていたように思う。何を言っていたのかは覚えていない。

それから母とルキドウ、二人で暮らしていくことになった。

猟師仲間は、傷が癒えてない体で、度々家にやって来ては、二人

のことを気にかけてくれた。

でも、その獵師仲間も、魔獣に襲われた際の傷が原因で死んでしまった。

そうして、ルキドウの家を訪れる者は、殆ど居なくなった。

集落の長が、時たま顔を現しては、二言三言、母と言葉を交わして帰っていくだけだった。

二人の生活は、父が生きていた頃に比べ、苦しかったが、それでも母はルキドウに笑顔を向けてくれた。

お父さんの分まで、頑張って生きていきましょう。そんなことを言っていた気がする。

だが、その言葉は母自身によって裏切られた。

ルキドウの父が死んで、三年が経ったある朝、目を覚ますと母の姿がなかった。

集落の者に訊いても、誰も母の行方を知らなかった。

ルキドウは、一人になった。

それから後のことは、思い出したくない。

「なあ、お前、家族とか居ないのか？」

そう言っつて、修一郎を伺うと、人間族の男性は静かな寝息を立てていた。

財布を掏ろうとした自分よりも先に寝るとは。この男には警戒心というものは無いのだろうか。

「……やっぱり、おかしな奴だ」

昔のことを考えていたせいか、眠気の靄が少しだけ晴れていたが、虎人族の少年はそのまま眠ることにした。

修一郎の背中に、軽く触れるように体の位置をずらしたルキドウは、目を瞑る。

暫くすると、小さな寝息が聞こえてきた。
その横で寝ている修一郎の口は、少しだけ微笑んでいるように見えた。

翌朝、ルキドウが目を覚ますと、隣に寝ているはずの修一郎の姿がなかった。

その瞬間、母が居なくなつた朝が思い出され、自分でもよく分からない焦燥感に駆られて、慌てて飛び起きると、少年は居間へ向かった。

「おはようございます。」

雨も上がって、今日はいい天気になりそうですよ」

台所に立っていた修一郎が、居間へ駆け込んできたルキドウに向き直り、柔らかな笑顔を浮かべる。

台所からは、いい匂いが漂ってきており、彼が朝食の支度をしていたことが分かる。

「早朝からやっている露店で、適当に買って来たんです。」

簡単なものしかありませんが、朝食にしましょう。
顔を洗ってきたらどうですか」

焼きたてのパンが盛られた皿と、ハーブティーの入ったポットを持って、修一郎がテーブルへ歩いてきた。

あれ？獣人族には朝顔を洗う習慣はないんですたっけ？と首を傾げて、寝室の扉を背に立ち尽くしているルキドウに目を遣る。

「あ……。うん……」

思わず、素の口調で返してしまったことにも気付かず、虎人族の少年は修一郎を見つめている。

「そうでしたか。じゃあ座ってください。

スープを持ってきます」

修一郎の言葉に素直に従いながらも、ルキドウの視線は彼の姿を追っていた。

修一郎の言葉通り、パンと野菜のスープという、実に簡単な朝食を済ませると、部屋の主である人間族の男が表情を真剣なものにして、少年に問うた。

「では、改めて訊きましょう。

君は、今日からどうするつもりなんですか？」

「……………」

昨夜と同じ質問に、やはりすぐさま答えることが出来ない。

朝になったら、訊かれることは分かっていたのに、これからどうすればいいのか分からない。

昨日、少年が捨て鉢に答えたように、今までと同じ荒んだ生活を送ればいいのか、それとも別の生き方があるのか。

「……………」

「申し訳ないのですが、私はこれから仕事に行かなければなりません。」

出来れば、そろそろ君の答えを聞かせてくれませんか」

事実、もうあまり時間がないのだろう、目の前に座る人間族の男は、先ほどよりも落ち着きなく体を小さく揺らしている。

その姿は尿意を我慢しているようにも見えたが、本人としては、それなりに深刻な事態であった。

これから着替えて、店まで走ってなんとか間に合うかどうかという状況なのだ。

「……も………」

「も？」

ルキドウが発した一言を、繰り返す修一郎。

「もう一日、ここに居させてください………」

消え入るような声で発せられた言葉に、修一郎は満足げな笑顔を浮かべると、立ち上がった。

「分かりました。」

それでは、もう一日猶予をあげましょう」

着替えのため、寝室に向かいながら修一郎は続ける。

「すみませんが、お昼は今朝のパンが残っていますので、それで我慢してください。」

夕食は、ちゃんと作りますから。

あと、ずっとその服というわけにもいかないでしょうから、服も適当に買ってきますね」

思いも寄らない修一郎の台詞に、驚きの声を上げるルキドウ。

「その代わり、君は、昨日まで着ていた服を洗濯しておいてください。

貫頭衣はもう使い物にならないくらいぼろぼろでしたから、下の服だけでも。

いいですね？」

何故、そこまでしてくれるのか分からないルキドウだったが、その考えを押し量るうにも、修一郎は寝室で着替えている最中であり、表情を見ることが出来なかった。

慌しく修一郎が出掛けていくと、居間にはルキドウだけが残された。

出掛ける間際、修一郎は「火は使わないでくださいね」とだけ言い残していった。

本来であれば、玄関の扉には、専用の『施錠』の魔法が掛けられた鍵で、戸締りをするはずであるのに、修一郎は、何もせずに出て行ったことにルキドウは気付いていた。

今なら、部屋中の物を持ち出して逃げることも出来る。

昨日までの彼なら、間違いなくそうしていただろう。

だが、今はそれが躊躇われた。理由は自分でもよく分からない。とりあえず、ルキドウは行動することにした。

立ち上がって、気持ちを切り替えるように、だぶだぶの袖を捲ると、台所の隅に置いてある洗濯桶に歩いていく。

「ゆっくり考えよつと。」

「一日猶予ができたんだし」

そう言った虎人族の少年の目は、活き活きとした光を湛えていた。

第八話 勉強の時間

仕事を終えた修一郎は、食事に行こうと誘ってきたゼリガに丁寧に断りを入れ、食料品を扱っている店へ向かった。

そこで豚肉の塊や野菜、果物などを買って、長屋へと戻る。

ルキドウの服は、昼の休憩時間を使って、庶民の子供が着るような服を上下三着、下着となる短パンを同じく三着購入していた。

子供を連れず、子供用の衣服を買う人間族の男に、衣服店の従業員は怪訝な顔をしていたが、修一郎はそれを見なかつたことにした。それらをそのまま事務室に持って帰るわけにもいかず、衣服を入れるための布袋を一枚買ってそれに入れておく。

それを目にしたソーニンヴが問うてきたが、冬物の部屋着と下着を買ったと誤魔化しておいた。

納得したソーニンヴだったが、「そういう時は、服を買った」とだけ言えばいいんだ、と怒られる修一郎だった。

「帰りましたよ」

向こうの世界でも、親元を離れ一人暮らしをしていた修一郎は、実に久しぶりに帰宅の言葉を口にした。

ふと、距離的ではなく“世界”的に遠く離れすぎてしまった、彼の親のことが思い出される。

こちらの世界に来て、既に九年が過ぎ、向こうの世界に戻ることは完全にと断言していいほど諦めていた修一郎だったが、安否だけでもいいから知ることが出来ればと思っている。

不可能であることは、分かりきったことであつたし、故に考えな

いようにしていたことでもあった。

「ですが、それを未練とは言いたくないですね……」

小さな、ほんの小さな声に出して呟いた修一郎の耳に、少年の声が届く。

「お、おかえり……」

修一郎は、虚を突かれた表情で少年を見る。

少年が、この家から逃げるとは思っていなかった。

返事を期待せずに発した自分の言葉に、照れたような、それでいてどこか拗ねたような声で、ルキドウが応えたことに驚いたのだ。

だが、すぐに心からの笑顔を浮かべると、改めて告げる。

「はい。ただいま」

少年は、そんな修一郎を見ると、慌てて顔を逸らして居間へと戻った。

「すみません。少し遅くなりました」

早速、夕飯の準備をしますね」

修一郎も居間へと歩きながら、上着を脱ぐ。

先に居間に戻り、テーブルの前にちよこんと座っていた少年に、持っていた袋を渡す。

「君の着替えです」

こういったことに慣れていないので、無難な物しか買っています

んが、我慢してくださいね」

元々、お洒落と言うより服装に無頓着であり、自分が着ている服は、どれもデザインよりも機能性を重視して選んだものが殆どである。

もつと言つてしまえば、温かければ良い、暑くなければ良い、そんな程度だ。

少しでも売れるようにと服のデザインを必死に考えている職人が聞けば、怒り出しそんな基準でしか選んでいない。

そんな修一郎であったため、ルキドウの服を買うときも変に格好付けることなく、店に入ると店員の下へ直行し、その辺りの十歳くらいの男の子が着ているような服が三着欲しい、と完全に任せてしまったくらいだ。

「くれるのか!？」

手許にある袋と修一郎を交互に見ながら、ルキドウが声を上げる。

「君が、拒否しなければね。」

人から施しを受けるのが嫌なら、後で返してくれてもいいですよ？
勿論、きちんと働いて得たお金で、ならですが」

寝室で着替えるために、扉に手をかけた修一郎は、振り返って笑顔のまま、からかうような口調を極僅かに滲ませた。

「か、返すに決まってるんだろ！」

お前に恵んで貰おうなんて思っていない！」

寝室に消えた修一郎に向けて、ルキドウは叫ぶが、応えは返ってこない。

きつと“あの笑顔”で居るのだろう、と思つたルキドウは更に言い募る。

「家中を空っぽにされてなかっただけ、ありがたいと思え！」

それでも何も言わない、よく分からない性格をした人間族の男に、これ以上言つても反応はないと感じたのか、虎人族の少年は口を閉じた。

暫くして、部屋着に着替えて寝室から出てきた修一郎は、居間がやけにさっぱりしていることに気付いた。

家財が消えているというわけではない。今朝方、慌てて家を出た際は、テーブルの上に食器やらパン籠やらが、朝食後そのままの状態で置かれていたはずなのに、それらは台所へ運ばれていた。

それだけではなく、ここ十日ばかり忙しかったので掃除を怠っており、部屋の隅には薄っすらと埃が溜まっていたりしたのだが、今はそうは見えない。

必要最低限にしか物が置いてない居間は、それでも整理されているように感じられた。

台所と居間の続きに張られた、室内干し用の物干し紐には、少年の着ていたシャツと短パン、それに少年が体を拭いたタオルが干しであつた。

感心したように部屋を見回している修一郎の態度に気付いたのか、ルキドウが言い訳するように訥々と言う。

「せ、世話になつたことは事実だから、ちょっと掃除しただけだ。

それにオレは虎人族だ。虎人族は他人から施しも受けないし、お、恩知らずでもない。

だ、大体この部屋は汚いんだよ！お前は掃除もできないのか！」

最後は、照れ隠しのためか声のトーンが上がってしまったが、確かに掃除する暇がなく汚れていたのは事実である。

修一郎は素直に感謝の意を述べた。

「ありがとうございます。」

「ここ数日忙しくて、掃除していなかったので助かりました。」

買ってきた食材を手に、台所に向かった修一郎の背中に、少年が「ふん……」と鼻を鳴らした。

夕食を終え、のんびりと茶を啜っている修一郎に、彼が今日買ってきた服に着替えてきたルキドウが声をかける。

「なあ。お前、本当に貴族とかじゃないのか？」

自分の向かいに座りながら発せられた、ルキドウの突然の質問に、目を瞬かせた修一郎は問い返した。

「どうして、そう思うんです？」

昨夜、同じような遣り取りをしたことを思い出したのか、小さな笑いが修一郎の口に浮かぶ。

それを見て、ルキドウは少しムツとしたようだが、言葉を続けた。

「昼間、ちょっと太ったおばちゃんがお茶を持ってきた。」

いつも世話になってるから、そのお礼だって言ってた。

あと、騎士みたいな鎧を着た犬人族のじいさんも来た。

困ったことがあったら、また声をかけると伝えてくれて言われ

た」

修一郎には、その二人に心当たりがあった。

太ったおばちゃんとは、修一郎が懇意にしている調薬士の人間族だ。

家で飲んでいるハーブティーを調査してくれたのも、その女性である。

犬人族のじいさんとは、修一郎がこの街で長屋を借りる際に口を利いてくれた老人で、コタールと共に行商人生活を送っていた頃に知り合った、旧知とまでは行かないが、それなりに長い付き合いの引退した騎士であった。

「二人とも、お前に好意を持つてるように見えた。

他人から良くされるから、貴族か金持ちかと思っただけだ」

投げ遣り気味に、だがきちんと説明する少年に更に感心した修一郎は、二人との関係を説明した。

この少年は、それなりに人を見る眼もあり頭も回るようだ。ならば、自分の素性を多少なりと明かしても大丈夫だろう。

「そういったわけで、世話になっっているのは私のほうです。

それから、私はシュウイチロウ・ヤスキといいます」

年上の相手に対して、いつまでもお前などと呼んではいけませんよ、と付け加える。

「今まで名乗らなかつたお前……シュ、シュウイチ、ローが悪い！」

「どうやらこの世界では“しゅういちろう”という名前は発音し辛いのだろう。少なくとも獣人族には。」

出会った獣人族の中で、まともにも彼の名前を呼んでくれるのはフ
ォーンスロシエとグラナくらいだ。

他は何れも、どこかイントネーションがおかしかったり、まとも
に言えてなかったりで、修一郎は様々な呼ばれ方をしていた。

ゼリガにいたっては、面倒臭いからシューでいいだろ、とまで言
いだす始末である。

クリユについては、まだ幼いため舌が回っていないということに
しておこう。

自分で口にして気付いたのか、ルキドウが窺うような目つきで質
す。

「シュ、シュウイチローはこの国の人間族じゃないのか？」

「はい。」

もつと正確に言うなら、“この世界”の人間族ではありません。

私は、異世界人です」

「異世界人!？」

「ええ」

人間族とは多少表情が異なるが、目を口を大きく開けて驚いてい
る虎人族に、修一郎はあっさり認めめた。

空になったポットを確認すると、もう少し話が長くなりそうだと
判断した修一郎は、再び茶を淹れなおすために、立ち上がる。

「昔、父さ……親父から聞いたことはあつたけど、異世界人なんて
初めて見た……」

「そうですか。」

私が聞いたところだと、数十年前にも異世界人が一人居たそうですけどね。

“大戦”以降、少なくとも私を除いて五人の異世界人が、この大陸に居たようですよ」

過去形なのは、既に五人の異世界人はこの世に居ないからだ。

彼ら中に元の世界に戻った者が居たという記録はなく、何れも病に倒れたか事故による死亡であつたとされている。

ルキドウのように驚いたり、珍しがられたりはするものの、異世界人である修一郎が自分の素性を明かしても、普通に暮らせているのは、姿形がこの世界の人間族と見分けが付かないことと、この大陸において過去に何度か例があるからなのだろう。

噂では、アルベロテス以外の大陸にも異世界人は居た、或いは居るらしいのだが、はつきりとしたことは分かっていない。

ひよつとしたら、同郷若しくは同じ世界の人間が居るかも知れず、修一郎も探して会ってみたいとは思っていたが、コータルはこの大陸から出ることはなかったし、自分も既にアーセナクトで仕事を見つけ、半ば定住してしまった状態だ。

余程のことがない限り、人探しの旅に出ることはないだろう。ライターで竈に火を入れて、やかんをかけた修一郎は、ルキドウに向き直る。

「それより、ルキドウ君。今は君のことです。

猶予は明日の朝ですよ？

これからどうするつもりか考えていますか？」

言われて、それまで呆けた表情だったルキドウは、触れて欲しくなかったことのように、僅かに顔を顰めた。

「……………それは……………」

「王都かダリンなら知り合いが居ます。」

君さえその気なら、紹介してあげますよ？

アーセナクトにも数人居ますから、この街で暮らしたいなら、その人を教えてあげることできますけどね」

ルキドウからやかんに視線を戻すと、湯が沸くのを待つ。

同時に、その背中からは、ルキドウの答えを待っているかのようにも見えた。

「……………」

ルキドウの中に、一つの答えがあるのだが、彼はそれを言葉にすることに躊躇いを感じている。恐怖と言ってもいい。

竈のやかんの蓋が、小さな音を刻み始める。

それを黙って見つめていた修一郎が、ため息交じりに助け舟を出した。

「それとも、もう一日、猶予が必要ですか？」

月が替わり、冬の二の月（十二月）となった。

この月は、修一郎たち事務員にとって最も忙しい時期である。

公平に言うならば、仕入れも流通も販売も在庫管理も、店全体が忙しいのだが、特に忙しいのが事務員であるということだ。

王国内各地で催される年越し祭に加え、現国王即位記念日も冬の二の月であり、それぞれが国民にとって一大行事だった。

商品の割引きや、特別な品物・食べ物の販売。通常より数も種類も多くなる商品の仕入れや在庫管理、そしてそれに伴う事務処理の増加。

マリボー商店も他に漏れず、目の回るような忙しさであった。

仕入れ担当のマリボーとブルソーは、二日店に居ればいい方で、それ以外は王都やアーラドルへ出掛けており、殆ど店で見かけることがない。

流通部門では、ひっきりなしに出入りする馬車に荷を積み込み、或いは降ろし、在庫管理部門へと走る。

在庫管理部門はそれを受け、数量や商品を確認し、店頭に運び入れたり、事務室へと報告に向かう。

店頭では販売部門の三人全員が駆り出され、表面上はいつもの笑顔で接客しながら、内実疲労困憊である。

各部門から寄越される出納板の確認と調整、売上金の管理、臨時に雇った人足への日当の支払い、それらを記録する記帳業務などが、一気に事務部門担当であるソーリヴと修一郎に押し寄せて、二人は日付が変わる直前まで店で仕事をしていることがざらであった。

他の部門に関しては、店が閉まればとりあえず忙しさからは開放されるのだが、事務は閉店後に業務量が減るところか増えるのだ。

そんな忙しさにかまけてか、ルキドウの今後のことは有耶無耶になり、未だに少年は修一郎の家に居る。

毎朝、朝食と併せて少年の昼食を用意し、夕食には露店で買い食いでできるほどの小銭を渡し、帰宅するのは少年が眠ってしまった後である。

この月に入ってから修一郎の一日は、その繰り返しであった。

ルキドウは、相変わらず頑なに「人の施しは受けない。食事や寝床は仕事の報酬」などと言いつつ、居間や寝室の掃除をしたり、布団を干したり、二人の汚れ物を洗濯したりと、ヤスキ家における家事の大半を引き受けるようになっていた。

炊事に関しては、部屋の主である修一郎が危険であるからと言いつつ、触らせないようにしていたが。

「シュウイチロー、金を貸してくれ」

ある朝、突然ルキドウが切り出した。

「なんです？いきなり」

ルキドウのお気に入りとなった、昼食用のサンドイッチを作る手を止めずに、修一郎は訊ねた。

「本が欲しい」

「本？どうしてまた」

居間に座っているルキドウに顔だけ向けながら、少年の意図を探るように見つめる。

「文字を覚えない」

小さな虎人族は、真剣な目で修一郎を見ていた。

いつかの会話で、自分は文字を読むことが出来ない、とルキドウが悔しそうに呟いていたのを思い出す。

仕事に忙殺されて買い物もままならない修一郎は、食料品などの買い出しもルキドウに任せるようになっていた。

修一郎がよく利用する商店の名前と場所を教え、その店以外では買わないようにと釘を刺している。

別に、無駄遣いをさせないようにといった理由ではない。

この街の数ある店の中で、品質が一定しており、価格も適正で、何より店主が信用できることが、その理由だ。

同様の店の中には、品質が悪いものが高値で売られていたり、一見の客相手に値段を吹っ掛けるようなところもあるのだ。

店主には自分からルキドウのことを伝えておくから、何も心配せず買って良いと言って、修一郎は必要な分だけ財布から渡していた。

ルキドウはその言いつけを守って、修一郎が教えた店で買い物をしてきたが、ある日、偶々店主が留守にしている時に店に行つてしまい、少年のことを知らない店員は、普通の客と同じように接してしまった。

即ち、店のお奨め品以外は、客の判断に任せたのだ。

その時、ルキドウが買おうとしていたのは、残り少なくなった塩と小麦粉だった。

店頭に並べられた白い粉末が入った袋の前には、文字の書かれた木板が刺してあったが、少年はそれを読むことが出来なかった。

仕方なく店員に、塩はどれかと訊ねると、目の前にあるのがそれだと笑われた。

店員は単に少年が見落としたのだらうと思い、軽い気持ちで笑ったのだが、ルキドウは違う意味で受け取った。

文字を読めない自分を嗤ったのだらうと。

王都や、商業で成り立つアーセナクトの住人の識字率はかなり高い。

街路で遊ぶ七〜八歳くらいの子供ですら、簡単な読み書きは出来る。

それが当たり前と思っていたその店員は、ルキドウが文字を読めないとは思わなかった。それだけだ。

しかし、ルキドウはそうは思わず、この一件以来、文字を読めない自分を恥じるようになっていた。

「なるほど。分かりました」

答えて、ですが、と付け加える。

「本の値段は、結構馬鹿にならないものなんです」

やはり無理か、と肩を落とすルキドウに、修一郎は更に付け加えた。

「ですが、私がこちらの言葉を覚えるために使った本があります。それを貸してあげますから、取り敢えずは我慢してくれませんか」

言われてみれば、確かに異世界人の修一郎も、こちらの世界に來たばかりの頃は、文字を読めなかったはずだ。

今のルキドウと同じような境遇を経験しているに違いないのだ。

「ちょっと待ってくださいね」

作り終えたサンドイッチを皿に乗せると、修一郎は寝室へと消えていった。

ルキドウがついて行くと、ベッドの横に置いてあった木箱を漁っている修一郎の姿があった。

「たしか、ここにあったと思うのですが……」

木箱の底を引つ繰り返しながら、何やらぶつぶつと呟いていた修一郎が声を上げる。

「ああ、あったあった！これです。」

「いやあ、懐かしい」

その手には、それほど厚くない羊皮紙製の本があった。

それは、この国に伝わる御伽噺や、どこかの誰かが創作した子供向けの童話が綴られた本で、一般市民に広く親しまれているものだ。いつもの柔和な笑顔で、その本をルキドウに渡しながら、修一郎が提案する。

「今日はもう時間がありませんし、夜はいつものように帰りが遅くなるでしょう。」

ですから、明日から朝食の時間を使って、私が君に教えてあげる、ということはどうでしょう?」

「いいの……か?」

手渡された本に、目が釘付けになりながらも、少年が訊いてくる。

「ええ。ちょっとお行儀が悪くなってしまいますけどね。」

まあ、そこは勘弁してもらおうことにして、それで構いませんか?」

笑いかけた修一郎に、ルキドウも笑顔で返す。

「ありがとうございます!」

「良かった。では、私はそろそろ出掛けますね。」

昼飯は台所に置いてあります。

それで、これはいつもの晩飯代」

そう言って、財布から幾らかの硬貨をルキドウに握らせると、修一郎は玄関へと向かった。

「ああ。しっかり働いて来いよな！」

上機嫌で、それでいて悪戯小僧のような顔をしてルキドウが見送る。

「まるで、亭主を送り出す主婦のようですね……」

長屋の前の通りを歩きながら、修一郎は苦笑した。

次の日から、異世界から来た人間族の男と、虎人族の少年の勉強会が始まった。

修一郎の言ったとおり、食事をしながら、この文字は何て読むのかだの、この言葉はどういう意味かだのと、傍から見れば行儀が悪いことこの上なかったが、ルキドウは毎日確実に覚えていった。

六日も経つ頃には、所々で詰まりはするものの、ルキドウは修一郎から渡された本を読めるようになっていた。

自分よりも遥かに早いペースで知識を吸収する虎人族の少年に驚きながらも、これが若いつてことなのかなあ……とぼやかずには居られない修一郎だった。

第九話 見守る者

「よし、引越しまししょう」

帳簿に向かっていた修一郎が、突然決心したように顔を上げた。地獄のように忙しかった冬の二の月も過ぎ、今は冬の三の月（一月）である。

アルペロテス大陸での暦法も十二ヶ月を一年としているが、数え方は基本的に“季節”の“何番目の月”といった、季節を基準にした数え方をする。

修一郎の世界の一般的な暦法のように、十二月の次は一月となるわけではない。

季節は日本と同様に、四季に分かれていて、春が二ヶ月、夏が三ヶ月、秋が三ヶ月、冬が四ヶ月とされており、呼び名は、春の一の月、春の二の月、その次は夏の一の月……といった具合だ。

このあたりも、向こうの世界と似ているようでどこかずれている感覚があり、当初はとまどっていた修一郎だったが、こちらの世界で生きていかなばならなかった修一郎は、慣れるしかなかったし、事実、慣れてしまった。

案外、自分は適応能力が高いのかも知れないと思いましたが、大雑把なだけかも知れない。

出納板の確認作業を終えていたソーンリヴが、怪訝な顔で修一郎を見る。

「いきなりなんだ。」

何か問題でもおきたのか？」

試作品とは言え、結果的に修一郎が贈ったことになった眼鏡を、ソーンリヴはいたく気に入ったようで、事務室内に居る間は、ずっと掛けている。

それまで悪かった目つきも、心なしか和らいだように思えた。

「いえ、問題というわけでもないのですが……」

修一郎は、ルキドウに関する一件を説明する。

「なるほどな。先々月だったか？

やけに仕事が終わったら早く帰っていたようなので、引っ掛かっていたんだが、そういうことか」

「まあ、最初は一日だけ面倒見て、後はあの子の好きにさせようと思っていたのですけどね。

何時の間にか、住み着かれてしまいました」

実際は、修一郎がそうなるように仕向けた面もある。

別に、国中の不幸な子を、どうにかしてやりたいと考えているわけではないし、どうにかできるとも思っていない。

ただ、自分の目の前に現れた、独りの子供を放っておけなかっただけだ。

自分の意思で、こちらの世界にやってきたわけではない修一郎の、面倒を看てくれたコタールの顔が思い出されて、修一郎は少年を拾い上げることにした。

傲慢なのかも知れない。思いついているのかも知れない。

この世界の間人でないうえに、世間を知っているわけでもない若造の修一郎に、人一人を救えるかは疑問だ。

それでも、修一郎は虎人族の少年に手を差し出した。

支えるつもりはない。彼を引き起こして立たせ、自分で歩かせる。それを手助けするだけ。

コタール・アペンツェルとハーベラ・アペンツェルが、修一郎にそうしてくれたように。

「物好きというか、お人よしと言うか……。」

それはまあいいが、市庁舎へは届け出たのか？」

何やら思案に耽っている修一郎に呆れながら、ソーンリヴが重要な懸案を口にした。

「え？市庁舎？」

「知らなかったのか？孤児の保護や、養子を迎えるには、市庁舎の市民登録窓口に申請する必要があるぞ？」

それに通らなかつたら、引き取ることはできないんだ」

「はい。初めて聞きました。

拙いなあ。まだ、申請していませんよ……。」

修一郎は納まりの悪い頭を掻くと、天を仰いだ。

ルキドゥが家に転がり込んだ後は、仕事が忙しくなってしまう、そのあたりのことには全く気を回す余裕がなかったのだ。

「そこまで心配する必要はないさ。犯罪者としての記録さえなければ、許可はおろるだろう。」

申請は、市民税納付額確定時期までに行っておけば、罰則や追徴金も発生することはないし、焦ることはない」

「犯罪歴は、おそらくは大丈夫……だといいいのですが。」

少なくとも何度かは“ああいったこと”をやっていたようですから、もしかしたら他の都市から通知が回っているかも知れませんか」

「話を聞く限りでは、馬鹿ではなさそうだから大丈夫なんじゃないか？」

あまり無責任なことを言いつもりはないが、手配板が回っていたら街に入った時点で捕縛されてるだろう」

商業都市であるアーセナクトは、街の境目を示すための形ばかりの市壁が円形に築かれており、東西南北に一応、出入りする者をチェックする審査所が設けられている。

審査所には警護団と数名の騎士が詰めており、街に出入りする人物の目的や荷物の検分、犯罪者の確認等が行われている。

だが、それも極々簡単な審査で終わってしまったので、実際に刑罰を受けた犯罪者や、国内外で指名手配された者でなければ、まず問題なく通過できた。

犯罪者のチェックは、通称『手配板』と呼ばれる魔法を応用した、主に警護団が使用する金属板で行われる。

手配板には、指名手配されている犯罪者用と、犯罪者として既に刑罰を受けた者用の、二種類が用意され、審査の際に、一人一人その手配板に手をかざすように言われる。

該当する者が手をかざすと、手配板に記録された姿形や犯罪歴の情報の照合が自動的に行われ、即座に判明する仕組みである。

それで完璧に犯罪者の通過をチェックできるわけではないが、各都市で採用されていることから、そこそこ効果を発揮しているようだ。

「今日帰ったら、一応本人に確認して、明日にでも市庁舎へ行ってみます」

ここまで来たら、変に焦っても仕方がない。何か問題がおきれば、その時はその時だ。

「ああ、登録は本人立会いじゃないとできないからな？」

その子も連れて行くんだぞ？」

珍しく、今日はソーンリヴが茶を淹れる気になったのか、記帳作業を続ける修一郎を横目に、流しへと歩いていく。

「分かりました」

修一郎は羽ペンを動かしながら、答えた。

翌朝、恒例となった朝食時の勉強会で、修一郎から、ルキドウの保護登録を行う旨の説明がなされた。

ルキドウは、自慢げに「他所ではへまなんてやらかしてない」と言い放つて、自慢することですか、と修一郎から軽い拳骨をお見舞いされた。

このところ、ルキドウは徐々に打ち解けてきて、修一郎に素の自分を見せるようになっていく。

完全に心を開いた、というわけではないのだろうが、以前のよう
に警戒したり、すぐに攻撃的になったりすることは、殆どない。

修一郎は、昼の休憩時間に市庁舎へ行くことにし、ルキドウには親鐘三つが鳴る頃に、マリボー商店の裏まで来るように伝えて、一人で家を出た。

昼になって、修一郎が従業員出入口から外に出ると、そこには少年の姿があった。

「では、行きましようか。」

昼飯は登録が済んだ後で、一緒に食べることにしましょう。」

そう言つて、二人で街の中央にある市庁舎へと向かう。

真冬の空は、小さな雲が視界の隅に見えるものの、快晴と言つていいほど晴れ渡つていた。

アーセナクトの近くを流れるナズ河からの冷たい風が、容易に市壁を乗り越え、東西南北に伸びる大通りを駆け抜けて、道行く人々に容赦なく襲いかかるため、昼時にも拘らず人影はまばらであった。修一郎は事務員の制服の上に、内張りに毛皮を使った外套を着込み、ルキドゥは冬物の子供用の長袖と長ズボンの上に、同じく子供用の外套を着込んでいる。

南の商業地区から大通りに出て、中央広場へと向かうと、この寒空の中、商魂逞しくいくつかの軽食を扱う露天が並んでいた。

市庁舎へ続く広場に並ぶ露店を見て、ルキドゥが実に情けなさそうな表情であつたのが印象的であつた。

市庁舎内に入ると、修一郎は総合案内所へ近づいて、そこに居た人間の女性に市民登録窓口の場所を尋ねる。

正面入口から見て、一階の廊下を右に進んだ先にあると教えてくれた、彼女の口調は丁寧であつたがどこか機械的で、むこうの世界で言われていた“お役所仕事”という言葉を修一郎に思い出させた。ルキドゥを連れて、言われた方向へ足を向けた修一郎は、廊下を進みつつも、どこか疑問を覚えたようで、しきりに首を傾げている。

「あれ？こつちは……」

「な、なあ、やっぱりオレたちみたいなのが来ちゃいけない場所なんじゃないか、こつち」

市庁舎に近づくにつれ、表情と声に緊張を高まらせていたルキドゥは、庁舎内に入った時点で、その度合いは最高潮に達したようだ。今も、右手右足と左手左足を同時に動かして歩いている。

「そんなわけではないでしょう」

市庁舎と呼ばれてはいるが、要はこの都市周辺を治める領主の居館のようなもので、アーセナクト市長も当然爵位持ちの貴族である。一般市民が立ち入ることができるのは、四階建ての市庁舎の二階部分までだが、それでも、姿が映りこむほどに磨き上げられた一階ロビーの床や、煌びやかな術石製シャンデリア、廊下に敷き詰められた青い絨毯など、市民が利用する公的機関の場とは思えないほどの華やかさがあった。

「第一、私は何度もここを訪れていますよ。」

勿論、二階までですが……っと、この先が窓口だったのですか」

修一郎は、二階に上がる階段の下で立ち止まると、階段と廊下の先を見比べて、一人で納得している。

わけが分からず、修一郎の行動を見ていたルキドゥの表情は、更に不安を増したように見えた。

「な、なに……?」

「なんでもありません。」

何度か利用している部署の窓口が、この階段を上がったところにあるだけですよ。

この廊下の先は行ったことがなかったので、気付きませんでした」

では行きましょう、と言って修一郎は再び歩き出した。
ルキドウは、説明されてもまだ理解できなかったが、結局は目の前の人間族に、不安な表情のままついて行くしかなかった。

ルキドウの市民登録……正確には、ルキドウの保護市民資格登録と、修一郎の管理保護者登録の申請は、問題なく受理された。晴れて二人は、被保護者と保護者の関係になった。

今後、ルキドウが問題を起した場合は、ルキドウだけでなく修一郎も管理責任を問われる立場となる。

虎人族の少年は、そのあたりの説明を受けても、未だ理解できない単語が半分近くあり、良く分からなかった。

「とりあえずは、今までどおりで居なさいということですよ。
当然、我が家に来てからの、“今までどおり”という意味ですけどね」

笑顔の修一郎に、何か言い返してやろうかと考えたルキドウだったが、結局は面白くもなさそうに、顔を背けるだけだった。

市庁舎を出て、過度の緊張から漸く開放されて大きく息を吐き出すルキドウを連れて、修一郎はプレルの食堂へと向かう。

ちよつと遅くなった昼食を摂るためだ。

「君もお腹が減ったでしょう。」

これから行くお店の味は、期待していいですよ」

「別に、オレはサンドイッチでいいけど……」

興味なさそうに呟く虎人族の少年だったが、外套の裾から僅かに

顔を出した縞模様の尻尾は、小刻みに揺れて、言葉とは裏腹な心情を物語っている。

「こんな寒い日は、暖かいものを食べたほうがいいと思いますよ。それに、知り合いに君を紹介したいとも思っていましたし」

そんな遣り取りをしながら歩いていると、ほどなく目的の場所に着いた。

「ここです。」

パノーバさんという猫人族の方がやっている、プレルの食堂という店です。

プレルという名はパノーバさんの奥さんの名前ですけどね」

「猫人族……」

僅かに表情を動かしたルキドウだったが、修一郎はそれに気付くことなく店の中に入っていく。

「こんにちは」

「いらっしやい、シューイチロー。」

「あら？そつちの子は……？」

店に入った修一郎の目を前を通り過ぎようとしていたプレルが、修一郎を見つけて笑顔を向ける。

その彼の後ろに隠れるようにして、店に入ってきた小さな影にも気付いたプレルは、視線で修一郎に問い掛けた。

「ほら、何を隠れているんですか。挨拶しなさい」

「……ルキドウだ」

言われて、渋々ながら少年が名乗る。

「虎人族なのねえ。はじめまして。プレルよ。

ルキドウ……ちゃん？」

「オレは男だ！」

最近のみせたことのないような剣幕で、声を荒げる虎人族の少年に修一郎は驚いたが、猫人族の女性は笑顔のまま穏やかな声で訂正した。

「あら、ごめんなさい。……ルキドウくんね。

ようこそ、うちの食堂へ。

これから宜しくね？」

その言葉にルキドウは応えることなく、修一郎と共に案内されてテーブルについた。

時間があまりないので、手早く食べられて温かいものを、と注文する修一郎に、プレルは今日のお奨めを二つでいいわね？と苦笑しながら応じていた。

そんな二人を黙って見遣りながら、ルキドウは相変わらず不機嫌そうな表情を崩さない。

「どうかしたのですか？さっきから、君、様子がおかしいですよ？」

ルキドウの様子に気付いた修一郎が問い掛ける。

勝手に注文を決めてしまったことに腹を立てているのかとも思っ

だが、少年はそれ以前からどこかおかしかった気もする。

「オレは、水だけでいい」

ぼつりと呟いた言葉に、修一郎が怪訝な表情を浮かべた。

「何故ですか？お腹の調子でもおかしいのですか？」

「……………」

「ルキドウ君？」

重ねて訊ねる修一郎に、ルキドウが口を開いた。

「虎人族であるオレが、猫人族の作った料理なんか食えない」

ルキドウの言葉に、思い当たった修一郎は、僅かに眉根を寄せる。

獣人族における上下関係。

一般的に、虎人族は猫人族の直系上位種族と言われている。

以前、この店でグラナに対してゼリガが見せた反応が思い起こされた。

「なるほど。分かりました。」

それが、この世界での慣習なら仕方ないことですからね。

では、君はそこで水を飲んでいてください。プレルさんには悪いですが、注文を一人分取り消すことにしましょう」

修一郎はため息を吐きながら、席を立ってカウンターへと歩く。

その背中に何か言いかけたプレルであったが、結局言葉を発することはなかった。

本来ならば、叱るべきであるのかも知れないが、ことはこの世界の慣習に関するものだ。

どんなにおかしいと感じても、修一郎が口を出すべきではないと思われた。

グラナの場合は、本人がそう言うように、特別なのだ。

自分でも簡単に整理を付けられそうもない感情を持って余しながら、修一郎は注文の取り消しを告げた。

ある程度は予想していたのだろう、プレルはそれに怒ることもなく、了解の言葉を返した。

食堂から出た二人は、お互いに黙ったままで、中央広場へと向かっていた。

もうじき、昼の休憩時間が終わる。

「では、ルキドウ君。これを渡しておきます。

適当に、何か買って食べてください」

修一郎は、財布から数枚の硬貨を取り出すと、プレルに渡した。

「でも、オレは……」

言い淀むプレルに対し、修一郎は何も言わず、少年の手に硬貨を握らせる。

「君のたった行動について、私は何も言える立場ではありません。言いたいことはあります。ですが、それを口にしていいとも思っていないです。」

後は、君が考えてください。

勿論、助言が必要ならいつでも言ってきたり構いませんが」

少しだけ苦笑の成分を含んだ笑顔で、ルキドウに告げると、修一郎はマリポー商店へ向かって去っていった。

露店が並ぶ広場に、硬貨を握り締めたまま立ち尽くす小さな虎人族の姿が残された。

第十話 引っ越し

どこから聞きつけたのか、店の通路で出会ったマリポーが、修一郎の肩を叩きながら、話しかけてきた。

「よう、ヤスキ。お前、虎人族の子供の保護者になつたんだって？
それで引っ越したいとか言っているらしいな」

やたらとにこやかな笑みを浮かべた人間族の商人は、修一郎の肩に手を置いたまま、寄りかかるようにして話を続ける。

「まだ引っ越し先は決めてないんだろ？
他ならぬ我が店の従業員に関することだ。俺がいい業者を紹介してやろうじゃないか」

「相も変わらず耳が早いですね、社長」

そんなマリポーに対して、修一郎は苦笑するしかなかった。
ソーンリヴがマリポーに話すとは思えない。恐らく、ソーンリヴからゼリガ、ゼリガからレナヴィルかゼリガの部下であるルネルあたりには伝わって、マリポーの耳に入ったのだろう。

レナヴィルに熱を上げているという噂が囁かれている、ブルソーからのルートもあるかも知れない。

別に隠すつもりはなかったので、修一郎は素直に頷いた。

「ええ、確かにまだ候補は決めていません。
できれば一軒家にしたいとは思っていますが」

「一軒家か！こりやまた思い切つたな！

「賃貸か？買い取りか？」

まるで商談をしているかのような表情になったマリボーが、詳しく聞こうと更に顔を寄せる。

目のぎらついた男に顔を近づけられて、若干及び腰になりながらも、修一郎は答えた。

「一応、購入を考えています。良い物件がなければ、貸家になるかも知れませんが。」

それ程大きな家でなくても良いので、三〜四人が暮らせる広さで、適当な中古物件があれば最高ですね」

その言葉を聞いて、マリボーが表情を真剣なものに変えた。良く透る声も抑え気味で、低い。

「お前、ここに腰を据える気になったのか」

「はい。良い街ですし、仕事にもありつけましたから……」

「クレルミロン夫人のことはどうする」

「王都ならば馬車を使えば、二日で行けます。」

それに、春頃に時間を見つけて、一度会いに行くつもりです」

「そうか。そこまで考えてのことなら、いい」

それまで修一郎だけに聞こえる程度で話していた声と表情を、元に戻してマリボーは笑った。

「まかせとけ。アーセナクトで一番の業者を紹介してやる」

「宜しく願います」

恐らく、紹介料のようなものがマリポー個人の懐に入るのだろうが、基本的には善人な男が言うことであつたので、修一郎は頭を下げた。

善は急げとばかりに、街中へと出かけていったマリポーを見送ると、修一郎は事務室に戻つた。

もう暫くすれば、大鐘三つに子鐘二つが聞こえてくるだろう。

年越し祭を無事終えた今は、普段どおりの業務に戻っている。と言つよりも普段より暇であつた。

年末と年始のお祭り騒ぎで、多少の贅沢を楽しんだ人々は、いつものように慎ましやかな生活に戻っている。

マリポー商店の客層は、一般市民が三分の二、貴族のような富裕層が三分の一といったもので、“多少の贅沢”を毎日送っているような人々も訪れるが、それでもこの月の売り上げは、一年を通して少ない月にあたる。

また、それに加えて、国土の中央から北部にかけて降る雪で、荷馬車の移動速度が落ちる、或いは足止めされることも少なくないことから、バンルーガ王国やアーラドルから入ってくる荷は多くない。幸い、この店の商品は日用品や事務用品といったものがメインであり、生鮮食料品は扱っていないので、輸送時間の遅延による商品の傷みといった問題とは無縁であつたが。

「よお、シユー。すっかり聞こえてたぜ？

で？どこに引越すんだ？」

流通も暇なのだろう、ここ数日、午前の荷の積み入れ・積み込みが終わると、ゼリガは事務室に入り浸ることが多かった。

今日も、ソーンリヴと修一郎相手に、事務室で駄弁っている。

「場所はまだ決めていませんよ。」

と言つても、居住地区の中で動くだけですから、通り数本程度しか変わらないと思います」

商業都市アーセナクトを空から俯瞰すると、ほぼ真円に近い形をしており、中央部に市長の居館を兼ねた市庁舎があり、その周囲を街路が囲んでいる。

その街路からは、東西南北に大通りが伸びていて、市壁へと続いている。

その市壁を潜れば、他の都市へと続く公路が、それぞれの方向へと伸びていた。

その大通りによって都市が四分割される形になっており、北東部にあたる四半分は魔法院や教会、騎士団駐屯場、貴族や豪商の邸宅といった、公的機関の建物や豪華な家屋が立ち並ぶ区域で、官庁地区と呼ばれている。

北西部は、一般市民が住んでいる家や、市が運営している長屋が並ぶ、居住地区と呼ばれる区域だ。

南東部と南西部は、商業地区と呼ばれ、商店や食堂、酒場や娯館、市場などが犇めき合っており、更に大通りから伸びる小さな街路は、それぞれの職種の店が集まって軒を連ね、職人通り、衣服通り、食堂通り、歓楽通りなど様々な呼ばれ方をしている。

プレルの食堂やマリポー商店があるのも、この商業地区だ。

プレルの食堂は、文字通り“食堂通り”にあり、マリポー商店は、特に名前の付けられていない比較的道幅の広い通りに面していた。

「なんだ、そうなのか？」

でもよ、焦らせるつもりはねえが、店が暇な今のうちに引越しまつたほうがいいと思うぜ？」

ゼリガの言うことはもつともで、冬の四の月の終わりには、アルベロテス大陸に在る四国の王が一堂に会して執り行われる、平和祈念式典がある。

これは“大戦”の終結が宣言された、アルタスリーア王国で言う冬の四の月二十五日に、毎年開催される行事で、主催する国は年毎に持ち回りで行われていた。

一昨年がルザル王国、去年がバンルーガ王国、今年がアルタスリーア王国で、来年はウヴェンナツハ王国で、その次の年は再びルザル王国、といった順になっている。

式典が開催されるのは王都であるが、その時期は各国から、多くの種族が主催国を訪れる。

それは王都に留まらず、ここアーセナクトや工業都市アーラドル、港湾都市ダリンにも同じことが言え、多種多様な種族が街中に溢れる。

即ち、商売人にとっては書き入れ時であり、忙しくなる時期でもあった。

「祈念式典まで、あと一月半といったところか。

シユウイチロウ、お前は初めてだろうが、仕事の量は年越し祭の比じゃないぞ。

それに加えて、だ。冬の四の月は……決算月だ」

まるで死刑宣告をするような口調で、ソーンリヴが言う。

事務職……特に経理に携わる者にとっては、正しく正念場であり本当の地獄であった。

一年間の仕入れ額、売り上げ額を確定し、棚卸を行い、売掛金・買掛金が発生しているならそれらの計上も行い、帳簿の年度締めを

行い、店の収支を確定させる。

他にも細々とした付随作業があり、且つ通常業務もこなさなければならぬ。

修一郎たちは経理業務だけを行っているわけではなく、人事や施設管理といった業務もあるのだ。

第一、修一郎の世界のように、コンピューターにインストールされた経理処理ソフトを使って、一瞬で纏めて、差異やミスがあれば指摘までしてくれるような、便利なモノもない。

「決算……」

悪夢を見るかのような表情で、修一郎が呟いた。

元の世界で経験した決算月が思い起こされる。

修一郎が向こうの世界で勤めていたのは、地方都市にある、文房具を扱う小さな会社であったが、それでも経理担当であった彼の、決算月の残業時間は百五十時間を遥かに超えていた。

さすがに、そこまで酷くはないだろうが、こちらは全て手作業で行わなければならない。

「こちらの世界には存在していないものだと思っていました……」

現実から逃避したいとばかりに漏らした修一郎に、冷徹な事実が突き付けられる。

「どうやら、お前の世界でも決算は大変だったようだな。

だが、シュウイチロウ。諦めろ。

この世界でも、決算は、ある」

既に、その忙しさを何度か経験しているソーンリヴは、達観した表情で、異世界人に告げた。

「ま、まあ、そういう訳だからよ？
引っ越しするなら早めがいいと、言いたかったってことだ」

人間族であれば、頬に一筋の汗でも垂らしていそうな口調で、ゼリガが話題の軌道修正を試みる。

「言ってくれりゃあ、手伝うからよ。」

まあ、シユーなら五人くらいはすぐ集まるだろうがな」

ゼリガが言っているのは、この世界……かどつかは不明だが、少なくともアルタスリーア国内での民間伝承のことで、曰く、

『引っ越しの際、五人以上の手伝いが訪れる家は栄える』

と、いうものである。

まあ、多くの者が助けしてくれるということは、それだけ人望があるとも言えるため、的を射ているとも言えなくもない。

「それはありがたいのですが、ウチにはそれほど家具もありませんから、おそらく私とルキドゥで大丈夫だと思いますよ？」

精々が、荷車一台借りてくれば済んでしまいそうですし」

「そんな訳にはいかねえだろ。こういうことは大事なんだからよ。
当てがねえなら、俺から数人ほど声かけるがどうする？」

犬人族の気遣いに感謝しながらも、まだ物件すら決まっていませ
んから、と苦笑するしかない修一郎だった。

マリポーから紹介された業者はコスラポリといった。人間族の中年で、中肉中背の、気の弱そうな印象を受ける男性だった。

彼が眼鏡をつけているのを見て、少しばかり嬉しくなった修一郎である。

コスラポリは、アーセナクトの居住地区全域の家屋に関する取り扱いを、市から一任されているようであった。

業務内容は、空き家や長屋の維持・賃貸・売却といった管理全般、新規家屋の設計・建築、居住者の居る建物の修繕、内装や魔法施術を含む専門知識が必要とされる装飾業者や術士の斡旋等と、結構手広くやっている。

修一郎の世界での、不動産業と建築業にインテリアデザイン等の斡旋を併せたようなものだろうか。

「マリポーさんからは、なるべく良い物件を、と言われていますから、安心してくださって結構ですよ。」

一応、こちらで数軒ほど候補を挙げさせていただきましたが、ヤスキ様のご要望があれば、出来る限り対応させていただきます」

店内に置かれた、応接用テーブルの上に数枚の金属板が並べられる。どうやら、これも魔法を応用したモノのようだ。

「すみません、ちょっと事情がありまして、私は魔法が使えないのです。」

お手数をおかけしますが、出来れば簡単に概要を説明していただいた後、直接物件を見させてもらうわけにはいかないでしょうか」

申し訳なさそうに言う修一郎に、気分を害したふうでもなく、コスラボリは快諾すると、金属板の上に手をかざして一枚ずつ説明していく。

金属板からは、どうやって撮ったのか分からないが、対象物件の外観が少しはなれた場所から見た視点で浮かび上がっている。

魔法というかSFみたいだな、と思いながら、修一郎は目の前の男の話に集中した。

「まず、一つめの物件ですが、築十二年の二階建てになります。

三〇四人が住まれる予定とのことでしたので、然程広くはありません。

部屋数は、台所を除けば、四部屋になります」

言いながら、コスラボリがかざした手を動かすと、浮かび上がっていた画像が、建物の外観から部屋の間取りに切り替わる。

「一階には、居間と客室が一室。二階に、寝室と子供部屋が一室ずつとなります。

台所は、居間から続く形になっておりまして、お手洗いは玄関から居間へ続く廊下の途中にあります」

コスラボリは、手馴れた様子で、淀みなく説明していく。修一郎は、黙ってそれを聴いている。

「次に、こちらの物件ですが……」

そうして、五つの候補を説明してもらったところで、修一郎が口を開く。

「大体、分かりました。」

ところで、これらの物件ですが、購入する際に、こちらが建物に手を加えることは可能ですか？」

「それは可能ですが、具体的にはどのような？」

賃貸ではなく購入であるので、基本的に持ち主の意向で改修はできるのだが、市が定める基準を大きく逸脱する場合は、市に届け出て受諾される必要がある。

居住地区の家屋全般に関することを任されているコスラボリとしては、市と客双方に対する信用問題になりかねないので、二つ返事で引き受けるわけにはいかず、事前に確認せずには居られなかった。

「新しい部屋を作りたいのです。」

水と火を使うことになるので、給排水管が引き込める場所に、増築する形になると思います。

それと、モノによっては台所も少し弄ることになるかも知れませんが、

一軒家を持つに当たって、修一郎は風呂の設置を考えていた。

これまでは、タオルで体を拭くか湯浴みで済ませていたが、それは仕方なくであり、日本人である修一郎としては、やはり肩まで湯に浸かることが出来る風呂が恋しかったのである。

「なるほど。それでしたら、こちらは少し難しいので、外させていただけます。」

手許にあった五枚の金属板のうち、一枚を抜き取ると、コスラボリは脇に除けた。

「では、これから物件を見ていただくことにいたしましょう。
ヤスキ様、お時間は宜しいでしょうか？」

「はい。お願いします」

そうして、二人は一軒ずつ売り家となっている家を見て回った。

一件目は、コスラボリが最初に説明した家だった。確かに、それほど広くはなかったが、建物自体の傷みも殆どなく、前の住人が大切に使っていたことが窺えた。

二件目は、平屋建てであったものの、部屋数は多かった。しかし、却って全体的に窮屈に感じられる間取りで、すぐ隣に二階建ての家があるためか日当たりも悪かった。

三件目は、二階建てで部屋数が五つあり、各部屋の広さもそれなりに、間取りも住人に対する配慮がなされていた。また、日本と言うと四畳ほどの地下貯蔵室が設けられていて、小さいながらも庭があった。

四件目は、三階建てで部屋の数も広さも充分にあり、大きな木の植えられた庭も付いていたが、内部の老朽化が酷く、かなり手入れをしなければならぬ状態だった。

どの家も、北の大通りから然程離れておらず、家の前の街路も見通しが良く、治安について心配する必要がないのは、共通していた。

全てを見終わって、修一郎は三件目の家することに決めた。

階段の手すり部分や、窓枠といった細かな箇所は修繕しなければならなかったが、それ以外は申し分ない。

台所は、予想していたとおり単炉の竈が二つ並んだタイプであったので、これについては手を入れることになるだろう。

何より、地下貯蔵室があることが、修一郎にとっては有難かった。

「かしこまりました。ヤスキ様はなかなかお目が高いようですね。ヤスキ様が選ばれた家は、四つのうち最も良い物件でございます。その分、多少値が張りますが、それに見合っただけの価値はございます」

各物件を見て回る修一郎は、一々細かい指摘をすることなく、その家の長所を見つけては感心して見せていたので、コスラボリは修一郎を上客として扱うことにしたようである。

当初から腰の低い物言いであったが、今は更に言葉遣いが丁寧になっている。

「家の修繕と増築に関しては、専門の業者をご紹介いたします。懇意にしておりますので、この辺りの家の改修や修繕をいくつも手懸けており、腕も保障いたします」

「分かりました。その方への連絡はお願いします。

増築の打ち合わせに関しては、コスラボリさんも同席のうえで行う必要がありますか？」

「はい。一応、市からも建築物の改修等につきましては、私を通して届け出るように、と言われておりますので、同席させていただくことになります。

ですが、余程のことがない限り、こちらが口を出すようなことはいたしませんので、ご安心ください」

修一郎たちは、コスラボリの店に戻って来ていた。

二人の前には茶が出され、コスラボリは修一郎と打ち合わせしながら、羊皮紙製の受注書に色々と書き込んでいく。

「それほど突飛な改修はするつもりはありませんよ。ですが、分かりました。では、後日また伺いますので、その際に、その業者の方と引き合わせていただけるといふことで宜しいですか？」

いつもの柔和な笑みを浮かべて、修一郎が確認する。

「はい。こちらもそのように調整しておきます。」

それで、つきましては、お支払いに關してのお話なのですが、ヤスキ様は如何様にお考えでしょうか。

ヤスキ様のご都合に合わせて、割賦も承っておりますが」

日本の一戸建て購入のように、何十年もかけて支払わなければならない金額ではないが、それでも優に一般市民の収入の十数年分に相当する金額である。

コスラボリもそれを考慮しての発言だったのだが、修一郎は平然として答えた。

「そうですね、一括でお支払いします」

「……は？」

マリボーが気にかけているようであったものの、どう見ても目の前の男は、その辺りに居る一般市民のような風貌をしている。

とても大金を持っているようには見えなかったので、コスラボリは上客に対して失態とも取れる間の抜けた返答をしてしまった。

それに逸早く気付いたコスラボリは、姿勢を正して詫びた。

「し、失礼しました。そ、それでは、一括でお支払いいただくとい

うこと……」

それでも声が若干震えていたのは、仕方ないだろう。

まあ、そういう反応になるでしょうね、と心の中で苦笑しながら、修一郎は話を続けた。

「修繕と増築の代金についてですが。

こちらは、後日二者で打ち合わせて、見積もりを作っていたいただき、決めるということでご宜しいですか？」

「あ、は、はい。それで構いません」

何時の間にか、客と店の立場が入れ替わっていたが、動転したままのコスラボリは、修一郎が店を出るまで、それに気付くことはなかった。

二日後、再び修一郎は、コスラボリの店を訪れていた。

今は昼の休憩時間であり、ソーンリヴとマリポーに事情を話し、少し遅れるかも知れないと言ってきてある。

先日と同じ応接用テーブルには、修一郎とコスラボリ、それにブラウニー族の男性の姿があった。

茶色のツナギのような服に身を包んだブラウニー族は、クータンと自己紹介した。

年齢は三十歳になったばかりだと言うが、レベックと同じような長い髭を生やしており、身長は修一郎の腰あたりまでしかない。

赤茶色の頭髪は伸びるに任せており、頭にはハチマキのように手

拭いを絞って巻きつけてある。

茶色の瞳をした目は、好奇心の光を湛えて修一郎を見つめていた。

「へえ」。 “フロ” ねえ。

兄さん、面白いモンを考えるお人だねえ」

事実、修一郎の出した増築案に興味を惹かれたのだろう、木板に木炭で簡単に書かれた浴室と浴槽のデザインを見ながら、クータンは楽しそうである。

「大量の水を使いますし、それを沸かすために、こんな感じの物を作っていたきたいのです。

また、水を使うことから、“浴室” までの水道管の増設と、下水管への接続もしなければなりません。

あと、水はけを良くするために、浴室の床はタイル張りにして、僅かに傾斜をつけてください」

「なるほどねえ。こりや確かに台所と便所に近い場所に作るのがいだらうなあ。

でも、兄さん、こりやあ結構高くつくぜえ？」

修一郎のラフデザインから目を上げると、値踏みするような目つきで人間族の優男を見上げる。

「でしょうね。ですが、どうしてもこれを作っていたきたいのです。

どうでしょう？ 出来ますか？」

「そうさなあ。技術的にはできなくはねえなあ。

ただ、台所の流しと竈の改修も含めて、費用はこれくらいかかる

「ぜえ？」

修一郎の前に置いてあつた木板を奪い取ると、勝手に凡その金額を書き加えていく。

それを横から覗き込んだコスラボリが、小さく息を呑む音をたてた。

その金額は、修一郎が購入すると決めた家の額の三分の一に相当するものだった。

「あー。やっぱりそれくらいかかりますか。

仕方ないですね、詳細な見積もりを作ってください。それで構いません。

ただし、所々は口を出させてもらいますよ？」

「そりやいいけどさあ。コスラボリさん、だってよ」

話を振られて、それまで言葉を発することのなかつたコスラボリが慌てて、声を上げた。

「や、ヤスキ様！宜しいのですか！？」

この金額を家の代金と合わせると、もう一つ上の家が買えますよ？」

「ええ、いいんですよ。私は、あの家が気に入ったんです。

さすがに、金に糸目は付けないとは言えませんが、これくらいの出費は覚悟していましたから」

こともなげに答える修一郎に、コスラボリは再び黙るしかなかった。

翌日、クータンから上げられた見積書の金額を確認した修一郎は、

それを応諾した。

家の内装部分の修繕は二日後から行われることになり、風呂場の増築と台所の改修は、一週間後から着工することだった。

全てが済んで、修一郎に引渡しが行われたのは、冬の四の月になる三日前だった。

第十一話 新たな我が家と、オレができること

修一郎が購入した家の、引渡しが行われる当日。

修繕箇所と改修がなされた台所、増築された風呂場部分の最終的な確認が、修一郎、コスラボリ、クータンの三者立会いの下、行われていた。

竣工検査と言えば大袈裟になるが、修繕部分のチェックと、修一郎が依頼した台所の改修、増築された風呂場、それらが、修一郎の要求したとおりのものとなっているかを、引渡し前に確認することは、当然である。

クータンを先頭にして、修繕箇所を見て回った三人は、台所に移動した。

改修前は、修一郎が今現在住んでいる長屋と同じように、仕切りなしで居間から一段下がって台所に繋がる形となっていたが、改修後は、居間と台所の床面は同じ高さに揃えられ、仕切りとなるように、修一郎の腰くらいの高さのカウンターが新たに設置されている。カウンターは、居間と台所を完全に仕切った訳ではなく、片側は壁面に据え付けられていたが、反対側は人二人が横に並べる程度の空間が確保されていた。

所謂、キッチンカウンターである。

台所内部は、奥の壁に取り付けられた、タイル張りのシンクの上に任意で水が出せるような機巧のある水道管が引かれ、シンクの底には、屋外の地下に埋設された下水道管に直結する配水管が取り付けられている。

シンクは、上面の高さが同じ調理台へと続き、そこから少し低くなった三炉式の連結竈へと繋がっており、一昔前の日本の家庭にあるようなシステムキッチンの体を成していた。

調理台の下には、扉こそないものの、鍋やかんを置くことがで

きるほどの広さがある収納スペースも確保されている。

さすがに、こちらの世界では、ステンレスのような耐食性に優れた合金は発明されていないため、レンガで基礎を組み、その上を、白いセメントに似た耐水性のある接着剤を使って、陶器製のタイルで覆ってあった。

この辺りは、修一郎も詳しくないので、水漏れやタイルの剥離が起こらないことを確認するに止めた。

竈は一体型で、煙を外に排出する煙突も一本であるが、それぞれの炉は内部で仕切られており、三つある竈口は独立していて、各々火力の調整が出来るようになってる。

「料理人でもないのに、台所にここまで凝る奴はアンタが初めてだよ、兄さん」

一つ一つ確認しながら、満足そうな笑みを浮かべている修一郎を、クータンが呆れ半分、感心半分といった顔で眺めている。

「料理が趣味なんですよ。今、住んでいる長屋は台所が小さくて、まともな料理ができませんからね。」

この際ですから、とことん拘ってみようかと思ひまして」

「なるほどねえ。でも、この一体型の調理台はいいねえ。」

今度、家を作るときは、これで行ってみるかねえ」

ちらりとコスラボリに目を遣って、クータンは独り言のように口を開いた。

コスラボリは、黙って頷く。

「どうでしょうね？私は、こちらのほうが使い易いと思ったから、お願いしたままでですから。」

他の方は、今までのように流しは流し、調理台は調理台と分かれているほうを選ばれるかも知れませんよ」

「気に入られなければ戻すまでさあ。俺は良さそうだと思うけどねえ」

「機会があれば、私どもからお客様にご提案させていただく、という事で良いのではないですか」

コスラボリはカータンに向かってそう言つと、先を促すように続けた。

「そうだなあ、それについてちゃあコスラボリの旦那に任せるさあ。で、兄さん。」

次は、“フロ”を見てくれよ。あつちはここ以上の自信作だぜえ」

台所を出て、居間を通つて廊下に出ると、先ほどと同じくカータンの先に立ち案内する。

二階に上がる階段の前を通り過ぎ、便所の横に新たに作られた扉の前に立つと、ここだあ、とブラウニー族の男が胸を張つた。

どうやら彼にとつても、かなりの自信作となつたのだろう、背の低い妖精族が仰々しく扉を開く。

「ほお………」

コスラボリも完成後の現場は初めて見たらしく、修一郎が口を開く前に、感嘆の声を上げる。

スペースと給排水上の問題から、脱衣所こそ作られなかったものの、修一郎が待ち望んだ光景がそこにあつた。

「……うん！いいですね！」

目の前にあるのは、五畳ほどの広さの浴室で、床と壁は一面陶器製のタイル張りである。

床は、白と水色と薄緑のタイルがランダム、壁が、白一色のタイルだった。

入口正面の壁には、照明用のランプをかけるための金具が二箇所と、採光と排気を兼ねた小さめの跳ね上げ窓が取り付けられており、窓枠には曇りガラスが詰め込まれていた。

その窓の下には、青と緑のタイルが貼られた浴槽が設えてある。

大きさは、修一郎が横になって浸かっても十分な余裕があり、もう一人くらい入っても問題なさそうだ。

浴槽は、かつての日本でよく見かけたバランス式ともバランス釜とも呼ばれるものを参考にしており、浴槽の底に近い側面には、縁が銀色の穴が少し間を空けて縦に二つ並んでいる。

その穴は、浴槽から風呂場の壁を通って、外へと続いていた。

風呂場入口扉から見て、右側の壁面に、もう一つ小さめの扉が設けられており、そこから屋外に出ることができるようだ。

その扉から、外を覗いて見ると、丁度浴槽の穴が伸びて来ていると思われる場所に、小さな竈が作られていた。

竈の中には、風呂場から伸びてきている銀色のU字型の管があり、これを熱することで、浴槽の水を加熱することが出来るようになってる。

この世界にはガス湯沸かし器などないため、バランス式と五右衛門風呂を併せたような湯沸し方式にしたのだった。

竈の上には、雨よけ用の庇が伸びていて、一応雨天時に竈が濡れることを防ぐようになっている。

術石を使えば、火の魔法を封入して加熱器代わりにしても良いのだろうが、魔法が使えない修一郎は、この方法しか思い浮かばなかった。

風呂場には、台所と同じ機巧が取り付けられた水道管が浴槽に向かつて伸びており、浴槽の底には木栓の詰められた排水用の穴もある。

要望どおり、風呂場の床は僅かな傾斜が付けられ、排水口に水が集まるようになっていた。

洗い場の広さも充分で、修一郎の想像していた風呂場とほぼ変わらないどころか、それ以上の仕上がりに、修一郎は満足の吐息を漏らした。

「でもよお、兄さん。この湯を沸かすための管は、“硬銀”を使っているとは言え、何年かに一度は交換しないとイケねえぜえ？

ま、俺んトコに言ってもらえりゃ、すぐに対応するけどなあ」

硬銀とは、この世界でも数少ない合金の一つらしく、銀と、修一郎が発音するには少しばかり難しい聞いたことのない金属を、魔法を使って作成するらしい。

耐熱性と耐食性に優れているが、金属の配合比率が難しいことに加えて、魔法を使わなければ合成できないため、量産はされておらず、王族や一部の貴族が調理器具として使っている程度だ、とはクータンの言である。

「ええ。その時はまたお願いしますね、クータンさん」

一瞬、バランダならば作ることができるかも知れないと思いはしたが、ここはクータンの言うとおりにしたほうが良いと判断する。

コスラボリがクータンと懇意にしているように、クータンも懇意にしている職人が居るのだろう。

法外な金額を取られでもない限り、多少なりとも利益が広く分配されるのであれば、それに越したことはない。

この街に腰を据えるならば、様々な方面に伝を作っておくことは、

決してマイナスではないからだ。

その後、地下貯蔵庫の壁面に小さな亀裂が入っていたのに気付いたクータンが、事前に確認した事項に入っていないのにも拘らず、独断で補修した旨が伝えられた。

料金のことを訊ねた修一郎に、

「ああ、それはいらねえよお。俺が勝手にやったことだしなあ。

それに、久々に遣り甲斐のある仕事だったからよお。

兄さんには、これもおまけしてやらあ」

そう言って笑うと、クータンは、コスラボリの手からこの家の鍵を二つ受け取り、それぞれに『施錠』の魔法をかけた。

ブラウニー族は、街の妖精族と呼ばれるとおり、自らが住み着く街や家に関してのエキスパートで、街全体の上下水道の埋設配管や、建物の傷んだ箇所を、実際に見ることなく探り当てる固有能力がある。

市庁舎内の都市整備部門にも数人のブラウニー族がいると聞いたことがあるし、クータンのように家の建築や改修業務を生業としているブラウニー族も少なくない。

そして、今や国中に広まった『施錠』という魔法も、元はブラウニー族の編み出したものである。

金庫や扉単体にかける『施錠』は、対象物に直接術処理を行う単純なものだが、修一郎が住んでいる長屋の鍵にかけられているような『施錠』は、少し複雑な術であった。

鍵を用いて行う『施錠』は、まず建物に『施錠』用の術式陣を施す。陣と言っても、修一郎の世界のファンタジーや漫画等に登場するような仰々しい魔法陣ではなく、一定の長さの文章であったり、描いた者にしか分からない複数の図形であったりと、決まった形はない。

当然、一目で分かるような場所に術式陣を書いてしまうと、それ

を破壊されれば『施錠』が発動しなくなるため、壁の中や、屋根裏、床下といった普段目にする事のないような場所に、埋め込んだり書き込まれる。

そうした後で、施した『施錠』の術式陣に反応する魔法を、鍵に對してかけるのである。

『施錠』のかけられた鍵で、文字通り施錠すると、術式陣が発動し、マリボー商店の建物にかけられている『施錠』と同等の効果を発揮する。

術式陣を用いているため、修一郎のように魔法が使えない、若しくは何らかの理由で魔法が使えなくなつた者でも、自らの魔力の有無に関係なく『施錠』の魔法が使えるのだ。

この鍵で閉められた扉は、例えば形状が全く同じ鍵でも開くことはなく、盗賊が使うようなピッキングツールを用いても決して開けることは出来ない。

さすがに、扉全体を破壊すれば侵入は可能だが、そうなると警護団にすぐさま連絡が入り、たちまち追い回されるはめになる。

修一郎が現在住んでいる長屋の、鍵式『施錠』は、長屋全体に施された簡易版とも呼べるもので、それぞれの部屋に形の違う鍵をあてがっているが、かけられている『施錠』は一種類のみで、対象も扉と窓に限られている。

極端な話をすれば、どこかの誰かが修一郎の部屋の鍵をそっくりそのまま複製して、長屋に施された術式陣に反応する魔法をかければ、本当の鍵でなくても『施錠』を解除することができる。

或いは、隣人が自分の部屋から壁をぶち抜いて、修一郎の部屋に侵入しても、扉と窓に触っていなければ、『施錠』の術は発動しない。

ちなみに、普通の鍵は、ピッキングツールは勿論、『開錠』という魔法を使えば、簡単に開いてしまうものなので、街中で見かけることは、まずない。

なお、『施錠』の魔法を『開錠』で打ち消すことは、不可能に近

い。何故なら、『施錠』の魔法を用いる際には、術者が何らかのキーワードを術に盛り込むからだ。

そのキーワードが偶然合致した場合は、『開錠』で『施錠』を打ち消すことが可能であるが、そうだったことは千に一つ、万に一つである。

クータンがこの家の鍵にかけた『施錠』の魔法は、この家のどこかに仕込まれた術式陣にのみ反応する魔法で、これでこの鍵以外では扉を開けることが出来なくなった。

「とりあえず二本にかけといたけどよお。ほいほいと無くさないでくれよなあ、兄さん。」

今回はおまけだが、次からはしっかりと代金をいただくぜえ」

「ありがとうございます。無くさないように注意しますよ」

礼を述べる修一郎に、いいってことさあ、と笑い、後はアンタの仕事だと言わんばかりに、コスラボリに手を振ると、クータンは自分の店にさっさと帰ってしまった。

「それでは、ヤスキ様。」

家の代金と増築等の諸費用をお支払いいただきますので、市庁舎までご同行いただけますか？」

無事に引渡しが無事完了したことに安心すると、コスラボリは今後の手続きのための説明を行う。

「全ての代金をお支払いいただいた後、家屋所持証明を市庁舎にて発行してもらうことになります。」

その証明をもって、この家は完全にヤスキ様の所有となったと市に認められます。」

なお、家屋所持証明の手續きに関する手数料は、当方が負担させていただきますので、ご安心ください。

ただし、その証明を紛失された場合、再発行に係る費用は、ヤスキ様にご負担いただくこととなりますので、家の鍵同様に、無くされないよう、ご注意願います」

「分かりました。どのみち、支払いは資産保管局で行うつもりでしたので、何も問題ありません。

では、行きましようか」

「はい」

二人の人間族は、市庁舎に向けて歩き出した。

途中、修一郎は一度だけ振り向いて、新たな我が家となる家を眩しそうに見つめると、再び市庁舎へと足を向けた。

「これはヤスキ様。いつもご利用ありがとうございます」

資産保管局に到着した二人を迎えたのは、窓口近くに立っていた身なりの良い老年の局長補佐であった。

真っ白な白髪頭を綺麗に撫でつけ、市庁舎の職員が着る制服とは違った、上等な生地で作られたスーツに身を包んだ人間族の老人は、まるでどこかの貴族に仕える執事のように見事な礼を見せた。

初めて見る局長補佐のその態度に、コスラボリは目を丸くしている。

「お世話になってます、リバー口さん」

修一郎はいつもの笑顔で、局長補佐に対していた。

「今日は、お店の入金で？」

「いえ、個人的な用件です。この度、家を買いました。その代金の支払いをしようかと」

「おお！それはおめでとうございます。

それで、官庁地区のどの辺りに住まわれるのですか？」

「官庁地区なんて、とてもじゃないですが無理ですよ。居住地区の北の大通りに近い場所です」

二人がにこやかに会話している横で、コスラボリは事態についていけない様子であった。

普段であれば、部屋の奥に構える自分の机で真剣な表情をして書類を見ているか、偶に保管局の表に出てきても、事務的な笑顔で一言二言会話するくらい程度だった、その局長補佐が今見せている態度は、コスラボリにとっては信じられない光景であった。

老人が一礼して離れていき、修一郎が手続きのために窓口に向かう後を付いていきながら、コスラボリは疑問を口にした。

「や、ヤスキ様……。貴方は、本当に貴族の方ではないのですか？」

コスラボリの言わんとしていることを察した修一郎は、苦笑を浮かべる。

「リバー口さんのことですか？」

あれは、お店のお金を出し入れする担当が私で、ちよくちよくここに来ているから顔見知りになったのです。

あと、私個人が少しばかり資産を預かっていただけではないですよ」

“少しばかり”で局長補佐が、あのような態度をするわけがない。それなりに資産を預けているコスラボリでさえ、ああいった対応をされたことなど一度もないのだ。

「そ、そうですか……」

どのようにして、その“少しばかり”の資産を得たのか知りたい誘惑に駆られたコスラボリであったが、これ以上は、客と商人の立場で話す内容ではないと思い直し、口を噤むことにしたのであった。

修繕費用等含めた家の代金を、修一郎から受け取ったコスラボリは、金額を確認すると、そのまま自分の店の口座に預け入れた。

おいそれと持ち歩ける金額ではない。この中から、後ほどクータンに対する支払いが行われるが、今は家屋所持証明の手続きが先だ。同じ階の、別の窓口に二人は移動し、そこで修一郎にあの家を引き渡したことで、家の代金が滞りなく支払われたことを告げて、発行手続き依頼を申し出る。

子鐘半分ほど経った頃に、窓口から二人の名前が呼ばれ、薄い水晶板に挟まれた銅製の板が手渡された。

それには、あの家の所有者が修一郎であること、その家を販売したのはコスラボリであること、アーセナクト市長がそれらを確認したこと、家の所有者は年に一定の家屋税を払う義務があることなど

が彫りこまれていた。

窓口担当者から、その板を屋内のどこかに掲示しておくように告げられて、手続きは全て完了した。

「これで取引は完了でございます。

これをもちまして、あの家はヤスキ様の所有するところとなりました。

ヤスキ様、この度は当店でのお買い上げ、誠にありがとうございました。」

市庁舎を出たところで、コスラボリは深々と頭を下げた。

「いえいえ、こちらこそお世話になりました。

色々は無理を聞いていただき、感謝しています。

また、何かありましたらお伺いすることもあると思いますが、その時は宜しくお願いします。」

「はい。私どもも、この件で色々と勉強させていただきました。

今後は、それを踏まえて、ヤスキ様により良いご提案ができると思います。

マリボーさんにも、良い取引が出来ました、とお伝えください。」

市庁舎前でお辞儀をし合う人間族の男二人の姿が、市庁舎に入ろうとしていた鳥人族の目に入ったようで、その鳥人族は不思議なモノを見るような顔をしたまま通り過ぎていった。

「シュウイチロー、これはどうするんだ？」

ルキドウが、台所の収納棚を指差す。

「それは、後で店の誰かに欲しい人が居るか訊いて、居ないようなら売ります」

居間に積んであった木箱に、クローゼットから持ってきた衣類を詰め込みながら、修一郎が答える。

引越しを明日に控えた今は、親鐘四つに子鐘三つ（午後九時）を過ぎたあたりだ。

ルキドウは、服や修一郎に買ってもらった三冊の本など、自分の持ち物は、新たに買ってもらった皮製の背嚢に詰め終えており、修一郎の手伝いをしている。

月が変わり、決算月となったため、徐々に帰りが遅くなり始めた修一郎に代わり、ルキドウによって家の物はあらかじめ整理されていて、後は主の判断を仰ぐだけであるので、それほど慌しいというわけではない。

引越しに際して、修一郎は殆どの家具を何らかの形で処分することにしていた。

新しい家には、新たに購入した家具を、明日の午前中に届けてもらうように手配してある。

明日は、マリボー商店の定休日、本当にゼリガが声を掛けたのか、店の従業員から、ゼリガ、ソーンリヴ、イルー、クローフルテ、流通部門でゼリガの部下であるルードという人間族の男性が手伝いに来てくれることになっていた。

また、どうやらレベックとバルンダも来るらしい。プレルも後で顔を出すとも言っていた。

随分と大人数になってしまったため、引越し作業は一瞬で終わりそうな気がしなくもなかったが、手伝いと言うより、新居への引

つ越し祝いが目的らしいので、修一郎は有難く申し入れを受けた。

「分かった。あと、これは……うわっ！なんだこの臭い！」

台所の隅の、しかも一番奥まったところに置いてあった、蓋がされた二つの壺を見つけたルキドウが、近づいて鼻を押さえる。

蓋を開けて中を確認しようとするルキドウを見るや、修一郎が慌ててそれを止める。

「待つてください、ルキドウ！それを開けてはいけません」

初めて聞く、修一郎の悲鳴に近い叫び声に、びくんと尻尾を伸ばし、毛を逆立ててルキドウの動きが止まった。

ルキドウが修一郎のことを名前で呼ぶようになり、暫く経った頃から、修一郎もルキドウのことを呼び捨てにするようになっていく。

「それは、この家の中で一番大切な物なんです。私が運びますから、君は別の物を見てください」

早足で台所までやってきた修一郎は、愛おしそうに壺を抱えると、居間へと運ぶ。

そんな修一郎を見て、殊更に壺の中身が気になったルキドウであったが、言葉どおり臭いモノには近づかないことに決めて、鍋やかんを運搬用の木箱に詰め込むのだった。

大体の荷造りが終わったのは、もうじき大鐘一つが鳴ろうとする深夜であった。

いつものように、修一郎と一緒にベッドで横になったルキドウが訊ねる。

「なあ、シュウイチロー。新しい家ってどんな感じなんだ？」

引越すと決めてから、虎人族の少年は事ある毎に、その質問を繰り返していた。

「明日になれば分かりますよ」

それに対する修一郎の返事も、いつも同じである。

「ちょっとくらい教えてくれないじゃないか……」

背中から聞こえてくる、少年の拗ねたような口調に、小さく笑いを漏らしながら、これまた同じ言葉を返す。

「言葉で説明するよりも、実際に見たほうがいいでしょう？楽しみにしててください」

それに、と続ける。

「明日は朝から忙しいですよ。もう夜も遅いのですから、早く寝てしましましょう」

寝る体勢にするためか、一度体を動かすと、修一郎はそれ以上喋るのをやめたようだ。

「ちえ……」

ルキドゥは、修一郎の背中に自分の背中を少しだけくっ付けるように寝返りを打つと、目を閉じた。

翌日、修一郎の言葉どおり朝から二人は忙しかった。

大鐘一つに子鐘五つ（午前五時）が鳴る前に、二人は起きだして、手早く朝食を摂ると、早速作業に取り掛かる。

修一郎が、マリボー商店から借りてきた荷車まで荷物を運び、ルキドウと二人で積み込んでいく。

大鐘二つに子鐘一つ（午前七時）を過ぎた頃には、ゼリガとイルーが長屋までやってきて、四人で荷車を押ししながら、新居に向かった。

四人が家が見える場所までやって来ると、既に新しい家の前には、ソーンリヴとクローフルテの姿があった。

初めて見る家に、驚きと喜びの声を上げるルキドウと、それぞれが感心するような声を漏らす獣人族の男性二人を横に、修一郎は女性陣二人に頭を下げる。

「今日はすみません、ソーンリヴさん、クローフルテさん」

「何、構わんさ。どうせ暇だったし、たまには体を動かさんと、鈍ってしまって仕方がない。」

それに、お前の新居とやらを拝んでおきたかったのもある。

なかなか良さそうな家じゃないか」

「クローフルテ・マイヤックです。おはようございます、シュウイチロウ・ヤスキさん。」

素敵なお家のようですね」

一方は人の悪い笑みを浮かべながら、もう一方は無表情で修一郎の言葉を訂正しながら、それぞれが修一郎に祝いの言葉を述べた。

「ありがとうございます。」

長屋から持ってきた荷物はこれだけです。折角来ていただいたお二人には申し訳ないのですが、もう暫くは何もすることがないと思いますよ。」

荷車には、大小幾つかの木箱と、収納棚、衣類を詰めた布袋、布団に巻かれた修一郎が大切にしている壺二つなどが積まれている。ちなみに、ベッドと寝室のクローゼットは長屋の備品であるので、簡単に拭き掃除をしてそのまま置いてきている。

新たに購入した家財は、大鐘三つまでにこちらに届く予定である旨を、その場に居る全員に告げると、修一郎はズボンのポケットから新居の鍵を取り出した。

鍵を玄関の扉の鍵穴に差し込んで回すと、軽い金属音とともに、一瞬扉の取っ手が淡く青い光を放つ。

これが『施錠』が解除された印であった。

「とりあえず、荷物は居間に運んでしましましょう。」

扉を開けながら、修一郎は同僚たちと小さな同居人に微笑んだ。

大鐘二つに子鐘四つ（午前十時）になる頃には、ルード、レベック、バランダもやって来た。

ルードとは何度か店でも顔を合わせていたが、まともに言葉を交わすのは今日が初めてであった。

「あまり力になれそうもないが、宜しくな。ヤスキ。」

上司のゼリガや、体格の良いイルー、力では誰にも負けそうもないバルランダらを見渡して、苦笑するルードだった。

金髪を短く刈った、碧眼の中年男性で、身長は修一郎の肩あたりと一般的な人間族にしては少し背が低いが、流通部門の従業員だけあってか、体つきは修一郎よりも遥かに逞しい。

「とんでもない。来ていただいただけでも嬉しいですよ」

笑顔で修一郎が返したとき、丁度家具が届いたようで、家の前の通りに出ていたゼリガが声を上げた。

「さて、それじゃあ少しでも働いてくるか」

腕まくりをする仕草で、表に出て行くルードであったが、それを何気なさを装って見ていたバルランダは、何やら言いたそうな表情でレベックを見る。

レベックも、何か思うところがあったようで、声を出すことなく頷く。

ルードに続いて、届いた荷物へと歩いて行く修一郎は、そんな二人に気付くことはなかった。

二階の寝室に置くベッドが二つ、一階の客室に置くベッドが一つ、それぞれの部屋に置く衣類用収納棚が三つ、台所に置く食器棚が一つに、収納棚が二つ。

レベックに紹介してもらった店で購入した家具が、それぞれの部屋に運び込まれて据え付けられる。

運んできた人足だけでは時間がかかるため、男性陣総出で運んでいる。

女性陣は、雑巾と手桶を持って、部屋中を拭いて周っていた。

後は、居間に置く椅子とテーブルと、それらの下に敷く絨毯が届

いていないのだが、それももうじき届くだろう。

忙しく行き来している大人を他所に、虎人族の少年は居間に一人で立っていた。

手伝いに来ている者は、修一郎がそれぞれ紹介してくれたのだが、少年から話しかけるには躊躇われる。

かと言って、自分一人が何もしないで遊んでいて平気なほど子供でもなかったルキドウは、どうすべきか悩んでいた。

台所で新しい水に汲みなおした手桶を持ったソーンリヴが、居間を通り過ぎようとして、ルキドウに気付く。

「どうした？ええと……、確かルキドウとかいったな少年。

手伝いは終わったのか？」

「いや……オレは」

言い淀むルキドウに、一瞬眉を動かしたソーンリヴだったが、すぐに二階に続く階段の下まで行くと、上階へ向かって声を上げた。

「おい、シュウイチロウ！ちょっといいか？」

返事があって、暫くすると、修一郎が首に巻いたタオルで汗を拭きながら降りてくる。

暦上は冬の四の月で、翌月は春の一の月となるのだが、実際の春が訪れるには少し遠いようで、外の風は未だ肌を刺す冷気を伴っている。

それでも、室内で作業をしていれば、さすがに汗もかくようであった。

「どうかしましたか、ソーンリヴさん」

降りてきた修一郎の目を見た後に、ルキドウに視線を向けるように、顔を動かす。

ソーンリヴの言いたいことが伝わったのか、修一郎が、ああ、と声を漏らした。

そんな二人の遣り取りを、当のルキドウは居心地悪そうに見ている。

「ルキドウ。すみませんが、買い物に行ってきてくれませんか。

頼んでいた家具も、全部届いてはいませんから、私がここを離れるわけにはいきません。

食料も、今朝の朝飯で使い切ってしまったから、今晚の晩飯の材料がないのです。

それに、石鹸やランプも必要です。今から書き上げますので、それらを買ってきてください」

修一郎は、居間の隅に積まれた、長屋から持ってきていた荷物を解いて、中から小さな羊皮紙の切れ端を取り出す。

それに木炭で色々と書き込みながら、思い出したように付け加えた。

「ああ、それと。昼飯はプレルさんから差し入れがあるようです。

プレルさんはこの家の詳しい場所を知らないはずですから、君が案内して連れてきてください」

「えっ……」

突然の言葉に驚くルキドウを気に留めるでもなく、修一郎は当たり前のように言う。

「君も見て分かるように、私たちは忙しくて、プレルさんの所に行

く暇がありません。

それに、どうせ買物で商業地区まで行くのですから、ついでに寄るくらい問題ないでしょう?」

「で、でも、オレは」

何かを言いかけたルキドウに、修一郎は、いつもの柔和な笑みを浮かべて、諭すように言葉を紡ぐ。

「これは、君にしか出来ないことですよ。

私でもなく、他の誰でもない、君にしか出来ないことです。

以前、どうすればいいか考えなさいと言いましたよね?

君は、もう答えを出しているのでしょうか?でしたら、それを行動に表せばいいだけですよ」

「……………」

黙りこんでしまった虎人族の少年の肩に、羊皮紙のメモと金の入った小袋を渡す修一郎の手が置かれる。

「お願いしますね。頼りにしてますよ、ルキドウ」

そう言うと、修一郎の手の置かれた少年の肩を、玄関に向かって軽く押す。

「分かった。行ってくる」

顔を上げたルキドウは、吹っ切れた様子で、駆け出していった。

「ふふ……。まるで本当の親子みたいだな」

そんな二人の遣り取りを黙って見ていたソーンリヴが、澄んだ笑顔で笑う。

「そうですか？

でも、私は、かつての私を拾ってくれた人の、真似をしているに過ぎませんよ」

荷物を運び入れるために開け放たれた玄関を通して、走り去っていくルキドウの小さな後姿を見送る修一郎は、その表情に微量の寂しさを含ませた。

「いいんじゃないか？

それがあの子のためになるなら、真似でも何でも」

床に下ろしていた手桶を持ち直すと、ソーンリヴはそう言い残して居間を後にした。

二階から修一郎を呼ぶ声が聞こえる。

長身の人間族の男は、収まりの悪い頭を一つ掻くと、二階へと続く階段を上がっていった。

第十二話 帰ってきた冒険者と、わたしにできること

ルキドウがプレルを伴って戻ってきたのは、大鐘三つと子鐘一つ（午後一時）を少し過ぎた頃だった。

ルキドウはぱんぱんに膨れ上がった袋を背負い、加えて、両手で食料品の入った布袋を抱えている。

プレルも、竹で編まれた大きな手提げ式の籠を、両手に持っていた。

「ただいま」

ルキドウが玄関を潜り、廊下を歩いて居間に入ると、そこには既に新品のテーブルと椅子が運び込まれ、広げられた絨毯の上に置かれた。

テーブルは長方形で、椅子は六脚。短辺に一脚ずつ、長辺に二脚ずつセットされており、ゼリガたち手伝い組が座っている。

家主である修一郎の姿を探して、見回していると、つい今しがた歩いてきた廊下から、その本人の声がかけられる。

「おかえり、ルキドウ。大変だったでしょう？」

振り返ると、まだ冬の季節だというのに、上着の長袖と長ズボンを捲り手桶を持った、風呂場から出てきた修一郎の姿があった。

「それでは、食料は台所に運んでください。他は居間の隅にでも置いてもらえればいいですから」

少年を労いながら、長身の男は台所に向かう。

言われたとおり起居間の入口横に、買ってきたランプや石鹸、新品の大きなタオルなどの入った背嚢を置くルキドウに、テーブルについていた面々からも、ルキドウに労いの言葉がかけられる。

「よお、帰ってきたかルキドウ。ご苦労さん」

「なかなか力があつたようだな、ルキドウ君。疲れただろう？荷物を台所に置いてきたら、少し休むといい」

「ちゃんとプレルさんを案内してきたようだな。少年」

「お疲れさまです、ルキドウさん」

「偉いの。坊主」

「お疲れさん」

ゼリガが、イルーが、ソーンリヴが、クローフルテが、レベックが、ルードが、それぞれがそれぞれの言葉で少年を迎えた。

「あ……。は、はい」

何と応えて良いのか分からず、戸惑うルキドウに、後から居間へ入ってきたプレルが椅子に座っている面々を睨む。

「ルキドウ君はね、これだけ荷物があるのにも拘らず、あたしの籠まで持ってくれようとしたんだよ。」

呑気に座ってる男どもも、少しは見習ったらどうかしらね？」

「い、いや、だって重そうだったし……」

すっかりとまではいかないのだろうが、ルキドウもプレルもそこそこ打ち解けたようで、道中、少ないながらも会話をしつつ、ここまで来ている。

「そりゃねえよ、プレル。俺たちや、ついさっきまでベッドやらテーブルやら運んで動き回ってたんだぜ」

「む……。私もルキドウ君について行けば良かったのかも知れないな」

「わしゃ、手伝いじゃのうて祝いに来たようなもんじゃからの。大体、この背じやたいした物も運べんわい」

「手厳しいねえ」

テーブルで一休みしつつ雑談していた男性陣が、首を竦める仕草でおどけてみせた。

そんな男どもを見て苦笑しながら、ソーンリヴが援護に回る。

「まあまあ、プレルさん。確かに先ほどまで家具の移動や据え付けで、働いていたのは間違いないんだ。

少しの休憩くらい大目にみてやってくれないか」

注文していた居間に置く家具は、どうやら手違いがあったようで、大鐘三つ（正午）を過ぎても届かなかった。

子鐘半分（三十分）を過ぎたあたりで、漸く届いたのだが、荷車を引つ張ってやって来たのは、人間族の男性一人だけだった。

おかげで、各部屋のベッドと収納棚の設置を終えた男性陣は、そのままテーブルや椅子の運びいれをする羽目になったというわけだ。昼飯時を過ぎても、あれやこれやで力仕事を続けることになった者は、空腹を抱えたまま動き回っていたのだ。

「ふーん……。ならまあ、しょうがないか。

じゃあみんな、シューイチロー直伝、プレル特製のサンドイッチの差し入れよ。」

「さあさあ、食べたいなら手を洗って来なさい」

居間に置かれたばかりのテーブルの上に、持っていた竹製の籠を置き、覆うように掛けられていた布を外す。

中には、以前修一郎がソーンリヴのために作った時と同じく、緑色の大きな葉に包まれた塊がいくつも入っていた。

歓声を上げる面々を他所に、ルキドウとプレルは修一郎の後を追って台所に向かった。

「プレルさん、今日はわざわざすみません」

台所に入るや否や、流しと調理台と竈が一体となった仕様に、驚きの声を上げているプレルへ、修一郎が捲った袖を戻しながら、振り向く。

ルキドウは、流しの横に置かれた収納棚に、早速買ってきた食料などを入れている。

「シューイチロー、これ、“料理が趣味”どころの話じゃないわよ！
ウチの厨房と殆ど変わらないじゃないの」

「それは大袈裟でしょう。

竈の炉の数も少ないですし、調理台もプレルさんの所ほど広くもないですよ」

「全く同じなら、ここで食堂開けるわよ……」

腰に手を充てて呆れている猫人族の傍に、買ってきたものをしまし終えた小さな虎人族が並ぶ。

「シューイチロー、お茶淹れるんだろ？これでいいか？」

調理台の上には、今まで二人が使っていた木製のコップと、新た

に購入した陶器製のカップと受け皿が八客、それにポットが用意されていた。

ルキドウは、今しがた買って来た茶の入った袋を持っている。

「ええ。では、君はお湯を沸かしてくれますか？」

私は風呂に水を張ってきます」

「分かった」

頷いて竈に向かうルキドウを柔らかな眼差しで見つめながら、プレルが修一郎に問う。

「フロ？何、修一郎。」

また新しいモノでも作ったの？」

「ええ。長年の夢の一つが叶ったんですよ。」

お見せしますから、付いて来てください」

まるで自分の宝物を見せびらかす少年のような顔つきで、修一郎は風呂場に案内するために、プレルを連れて台所を出て行った。

竈に薪を入れ、『着火』の魔法で火をつけたルキドウは、茶葉の入った袋を開けながら、小さく呟く。

「ほんとに、子供みたいだ」

自然と浮かんだ笑顔は、修一郎に対してか、新しい家に一緒に住むことに喜んで自分の状況に対してか、それは少年自身にも明確な答えは出せなかった。

プレルからの差し入れを食べ終え、一息ついたところで、ルードはこれから用事があるから、と言い残して帰っていった。

レベックとバランダは、風呂用の竈に風除けが必要だということ、急遽、商業地区へと資材の買出しに出掛けている。

どうやら、風除けを作ること、引越祝い祝いの代わりにするつもりらしい。

イルーとゼリガは庭を掃除すると言って外に出ており、クローフルテとプレルは使った食器の片付けをしている。

ルキドゥは、自分に充てがわれた部屋で、荷物の整理をしていた。居間には、何となく手の空いてしまった、修一郎とソーンリヴが残されていた。

「しかし、本当に家を買ってしまったとはな。

別に、他人の行動にとやかく言うつもりはないが、お前も思い切ったことをしたもんだ」

「そうですね……。いずれ何処かに腰を落ち着けるつもりではありませんし、丁度良い機会かと思ひまして。

それに、私はこの街も、そこに住む人たちも、好きですから」

柔らかで、それでいてどこか頼りなさそうな、そんないつもの笑顔の修一郎を、ソーンリヴは黙って見つめている。

彼女には話すつもりはなかったが、もう一つ理由もある。だからと言って、今の言葉に嘘はない。

「そうか。私はこの街の出身だから、他所の街がどうかは伝聞でしか知らん。

だが、王都やダリンもなかなかに住み良い街だとは聞くぞ？」

「確かに、王都も良い街だとは思いますが。けれど、あそこは私にとっては、少しばかり賑やかに過ぎますね。」

ダリンやナダルも考えなかったわけではないですが、向こうの世界で事務屋をやっていた私に、就ける仕事があるかどうか……。

「なんせ、魔法が使えないうえに非力ですから」

右腕を曲げ、全く浮かび上がらない力瘤を見せるような仕草をして修一郎は自嘲するが、ダリンやナダルにも商店はあるし、事務を必要としている店はあるだろう。

ただ、魔力がない修一郎にとっては、その事務すら満足にこなせないという事実は、能力的にはなく体質的な面で、確かにあった。マリボー商店のように、事務員が二人以上居るならば問題ない。ソーンリヴがやっているように、魔法を使う作業とそうでない作業に分かれれば済む話である。

だが、一人だとそうはいかない。この国で広く使われている出納板の取り扱いが、修一郎では出来ないからだ。

どうせ新たに雇うなら、魔法が使えない修一郎よりも、魔法を使える者を雇うほうが、遥かに役に立つ。

そういった意味では、以前ソーンリヴが言った「何のつもりで、マリボーは修一郎を雇ったのか」という疑問は、尤もであった。

「これほどの家を買う余裕があるなら、術石くらい買えるはずだぞ？ 純粋な魔力だけを込めた術石なら、お前でも使えるだろうに」

この家がいくらしたのかは知らない。だが、中古であっても、一般市民が住む家よりも大きく、その上購入にあたって改修や増築まで行っている。

加えて、引越しに際して、新たに家具を相当数購入しているのだ。それらの総額を考えると、修一郎が一般貴族並みの資産を有しているもおかしくはない。

おまけに、ライターやメガネの試作を職人に依頼するにも、それなりに金はかかっているはずだ。
となると、修一郎が普段から、術石を買う金がない、と言っていることと矛盾してくる。

「ええと、それはですね……」

言いかけた修一郎の声に被さるように、玄関からレベックの音が響く。

「シユウイチロウ、戻ったぞい！

あと、客が来とるぞ！」

修一郎が座っていた椅子から立ち上がると、レベックの横をすり抜け、廊下から居間へと駆け込んできた黒い影が、声と同時に修一郎に飛びついた。

「修一郎！帰ってきたよ！」

「うわっ、ろ、ロシエ！？」

硬い皮鎧が胸に当たって少しばかり痛かったが、その影は一向にお構いなしである。

再会の喜びを、体と顔と声を総動員して、いつかの様に修一郎の首にぶら下がっている。

名前を呼ばれた黒髪の女冒険者は、ぶら下がったままで、眉根を寄せて口を尖らせた。

「店は閉まってるし、いつもの長屋に行ったら誰も居ないしで、探したんだからね！」

なあって引越したって教えてくんなかったのよう！」

「無茶を言わないでください、ロシエ。だいたい、引越したのは今日の今日ですよ」

首に掛かる重さに、若干ふらつきながらも修一郎が弁明するが、フオーンロシエには通じなかった。

「そんなの関係ない！私の“能力”がなかったら、街中探し回る羽目になってたのよ！」

修一郎の首にぶら下がったまま、体を左右に揺する混血者の少女の機嫌は治まりそうにない。

「グラナ、貴方からも言ってください」

フオーンロシエに遅れて居間に入ってきた狼人族の冒険者に、修一郎が助けを求める。

「なかなか立派な家だ。まずは、おめでとう、と言つべきなのだろうな」

ああなると、ちょっとやさつとじゃ治まらない相方の性格を知悉しているグラナは、じゃれ付かれて困惑している修一郎に、軽く礼をすると続けた。

「それで、修一郎。依頼の話だが、“それ”らしき物が見つかった。一つは生のまま凍らせ、一つは中の種だけ持ち帰った。確認して欲しい」

マイペースを装って、巻き込まれるのを回避すべく事務的に話を進めるグラナに気付いた修一郎だが、同時に背後に漂う、不穏な空気も感じ取っている。

顔を出るだけ動かさず後ろを確認すると、椅子に座り、冷え切った視線でこちらを見つめるソーンリヴの姿があった。

「と、とにかく。ロシエも落ち着いてください。

それで、グラナ。“それ”は今ここに？」

「無論だ。おい、ロシエ、荷物を出せ」

未だに修一郎にぶら下がっているフォンロシエを強引に引き剥がしながら、彼女が背負っている背嚢を叩くグラナ。

「分かったわよお。修一郎、一つ貸しだからね！」

渋々といった態度で、言われたものを取り出すと、フォンロシ

エは“それ”を修一郎に差し出した。

「はい、これ。修一郎が言ったのって、これのことじゃないかなって思うんだけど……」

一つは、そこら辺で見かけるような広葉樹よりも、幾分か分厚いの葉の付け根に、小さな赤い実が三〜四個生っている枝を、そのまま『氷結』の魔法で氷漬けにしたもの。

もう一つは、その実の種らしき薄い小麦色の小さな粒が入った麻袋である。

枝のほうは、氷ごと麻の布で何重にも巻いて、その上におが屑で満たした皮袋の中に埋めてあった。

「ナダル又周辺にはなくつてさ。結局、イレ・マバルまで渡つちやつたわよ。」

「ま、そのおかげで見つけることが出来ただけだねー」

「現地の者に訊くと、その実は食べることが出来るそうだが、果肉が少なく種が大きいためか、殆ど流通には乗らず、現地の子供たちが偶に食べる程度だそうだ。」

「果肉が甘いというのも、修一郎の言っていた条件に合致する」

「種は食べても美味しくないらしくて、子供と一緒に実を食べまくって集めたのよ？」

「こんな物、どうするつもりなの？」

「これが生っていたのは、イレ・マバルでもかなり南方の島だけだった。」

「この辺りの風土では栽培は難しいと思われるが」

二人の冒険者から交互に説明を受けながらも、修一郎は麻袋の中の種を手に持ち、間近で観察したり、匂いを嗅いだりしている。

この世界でも流通している、大豆より一回り小さな豆のような形状の種で、その殆どは乾燥しており、薄皮に包まれているようである。

その薄皮を丁寧に剥いてみると、薄い小麦色から黄色みのかかった乳白色の種に変わる。

匂いからは判断できないが、氷漬けにされた枝とこの種から判断して、まずコーヒー豆で間違いないと思われた。

「いえ、栽培は考えていませんよ、グラナ。」

「ところで、この種はこれだけですか？」

修一郎の世界の度量衡で言えば、大体500グラム程度の豆が入った麻袋を見る。

「ううん。あたしたちが集めてたら、村の子供たちも協力してくれてね？」

沢山持って帰って来ちゃった」

そう言いながらフォンロシエが背囊から、先ほど出した麻袋と同じ大きさの袋を三つ追加した。

修一郎は、元の世界ではコーヒー中毒者に近い状態であり、実のところ、この九年間、なんとかしてコーヒーを飲むことが出来ないかと探し回っていたのだ。

元の世界でも試したことがなかったのに、タンポポの根を煎じればコーヒーのような味がするという、真偽の定かでない話の記憶を元に、この世界のタンポポに酷似した植物の根を煎じたこともある。結果は、激しい腹痛に襲われ、調薬士の世話になってしまったが、それでもコーヒーの味を諦めきれない修一郎だった。

これだけあれば、多少失敗しても暫くは楽しめそうだ、と判断した修一郎は、二人に対して勢い良く頭を下げた。

「“これ”で間違いないと思いますよ。

いやあ、この世界に来てから望んでいたことが、一日に二つも叶うことになるとは、思ってもいませんでした。

グラナ、ロシエ、本当にありがとうございます！」

「では、これで依頼達成ということで問題ないな」

「ええ。後できちんと報酬は支払いますよ。

とりあえず、お茶を淹れますから、二人もそこに座っていてください」

完全に浮かれてしまっている修一郎は、ソーンリヴの冷たい視線にも、そんな修一郎を初めて目にして唾然としているフォーンロシエにも構わず、台所へとスキップするかのような足取りで消えていった。

「な、なんか……あんな修一郎見たの初めてかも……」

「俺もだ。余程、“あれ”が嬉しかったのだろうな」

「……………」

テーブルを挟んで向かいに座った二人の冒険者に対して、ソーンリヴは友好的とは言えない視線を向けて黙っている。

フォーンロシエとの初対面時の印象が、拭いきれないのだろう。そんなソーンリヴの視線に気付いたグラナが、向かいの人間族の女性に向き直り、言葉を発する。

「む？ああ、俺とは初めてだったな。」

俺は、グラナ。冒険者をやっている狼人族だ。

隣に座っているのは、知っているだろうがフォーンロシエという俺の相方だ。

俺とロシエは、以前、隊商護衛の仕事で修一郎と知り合って、それ以来の付き合いになる」

修一郎とグラナ、フォーンロシエの正確な関係を把握していなかったソーンリヴに、あっさりと全てを明かしたパートナーに向かって、フォーンロシエが再び口を尖らせた。

「なんで全部言っちゃうのよ！もうちょっと楽しめるかと思ってた

の」

「……楽しむとは、どういう意味だ？小娘」

フォンロシエの一言に、柳眉を跳ね上げて臨戦態勢を整えるソーンリヴ。

「べつについ。分かってるんじゃないの？」

「私と修一郎は、職場の上司と部下という関係だ。下衆な勘繰りはやめてもたいたいものだな」

「……下衆とは言ってくれるじゃないの」

向き合う女二人の間で、言葉という名の弓の射掛け合いが始まるかに見えたが、自分の部屋の整理を終えて、階下に降りてきたルキドウの言葉で、それは中断される形となった。

「シュウイチロー、また誰か来てるのか？」

居間へと入ってきた小さな虎人族の姿を見て、フォンロシエとグラナが表情を変える。

「え？え？何？この子誰？」

「む……。虎人族か」

冒険者という稼業をやっているならば、何度か虎人族にも出会っているが、子供で、しかも修一郎に対し砕けた口調であったので、二人の興味を惹いたようだ。

「ああ、ルキドウ。彼らはな、シュウイチロウの旧い知人だそうだ。こっちの狼人族がグラナ。で、そっちの黒髪『の』がフォーンスィエ」

目線だけで二人を紹介すると、フォーンスィエが何か言い返そうとする前に、ソーンリヴは椅子から立ち上がると、台所へと足を向けた。

「は、初めまして……。ルキドウと言います。シュウイチローと一緒に暮らしています」

ルキドウはルキドウで、この日何度目かの自己紹介にすっかり慣れてしまい、普段とは違った余所行きの口調で喋っている。

「あ、こ、これはどうもご丁寧に……」

可愛くお辞儀をする少年に、フォーンスィエも先ほどまでの怒気が霧散したのか、間の抜けた返事をしてしまう。

「こちらこそ宜しくな、ルキドウ」

そんな相方とは対照的に、グラナは落ち着いた様子で応じていた。

「少年、シュウイチロウは台所に居るぞ。お茶を淹れるそうだから手伝ってやってくれ」

「分かった」

頷いて台所へと向かうルキドウを見送ると、肩を竦めつつ、台所

のカウンター前に立って、ソーンリヴは二人に説明する。

「まあ、そういう訳で、この度の引越しとなったわけだ。他にも思う所はあるようだが、どうやらこの街に腰を落ち着けるつもりらしいな、シュウイチロウは」

その言葉を聞いた、フォーンロシエとグラナは、それぞれの表情で、それぞれの思考の森の中に入り込んで行ったようであった。

レベックとバランダが、風呂場の竈用にと作った風除けは、半ば部屋とも言える設えとなった。

雨除けの庇に合わせる形で、四方に木の壁が作られ、換気用兼燃料の薪を搬入するための扉まで新たに取付けられている。

竈部屋とも呼べる室内には、竈用の薪を置く場所も作られ、レベックの工房で余った木切れなども既に運び込まれていた。

その二人は、修一郎からの夕食の誘いを断り、既に帰ってしまった。

家族第一であるゼリガと、実は近々子供が生まれることが判明したイルーも、既に自宅へと戻っていて、この場には居ない。

ソーンリヴは、久々に酒が呑みたいと言い出して、応とも否とも言わなかったクローフルテを連れて、食堂通りへと消えていった。

今日、この街に戻ってきて、その足で修一郎の家に来てきたフォーンロシエとグラナは、期せずして、新たなヤスキ家の第一号の客人となった。

夕食を食べ終え、茶を啜りながら寛いでいる冒険者二人に、家主である修一郎が告げる。

「グラナ、ロシエ。風呂が沸いたようです。どうです？入ってみませんか？」

既に、風呂についての説明を修一郎から聞いていた、二人のうち一人は、その提案に有難く乗ることにした。

「入る入る！体が浸かるほどのお湯って体験したことないのよねー。グラナは当然入るとし」

「待て。俺は入るつもりはないぞ。別に汚れてもいないし、タオルで拭けば充分だ」

フオーンロシエの言葉を遮るように言い切ったグラナは、コップに残った茶を飲み干した。

「では、修一郎。済まんが、俺は先に部屋へ行かせてもらう。

装備の手入れしておきたいのでな。

後で、手桶に湯を貰えると助かる」

「分かりました。タオルも用意しましょうか？」

「いや、タオルは自前の物があるので必要ない。部屋は二階の一番奥で良かったか？」

「なんでよーだの、汚くしていると嫌いになるぞだのと、ぼやいている相方を無視して、グラナは階段へと向かう。

「はい。客用の布団がまだ一式しか揃ってないので、ロシエと同室になります。良かったですね？」

「寝られれば、俺はどこでも構わんさ」

本当は相方である黒髪の混血者と恋仲なのだが、それをおくびにも出さず淡々とした口調で、狼人族は二階へと上がって行った。

「もう！仕方ないなあ。

じゃあ、ルキドウ君！お姉さんと一緒に入る？」

連れを説得するのを早々に諦めたロシエは、次の目標をルキドウに定めたようだ。

「え！？お、オレはいいよ……」

「照れない照れない。こーんな綺麗で優しいおねーさんと一緒なんだよ？」

遠慮しないで、来・る・の・！」

強引に少年の腕を引っ張って風呂場に向かうフォーンロシエに、綺麗はともかく優しいはどうなんだろう、と思った修一郎であったが、口に出すような馬鹿な真似はせずに、一つ苦笑を漏らすと、居間のテーブルの片付けを始めたのだった。

「……………それ、修一郎には言ってるの？」

真面目な声音で、フォーンロシエがルキドウに訊ねる。

適温に調整された湯に浸かり、傷一つない滑らかな肢体を伸ばし

て寛いでいるように見えるものの、顔は真剣そのものである。
日本の風呂場のように、残響音で普段の彼女の声とは微妙に違っ
て聞こえるが、今はそんなことを気にする時ではない。

「……………言っていない」

訊かれたルキドウも、湯船に浸かったまま、俯き加減に答える。

「じゃあ、ずっと隠すの？」

二人の間と言わず、風呂場の中には湯気が充満している。
天井から落ちた水滴が、湯面に当たって小さな音を立てる。
壁にかけられたランプの光が、白いタイルに反射して風呂場の中
は思いの外明るく、互いの表情も分かる。

「そんなことは……………！ない、けど……………」

消え入りそうに答えるルキドウの声が、浴室に響く。

「一つだけ、確認させて」

「うん……………」

「修一郎を、騙すつもりなの？」

そう口にしたフォーンロシエの瞳には、苛烈な炎が宿っている気
がした。

ルキドウは慌てて、だがきっぱりと否定する。

「騙したつもりなんかない！ただ、成り行きでそうなたただけで！」

「そつか。なら、いいや」

先ほどまでの態度を一変させて、黒髪の少女は身体を更に湯の中へ沈める。

修一郎をどのような形であれ害する者は、絶対に許すわけにはいかない。

そうでないのなら、後は修一郎が判断することだ。そして彼は、重要な判断を誤るようなことはしない人間だ。

恋愛感情はグラナに向いているが、異世界から来た人間族の男は、フオーンロシエの大切な人であることは間違いない。

短くない修一郎との付き合いの中で、あの男をそこまで信じるこ
とが出来るようになっていたからこそ言えた台詞であった。

「どうすればいいと思う？」

フオーンロシエと並んで浸かりながら、ルキドウは迷っている。

「あなたの好きにすればいいわよ。決めるのはあなただもの。」

修一郎なら、どんな事実であれ、受け止めてくれるとは思っけど
ね

「そつかな……」

修一郎と付き合いの長い女冒険者の言うことであるから、信じて
もいいのかも知れない。

それでも、ルキドウの迷いは完全には消えない。

本当のことを話して、修一郎に拒絶されたらどうすればいいのか。
数ヶ月前であれば、今までの生活に戻ればいいだけだ、と鼻で笑
うことも出来たが、彼との生活を過ごすうちに、そんな考えは既に

浮かばなくなつて久しい。

「そうよ。自分のことは自分自身で決めるものだもの。
あなたのことは、あなたにしか決めることはできないし、そうじやなきや生きてる意味ないでしょ？」

混血者である自分が辿つてきた人生は、全部が全部自らが決めたことではないが、重要な場面で他者に判断を委ねた経験は、フォー
ンロシエにはない。

助言を請うたり、判断材料を要求したことはあれど、最終的な決定は全て自分でやってきたことだ。

「オレに……」

そう言えば、昼間、修一郎に同じようなことを言われたな。

どうやら、アイツの周囲に集まる人物は、他人に対しあれこれ口を出す者はいないらしい。

これも、あの頼りなさそうな人間族の男の人柄のせいなのだろうか。

「わたしにできること……」

呟いた声は湯気の中へと響きながら消えていき、それを耳にした
フォーンロシエは満足そうな表情で、“フロ”を存分に堪能するこ
とにした。

第十二話 帰ってきた冒険者と、わたしにできること（後書き）

後書きという名の言い訳

「風邪ひいてました。」

あと、書き溜めていた話は今回で完全に尽きました。

大まかな流れをつらつらとメモってはいますが、今後は週に一、二度くらいの更新ペースとなると思います。

他の作家さんの作品を読まれる合間に、「そついやあれどうなったかな」程度に読んでいただけると幸いです。

第十三話 出張

「店、大丈夫でしょうかね……」

今日、幾度めかの台詞を修一郎が口にする。

商業都市アーセナクトから王都アーオノシユへと向かう、路線馬車の中、修一郎の隣に座るソーンリヴが、ため息と共にこちらも幾度めかの同じ返答を吐き出した。

「ブルソーも一応は、事務の仕事を経験してるんだ。一月くらい何とかなるさ。」

ジスさんも、ウチに来る前の店では事務と販売を兼任していたんだ。

決算締めはマリボーさんも手伝うと言っていたし、心配することはないと言っているだろう」

ジスとは、マリボー商店の販売担当の三人目の女性であった。

以前働いていた店で、夫となる人間族の男性と知り合い、今では二児の母である。

外見だけは、二十歳前の少女としか見えないのだが。

「それよりも、家は大丈夫なのか？あの二人組とルキドウ……っと、ルキーテだったな、の三人だけで」

「ええ。問題ないでしょう。」

ルキーテはあれで結構細かいところに気がつく子ですし、ロシエとグラナも、ずっと冒険者をやっていたわけではありませんから、街暮らしに支障はないと思いますよ」

店の制服とも普段の私服とも違う、旅装のソーンリヴが、座り心地が悪そうに身じろぎした。

石畳で舗装されているとはいえ、修一郎の世界のコンクリートやアスファルトで舗装された道とは程違く、王国公路にはかなりの凹凸がある。

加えて、路線馬車を始め、馬車の荷台には満足なサスペンションが発明されておらず、精々が座席に縫い付けられた綿入りの座布団のようなものがあるくらいだ。

聞く所によると、レベックとバランダが共同で馬車用のバネを開発中らしいが、未だ完成はしていないようである。

「しかし、引越し早々新居を留守にせねばならんとは、お前もついてないな」

自分と同様に、旅立ちの修一郎に、口の片端を持ち上げるようにソーンリヴが笑う。

「仕方ない……んでしようねえ、やつぱり。
ソーンリヴさんともかく、私が行く理由は未だに分かりませんが」

そう言った修一郎の顔には、諦観と疑問と僅かな感謝の念が絶妙にブレンドされた表情が浮かんでいた。

その日、マリボー商店の店主、マリボー・ワットの持つ伝達板が

微かな音と共に明滅した。

懐から取り出して見ると、伝達板には『至急』を表す文字が浮かび上がっている。

マリポー商店が登録・保有している伝達板は三枚。一枚はマリポー、一枚は事務担当、そして最後の一枚は息子ブルソーが所持していた。

同じ店内に居る事務担当者が伝達板を使うはずもなく、つまりはブルソーからの連絡ということになる。

そのブルソーは今、王都に新しく出来た、マリポー商店アーオノシュ支店へと、暫定的な店主として出向いていた。

この国で店を持つとする商人は、大抵本拠をアーセナクトに置く。

人口で言えばアーセナクトの倍はある王都であるが、流通の要はアーセナクトであり、アーオノシュとほぼ同条件の公路網に加え、アーセナクトの近くを流れるナス河を利用した船での搬送等によって、物品の輸送や、ヒトの出入りが最も多いのが、その理由だ。

“政はアーオノシュオノシュから、商いはアーセナクトから”とは、アルタスリーア王国の商人が良く口にする諺である。

早足で、店から一番近い早伝役の駐留所へと向かったマリポーは、年若い鳥人族の早伝役立会いの下、伝達板で息子と話をする。

「どうした、ブルソー。何か問題でも起きたのか？」

『至急』と指定してくるのだ。余程の問題でも起きない限り伝達板を使うはずもないのだが、それでもそう訊かずには居られない。

アーセナクトで足場を固めるに至ったと確信したからこそ、王都へと支店を出したのだ。

王都での商売はこれからが正念場であり、下手を打って、王都での商売に支障を来すようなことになってはならない。

「親父、早速だが本店の事務員を支店に回してくれ。こつちじゃ今、大変なことになってるんだ」

まるで目の前にブルソーが居るように、はつきりとした声が伝達板から発せられる。

「どう大変なんだ。そちらにも二人ほど事務員を雇っていたはずだろっ」

理由も言わず、用件だけ伝えようとする自分の息子に、マリボ―は苛立ちを滲ませた声を返す。

「その二人が倒れたんだよ！一人は急病で、一人は荷馬車に轢かれたんだ！」

二人の命に別状はないが、職場復帰は当分先になるらしい。今は俺がなんとか一人でやってるが、もうじき決算締めがある。さすがにそれは俺一人じゃ無理だ！」

「何だと？一度に二人ともか！？」

「ああ。俺が本店に戻れば、ジスと二人でなんとかそつちの決算締めは出来るだろう。」

けど、こつちはウチの事務に慣れた者じゃないと出来ない。

他の従業員に事務経験者は居ないし、一時的に新規で雇ってる時間の余裕もないんだ！」

「ソーニンリヴとヤスキを回せということが……」

「それしかないと思う。シュウイチロウはどうか知らないが、ソーニンリヴは何度もウチの決算締めを経験してる。」

二人が無理なら、せめてソーンリヴだけでもこっちに寄越してくれないか」

マリポーは暫し口を閉ざして考えた。

彼は、将来的にブルソーに店を継がせるつもりで、仕入れから事務まで全ての業務を経験させていた。

確かにジスと二人、最悪マリポー自身も手伝えば、本店の決算締めは出来るだろう。

だが、アーオノシユの支店で、ソーンリヴを助っ人としてブルソーと二人で決算締めをさせるとなると、今度は本店の決算締めを修一郎とジス、マリポーで分担することになる。

そうした場合、支店は何かなるだろうが、こちらは正直なところきちんと出来るか不安だ。

それに、マリポーには修一郎に対して考えていることがあった。

「分かった。ソーンリヴとヤスキをそちらに向かわせる。

二人が到着して、引継ぎを終えたら、お前はすぐにこちらに戻って来い。

それまでは、お前と俺で最低でも通常の事務処理はしておくことにしよう」

「ああ、それで構わない。でも、出来るだけ早く二人を寄越してくれよ。

自分でも情けないことだと分かっちゃいるけど、俺ももう限界に近いんだ」

一応、事務経験はあるとは言え、ブルソーも一通りの流れをこなした程度であって、事務を専らにしているわけではない。

マリポーに言われるまでもなく、ブルソーは通常の事務処理にか手が回っていなかった。

「泣き言を言うな。なるべく早く向かわせる。」

それと、二人分の宿でも仮住まいでもいいから、確保しておいてやれよ。」

遅くても四日後には、そちらに行かせるようにするから、だいたい三週間程度は王都に滞在することになるはずだ」

「ああ。早速手配しておくよ。とにかく頼んだぞ、親父」

その言葉を最後に、伝達板から光が失われる。

「通話終了です」

早伝役の鳥人族が、見て分かることを口にした。

その日のうちに、ソーンリヴと修一郎に事情が説明され、急遽二人はアーオノシュヘ助っ人に行くと言う名目で出張を命じられた。

翌日、ジスとマリポーに業務引継ぎと旅の準備を行い、更にその翌日の朝一番の路線馬車で、王都アーオノシュヘと二人は出発したのだった。

「もう子鐘半もしないうちに、セボに着きます」

修一郎の回想を打ち消すように、御者が平坦な声で車内の乗客に告げる。

修一郎とソーンリヴが乗り込んだ路線馬車には、他に二人の人間

族の男がいた。

どちらも、アーオノシユからアーセナクトの知人を訪ねた帰りだという。

半日以上、然程広くない馬車の中に、四人が顔をつき合わせていたのである。

誰からともなく話しかけて、適当な雑談をしながらの道中であった。

アルタスリーア王国内の公路には、各主要都市間に路線馬車が運行されており、修一郎の世界でいう冬至にあたる日を基準に、日の出から日の入りまでで馬車が移動できる距離に、宿場のような集落が作られている。

無論、何のトラブルもなく、順調に馬車が運行されたと仮定しての距離であるが。

御者が言った、セボという集落が、王都アーオノシユと商業都市アーセナクトを結ぶ公路上での、宿場に当たる。

村とすら呼べるかどうか怪しい規模の集落であるが、国が認めた商人に委託して経営している宿屋兼食堂が一軒、日用品を扱う商店が一軒、携帯食を含めた食料品を扱う商店が一軒、武具や野営に必要な雑貨を扱う商店が一軒と、一応旅に必要な品々を揃えることが出来るようになっていた。

その他には数軒の民家があり、集落全体の人口は三十人にも満たない。

宿屋の規模は意外と大きく、常に路線馬車の人数分の空き部屋を確保することが決められているようで、全部で十六室あり、三室が四人部屋、五室が二人部屋、残り八室が一人部屋となっていた。

路線馬車の最大搭乗人数は六人であるので、王都とアーセナクト両都市から到着する馬車の最大乗客分計十二人分の部屋が、確保されていることになる。

セボに到着し、宿屋の前に馬車が停まると、宿屋の中からふくよか過ぎる中年の女性が姿を現した。

「ようこそいらっしゃいました。皆様お疲れでしょう。」

お部屋を用意しておりますので、まずは荷物を置かれてはいいかでしょうか。

「食事が必要なお客様は、一階の食堂でご用意できます」

笑顔であったが、どこか決められた台詞を決められた口調で言う女性に、乗客が軽く言葉をかけながら宿の中へと入っていく。

宿屋に入っつてすぐのカウンターに、羊皮紙製の宿帳が広げられている。

宿泊者は、そこに名前と、朝食が必要かどうかを書き込むようになっていた。

朝食は、一泊の料金に含まれているが、朝食を必要としない者に対しては、僅かだが宿泊料金が安くなるのだ。

ちなみに、朝食はパンとスープだけという質素極まりないものであったが、それでもないよりはマシというものである。

昼食は、頼めば宿でもパンと干し肉、干し果物程度なら用意してくれるだろうが、基本的には個々人が予め準備しているものなので、宿からは何も言われることはなかった。

その為に食料品を扱う店が、この宿場にあると言っても良いくらいのだから。

アーオノシユ行き路線馬車に乗り合わせた四人が、宿帳に書き終え、一泊分の料金を支払うと、それぞれに部屋の鍵が渡される。

「生憎と部屋が満室でございます。誠に申し訳ありませんがお連れ様と相部屋になります。宜しいでしょうか」などと言う、ハプニングは当然あるはずもなく、四人それぞれに一人部屋が割り当てられた。

「では、ソーンリヴさん。荷物を置いて一息ついたら、晩飯にしましょうか」

「分かった」

自分の部屋の隣室となったソーンリヴに声をかけると、修一郎は部屋の扉に鍵を差し込む。

ここでも、扉を対象とした『施錠』の鍵が使われていた。

部屋は、修一郎の世界の一般的なビジネスホテルのシングルルームより幾分広い程度で、頑丈だけが取り柄のようなベッドと、簡素なテーブルと椅子が一脚ずつ、そのテーブルの上に火の灯ってないランプが一つ置いてある。

愛用のライターでランプに火を灯し、荷物を椅子の上に乗せると、修一郎はベッドに腰掛けた。

宿場に着いた頃は、まだ夕焼けの残滓が、地上に接する空を僅かに赤く染めていたのだが、既に全天が深い紺へと色を変えている。

「ふう……」

長いこと馬車に揺られていたせいか、未だに何となく体が揺れている気がする。

存外、座席に座っているだけでも疲労は蓄積されるようだ。

大きく息を吐き出すと、修一郎は上体をベッドへと倒す。

「やはり、気を遣われたというのもあるのでしょうか……」

以前、フォーンロシエに、春ごろには時間を見つけて王都へ行くと答えた自分を思い出す。

期せずして、その言葉どおりとなったことに苦笑が浮かびそうになるが、考えてみれば良い機会かも知れない。

店の事務担当は自分とソーンリヴしかおらず、どちらか一人が長期の休みを取るの難しい。

アーセナクトからアーオノシユまでは、路線馬車で二日。王都で一日過ごしてすぐに戻ったとしても、往復で五日かかる。

店の定休日を絡ませるにしても、四日は休みを取らねばならないのだ。

出納板を扱えない修一郎が欠けても、マリポーかジスが手伝えれば、然して困ることはないだろうが、ソーンリヴへの負担は増えるだろう。

飽くまでも仕事で王都へ行くのであって、ハーベラに会う余裕はないのかも知れない。

それでも、修一郎はなんとかして彼女に会う時間を作ろうと決心していた。

今まで、こちらが一方的に避けていたのに、自分勝手だとは思いますが、ここらではじめを付けるべきだろう。

それをしないと先に進めないなどと言うつもりはない。既に自分は、アーセナクトで様々な縁を持ち、日々を暮らしているのだ。

ただ、やはり今の自分を見せ、考えを伝えなければ、いつまでも引き摺ることになる。

現に、そうやって二年が経っている。修一郎がアーセナクトにやってくるまで約一年。

あの街に家を構えたこともあり、ここらが潮時だのだろう、と思う。

マリポーが修一郎に王都への出張を命じたのは、勿論ヘルプ要員であることは間違いないのだが、ハーベラ……と言うより、ハーベラの前夫であるコタルと親友であった商人にとっても、ハーベラと修一郎の間に横たわる蟠りを解消しようとの考えもあるのだろう。

「まったく……。私は何時まで経ってもあの三人に世話になりっ放しですね」

この世界に来てからは、コタール、ハーベラのアペンツェル夫妻に。アーセナクトに居座ってからはマリボーに。

元の世界で、自立できていると思っていたのは、錯覚であったのかと感ずるくらいには、三人に助けられている修一郎だった。

「さて、これ以上物思いに耽っていると、ソーンリヴさんが怖いですね。そろそろ食堂に行きますか」

誰に聞かせるでもない台詞を呟いて、修一郎は勢い良く体を起す。マリボー商店に勤め、様々な人たちと日々を過ごし、ここ数ヶ月は虎人族の“少女”と暮らすようになって、眠る時を除き、一人で居る時間が殆どなくなった修一郎は、自分は今ここで独り言を言うような性格だっただろうか、と思いながら部屋を出て行った。

「どうした？ シュウイチロウ、飲まないのか？」

顔色を一切変えない目の前に座る人間族の女性が、修一郎にブドウ酒の注がれたジョッキを突きつける。

「もう充分飲んでますよ。ソーンリヴさんこそ、そろそろ止めておいたほうが……」

「何を言っている。まだ二杯しか飲んでいないぞ？」

この程度で翌日に響くわけなし、構わんだろっが」

確かに、ソーンリヴはアルコールには強い体質なようで、顔色どころか口調も態度も普段と全く変わっていない。

「馬車での移動は、意外と疲れが溜まるんです。何事もいつもより抑え目に、が旅の鉄則ですよ」

普段は見せないような決然とした表情と口調で、修一郎はソーンリヴを窺めた。

「ふ……ん。シュウイチロウが私に意見するとは珍しいな。仕方ない。ここは素直に従っておくことにするか」

持っていたジヨツキをテーブルに置くと、ソーンリヴはつまらなそうに兎肉の香草焼きをつつく。

それを見て安心した修一郎は、手許にあった固いパンを千切ると口に放り込んだ。

「そつえば」

食事があらかた終わった頃、ふとソーンリヴが口にする。

「ルキーテは、結局あのままシュウイチロウの被保護者となったのか？」

「ええ。登録時は男で申請していましたが、変更手続きに手間取りましたけどね。」

それと孤児の保護ではなく、養子として迎えることにしましたよ」

さらりと言つてのけた修一郎に、ソーンリヴが驚きの声を上げたが、周囲のテーブルにつく客の視線に気付き声のトーンを元に戻す。

「ルキーテもそれで納得したのか？」

「はい。喜んでいましたよ。」

まあ、おかげで結婚もしていないのに、一児の親となつてしまいましたけどね」

いつもの頼りなげな笑顔で笑う修一郎を、ソーンリヴは心底呆れた様子で見つめた。

「やっぱりお前は、馬鹿がつくほどのお人よしか物好きだ。」

子連れの男と結婚しようなどと思う女はそうは居ないぞ。

それとも、お前の世界ではそういった男のほうもてるのか？ 包容力があるとか言われて」

「まさか。余程、容姿が優れているとか、人柄が良いとか、資産があるとかでない限り、“コブ付き”は敬遠されますよ。」

残念ながら、私はどれにも該当しませんね」

何故かこの世界でも、子連れの独身者のことを“コブ付き”と呼んでいる。

大方、修一郎より前にこちらの世界に来た、日本出身の異世界人が広めたのだろうが、本来は“コブ付き”とは子連れの女性を指す、どちらかと言えばあまり良くない意味合いの俗語であったはずだ。

現代日本では男女関係なく使われていたもので、気軽に使うような言葉ではないが、冗談めかしたり自嘲で使つたりと、忌避される程の言葉ではなかった。

ということは、その異世界人は修一郎の居た時間軸に近い時代か

ら来たことになるのではないか。

どうやら、異世界からこちらの世界に来る者は、時代や人種は関係ないらしい。

以前、少しばかり調べたところだと、修一郎と同じ日本人の異世界人も居たし、金髪碧眼の異世界人も居たようであるし、何かの毛皮を纏った魔獣の“人鬼”^{ゴリオン}に近い姿形の異世界人も居たようだ。

各国は一応、異世界人に関する記録を残しているようだが、詳しい情報は隠匿されているのか、それとも本当に分かっていないのか、修一郎が辿り付けたのは、そういった者が居てこの世界で死んだといった程度の記録だけであった。

以前は何とかして元の世界に戻ろうと、旅先で様々な書物を漁ったり、賢者と呼ばれる人物に話を聞いたりしていた修一郎だったが、調べれば調べるほど、誰一人としてこちらに来た異世界人が元の世界に戻った事実はないことが判明しただけで、いつしか調べることが止めていた。

探しても得られる情報は、修一郎の望む情報と正反対のものしかないのだから、無理もない。

戻ることが出来ないならば、この世界で生きていくしかないのだ。こちらの世界に来て九年。そろそろ諦める時期なのかも知れないな、と修一郎は思う。

だからこそ、ルキーテを養子として迎え、アーセナクトに自分の家を持った。自らこの世界でのしがらみを増やした。

迷いを吹っ切るため、行動することで自分を追い込むため、色々と言い換えることはできるだろうが、結局は修一郎なりの区切りの付け方である。

「そう卑下するものでもないと思うがな……」

思考の淵に沈みこんだ修一郎に、ソーンリヴがぼつりと口にした言葉は、聞こえることはなかった。

一夜明けて、陽が昇って暫く経った頃、アーオノシユ行きの路線馬車は宿場を出発した。

都市部や一定規模の町でない限り、時を告げる鐘が存在しない村や集落の時間は、基本的に太陽が昇ると活動を始め、太陽が沈むと休むといった、実に単純且つ曖昧なものである。

大鐘幾つに子鐘が幾つ、といった区切りがないので当たり前であるが、宿泊客は陽が昇る頃に起き出して一階の食堂で簡単な朝食を済ませると、さっさと宿を引き払い、路線馬車の停留所へと向った。その頃には既に御者が、馬車を停留所に待機させていて、乗客が揃った段階で出発する。

当たり前のことだが、昨日と変わらぬ顔ぶれで馬車に揺られながら、修一郎たちは適当な雑談を交わしつつ、王都アーオノシユへと向かっている。

このまま行けば、陽が沈む前に王都へ到着できるだろう。修一郎とソーンリヴは、今日はそのままでどこかに宿を取って、翌日はマリボー商店アーオノシユ支店へと向かうことになっている。明日から当分は、いつもとは違う事務室で、いつもと同じ仕事をすることになるのだろう。

正確には、いつもと同じ作業に決算締め作業も加わるのだけれど。この世界の決算業務は初めてであるうえに、勝手が違う支店での仕事である。

間違はなく忙しくなるのであろうが、恩人でもあり雇い主でもあるマリボーからの業務命令だ。やるしかない。

馬車の中から見える外の景色を見つめながら、修一郎はこれからのことに考えを巡らせていた。

その隣に座るソーンリヴは、昨晚結局もう一杯注文したブドウ酒が効いたのか、その伶俐な顔を幾分青くして、修一郎の助言どおり窓の外の遠景を黙って眺め続けていた。

第十四話 王都

王城の大鐘が四つ鳴り響き終えた頃、修一郎たちを乗せた路線馬車は、アーオノシユに到着した。

辺りは既に薄暗くなってきていたが、人通りはアーセナクト中央広場の昼間よりも遥かに多い。

大きな籠を背負ってどこかへ向かう中年の人間族の女性や、板金鎧に身を固めた数人の騎士、大きな荷物を括りつけた馬を引つ張っていく犬人族の商人、冒険者風の出で立ちのグループなど、様々な人々が修一郎の目の前を通り過ぎていく。

修一郎には懐かしい光景に思えたが、王都を訪れたのは初めてだというソーンリヴは、率直に感想を口にした。

「やはり、王都だけあってアーセナクトとは比べるべくもないな……」

王都を囲む城壁を潜ってすぐの場所に設置されている、路線馬車停留所周辺でもこの人通りである。

商店や酒場などが集まる地区の人通りは、如何ばかりのものか想像もつかない。

周囲の建物は白壁で統一され、大通りの路面もアーセナクトのような石畳ではなく、白っぽいレンガが敷き詰められている。

王都の中心部には、アルタスリーア国王の居城であるアーステルア城が、その白い威容を誇っていた。

他国の者から“白き王都”と呼ばれる所以である。

「では、ソーンリヴさん。とりあえず宿を探しましょう」

馬車に乗り合わせた二人の男性客に、軽く別れの挨拶を告げると、地面に置いた荷物を持って修一郎は歩き出した。

何度か王都を訪れているだけあって、修一郎の歩みには迷いが無い。大方、宿の目星も付いているのだろう。

明日以降の宿泊先は、ブルソーが確保してくれているはずなので、今夜の一夜だけ自分たちで探さねばならなかった。

じきに夜になろうという時間であるのに、術石を利用した街路灯が等間隔に設置された大通りを歩く人の数はいつこうに減ることもなく、店も煌々とした明かりを灯している。

市庁舎を中心に放射状に延びるアーセナクトの大通りとは違い、王都の大通りは所謂碁盤の目のように幾本もの大通りが交差し、さらにそこから小路が延びている。

そこかしこの小路から、店から、人が現れては消えていき、多種多様な種族が入り乱れる様は、ソーンリヴには、まるで祭りの日のように感じられた。

そんな中を歩くのだから、ソーンリヴは修一郎を見失わないように付いて行くのが精一杯で、周囲を観察する暇もない。

もし、先を歩く修一郎が時たま振り返りつつ、ソーンリヴが付いて来られるように歩調を合わせてくれなければ、この人通りの中、迷っていたかも知れないくらいであった。

アーセナクトの食堂通りにあたる“歓楽街”を抜け、酒場や食堂の喧騒が薄れてきた場所に、修一郎の目指す宿はあった。

人間族の老夫婦が営んでいるその宿は、その主の容貌に似て古びていたが、どこか落ち着ける雰囲気宿全体を包んでいた。

木造三階建ての建物には、看板らしきものもなく、入口も通りから見ただけでは、中を窺えない造りになっている。

老夫婦は修一郎を覚えていたようで、深い皺が刻まれた顔を更に

皺だらけにしながら、二人を歓迎してくれた。

この宿もセボにあった宿と同じく、一階が食堂、二、三階が客室となっており、一泊の料金には、夕食と翌日の朝食代も含まれていた。

一人部屋を二つ確保して荷物を置くと、二人は一階の食堂で夕食を摂ることにした。修一郎が強く勧めたためである。

「プレルさんのところとは違った良さがあって、私は気に入ってます。」

それに、ソーンリヴさんには是非試していただきたいモノもありますしね」

ソーンリヴの背中を押すようにして食堂のテーブルにつかせると、修一郎は宿の主である老人に、毎日通っている者のような口調で注文する。

「バラカさん、以前いただいたアレを二つお願いします。」

「食事は今日のお奨めを二人前で。あと、ツマミを適当に二品ほど」

「はいよ。どうするね？アレは温めるかい？」

「いえ、彼女は初めてでしょうから、まずはそのままです。私も同じでいいですよ」

「そうかい。じゃあツマミもアレに合わせたものがええかの」

「そうですね」

相手の老人も慣れたものであるのか、矢鱈と指示語が多い会話なのに、会話は成り立っていた。

「シュウイチロウ、アレとは何だ」

注文が一通り終わり、向かいに座る修一郎が口を閉ざした頃合を見計らって、ソーンリヴが訊ねる。

「先ほど言った、ソーンリヴさんに試していただきたいモノですよ。気に入ってもらえると良いのですが」

詳しく話さないのは、実際にそのモノが来てから自分で確かめてみるということなのだろう。

「……ふん。話すつもりがないのなら、それでも構わんが、私は気に入らなければ率直に言うぞ？」

飲み物を頼んでいないようだから、恐らくアレとは飲み物なのだろうがな」

「その時は、改めてソーンリヴさんの好きなものを注文してください。確かに好みが分かれるものではありませんから」

修一郎が言い終わるのを待っていたかのように、バラカと呼ばれた宿の主が、盆に何やら器を載せてやって来る。

「ほいよ。お主に聞いたとおりにしてみたら、常連にえらく受けてな。

今じゃこれがお決まりの器になってしもつたぞ」

そう言って、テーブルに置かれた容器は木製の四角形をしていた。材質は杉だろうか？木の柾目を巧く活かして組まれているようだ。容器の中にはやや黄色味のある透明な液体が満たされ、隅には塩が

少量盛つてある。

「マスザケですか。いやあ懐かしい」

それを見て相好を崩す修一郎に、ソーンリヴはこれが修一郎の世界のモノであるらしいと直感した。

“マスザケ”と共に運ばれてきた皿には、乳白色のどろりとした塊に黒い液体がかけられたものが盛られている。

「おまけにユバまで。ますますもって懐かしいですね」

メガネが出来上がった時よりも嬉しそうな修一郎に、ソーンリヴは若干呆れながらも確認せずには居られなかった。

“マスザケ”とやらはいいとして、“ユバ”と呼ばれたこの物体は、どう見ても何かの出来損ないのようにはしか見えない。

「おい、シュウイチロウ。いい加減教えてくれてもいいだろう」

今はメガネをかけていないせいか、以前のように眉を寄せながら異世界人の男を見るソーンリヴの視線は、睨んでいると言っても良いくらいである。

「まあまあ。まずは乾杯といきましょう、ソーンリヴさん」

なみなみと注がれた液体の入った木製の容器をゆっくりと持ち上げながら、修一郎は相変わらず嬉しそうな表情のままだ。

「……飲めばいいんだろう。飲めば」

にこにこことご満悦の後輩事務員に嘆息しながら、ソーンリヴもそ

れに倣う。

中の液体を零さないように、互いの容器をゆっくりと、そして軽く合わせて、ソーンリヴはそれに口を付けた。

含んだ瞬間は水かと思えたが、すぐに口腔内に果物のような香りと仄かな甘さが広がる。

酒精の類であることは確かだが、ブドウ酒よりはきつく、バンルーガ王国のウトカと呼ばれる火酒ほどきつくはないくらいか。むしろ、最初の口当たりの良さからブドウ酒よりも飲み易く感じる。

後口も何時の間にか消え去っていて、酒精特有の喉を焼く感覚と鼻腔に残る香りがなければ、本当に水ではないのかと思うだろう。

容器に使われているのは、矢張り杉であったようで、杉の香りもこの液体の美味さを引き立てているようだ。

「美味しい……」

酒気を伴った甘心の吐息と共に、ソーンリヴがその一言だけを口にした。

「気に入ってもらえたようで何よりです。

これは“サケ”と言います。正確には“ニホンシユ”ですが。

私の生まれた国で作られている、コメを原料とした“酒”です。

こちらの世界でも酒精を含んだ飲料全般を“酒”と呼んでいるのは驚きましたが、私の国で“酒”と言うと、大抵この飲み物を指します」

嬉しそうに説明する修一郎も升酒を一口飲み、美味いと呟くと、次はそちらの“ユバ”を試してみてください、と勧める。

言われるがままに、ソーンリヴは木のスプーンで湯葉を掬い、口に入れた。

「かかっているソースは独特の風味があるが、悪くはないな。この“ユバ”とやらは、大豆の味が濃いのにあっさりしている」

恐る恐るといった感じで、それを口に入れたソーンリヴだが、香ばしさを伴った、塩味と言うには複雑な味のするソースと、湯葉の大豆の旨味が口の中で混ざり合い、渾然一体となる。

引きあげ湯葉自体に歯ごたえはないに等しいが、逆に、このとりとした食感が堪らない。

「これも私の生まれた国で作られていたものです。ソーンリヴさんの言うとおり大豆を原料としています。

かかっているソースは“シヨウユ”と言います。これも同じく大豆が原料ですよ。

私の国では、最も多く使われていた調味料の一つですね。

ユバを食べた後、サケを飲んでみてください。ユバの味を何倍も楽しめると思います」

日本酒と湯葉に心を奪われたソーンリヴは、修一郎の勧めるとおりに湯葉をもう一度口に入れて咀嚼すると、サケを口に含む。

「……………」

最早、言葉を失った状態のソーンリヴに、修一郎は満足げな笑みを深くした。

「こちらも気に入ってもらえたようですね。

自分の故郷の味を気に入ってもらえるというのは、矢張り嬉しいものです」

修一郎は、にこやかな表情を崩さないまま説明する。

これらは、この宿の主のバラカが若い頃に、西の大陸ラングナトで出会った異世界人に教えたもらったこと、以前修一郎が王都を訪れた際に、どうせならば升酒を試してはどうかと提案したこと、日本酒好きな者は升に盛られた塩をツマミとして呑んだりもすること、サケとシヨウウは特別なカビを用いて発酵させて作っていることなど、一つ一つ丁寧に、そして楽しそうに話す修一郎に、ソーンリヴは呆れの成分を混ぜた笑顔で聞き入っていた。

同僚である異世界人の話から、彼の生まれ故郷に興味を持ったソーンリヴが、あれやこれやと修一郎に質問をしながらも、宿の食事を楽しんでいると、この二日間で耳慣れた声が宿の入口から聞こえてきた。

「こんばんは。部屋は空いて……おや？あなた方は……」

ちょうど修一郎の座っている食堂の席から入口が見通せたので、声の主はすぐに分かった。

ソーンリヴは背中を向けた形になっていたが、聞き覚えのある声に、椅子に座ったまま身体を捻って後ろを向く。

「リバロさん？どうしてここに？」

二日の間、同じ馬車に揺られていた男の一人の名前を、修一郎が呼んだ。

「いやあ、ちょっと妻と喧嘩してしまいましたね……」

決まり悪そうな苦笑いを浮かべながら、リバロという名の人間族の中年男が食堂に入ってくる。

客の応対をすべく近寄ってきたバラカには脇目も振れず、まっすぐこちらに近づいてくるリバロに、修一郎はあることを確信したようであったが、それを表には出さずに応対した。

「王都に戻ったら真つ先に奥さんに顔を見せると仰っていたのに。何か問題でもあったのですか？」

お食事のところすみませんな、と言いつつも隣のテーブルにつきリバロは、肩に担いでいた荷物を床に置いて、表情を変えないまま言葉を続ける。

「勿論、あれからすぐに家に戻ったのですがね。

どうも妻に言わせると、アーセナクトで二日間も何をしていたんだ、と。

出掛ける前に、ちゃんと向こうに二日滞在すると言っていたのですが……」

リバロの口調から察するに、どうやら彼の妻は、夫がアーセナクトで浮気をしていたのではないかと疑っているようであった。

馬車の中で交わされた会話から、リバロは結婚してまだ一年経っていないとのこと、今回のアーセナクト行きについても、彼の親友が自分の店を持った祝いに出向いたためだと聞いている。

新婚と言えなくもない状況で、妻を残して一週間以上家を空けたのだから、浮気を疑われても仕方ないのかも知れない。

「まあ、明日にでもなればアイツの頭も少しは冷えるでしょうから、今日一晩だけどこかで過ごそうと思ひましてね。

それで、適当に宿を探していたのですが、目ぼしい宿は全て満室

でして……。

途方に暮れていたところに、この宿の噂を思い出した、という次第です」

確かに、バラカの営む宿は、落ち着いた雰囲気と出される食事の質の高さから、王都でも知る人ぞ知ると言われてもおかしくない宿ではあるので、この都市に住む者なら名前くらい知っている者も居るだろう。

バラカも看板を出していないだけで、来る客を選ぶような真似は余程のことがない限りしないため、宿の場所が分かるのであれば、宿泊が可能かどうか確認くらいはしようと思ってもおかしくない。

ここにやって来た理由を説明し終わると、リバロは漸くバラカに向かつて宿泊の手続きを始めた。

「さて、これでやつと寝床も確保できたことだし、私も荷物を置いて食事にしますかね。

では、ヤスキさん、また後ほど」

宿帳に記入し、一泊分の料金を支払うと、そっくり残して、リバロは二階の客室へ続く階段を荷物を担いで上がっていった。

「……やれやれ。どこの誰が雇ったのかは知りませんが、もっと芝居の巧い人物を寄越せばいいものを」

リバロの姿が完全に見えなくなってから、修一郎は大きくため息を吐いた。

「ふん……。お前もさすがに気付いていたか」

バラカに新たな升酒を注文しながら、ソーンリヴが口の片端を持ち上げて笑う。

だが、顔では笑っているものの、その目は剣呑な光を湛えていた。この女性ひとは、こついつた表情が似合うな、と心の中で苦笑しながら、修一郎が応える。

「いくらなんでもあからさま過ぎますよ。」

馬車の中でも、訊ねてくるのは私にすることが殆どでしたしね。今も、ソーンリヴさんには目もくれてなかったじゃないですか。

それに、いくら喧嘩して家を追い出されたとは言え、荷物がそのままというもおかしなものです。

更に言うなら、あの人は宿に入ってくる前に中を確認してから声を掛けて来ましたから」

「ついでに言うなら、もう一人の敵ついほうの乗客も怪しいものだったがな。」

何気ない振りを装って、確りと私たちの会話は聞いていたようだぞ」

商人であれば、どこに金儲けのネタがあるかも知れないので、他人の会話に気を配るのは当たり前である。

しかし、ソーンリヴが言ったもう一人の乗客は、王都周辺で土木作業に従事していると言っていた。

この伶俐な上司の言うことが本当であれば、情報収集担当がリバ口、もし何かあった時の荒事担当が、その男といったところだろう。それに気付いていたのか、馬車の中で修一郎とソーンリヴが交わした会話は、本当に日常の雑談程度に止めていた。

二人が王都に向かう理由は、それに気付く前であったので、迂闊にも修一郎が漏らしてしまったが、もしかすると、今回の支店の事

務員が倒れたこともこれに関係しているのかも知れない。

だとすれば、こちらの事情は、誰かは分からぬ“相手”に、ほぼ完全に把握されているか、最悪その“相手”の仕組んだとおりに事が運んでいるのだろう。

「とりあえず、ブルソーさんには、このことを伝えておいたほうがいいでしょうね。」

いきなり実力行使に及ぶとは思えませんが、支店の事務員の件もあります。用心に越したことはないでしょう」

「そうだな。」

ところで、厄介ごとに巻き込まれるであろう私に、謝罪の言葉はないのか？」

運ばれてきた升酒に口を付けながら、ソーンリヴはからかうような表情を浮かべている。

本心から迷惑がっているわけではないのを知っているのか、修一郎はいつもの頼りなげな顔で、

「事態の推移を面白がっている上司に謝ろうという気は、なかなか起きないものですよ。」

下手をすると、私たちだけではなく、マリポー商店全体に関わってくる可能性がありますから。

謝るとしたら、ソーンリヴさんだけではなく店の皆全員になるかも知れません。

はあ……。少し大っぴらに動きすぎましたかねえ……」

と、収まりの悪い頭を搔いた。

アーセナクトに住むようになってから、ライターやメガネ、それ

らに関するアイデアと技術を、修一郎は然程隠すでもなく他人に伝え、それをもつてマリボー商店やレベックの工房などに利益をもたらしている。

細かく言えば、プレルの食堂のメニューに採用された修一郎の世界の料理は、サンドイッチだけではないし、風呂や台所の新たな様式もコスラボリやクータンたち職人の知るところとなつていたので、国は、異世界人である修一郎の動向を監視してはいるだろうが、国や民に害を為すような真似をしなければ、動くことはない。

その辺りに関しては、大陸憲章に何やら書かれているらしいのだが、詳しい内容を修一郎は知らなかった。

ただ、余程のことをしない限り、国という巨大な組織からの干渉を受けないことだけは判明したので、それ以上細かく調べるつもりもなかったのだ。

この世界にとつて、異世界人は珍しいものの、類を見ないとまでは行かない程度には認知されているため、普通に暮らすことが出来ればそれでいいと、修一郎は割り切っている。

ただ、国としてはそうであっても、その下の貴族や一般市民にとつては、修一郎は稀有な存在であり、何らかの益を生み出す金の卵と見られる可能性がある。

貴族は国の一部を担う立場であるため、軽率な行動に出ることはないだろうが、怖いのは一般市民……特に、同業者の嫉みや恨みを買うことだ。

今回の騒動が、それに当たるのではないかと、修一郎は心配しているのであった。

「それに関しては、我々が思い悩んでもどうにもならんだろう。大本を探るのは、マリボーさんに任せたほうが良さそうだな。

シュウイチロウ、明日にでもブルソーと一緒に、伝達板で我がが雇い主に連絡しておけ」

「分かりました。確かに私たちが今すべきことは、支店の事務を滞りなく進めることですからね」

思いもかけない展開に、折角の美味しい“サケ”と食事が中断されてしまったが、修一郎たちの本来の目的は支店の臨時応援である。

遊び気分で来たわけではないが、これから約三週間、何事も起こらねば良いと願わずには居られない修一郎だった。

修一郎の向かいに座るソーンリヴは、三杯目となる升酒と二皿目の湯葉を注文し、升に残っていた酒を一気に呷ると宿の入口に目を向けた。

ここから通りを見ることは出来ないが、微かに歓楽街の喧騒が流れ込んできているのは聞き取れる。

王都アーオノシユの夜は始まったばかりで、おそらく日付が変わっても、歓楽街は眠ることはないだろう。

初めて訪れた街であったが、そこに暮らす人々はアーセナクトと変わることなく、様々な感情を持ち、それぞれが日々の生活を送っている。

暫くの間、ここで生活することになるが、この街が好きになれるかどうか、此度の事態を含めて見極めようと考えてるソーンリヴであった。

第十五話 願いよ叶え

「……なんだ、それは」

翌朝、宿の食堂で朝食を摂り、一度部屋へと戻って出立の支度を
して降りてきたソーンリヴの発した言葉がこれであった。

「何と言われても……。整髪剤ですよ」

朝食時の修一郎の頭は、寝起きということもあって、普段より更
に、髪の毛が好き勝手な方向へと起き上がっていたり寝ていたり
という有様だった。

あまりにも酷いので、ソーンリヴは柳眉を僅かに上げて、少しは
髪を整えたらどうなんだ、と零した。

曲がり形にも、二人はマリポー商店の本店に勤める事務員である。
店頭に立って接客することはないとは言え、支店の従業員に軽く
見られるようであつては、ソーンリヴと修一郎だけではなく本店従
業員全員の質を疑われかねないのだ。

朝っぱらから小言を言うソーンリヴに、いつもの表情で「はあ……
…」と応えた修一郎は部屋に戻ると、荷物の中から、手の平に納ま
る程度の小さな壺を取り出した。

その陶器製の壺には蓋の代わりに皮と紐で封がしてあり、それを
解くと、中には薄い黄緑色をしたゼリー状の物体が詰められていて、
微かに甘い香りがする。

アーセナクトに住んでいる、知り合いの調薬士に調合してもらっ
たポマードだ。

元の世界では、ポマードは使ったことがなく、精々がスプレー式
の整髪剤を使っていた修一郎だったが、この世界にはそんな物はな

い。

普段の生活でも、寝癖が酷い時は湯で濡らしたタオルで、髪を蒸らして整える程度だったのだが、何かの拍子に必要ななるかも知れないと、試しに作ってもらっていたのだった。

修一郎はそれを少量手で掬うと、髪の毛に塗り始めた。

ムスク麝香系の匂いはあまり好きではなかったので、何か他の香りを、

と頼んでいたのだが、どうやら柑橘系の植物から採った香料らしい。頭から柑橘系の匂いを振りまいている中年男というのもどうなんだろうか、と思いつつも、あまり付けすぎないように注意しながら、髪の毛全体に拡がるように塗り付ける。

余談ではあるが、アーセナクト資産保管局の局長補佐リバー口氏も、この整髪剤を使っている一人である。

リバー口と顔見知りになって暫くしたある日、調薬士からポマーの完成の知らせが届いてそこに向かうと、ちょうど持病の腰痛用の塗り薬を受け取りに来ていた老紳士に出くわしたのだ。

修一郎が依頼したモノに興味を持った様子のリバー口に、黒髪の異世界人は、リバー口さんも試してみますかと、気前良くその整髪剤を取り分けて差し出したのだった。

リバー口氏はそれをいたく気に入ったようで、それ以来、修一郎とは別に調薬士からポマーを購入しているらしい。

この世界では、まだまだ鏡は貴重品らしく、宿の部屋には置いてなかったが、窓のガラスに僅かに映る自分の姿を見ながら、修一郎は髪を撫で付けていった。

暫くして、とりあえず納得したのか、「こんなものでしょう」と呟くと、長身の男は荷物を持って部屋を出たのだった。

「おかしいですかね？一応、軽く寝かせる程度にしたつもりなんです」

そう言いながら、頭に手を伸ばした修一郎は、寝癖が酷かった右側頭部を撫でる。

櫛など持っていないなかったため、手櫛で整えた髪形は、元の世界で言うところのオールバックに近い。

「おかしくはないが……。まあいい。

準備が出来たのなら、店へ向かうぞ」

何かを言いかけて止めた上司は、宿の老夫婦に礼を述べると、修一郎を置いて表に出て行った。

「お世話になりました、バラカさん、ポーネさん。

暫くは王都に滞在する予定ですから、酒が恋しくなったらまた食事に寄らせてもらいます」

既にマリポー商店の事務員の制服に着替えていた修一郎は、黒髪の頭を下げる。

「いつでもおいでなさい、シュウイチロウ。美味しい料理を用意して待ってるわ」

おっとりとした口調で、バラカの妻ポーネが微笑む。

「手配されておる宿が気に入らんようだったら、ウチに来るとええ。一月くらいなら、部屋の一つや二つ用意してやるわい」

「ありがとうございます」

もう一度、深く頭を下げると、修一郎は思い出したようにバラカ

に尋ねた。

「そういえば、リバロさんはもう出て行かれたのですか？」

朝食の時に姿を見せなかった人間族の男のことが、些かなりとも気になっていたのだ。

「ああ。大鐘二つ鳴る前に出て行きおつた。

宿代に朝食分も含まれておるから、食べてからにすればええと言
うたんだがの。

カミさんが気になるからと笑っておつたぞ」

「そうですか。早く機嫌を直してもらえると良いですね」

内心とは別のことを口にしながら、修一郎はバラカに合わせるよ
うに笑顔を作った。

「それでは、行ってきます」

そろそろ先に出て行った上司の後を追わねば、また小言が飛んで
くるだろう。

それに、今日は事務の引継ぎに加えて、マリポーへ連絡も取らな
いといけない。早めに支店へと向かうに越したことはない。

老夫婦に見送られて、修一郎は早足でマリポー商店アオノシユ
支店へと歩いていった。

店で待っていたブルソーに支店の従業員を紹介され、本店よりも僅かに狭い事務室に案内された二人は、アーセナクトを出発してからの一連の事情を説明した。

ブルソーのほうでも、事務員二人が一度に倒れるという事態に些かの疑念を抱いたようで、支店を切り盛りする傍ら、王都の警護団や、急病に倒れた事務員を見た医術士に対して調査・確認を依頼したとのことであった。

とりあえず本店のマリポーへ連絡するべく、修一郎とブルソーが連れ立って早伝役駐留所へ向かうと、ソーンリヴは事務用机に文字通り山と積まれた出納板を眺めて盛大なため息を吐く。

「やれやれ……。これは何もなくても一仕事じゃないか……。いや、何かあったからこうなったのか」

既に冬の四の月も半ばを過ぎている。ここ王都で開催される平和祈念式典も目前に迫っていた。

ブルソーは日締め作業は済ませていると言っていたが、この状態だとそれすらきちんと出来ているか怪しい。

「喜べ、シュウイチロウ。他の事に気を回す暇がないくらいには仕事があるようだぞ……」

今、この場に居ない後輩事務員に向かって、ソーンリヴはその深い藍色の頭を軽く左右に振りつつ呟いた。

このまま事務室で佇んで居ても、仕事が減るわけでもない。

出納板の積まれた机に向かい、近くにあった椅子を引き寄せると、ソーンリヴはメガネをかけて腰を下ろしたのだった。

マリポーに報告を終えた二人が戻って来ると、既にソーンリヴの机の上には確認済みの出納板が綺麗に並べられていた。

「ブルソー、とりあえず出納板の確認は終えた。

帳簿との照合作業をしたいので、帳簿の入った金庫を開けてもらえると助かる」

支店の金庫にかけられた『施錠』は、ブルソーと今は居ない支店の事務員にしか解除できない。

幸い、金庫の『施錠』は鍵式であったので、ブルソーから鍵を預ければ、ソーンリヴにも解除はできるため、ブルソーがアーオノシユを離れても問題はない。

尤も、ブルソーはアーオノシユ支店の支店長とも呼べる立場のため、最良なのは現在臥せっている事務員から鍵を借りることなのだが、今日のところはそうも言っていられなかった。

「ああ、すまん。今開ける」

事務室の奥に据えられている金庫へ向かったブルソーから視線を動かして、ソーンリヴは後輩事務員に指示を出した。

「シユウイチロウ、言ったとおり出納板は終わった。今からは二人で帳簿の照合と記帳漏れや間違いがないかの確認作業だ。

それを終わせないと、今日以降の事務作業が次々とずれ込むばかりになるからな。

照合は私がやるから、お前は記帳確認と未記帳分の処理を頼む」

「分かりました」

ソーンリヴの真向かいの机に自分の作業場所を確保しながら、修

一郎が応える。

その机も雑然と羊皮紙の束やら木箱やらが積まれ、一度整理しないと、とてもではないが仕事が出来るとような状態ではなかったのだ。事務室の壁面に据えつけられた棚から、本店と同じように『確認済み』と書かれた木箱を持ってきた修一郎は、羽ペンとインク壺を手許に引き寄せた。

「ほら、これが今月分の帳簿だ。先月までの締めはこの事務員二人が処理済みだから問題ないと思う。

二人が倒れてからは……すまん。仮の日締めをやってはいるが、本締めはしていない」

ソーンリヴの机に羊皮紙製の帳簿を積み上げて、ブルソーは体を小さくしている。

「どうやら店の経営に関することは一通りこなしている店主の息子とはいえども、マリボー商店の実質的な副店主とも呼べるソーンリヴに対しては、事務作業面では未だ頭が上がりないうだ。

「ああ、あの状況を見れば大体予想は付いてるよ。まあ、そのために私たちが呼ばれたのだろっし、仕事はするさ。

「けど、事務以外のことについては、私たちは何も分からないに等しいからな。そっちは任せるけど、いいか？」

「無論だ。なかなか難しいだろうが、なんとか一区切りついたら教えてくれ。懸案事項を含めて引継ぎをしたい。

それまでに、俺は警護団と医術士のところに顔を出してくる。

「ついでに、倒れた事務員からも何か分からないか訊いてくるつもりだ。金庫の鍵も渡してもらわないといけないしな」

本店の事務員がこちらに来たということは、向こうの事務はジス

とマリボーがなんとか回している状態のはずだ。
なるべく早く戻らないと、今度は本店の事務作業が滞ってしまう
ことになりかねない。

「付け加えると、店の『施錠』もなんとかして欲しいが……。ここ
も本店と同じ様式なのだろう？」

この状態だと、私たちの作業は夜遅くまでかかるのは間違いない
が、誰が『施錠』をかけるんだ？」

本店と同じ様式なら、店の『施錠』は鍵式ではなく店舗全体にか
けられるものであるはずだ。

ブルソーは当然登録されているだろうが、修一郎は体質的に論外
だとしても、ソーニンリヴは支店の『施錠』に関しては登録していな
い。

「その点に関しては、スイルトンに任せようと思ってる。今は取引
先に出向いていて居ないが、ハーFRING族の男だ。

本来は仕入れ担当だが、親父とも面識のある奴で、俺がいない間
の店主補佐みたいな業務もやってもらっているからな。

通常業務が終わってからずっと付きつきりにさせるわけにもいか
んだろうから、頃合を見計らって店に戻って来てもらうつもりだ」

近い将来、アーオノシユ支店の店主となる予定ではあるが、ブル
ソーの所属は未だアーセナクトの本店仕入れ担当である。

その補佐として雇っているのが、スイルトンという人物のようで
あった。

「分かった。それについてはあとで引継ぎの際にでも詳しく聞こう。
まずは、目の前の仕事を片付けてからだな。シユウイチロウ、始
めようか」

「はい」

本日の大まかな流れが決まったところで、各人はそれぞれの仕事をこなすべく動きだす。

王城の大鐘が二つ鳴り、続いて教会の子鐘が五つ鳴った。

王都アーオノシユは、もうじき昼を迎えようとしている。

昼食を摂るだけの極々短い休憩時間を終えて、再び帳簿に向き合っていたソーニンリヴが声を上げる。

「どこが日締めは『やっている』だ……。売上金も売上数量も合わない日が四日もあるじゃないか。

経験があるとは言っても、やはりブルソーは事務には向かないよ
うだな……」

肩に手を当てて、凝りを解すように首を回したソーニンリヴの嘆息交じりの口調には、はっきりと分かるほどの疲れが含まれていた。

「ええと……、どこですか？」

短く訊ねる修一郎の声にも、やはり疲れが滲んでいる。

いざ意気込んで取り掛かったはいいが、ほぼ半月分に相当する日別の売上・棚卸の確認作業はそう簡単に終わるものでもない。

ましてや、ブルソー一人で店主代行として対外交渉や仕入れ調整といった業務をこなしつつの事務作業であったため、帳簿への記入漏れや転記間違いといったミスが次々と判明していた。

今は、資産出納簿と売掛・買掛簿を修一郎が、金銭出納簿と商品

別売上内訳簿をソーンリヴが、それぞれ担当している。

「まずは、八日だ。売上板と売上内訳簿の商品売上数量に54の差異がある。」

これは一つ一つ見ていかんと分らんか……」

作業を進めるごとに減るところが増えるばかりのこの状態に、ソーンリヴは軽い頭痛を覚えたのか、こめかみをその細い指先で押さえる。

「54ということは9の倍数ですか……。」

ソーンリヴさん、売上金額に間違いはないんですね？」

何かを考えていた様子の修一郎が、確認のため質問すると、彼の女性上司はメガネを光らせながら声のトーンを落とした。

「実際の金に間違いがあったらそれこそ問題だろうが。合わないのは商品系統別の売上数量だ。」

売上板が違うということはまず有り得ないから転記間違いだと思うが、面倒なことには変わらないな」

「でしたら、数字の順番が入れ替わっている可能性もありますね。売上板で171のところを帳簿には117と記入しているとか。」

売上個数が50以下の商品を除外して、ざっと確認してみると、もしかしたら一発で分かるかも知れません」

「なんでそんなことが言える？心当たりでもあるのか？」

修一郎の言葉に怪訝な表情を浮かべながら、尋ね返すソーンリヴ。

「以前、元の世界で事務をやっている時に先輩から教えてもらった事例の一つですよ。」

9の倍数の差異がある場合は、下二桁の数字の順序が逆になっている可能性がある。」

勿論、売上板と帳簿を一つ一つ照合するのが一番確実な方法ですが、それで分かれれば儲けモノ程度の確認法です」

事務をやっていると、連続する数字の前後で記入ミスを犯すことが間々ある。例えば、556という数字を565や655といったように記入してしまう、所謂“てれこ”と呼ばれるミスだ。

実際に556個売れた商品を、記帳する際に565個と書けば、違いはマイナス9個となるし、655個と書けばマイナス99個となり、どちらも9の倍数の差異となる。

飽くまでも一例であって、実際は小さな数字の積み重ねでその差異が発生していることのほうが圧倒的に多いのだが、苦し紛れとして覚えておいても損はないだろう、とその先輩は笑いながら教えてくれたものだ。

「面白いな。気にかけて確認してみるか」

頭の中で色々なパターンを試算してみたのだろう、確かにどれも9の倍数になるな、とソーンリヴは納得しながら帳簿に目を落とす。結果的には三品目の数量に記入ミスがあつたものが累計で54の差異となっていたのだが、そんな遣り取りをしながら、二人は仕事を進めていった。

「では、『施錠』しますよ？忘れ物とかないでしょうね？」

ブルソーの言ったとおり、じきに大鐘四つに子鐘五つ（午後十一時）になるうとする頃、スイルトンが店にやってきて本日の仕事を終えたソーソリヴと修一郎に合流した。

引継ぎを終わらせたブルソーは、一足先に二人のために用意した宿舎に向かっている。

このためだけに、深夜に店まで出向いてもらったことに恐縮する二人であったが、ハーFRING族の男は一向に気にしない様子で笑って答えた。

「気にしないでください。

元々、夜更かしするほうなんでね。散歩がてらと思えば気にもなりませんよ。

それより、お二人のほうこそあまり無理をしないでくださいよ？助っ人まで倒れられちゃ本当に店が動けなくなっちゃう」

「ああ、気をつけるよ」

「お手数をおかけします、スイルトンさん」

素直に頷く二人に、再度笑顔を見せると、スイルトンはまた明日、と言いつ残して去っていった。

「さて、彼の仕事はこれで終わりだろうが、我々は今からもう一仕事残っているんだな。

ブルソーが用意してくれたという宿舎はこの近くのなか？」

通りに消えていくスイルトンを見送った後、修一郎に振り返りながらソーソリヴが訊ねた。

午前中、マリボーへ報告する道すがら、修一郎はブルソーから仮

の住まいとなる宿舎の場所を聞いている。

「はい。それほど離れてはいませんよ。

ブルソーさんが気を遣ってくれたのか、警護団の詰め所も近くに
ありますし、治安も悪くなさそうです」

ブルソーの待つ宿舎へと歩きながら、修一郎が説明した。

「どうも宿の長期確保は無理だったようで、築五年の二階建ての家
を一月ほど借りたそうです。

寝室は四部屋あるそうですから、寝る場所には困らないでしょう。
ソーンリヴさんが気にされるなら、私はバラカさんの宿に移りま
すが……」

隣を歩く上司を見下ろす形になりながらも、窺うように言葉を続
ける修一郎に、

「店側が用意してくれたんだ。態々自腹で宿を確保する必要もない
だろう。

私なら構わんさ。尤も、お前が“おかしな行動”を取ろうという
つもりなら話は別だが？」

と、挑戦的な笑みの形に唇を歪めたソーンリヴだったが、修一郎
はとんでもない、と笑って応じた。

宿舎となる家に辿り着いた頃は、既に大鐘四つに子鐘五つが鳴り
終えて少し経った時間であった。

他の家と同じく白く塗られた壁にある窓からは、煌々と明かりが

漏れており、どうやらランプだけではなく術石式の照明器具もあるようだ。

玄関先に立ち、修一郎が扉をノックすると、暫くしてからブルソーが扉を開ける。

「ご苦労さん。」

荷物はとりあえず居間にも置いてくれ。茶でも淹れよう」

助つ二人を家に招きいれながらも、扉を閉める間に、ブルソーは表に視線を巡らせて怪しい人影がないか確認する。

その様子を見て、修一郎はあまり良い方向に話が進んでいないようだと感じ取った。

居間に置かれたソファに腰を下ろして、ブルソーが茶を淹れるのを待つてから、三人で今後の打ち合わせが始まった。

仕事に関しては、既に店で済ませているので、内容は支店の事務員が同時に倒れたことと、アーオノシユへの道中に馬車で知り合った二人に関してである。

「急病で倒れた事務員についてはまだ確認は取れてないが、馬車に轢かれた事務員については、本人と警護団からある程度事情を聞くことが出来た」

先に馬車の二人に関しての報告を二人から聞いた後、自分用に淹れた茶を啜って唇を湿らせると、ブルソーはそう切り出した。

「本人曰く、馬車が目の前を通り過ぎる際に、突然後ろから誰かに突き飛ばされた気がしたそうだ。」

警護団のほうも、その馬車に乗っていた御者から当時の状況を聞いたらしく、外套を目深に被った人物が事務員を押ししたように見えたとの証言を得ているらしい」

「それはまた……」

ブルソーの説明に、修一郎は顔を顰める。

「ふ……ん。そこまで稚拙な手段で来るとはな。

ブルソー、あんだこの街で何か拙いことでもやってるんじゃないだろうな？」

黙って聞いていたソーニリヴが、口の片端だけ吊り上げて皮肉めいた笑いを浮かべるが、ブルソーは彼女の台詞を全力で否定した。

「よしてくれ！親父には及ばないながらも、俺も歴とした商人だぞ？法に触れるようなことはしないし、同業者ならともかく人様に恨みを買われるような真似もしない！」

「つまりは、同業者に恨みを買われるようなことをしていると？」

言葉尻を捉えるようにソーニリヴが追求すると、ブルソーは口籠る。

「商売上で何かあつたんですか？」

それを見た修一郎が声をかけるが、ブルソーは何やら言いにくそうに茶の注がれたコップを手の中で弄ぶだけで、言葉を発しようとはしない。

「店の方針なら私たちが口を出すことではないが、それはマリボ―さんも承知していることなのか？」

「いや……。まだ親父には話していない」

ブルソーの一言に、ソーンリヴは呆れたと言わんばかりに、座ったまま天井を見上げる。

何のことはない。こちら側……。ブルソーに原因があったというわけだ。

「それは何ですか？さすがに“社長”も知らないこととなると、本店でも対応できないのではないですか？」

「ここまで来たら、我々も無関係というわけにもいかないようだな。勿論、教えてもらえるんだろう？」

二人に詰め寄られて、ついにブルソーも観念したようで、ばつが悪そうに事情を口にした。

「別にやましいことはしていないぞ。ただ、親父に止められていたライターとメガネの販売を支店でもやり始めただけだ。

アーセナクトであれだけの売り上げがあるんだ。王都で売ればそれ以上の儲けになるだろう？」

それに、親父も近いうちに王都でも取り扱いを始めると言っていた。それを少し早めただけだ。

店の利益を伸ばすことは悪いはずがない。俺はその一心で行動したまでだ」

話すうちに、自分でも徐々に言い訳がましくなっていることに気が付きながらも、ブルソーは一気にまくし立てる。

「……製作はどうしているんです？レベックさんとバランダさんからは、そのような話は聞いていませんが」

帳簿にその二つの商品の名前を見つけた時は驚いたが、修一郎が気にしたのは別の件である。

増産するならするで、何らかの話が修一郎の耳にも入っていてもおかしくないが、生憎と二人からそういった話は聞いていないのだ。

「ライターは本店から原価で買い上げる形でこちらに回している。アーセナクトでの売れ行きも落ち着いて、在庫に余裕が出来るようになっていたしな。」

メガネに関しては、この街の職人に依頼して同様の物を作らせる契約を交わした」

ブルソーの話を聞くに、どちらも今月に入って取り扱いを始めたばかりで、本店のマリボーが知ることになるのは月末の報告になるだろう、とのことだった。

「ライターはともかくとして、メガネの類似品は遠くないうちに出回るだろうとは思っていましたが、まさか身内からは……」

これには修一郎も絶句せざるを得ない。

「事情はともかくとして、原因の目処は付いたわけだ。」

この件に関しては、明日の朝一番でマリボーに連絡してもらおうぞ、ブルソー？」

何かにつけて、父親に追いつこうとあがくブルソーをきつく責める気にもなれず、かと言って放置しておいて良い問題でもないため、釘を刺すようにソーソリヴはマリボーの息子に向かって口を開いた。

「それに、目処は付いたとは言え、原因はそれだけでもなさそうだ。」

王都で起きた問題なら王都の中で解決すれば済む話だからな。
だが実際は、アーセナクトから出発した我々にも監視の目があった。

事は、支店だけの問題ではないだろうな」

「分かった。シュウイチロウ、すまないが明日また早伝役まで同行してくれるか」

「はい」

自分の持ち込んだ技術が原因でこの騒動が起きたとなつては、それこそ他人事ではない。

修一郎に否も応もなかった。

「本来なら、ブルソーは一刻も早く本店に戻つて向ここの事務をやつてもらわないと困るんだが、こうなつてはな。

少なくとも明日もう一日、王都に留まるべきだろう」

「ああ、そのつもりだよ。もう一人の事務員を看てくれた医術士からも連絡があるだろうし」

今後のことを話す二人の会話を聞きながらも、昨夜バラカの宿で思った「何も起こらなければ」、との願いが早くも叶わぬものとなったことに、修一郎は内心で大きくため息を吐くのであった。

第十六話 喧騒を聴きながら

ブルソーが事情を説明し、それを伝達板越しに聞いた父親であり店主であるマリポーに盛大に怒鳴られてから数日。

ブルソーは床に臥せている支店の事務員二人と、警護団、医術士から分かる限りの情報を得た後、修一郎とソーンリヴに対しては、充分に気をつけるように、と言い残してアーセナクトへと戻っていた。

尤も、二人が気をつけたところで、相手が悪意を持って近寄ってきた場合はどうしようもないのだが。

ともあれ、ブルソーの置き土産とも言える残務処理と日々の通常業務で、二人の一日は殆どを事務室で過ごしており、食事も露店の軽食を買ってきて摘む程度の時間的余裕しかなかったため、幸か不幸か今の所は平和であった。

「いい加減、露店の食事も飽きてきたな……」

修一郎が買ってきた、干した果実を練り込んで棒状に焼き上げたビスケットに似た食感の焼き菓子を、紅茶で流し込んだソーンリヴが、ぽつりと呟いた。

王都の露店で売られている軽食は、アーセナクトと比べるべくもなく多種多彩であったが、さすがに三食全てが露店では、ソーンリヴが愚痴を零すのも仕方ない。

アーセナクトでは、修一郎のアイデアによって、プレルの食堂が昼食の配達を始めていたため、仕事で忙しい時も選べる食事の幅は広がった。

食堂で提供する料理と全く同じというわけにはいかなかったが、それなりに工夫が凝らされており、露店の軽食よりも手が込んでい

て、それでいて簡単に摂れるメニューが用意されていたのだ。

ルキドゥ……今は自らの正体を明かしてルキーテと名乗っている少女と修一郎が出会った日に、プレルが修一郎を拉致したのは、このためのアイデアを異世界の人間族から考案してもらったためであった。

「そうですね。

バラカさんのところに食事に行こうにも、昼間はそんな時間はありませんし、夜は遅くなってしまうすし」

それに、私も料理でもしてストレス発散したいですしね、と心の中で修一郎が続ける。

新しい家に引越してから、然程経っていなかったが、それでも修一郎は今までの鬱憤を晴らすように、朝食と夕食の大半を、自らがルキーテの分も併せて作っていた。

仕事で帰りが遅くなる場合はそうもいかなかったので、ルキーテに金を渡してプレルの食堂なり露店なりで夕食を摂らせるようにしていたが、本心を言えば、それでも何とかして修一郎が作ってやりたいと思っている。

虎人族の少女の保護者となった身としては、彼女の成長に留意した栄養バランスの良い献立を考えて食べさせなければならぬと、密かに心に誓っている修一郎であった。

飽くまで修一郎の世界の人間基準での栄養バランスではあったが。

「そう言えば、以前お前が作ってくれたサンドイッチとか言ったな、あれは美味かった。

今はそんな余裕はないが、アーセナクトに戻ったら、またご馳走になりたいものだ」

コップに残った紅茶を飲み干して、洗い物を浸けておくための桶

へと向かうソーンリヴに、修一郎はいつもの柔和な笑みを浮かべて喜色の滲んだ声で応える。

「お安い御用ですよ。サンドイッチに限らず、あの類の料理は色々種類もありますからね。」

あれだと、ソーンリヴさんの嫌いなチーズも食べていただけるようですよ。」

フォンロシエが事務室を訪れた際に目撃した、サンドイッチを頬張ろうとするソーンリヴの姿を思い出して、修一郎は小さく笑った。

「……ふん。言っただろう？ 私はチーズの食感が苦手なだけで、食べられないわけじゃない」

後輩事務員が笑った理由に思い当たったのか、ソーンリヴは羞恥で僅かに頬を赤くしながら、自分の机に戻る。

「さあ、食事も終わったことだし、午後の仕事に取り掛かるぞ。シュウイチロウ、いつまでも呑気に食ってるんじゃない。さっさと済ませてしまえ」

メガネをかけて仕事をやる態勢を整えると、お返しとばかりに未だ食べ終えていない修一郎を急かした。

冬の四の月二十五日。

アルタスリーア王国の王都アーオノシユは、祝賀ムード一色に染まっていた。

アルベロテス大陸に存在する他の三国の王と、彼らに付き従う者を含めると、それだけで中規模の村の人口と変わらない人数が王都を訪れ、式典に参列している。

祈念式典を祝うという名目でそれらを見物に来た観光客は、国内は勿論のこと、他国からも大勢が訪れ、大通りと言わず小路にまで様々な種族の者が溢れていた。

アーオノシユ市が許可を出した場所には、いつもの倍近い数の露店が並び、軽食や菓子類をはじめ、装飾品や衣類、式典を祝う小物などが売られており、通り過ぎる客の目を楽しませつつも、なんとかその財布から金を出させるべく、呼び込みの声や値段交渉の会話があちこちで飛び交っている。

マリポー商店アーオノシユ支店も、普段とは違って、店先にまで陳列台を出して客に対応していた。

ちなみに、ライターとメガネに関しては、マリポーから一時販売中止の指示が出たため、店先にも店内にもそれらの姿はない。

今後の対応を含め、今日の祈念式典が終わった後に、マリポーがアーオノシユを訪れて新たな指示を出すまでは、販売再開は未定となっていた。

店先から聞こえてくる喧騒を他所に、事務室では相変わらずソーンリヴと修一郎が仕事に追われていた。

昨日までに、支店の事務員が倒れて以降の帳簿の確認・日別本締め作業をなんとか終わらせ、今は決算事務の準備をしつつ、子鐘三つ（三時間）ごとに持ち込まれる売り上げ金の集計や、各種出納板とのチェック、納品される荷物の手配と確認といった業務を行っている。

「外は賑やかですなあ……」

つい先ほど、販売部門から持ち込まれた子鐘三つ分の売り上げ金を確認しながら、修一郎がぼつりと呟いた。

「ごった返すほどの人ごみは好きではない修一郎だったが、それでも祭りの賑やかな雰囲気は嫌いではない。

ましてや、こちらは然程広くもない事務室に籠りつきりで仕事をしているのだ。

「つい、ぼやきの一つも出ようというものである。」

そういえば、元の世界でも、この時期は休日出勤が当たり前になっていて、テレビのニュースで流れる気の早い花見客の様子を見ながら、同じような台詞を同じような気持ちで呟いていたな、と思いつく。

「事務員と言えど、客商売の一部であるからには、人々が休んで外に出掛ける時が稼ぎ時であり、それに伴って忙しくなるのは、世界が違ってても変わらなかった。」

「確かに賑やかだな。だがまあ、諦める。」

「今日一日踏ん張れば、明日以降は少しの間落ち着くだろう。」

「休むわけにはいかないが、夜は多少は早く帰ることができるかも知れないぞ」

「納品板に記録された内容を商品別在庫板に転記するため、二枚の金属板に手をかざしていたソーナリヴが作業を続けたまま応じる。」

「私も、またあの“ニホンシュ”を呑みたいと思っているんだ。」

「……出来れば、今度は無粋な邪魔者なしでな」

「処理が終わった納品板を木箱に納め、新たな納品板を手許に引き」

寄せる。

あと数件処理すれば、とりあえずはソーンリヴの作業は終わる。茶でも淹れるか、と頭の隅で考えながらも、出納板の処理に集中する女性事務員であつた。

「そうですね。こちらの世界の“お酒”も嫌いではありませんが、折角の王都ですし、私もお付き合いしたいところです。

もうそろそろ時季ではなくなりますが、湯豆腐で一杯なんていいですねえ」

アルコールも甘味もどちらもイケる修一郎は、元の世界で冬の定番であつた献立を思い出して、元々大きくない目を更に細めた。

バラカの宿で別れて以来、リバロにも、仲間と思しきあの厳つい男にも出会っていない。

宿舎と職場である支店との往復と、昼食の買出し時以外には外を歩くことがないので、当然と言えば当然なのかも知れないが、仮に本当に“相手”が居たとして、こちらに何らかのちよっかいを出そうと考えているなら、そろそろ動きがあつても良さそうな頃合ではあつた。

今のところは、支店の事務員が急病と事故で倒れた以外に、これといった問題は起きていないのだ。

無論、何もなければそれに越したことはないが、嬉しくも有難くもない事に、そうはならないであろうというのが、ソーンリヴと修一郎の共通した認識である。

一日でも早く、マリポーが王都を訪れて、真相を究明するなり、“相手”の正体を突き止めるなりして欲しいところだが、平和祈念式典が開催される冬の四の月二十五日は、アーセナクトでも従業員総出で対処しなければならぬほど忙しい日であつた。

どんなに急いだとしても、マリポーがアーオノシユに到着するのは三日後になるだろう。

それまでは、二人で日々の仕事をこなしつつも、周囲に気を配りながらの生活を強いられる今の状態が続くことになる。

「まあ、何も起こらなければ、明日か明後日にでもあの宿に顔を出せるだろうさ」

手許にあった全ての納品板の処理を終わらせ、茶を淹れる準備をしようとソーンリヴが立ち上がった。たちよごその時、事務室の扉が荒々しくノックされた。

「はい、どうぞ?」

一瞬だけソーンリヴと視線を合わせてから、修一郎が応じる。

その声を待っていたように、すぐに扉が開き、一人の人間族の男と一人の犬人族の女性が事務室へと入ってきた。

着任当時の紹介の際に顔を合わせたことのある二人で、確か流通部門に所属していたはずである。

犬人族の表情は容易に判断がつかないが、人間族の表情から察するに、あまり良い話ではなさそうだ。

「どうしました?ええと、アムスさんにトーラさん」

修一郎が椅子から立ち上がり、入ってきた二人に歩み寄る。ソーンリヴも流しへ向けていた足を入口へと変えていた。

「スイルトンが居ないようだから、あんたら二人に訊くんだがよ」

アムスと呼ばれた人間族の男が、修一郎とソーンリヴを交互に見ながら口を開いた。

その声には、苛立ちと僅かな怒りが含まれているように、修一郎

には感じられる。

「あたしたちの給金が支払われないかも知れないってのは本当なのかい？」

アムスに続いたのは、犬人族の女性トーラの発せられた言葉だった。

「こちらは、不安を隠しきれていない口調である。

「いったい何の話だ？」

二人を見遣るソーンリヴのメガネが、窓から差し込む陽光に反射してきらりと光った。

事務室の入口に立たせたまま事情を聞くわけにもいかず、二人を事務室内に招きいれて、自分たちが使っていた椅子に座らせたソーンリヴは、予備として部屋の隅に置いてあった小さな椅子を持ち出して、彼らと向き合うように座っている。

修一郎は、茶を淹れるべく流しで湯を沸かしていた。

店中が慌しい日に、あまり呑気に話を聞いているわけにもいれないが、内容が内容である。

二人が椅子に座って、いくらか落ち着いた様子を見て取ると、ソーンリヴは詳しい話を聞くことにした。

アムスによると、近頃流通の同僚の間で、マリポー商店の資金繰りが上手く行っていないという噂が囁かれているとのことであった。アムスもそれを耳にした時は、すぐに信じる気にもなれず、噂の出所を調べたところ、同僚の一人が酒場で聞いた話が原因であるら

しいことが判明した。

その同僚に、話の相手が誰かと訊ねると、ルポネ商店の従業員であるとの答えが返ってきた。

アムスが同僚を連れて、そのルポネ商店の従業員のところまで出向き、更に詳しく訊こうとしたところ、その従業員も酒場でそのような会話を耳にしただけで、その会話の主が誰であったかまでは知らないと言われたのが昨夜のこと。

それ以上はアムスとしてもどうしようもなくなったため、翌日いつものように出勤してみると、今度はトーラから同じような噂を聞いた旨の話を打ち明けられた。

彼女の場合は、昨日、仕事を終えて市場で夕食の買い物をしている最中に、アムスが聞いたものと同様の噂が流れていることを気にした食料品店の店主から問われて、トーラの知るところとなったようである。

二人は仕事の合間を縫って、事実確認をするべくスイルトンを探したが、生憎とスイルトンは朝から出掛けており、仕方なく、本店から出向いてきたソーンリヴと修一郎に事情を聞こうと、こうしてやってきた次第であった。

「なるほどね……。分かった。

数日前まで私たちはブルソーさんと何度も会っていたが、そのような話は全く聞いていない。

もちろん、私たちにも知らされていない可能性は考えられるが、資金繰りが上手く行ってないなら、本店のマリボーさんもアオーノシユに支店を出すようなことはしないと思うがな」

ブルソーはまだその域に達していないが、店主のマリボーは、“商売は堅実に、だが交渉は大胆に”が信条の商人である。

堅実にアオーセナクトで商売の基盤を固め、確信を持たたからこそ、アオーノシユへの出店であるはずで、無理をしてまで手を広げ

ようとはしないはずだ。

無論、支店だけを見て、経営状況が芳しくないということも考えられるが、帳簿をざっと見る限りでは充分利益を上げているように思われる。

「そうですね。私もソーンリヴさんと同意見です。

今は養生されているこちらの事務の二人に訊いても、同じ答えが返ってくるはずですよ。

我々事務員は帳簿を管理する側ですから、もしそういった兆候が見られるなら、噂は外からではなく、中から流れる可能性が高いでしょうね」

勿論、経営者側が意図的にそういった情報を隠匿することも考えられるし、事務員が知ったところで口止めされればそれで終わりである。

しかし実際に、元の世界では似たような事が発端となって崩壊していった会社はいくらでもあった。

だが、それを今ここで口にしても、アムストトーラを更に不安がらせるだけで、何の益も生まないことを理解している修一郎は、表面上の事実だけを述べるに留まり、二人を安心させることを選んだ。

「それに、あと数日もすれば、マリボーさんが王都にいらっしやる予定となっています。

私たちの言葉で納得できないのであれば、その時に皆さんに対してマリボーさんの口から説明していただければ良いものではありませんか？

ちなみに、皆さんの今月の給金ですが、既に支払う準備は整って、後は資産保管局にそのお金を引き出しに行けばいいだけの状態になっていますよ」

柔らかな笑みを浮かべて、淹れた茶を自分たちの目の前に置く修一郎に少しは安心したのか、流通部門の二人はお互いの顔を見合わせた。

何より、今月の給金が支払われるという修一郎の言葉に安堵したようだ。

「はつきりと、『砂山に立てた棒切れのような』噂と断言することは出来ないが、私自身はそうだと思っている。」

それよりも、だ。あなた方に指図できる立場ではないが、少なくとも今日は、噂の真偽を確かめるよりも仕事に精を出すべきではないかと思うのだがな」

ソーンリヴの言うように、今日は、客の出入りも納品される荷物の数も普段とは比較にならない。

アーオノシユ支店は小売専門であったが、それでもひっきりなしに外から荷物が搬入されてくる。

正直なところ、噂に右往左往する暇があるなら、その分体を動かしてはどうかと思うのだが、その噂の内容が本人たちの生活に関わることであるから、強く言うわけにもいかない。

「分かったよ。確かに今日はそれどころじゃないからね。」

「だけど、マリボーさんが来たらきちんと説明してもらおうからね？」

アムスが何かを言いかけたようだが、トーラがそれを抑えるように応じた。

そんな犬人族を見たソーンリヴは、真剣な表情で頷いた後、軽く肩を竦める仕草を見せて、二人に約束する。

「ああ、私が責任を持って伝えておくよ。」

第一、私も給金を貰う立場なんだ。噂が真実だったとして、困る

のはあなた方だけじゃない」

結局、アムスとトーラは、出された茶に口をつけることなく、事務室を出て行った。

二人を見送って、事務室の扉を閉めた修一郎の背中に、ソーンリヴの疲れた声が聞こえてくる。

「やれやれ……。ついさつき、何も起こらなければと言った自分が酷く間抜けに思えるよ……」。

よりにもよって、祈念式典の日を狙ったように厄介ことが舞い込んで来るとはね」

どうやら、マリポーが調べるまでもなく、本当に“相手”が存在し、その“相手”は明確に悪意を持って行動しているようである。

しかも今度は直接的ではなく、間接的な手段を使ってきた。

アムスの口ぶりからすると、噂は支店の全従業員に既に広まっていると考えていいだろう。それどころか、アーオノシユの商人中に広まっている可能性すらある。

店主自らが噂を否定し、従業員の不安を払拭したとしても、街中に拡がった噂を取り除くにはかなりの労力と時間を要するのは間違いない。

しかも、この場合一刻も早く対処しないと、取引先が減るところか、商売自体立ち行かなくなるのだ。

「まいりましたね。一番面倒な方法を使ってくるとは。

内部に対しては、いくらでも説明のしようがあるのですが、世間に広まった噂までは、さすがに私たちではどうしようもありません」

自分の机に戻る修一郎の表情も暗い。

元々、支店の従業員でもないうえに、一介の事務員であるソーンリヴと修一郎には、打てる手段などないに等しいのだ。

朝から出掛けているスイルトンは、もしかしたらこの件に関して動いているのかも知れないが、彼も未だ戻ってきていない。

店主も店主代行も不在の今、二人に出来ることはごく限られていた。

即ち、目の前の仕事を片付けること。それだけであった。

「いよいよもって、マリポーさんの到着が待たれるな。

とりあえず、シユウイチロウ。頃合を見て、伝達板で今の話を伝えておけ。

今日伝えたところで、直ぐになんとかなるわけじゃないが、こちらに来るまでに対応策を考えておいてもらわないとな」

「分かりました」

楽しくもない会話を交わしながら、二人は事務員としての仕事に戻る。

時間はもうじき大鐘四つ（午後六時）になろうとしているが、外から聞こえてくる人々のざわめきは一向に静まりそうもない。

祈念式典は疾うに恙無く終わっているが、王都を訪れている人々の大半は、このまま一日中めでたい祭りを楽しむのだろう。

アーオノシユの夜はこれからで、仕事を終えた者も加わって、さらにその騒がしさが増すのは間違いない。

大鐘四つが鳴れば、ほどなくして子鐘三つ分の売り上げ金が事務室へと持ち込まれ、ソーンリヴと修一郎の作業が再開されることになる。

表で騒ぐ人々とは違った意味で、二人の一日はまだまだ終わりそ

うもなかった。

「外は相変わらず、賑やかですねえ……」

机に向かい、手を動かしながら、修一郎が先ほど呟いたものと同じ台詞を口にする。

しかし、その口調には、先ほどとは違った感情が込められていた。事務の仕事であれば、目の前にあるものを一つ一つ確実に片付ければいつかは終わる。修一郎たちが今、そうしているように。

だが、マリボー商店が抱えている問題とも呼べる大きな仕事は、容易に片付けることができないものばかりである。

修一郎の呟きに応えたソーンリヴの口調は、内心を感じさせることのない、平坦なものであった。

「まったくだ。騒がし過ぎるくらいにな」

第十七話 笑えばそれでいい

「遅くなつてすまなかつたな。だが、俺が来たからには安心しろ」

冬の四月二十五日の平和祈念式典が終わつて四日後、アオーノシュに到着したマリボーが、ソーンリヴと修一郎を前に発した第一声である。

二十五日に、修一郎から支店に関する噂について報告を受けたマリボーは、翌二十六日の朝一番で商館へと向かった。

以前、懸案事項として組合の幹部に提案していた話の回答を得るためであり、昼を過ぎて商館から戻ってきたマリボーは満足げな笑みを浮かべていた。

その後、息子のブルソーに自分が不在の際の指示を細かく出すと、マリボーは慌しく再び店を出て行った。

向かった先はレベックの工房で、商館で得られた回答の内容をノーム族の老職人に説明して了解を得ると、次はランダの工房へと足を向けた。

そこでも同様に説明し、ランダと何度か口論になりながらも何とか了解を取り付けたマリボーは、意気揚々と店へ戻ってきたのだ。

その日の事務処理をジスとブルソーの三人で終わらせ、月末である三十日の決算締めの手続きに関していくつかの注意点を二人に与えた後、マリボーは自宅へと戻り、旅支度に取り掛かった。

夜が明けて、路線馬車に乗り込んだのが二十七日。

道中は内心の焦りを隠しつつ、乗り合つた客同士で他愛ない会話を交わしながら一日を馬車の中で過ごし、セボの宿場に着いてからも、自らの店に関する噂がどの程度広まっているのか確認するのに併せて、有益な情報がないかと多くはない店を全て回つて話を聞い

た。

そこでマリボーが得たのは、今のところ例の噂はアーオノシユに留まっているようで、どうやら他の都市には広まっていないらしい、といった程度のものであった。

明けて二十八日。

夕刻に到着した馬車を降りると、マリボーは支店へと直行することなく、アーオノシユの商館へと足を向けた。

アーオノシユにある商人組合は、表向きは独立した組織であったが、実質はアーセナクト商人組合の支所的扱いである。

正確に言つと、アーセナクト商人組合がアルタスリーア王国内の商人組合を束ねる位置づけであり、他の都市の商人組合は全てその支所と呼んで差し支えない。

アーセナクトの組合長は、領地こそ所有していないものの、爵位を持つ貴族でもあり、その気になれば国の運営にも口を出せる立場であるのだ。

つまりは、アーセナクト商人組合で決定された事項は、アルタスリーア国内全ての商人組合に所属する商人間の取引等に適用されるものであり、一般の商人たちにとっては、国の法律に次いで遵守されなければならないものであった。

アーオノシユの商館にて、マリボーは組合長に面会を求め、子鐘半分ほどの時間を待たされた後、老齢の人間族が務めている組合長の執務室に通された。

そこで、アーセナクト商館が発行した羊皮紙製の三枚の書類を見せ、補足事項を口頭で説明しながら、承諾を迫った。

無論、アーセナクトの決定に否やの返事をするなどできず、老組合長は書類の内容に若干の疑問を持ちながらもそれを受け入れる旨の回答をした。

その後、例の噂に関して事実無根である証拠となる、国に提出済みの前年次分の総資産計算書の写しと、今年の総資産計算書の概算を組合長に手渡した。

総資産計算書とは、修一郎の世界で言うところの、損益計算書と貸借対照表を合わせたようなものであり、毎年決算時に作成される書類である。

店舗を構える商人は、前年の春の一の月から翌年の冬の四の月までの一年分の収支額を取りまとめ、春の一の月十五日までに国に提出しなければならず、国は提出された総資産計算書を元に、当該年次の売上税を商人から徴収する仕組みになっている。

総資産計算書に虚偽の記載があった場合は、容易に店が傾くほどの莫大な追徴金が課せられるため、マリポーのようにいささか強引ながらも、一応まっとうな商売を行っている者ならば、計算書に書かれた数字はまず間違いなく事実であろうが、それを他人……しかも同業者に見せるということは、自らの懐具合を曝け出すに等しい。まともな状況であれば、そのような行いは愚挙としか言えないのだが、現状がそもそもまともでないのだ。

マリポーが採った、初手にして最後の手段であり、最大の効果を発揮する手段でもあった。

これを見せられれば、マリポー商店の資金繰りがどうなっているか一目瞭然であるため、噂を信じて取引を渋るような者は居なくなるだろう。

ただ、手の内を公開するということは、取引上で足元を見られる可能性も増えるということであったが、それだけのリスクを犯しても、マリポーはアーオノシユでの商売を成功させねばならないと考えていた。

どこの誰が流した噂かは未だ判明していないが、事態を収拾した暁には、その者には相応の報いをくれてやると、心に誓っているマリポーであった。

そんなマリポーから渡された計算書に目を通したアーオノシユの組合長は、その数字に愕然とした。

前年次の総資産額ですら、アーオノシユの本店に匹敵する金額であるのに、今年の推定総資産額はそれを更に上回っている。

しかも、今年の推定額はアーセナクトの本店のみであり、最近になってアーオノシユに開いた支店の資産額は含まれていないのだ。

当然ながら、店舗の購入や新規雇用に係る人件費、設備費等の初期投資費用を考慮すれば、支店の損益額は本店には遠く及ばないであろうが、マリポーが言うには、それでも収支差額がほぼ同額になるか、収入が僅かながらも上回るだろうとのことである。

渡された書類は総額のみを記したもので、支出と収入の内訳がどうなっているのかは分からないが、少なくともマリポー商店の経営状態は、この計算書を信じるならば至って良好と言えるだろう。

ここまで力をつけてきている店であれば、同業者の一人や二人はマリポーに対し危機感なり嫉妬なりを抱いてもおかしくないと、老組合長は心の中で呟いた。

マリポーとしては、巷に流れている噂も何とかしなければならぬのは勿論のこと、まずは、商人を束ねる組合に対して流言を否定しておく必要があった。

同業でない者……要は顧客となり得る一般市民に対しては、新規商品の取り扱いを増やしたり、特価品の販売や販売商品に無料提供品を付ける等、いくらでも手の打ちようはあるのだ。

それを数ヶ月も続ければ、マリポー商店が経営不振に陥っているという噂など、一般市民の頭からはすっかり消えてなくなっているだろう。

ともあれ、アーオノシユの商人組合にて必要な要件を全て片付けると、マリポーはソーソリヴと修一郎が起居している宿舎代わりの家へと、自信に満ちた足取りで向かったのだった。

「……と、まあそういうわけだな。組合に対しては手を打っておい

支店の者たちには、明日の朝俺から直接説明する。彼らには、こ

れから一層頑張つて働いてもらわんといかん。

決算締めが終わつたら、お前たちも含めて支店の従業員には、特別手当を渡すつもりだ。

くだらん噂なんぞで、折角雇入れた重要な戦力を失うわけにはいかんからな」

王都に着いてからの行動を一通り二人に説明し終えたマリポーは、出されていた茶で喉を湿らすと続ける。

「それから支店の事務員についてだが、こちら俺が明日、本人たちと警護団、治療を行った医術士のところへ顔を出して、直接話を聞いてくる。

お前たちが出会つたという、二人組の男のことも調べる必要もあるだろう。

その間はスイルトンに店を任せるが、お前たちは決算締めの手続きを進めておいてくれ。何せあと二日で本締めだからな。

総資産計算書の作成については、ソーンリヴが経験しているから、ヤスキは教えてもらうといいだろう」

「分かりました。お話を聞く限りでは、元の世界での財務諸表と酷似しているようですから、理解するにはそれほど時間はかからないと思います。

ただ、出来ればやはり支店の事務に精通した方が一人でも居ていただいたほうが、作業は捗ると思いますが……」

居間に置かれたテーブルを挟んで、マリポーの向かいのソファーに腰掛けていた修一郎が頷いた。

「ああ。急病で倒れた者の病状がどんなものかは分らんが、馬車に轢かれて臥せっている者はそろそろ回復するだろうとブルソーか

ら聞いている。

本締めには間に合わんかも知れんが、計算書作成までには何とか復帰できないか頼んでみるつもりだ」

「お願いします」

修一郎の隣に腰を下ろしているソーンリヴは、短くその一言だけを口にした後、修一郎に小声で尋ねる。

「ところで“ザイムシヨヒョー”とは何だ」

「社長が仰った、“総資産計算書”と同じようなものですよ。その店の一年間の資産や収支の増減が分かるように取りまとめた書類の総称みたいなものです。

「こちらの世界でもわざわざ難しい言葉を使っているようですが、要は決算書ですね」

「……なら、最初からそう言え」

「すみません」

小声で遣り取りしている二人を見ながら、マリポーが人の悪い笑みを口許に浮かべた。

「うん？二人して一つ屋根の下で暮らして、何か進展でもあったのか？

やけに仲が良さそうじゃないか」

「……何もありません」

「とんでもない！何もありませんよ！」

ソーンリヴは腕を組んだまま片方の眉を僅かに上げて、修一郎は慌てたように前に突き出した両手を左右に振って、異口同音に否定した。

それを見ていたマリポーは膝を叩きながら、呵呵と笑う。

「まあ何にせよ、二人の息が合っていることは大いに結構。これからの約十日間が仕事の山場だからな。

上手いこと仕事を回してくれよ。

決算事務が早めに終われば、一日くらいは休みをやれるだろうから、頑張ってくれ」

聞くべきことを聞き、話すことを話したマリポーは、これで安心して眠れると言い残し、使われていない客室はどこか確認すると、さっさとその部屋へと入っていった。

この時間から宿を探すのは面倒であったし、どうせ店が用意した宿舎である。未使用の部屋があるなら使わねば損だとばかりに。

店の窮地にあっても、少なくとも表面上は普段と変わらない店主の後姿を見送って、修一郎が嘆息する。

「これで、とりあえずは私たちは仕事に専念できますね」

「ああ」

「社長の言うとおり、こちらの事務の方が復帰してくれれば、更に仕事は楽になるでしょうし。」

「上手く行って欲しいものです」

「ああ」

「決算事務を早く終わらせることが出来れば、一日休みをいただけるようですし、嬉しい方向に張り合いが出てきましたね。」

ソーンリヴさんは王都は初めてなのですから、王都観光するのも良いのではないですか？

もし宜しければ、私が案内しますよ？」

「ああ」

マリボアの言葉に、修一郎も多少は気力を回復できたらしく、隣に座るソーンリヴに饒舌気味に話しかけるのだが、当の本人はまるで上の空で、同じ返事を繰り返すだけであった。

「……どうしました？ソーンリヴさん」

その態度を怪訝に思ったのか、修一郎が上司の顔を覗き込むが、俯き加減の顔は深い藍色の髪に隠れて、表情が窺えない。

「シュウイチロウ、一つ確認したいことがある」

名前を呼ばれた人間族の女性が、漸く今までと違う言葉を口にした。

姿勢は先ほどから変わらず、腕を胸の前で組み、両目は瞑ったままである。

「はい。なんでしょうが」

「お前がさっき言った『とんでもない』とはどういう意味だ」

春の一月八日。

マリポーは、アーオノシユ市庁舎の税金関係窓口に、マリポー商店アーオノシユ支店の総資産計算書と証拠書類、決算締めを済ませた帳簿一式を提出した。

マリポーの言ったとおり、決算締めには間に合わなかったものの、総資産計算書作成時には支店の事務員一人が職場復帰し、三人がかりで毎晩遅くまで机に向かうこととなった。

一通りの書類が出来上がったのが六日。店主であるマリポーが最終確認を一日かけて行い、翌八日に正式書類として提出と成った次第である。

肩の荷が下りたと安堵するソーンリヴと修一郎に、更に喜ばしい報せが二つもたらされた。

急病で療養していたもう一人の支店事務員も、十日には復帰できるといったものが一つ。

本店の決算事務もなんとか終わり、後はマリポーの決済を待つのみとなったということがもう一つ。

ジスとブルソーに任せていたとは言え、それまでの日々の作業はソーンリヴと修一郎が行っていたのである。

日締め、週締め、月締めは問題なく行っていたという自負はあったが、それでも何かしらの見落としがあるなど、不備が出ないかと二人が心配していたのも事実であった。

市庁舎から戻ってきたマリポーは、本店からの助っ人二人に、支店の事務員が揃う十日に引継ぎを行い、翌日の十一日は丸一日の休日を与える旨の指示を出すと、アーオノシユの商館へと出かけていった。

店では、中止となっていたライターとメガネの取り扱いが再開され、それに合わせるように特別割引販売や新商品の販売が始まった。また、例の噂に関しては、支店の全従業員に対し、店主本人の口

から完全に否定されたうえに、支店の開店以降順調に売り上げを伸ばし、店の利益に貢献したという名目で、特別手当の支給が発表された。

明らかに従業員の士気の低下を防ぐための方便であったが、事務室に乗り込んで来たアムスやトーラをはじめ、噂を気にしていた者には効果はあったようで、店には目に見えて活気が戻ってきていた。マリボーが内に外にと精力的に動いているおかげもあってか、あの噂以降は目立った問題は起きていない。

このまま行けば、十二日には王都を離れてアーセナクトに戻るこ
とが出来ると、ソーンリヴと修一郎は話しながら仕事を続けていた。

春の一の月十日。

予定通りもう一人の支店事務員も職場に復帰し、日中は四人で通常業務をこなしつつ、必要な事項に関してはその都度ソーンリヴたちから支店事務員へ引継ぎが行われた。

元々自分たちの仕事であったことに加え、開店当初からの作業を経験していた支店事務員たちは、細かい指示を出さずとも即座に理解し、事務室は和やかな雰囲気にも包まれてその日の業務を終了した。

翌十一日は特別休暇を貰って店に顔を出すことがないソーンリヴと修一郎に、支店の事務員二人は、自分たちが不在の間の仕事を代行してくれたことに改めて礼を述べると、それぞれの家路についた。ソーンリヴと修一郎は夕方ぶりの定時終業を喜びつつ、“酒”と食事を楽しむためにバラカの宿へ足を向けた。

春の一の月十一日。

ソーンリヴの要請もあって、修一郎はアーオノシユの主要施設や大通りを案内していた。

白亜の王城アーステルアや、白壁で統一された街並みの中でも特に景観の素晴らしさで知られる貴族の邸宅が並ぶ高級住宅街、アーセナクトの倍はあるうかと思われる中央広場と、そこに設置されたアールオノシユが誇る大噴水など。

幸い天気にも恵まれ、空から降り注ぐ陽光は春の暖かさを感じさせ、街中を吹く風は優しい。

祈念式典の時のような騒がしさはないものの、通りや広場は人々の活気とざわめきに溢れ、時たま大陸公用語以外の言語も聞こえてくる。

支店の事務員の件もあってか、修一郎は案内する間、常にソーンリヴが通りの外側を歩くことになるように配慮しつつ、彼女の横に並んで柔和な笑みを浮かべていた。

「そろそろ大鐘三つ（正午）になりそうだな。シュウイチロウ、昼食にどこかお奨めはあるのか？」

アールオノシユの台所とも言わなければならないが、中央広場まで戻ってきた二人は、大噴水を囲むように据えつけられたベンチの一つに腰掛け、清澄な水を高く噴き上げる巨大な噴水を眺めている。

「お奨めと言えるほど通ったわけではないですが、知っている店は数軒ありますよ。」

ソーンリヴさんの希望は何かありますか？」

バラカの宿は昼もやっていらが、昨晚の夕食時に存分に堪能したばかりである。

数年前に王都に滞在した際に見つけた食堂を思い出しながら、ソーンリヴのリクエストを訊くことにした修一郎だった。

「そつだな……。これといって特に希望はないが、美味しいサラダを出す店だと嬉しい」

ソーンリヴはベンチに腰掛けたまま、空を見上げて答える。

ここ最近、露店で買った物が主な昼食であったので、久しぶりに生野菜の歯応えを楽しみたい。

修一郎には明かせないが、偏った食生活が続いたおかげで、通じもあまり宜しくない状況だ。

「分かりました。じゃあ、行きましようか」

ソーンリヴの密かな悩みに気付かない修一郎は、いつもの笑顔で立ち上がった。

「食事の値段は安いとは言えませんが、お洒落な感じの店で、サラダも含めて料理の味は結構いけますよ」

「落ち着いて食事が楽しめるなら、洒落ていようがいまいが構わんさ」

修一郎に続いて立ち上がりながら、ソーンリヴもいつものように唇の片端を持ち上げるように笑う。

二人並んで中央広場を歩き出して暫くも経たないうちに、王城の大鐘が鳴り始めた。

修一郎が案内した食堂は、確かに洒落た造りになっていた。

大通りに面した店先は、板張りのデッキが前面に広がっており、そこには数脚のテーブルセットが置かれ、修一郎の世界で言うところ

ろのオープンカフェの様相を呈している。

店の雰囲気に着かれてか、円テーブルで食事やお茶を楽しんでいる者の多くが女性客であった。

前面のデッキ部のテーブルは満席であったため、店の建物内に入る。

店内のテーブルに着いた二人は、それぞれ注文を済まして店内を見回した。

室内は、建物の外壁と同じく白で統一され、床を除いて壁も天井も白一色である。

天井からは術石式のランプが吊り下げられ、壁面には所々に小さな額縁に入れられた絵画が飾られている。

室内の角テーブルは、二人掛けが前提で作られているようで、薄緑色の正方形の天板を一本の脚が支えるタイプであった。

テーブルの隅には、ガラス製の一輪挿しが置いてあり、この国では良く見かける白い花を咲かせた植物が活けてある。

店内の装飾や、本格的な食事には向かない然して大きくないテーブルなどから、ここが食事よりもお茶を楽しむことを主目的とした店作りを行っていることが容易に推察できた。

それでも、出された料理の味はソーニヴの口に合ったようで、キャベツとルッコラに良く似た香味野菜のサラダに満足しているようである。

「それで、シユウイチロウ。昼からはどうする？」

私の案内ばかりではつまらんだらう。お前が行きたい所があるなら、今度は私が付き合うか？」

それとも、本店の皆用に土産物でも買いに行くか？」

皿に盛られたサラダを綺麗に平らげた後、残っていた黒パンに手をつけながらソーニヴが問う。

支店事務員の件があるので、マリポーからは休日でも二人一緒に

行動するようになると言われていた。

明日の朝、少しだけ支店に顔を出した後は、二人とも路線馬車でアーセナクトに戻る予定である。

本店の者や、修一郎の留守を預かっているグラナたちには何か買って帰るべきだろうと、二人して話し合っただけで決まっていた。

「そうですね……」

食後に頼んだ紅茶のカップを受け皿に戻しながら、修一郎は考え込む仕草を見せる。

普段見せないような真剣な、それでいてどこか鎮痛な面持ちで黙り込んだ部下を見て、ソーンリヴは何か声をかけようかと迷ったが、そのまま修一郎が口を開くのを待つことにした。

「実は、一箇所だけ寄りたい場所があるんです。

ソーンリヴさんには待つていただくことになると思いますが、それでも良ければ少しだけ付き合っただけいただけますか？」

決して短くない時間、何かを逡巡していた様子の修一郎は、意を決したように顔を上げて、ソーンリヴの瞳を見つめた。

今まで見せたことのない表情で自分を見つめてくる異世界人の男に、ソーンリヴは、

「分かった」

とだけ告げた。

安来修一郎がこの世界に突然現れた時、彼の目の前には十数人の人間と、数匹の直立歩行する衣服を着込んだ獣、十輜を超える荷馬車が隊列を組んで石畳の道を進んでいた。

荷馬車の列の先頭には、欧米人のような彫りの深い顔立ちの壮年の男性が立っていて、突如として出現した修一郎を見た彼は、隊列に向かって何やら叫んでいた記憶がある。

一方、修一郎は営業から連絡を受け、数キロメートル離れた小学校に文房具を届けるために社用車に乗り込もうとして、急激な平衡感覚の喪失と激しい眩暈に襲われ、それが漸く治まったかと思つたら、周囲の風景が一変しており、呆然としていた。

数台の社用車と従業員の自家用車が並ぶ会社の駐車場ではなく、ヨーロッパ旅行の番組に出てきそうな緑広がる一面の草原に変わっていたのである。

未だ僅かに残る眩暈のために、路傍に座り込んだまま、周囲の風景と目の前の一団を見比べていた修一郎に、欧米人風の男が腰にさした短剣を抜き放ちながら、ゆっくりと近寄ってくる。

「
！
！？」

どこの言語なのかは分からないが、状況と語調からして誰何か警告なのだろうな、と回らない頭で考える。

イントネーションや言葉の持つ雰囲気からしてイタリア辺りなのだろうか、とも思うが、第二外国語履修でイタリア語を選択していなかったため、修一郎には何を言っているのかさっぱりであった。

よく見れば、男の服装も田舎風というか、中世ヨーロッパを舞台にした映画に出てくる町民のような出で立ちである。

もしかしたら、フランスの片田舎とかベルギー辺りなのかも知れない。

先ほどまで日本に居た自分が、何故、今そんな場所に居るのかは

分からないが。

『ええと……』

白いワイシャツにネクタイ、紺色のスラックスに会社の制服である作業着を引つ掛けた、日本の地方都市の中小企業で良く見かけるような出で立ちの修一郎は、座り込んだままどう答えたら良いものか迷う。

とりあえず拙い英語ちたひで話しかけてみようとしたところに、先頭にある幌付きの荷馬車の中から女性の声が聞こえてきた。

「。、……？」

ゆっくりとした動作で荷馬車から降りてきた女性は、やはりどこか欧米人のような顔立ちをしており、その腹は大きく膨らんでいた。どうやら妊婦のようである。

修一郎を警戒しながらも、その妊婦と言葉を交わしていた男は、いきなり修一郎に右手を突き出して、何やら呟き始める。

「！」

男は、一音節の言葉を口にした後、再び修一郎に向けて語りかけた。

「。？」

しかし、相変わらず何を言っているのか分からず、戸惑っている修一郎を見て、男は驚愕の表情を浮かべる。

向こうも戸惑っているのが分かった修一郎は、とりあえず敵意がないことを理解してもらうために、社会に出て身についた営業スマ

イルを浮かべ、一言一言区切るように話す。

『あ……。私は、Japanese、日本人です。シユウイチロウ・ヤスキと言います。』

Where is this?ここはどこでしょうか?』

「？」

途中、何か反応があるも知れないと考えて英語も混ぜてみたが、相手は理解した様子もない。

いよいよ困ったことになった、と収まりの悪い頭を掻いた修一郎であったが、それを見ていた妊婦が、笑顔を浮かべて隣の男に話しかけた。

にこにこ笑顔で話す女性に対して、男のほうは困ったような表情を浮かべていて、どうやら何かを提案した女性の翻意を促そうと説得を試みているようだ。

結局、男が折れたようで、妊婦は笑顔を浮かべたまま修一郎に再び話しかけてきた。

「シユウイチロウ?」

「?」

そう言って、手招きする。

その仕草は日本式の手招きと同じで、手の甲を上にして上下に振るといったものであったので、修一郎は素直に従うことにした。

その横で、相変わらず修一郎を警戒している男が握っている短剣が、こちらに向かって振るわれないことを内心で祈りながら。

女性に勧められるまま、修一郎は荷馬車に乗り込んだ。

この一団がどこに向かおうとしているのかは分からないが、少なくとも周囲に人が住んでいるような形跡がない草原に走る道の真っ只中に放置されるよりはマシだと思えた。

荷馬車には男の子が二人と女の子が一人、床板に毛布を敷いてその上に座っていた。

修一郎に続いて女性が乗り込み、三人の傍らに腰を落とすと、男の子二人は毅然として、女の子は女性の陰に隠れるようにしながら、ちらちらと修一郎を窺っている。

どうやらこの子たちは、この女性の子供なのだろう。となると、隊列を率いていた男は、この女性の夫なのだろうか。

そんなことを考えつつ、修一郎が親子らしき四人を見ていると、女性は自分を指さして、

「ハーベラ」

と、穏やかな笑顔とはつきりとした発音で言った。

次に、三人の子供のうち、背の高い十五歳前後と思しき少年を指さして「セギユール」と続ける。

ここまで来れば、さすがに修一郎も名前を言っているのだと分かった。

「カーロン」

もう一人の十歳くらいの少年を指さしてそう告げると、自分の後ろに居たカーロン少年と同じくらいの歳に見える少女の頭に手を置いて、

「パルメル」

と呼びかけた。

その後、ハーベラと名乗った女性は、荷馬車の外から心配そうに中を窺っている短剣の男を指さし、

「コタール。 、 。

と、締め括る。

“コタール”の後に続けて言った言葉は、恐らく「私の夫よ」といった意味なのだろう。

『シウウイチロウ。シウウイチロウ・ヤスキです』

この辺りの氏名の呼称が西洋式なのか東洋式なのかは分からなかったが、外見から判断して西洋式に名・姓の順に名乗ることにした修一郎だった。

自分の名前を言いながら、母子四人と外の男に向かって軽くお辞儀をする。

ここに至って、漸く男の警戒心も和らいだのか、握っていた短剣を鞘に収めると軽く嘆息して、後ろに控えていた隊列に向かい何やら声を張り上げた。

それが出発の合図であったようで、荷馬車が動き出す。荷馬車の中で所在無げに立ち尽くしていた修一郎は、その揺れに危うく転倒しかけた。

それを見たハーベラと名乗った女性が、セギユールに何やら指示すると、少年は荷台の隅に積まれていた毛布を引っ張り出して修一郎に手渡した。

身振り手振りを交えて、それを荷台に敷いてその上に座れと言っているようだ。

『ありがとう』

先ほどまでの営業スマイルではなく、心からの笑顔でそう応えたと、修一郎はセギユールの示すとおり、毛布の上に腰を下ろした。ここがどこなのか未だに分からないし、彼らが何者なのかも分か

らない。そしてこれからどこに向かうかも、自分がどうなるのかも分からない。

全てが分からないことだらけであったが、少なくとも目の前の女性性は、今のところは友好的であったので、修一郎は彼女をとりあえず信用することにした。

自分でも無用心だと思わなくもないが、さしあたって修一郎の選ぶことの出来る選択肢は、それくらいしかなかったのだ。

ハーベラは、相変わらずにこにこと笑顔を絶やさないまま、修一郎を見つめていた。

それが、九年前。

ハーベラ・アペンツェルと、その夫コタール・アペンツェル、そして夫妻の子供たちとの出会いであった。

「……まあ、そんな感じで、アペンツェル夫妻に拾われましてね。

その後は、あの人たちからこの世界の言葉や一般常識といったものを教わりながら、一緒に行動していたというわけです。

彼らが隊商であったのは幸運だったのでしょね。これが奴隷商や野盗であつたら、私はどこかに奴隷として売られていたか、命を落としていたかも知れません」

クレルミロン邸へ向かう道すがら、世間話でもするような気軽な口調で、修一郎はこの世界にやって来た当時のことを、ソーンリヴに話していた。

「なるほどな……」

隣を歩くソーンリヴは、表情を消したまま、それだけを口にした。

「いやあ、この世界の言葉を覚えるのには苦労しましたよ。なにせ大学……こちらの世界で言うと“上級学校”になるのでしょうか。そこを卒業してから、語学の勉強なんてご無沙汰していましたからね。」

ただ、覚えなければ本当の意味で死活問題でしたから、必死で勉強しました」

いつもの笑顔を浮かべて、呑気な口調で喋る修一郎であったが、ソーンリヴは部下の変化に気付いていた。

「おかげで、三年も経った頃は行商人としてもなんとかやっていく程度には、色々と覚えることが」

「シューイチロウ」

口数の多くなった部下の言葉を遮るように、ソーンリヴが異世界からやって来た男の名前を呼ぶ。

「はい。なんででしょう?」

「本当に私が付いて行って良いのか?

マリボーさんは常に二人で行動しろと言っていたが、何だったら私は他の場所で待っていてもいいのだぞ?」

ソーンリヴは珍しく迷っていた。

普段であれば、自分に関係のないことなら、本人の問題だと一言で斬って捨てるような性格の彼女である。

だが今、目の前で“笑顔を作つて”、自らの過去を話している男は、どこか危うい感じがするのだ。

一年にも満たない、しかも主に職場の同僚としての付き合いでし

かなかったが、このような修一郎を目にしたのは初めてだった。
そんな彼の私的な用件に、自分がこれ以上踏み込んで良いの
だろうか。

逡巡するソーンリヴを暫く見つめていた修一郎は、肩の力を抜く
ように大きくため息を吐いた。

「ふう……。そうですね、矢張り無理はするものじゃないですね」

「では、私はさっきの店で茶でも……」

「いえ、大丈夫です。無理というのは、そういう意味ではありません
んよ。」

自分らしく行こうと思っただけです」

同行を辞退しようとしたソーンリヴを引き留めた修一郎の顔には、
本来のいつもの“笑顔が浮かんで”いた。

「今なら、笑ってあの人たちに会うことが出来ると思います。

だから、大丈夫ですよ」

そう言って、修一郎は歩みを進める。

一度は立ち止まっていたソーンリヴであったが、クレルミロン邸
へと向かう彼の背中を見て小さく嘆息すると、再び歩き出した。

「笑うことが出来るならそれでいい、か……」

修一郎らしい答えに、彼の後を追うソーンリヴの口許にも、いつ
しか笑みが浮かんでいた。

第十八話 クレルミロン夫人

クレルミロン邸は、アーオノシユ高級住宅街の一角にある。

綺麗に剪定された街路樹が両脇に並ぶ大通りを歩いて行くと、別の大通りに突き当たる。

その通りと通りが交差する角地に、豪奢という言葉をそのまま形にしたような邸宅が建っていた。

尤も、高級住宅地に建てられている家屋は、その殆どが同じ規模かそれ以上であったが。

ハーベラの現在の夫は、クロワバーシュ・クレルミロンといい、王都アーオノシユに本拠を構えるクレルミロン運送の三代目店主であった。

王都から各主要都市に伸びる路線馬車の運営は、クレルミロン運送が一手に引き受けている。

また、荷馬車の販売や賃貸、荷物の代行運送なども手がけており、“王都の足”と呼ばれるまでになっていた。

クロワバーシュは、祖父の代から築いてきたその店を、実に堅実な手腕で着実に発展させ、一般市民階級でありながらも高級住宅街に居を構えるほどの財を成した人物として、アーオノシユ市民に知られている。

クレルミロン邸に到着するまでに、修一郎からそういつた説明を受けていたソーンリヴであったが、実際に大邸宅と呼んでいい建物を目の前になると、その言葉に納得せざるを得なかった。

さすがに貴族階級でないため、騎士や兵士といった門衛の姿はないが、門扉の横に立っていたとしてもおかしくないほど、屋敷は大きい。

「話には聞いていましたが、文字通りの豪邸ですねえ……」

両開きの扉の前に設けられたポーチに立った修一郎は、屋敷を見上げるようにして、感嘆のため息を漏らした。

「お前の家の何倍あるかな？」

「比べるだけで失礼というものですよ。我が家では比較にもなりません」

そんな軽口をたたきながら、扉に取り付けられたノッカーで家人を呼ぶ修一郎。

暫くして、扉が内側から開けられると、そこには黒のスーツを見事に着こなした人間族の老紳士が立っていた。

「どちら様でございましょうか」

目の前に立つ人間族の男女の身形を確認すると、老紳士は落ち着いた声音で訊ねてくる。

二人の格好は、アオノシユの一般市民が着ている服と大差ない、ごくありふれたものだったが、この地区では逆に場違いな服装とも言えた。

老紳士の茶色の瞳に、自分たちを訝しむ色が一瞬横切ったのを見逃さなかった修一郎であったが、敢えて気付かないふりをして口を開く。

「突然の訪問、失礼します。私はシュウイチロウ・ヤスキと申します。」

「以前、クレルミロン夫人にお世話になった者ですが、夫人はご在宅でしょうか？」

軽く頭を下げて用件を告げると、修一郎はいつもの笑顔で老紳士の返事を待った。

ソーンリヴは修一郎の後ろで両手を前に重ねて、静かに立っている。この場は修一郎に全て任せるつもりのようなようだ。

「……少々お待ちいただけますか」

値踏みするように修一郎を一瞥した老紳士は、そう言ってお手本のような礼をして、扉を閉めた。

静かに閉じられた扉を見て、修一郎は軽く息を吐き出した。

「ふう。……執事の方ですかね？」

少しばかり怪しまれているみたいですね」

後ろに立つソーンリヴに頼りなげな笑顔を向けると、彼の上司は何を当たり前なことを、と言わんばかりに首を軽く横に振った。

「少しどころか、完全に怪しまれていただろうが。」

まあ、今の私たちはそこら辺の一般市民と変わらない格好だからな。当然と言えば当然だ」

「それもそうですね。」

ですが、店の制服がこの私服かくらいしか選べるものがないませんでしたから、仕方ないですよ」

「却って、制服のほうが良かったかも知れんぞ？」

「うーん……。それだと、どうにも仕事の延長で動いている気がして、落ち着かないんですよえ」

などと他愛もない会話を交わしていると、再び扉が開かれた。

「お待たせいたしました、ヤスキ様。奥様がお会いになられると……っ！」

丁寧なお辞儀をしながら口を開いた執事らしき男の台詞が終わらないうちに、突然目の前のその姿が消える。

「シュウイチロウ！よく来たわねえっ！」

老執事を突き飛ばしたのは、淡い緑色の毛糸で編まれたセーターのような短衣と薄紫のスカートに、純白のレースのついた絹の上掛けといった、見た目にも高級品と分かる衣装を身に纏った人間族の中年女性であった。

おそらく、この女性がハーベラ・クレルミロンなのだろう。

修一郎の話からすると、歳の頃は五十代に届くか届かないかといったところのはずだが、ソーンリヴの目には三十代後半に見える。

焦げ茶色の豊かな髪は銀細工らしき髪留めで後ろに纏められており、喜色を満面に湛えた顔には目立った皺も見受けられない。

顔つきや髪の色から、典型的なアルタスリーア南部出身の者と思われたが、肌の色は白く、北部出身者に南部の血が混ざっているのかも知れない。或いはその逆か。

いきなりの登場に驚いている様子の修一郎の後ろで、ソーンリヴは目の前の女性を観察していた。

「じ、ご無沙汰しています、ハーベラさん。お元気そうで何よりです」

やっこのことで口にした修一郎の挨拶に、ハーベラはまるで食堂の女将のような口調で応える。

「まったくだわ！」

何度も何度も何度も、顔を見せに来なさいって言ったのに、シュウイチロウったら全然訪ねて来てくれないのだから！」

両の拳を握って腰の辺りで上下に振るといって、まるで地団駄を踏む少女のような仕草で修一郎に詰め寄るハーベラに、漸く起き上がった老執事が苦言を呈した。

「奥様……。いきなり何をなさるのですか。」

何度も申し上げておりますように、クレルミロン家の名にふさわしい言動をとっていただかないと困ります」

「それなりの時と場所ではきちんとしてるでしょ！今はそうじゃないもの。」

そんなことより、ジュブラン。おもてなしの支度をして頂戴。

とびっきりのお茶とお菓子を用意して、ね」

毎度のことなのか、ジュブランと呼ばれた老執事は、やれやれといった様子で「かしこまりました」と答えると、三人に向かって一礼して屋敷の奥へと消えていった。

「さあ、シュウイチロウ。遠慮しないで入って頂戴。

……あら？そちらの女性は？」

ここに至って漸く気付いたのか、ハーベラが修一郎の後ろに立っていたソーニンリヴに声をかける。

「はい。こちらは私の職場の上司の……」

「ソーニンリヴと申します」

修一郎が言い終える前に、ソーンリヴは自ら名乗り、ハーベラに向かって丁寧なお辞儀を見せる。

「ソーンリヴさんね。お客様が増えるのは良いことだわ。

貴女も遠慮しなくて良いのよ。二人ともこちらにいらっしやいな」

左右の掌を胸の前で合わせる仕草で、修一郎に向けたものと変わらない笑顔でソーンリヴにそう告げると、ハーベラは屋敷の中へと二人を招き入れた。

苦笑を浮かべながら彼女に続く修一郎に向かって、ソーンリヴが小声で話しかける。

「……おい、シュウイチロウ。お前から聞いていた人物像とかけ離れているような気がするが、それは私の思い違いか？」

その問いに、修一郎は浮かべていた苦笑をそのまま返すことしかできなかった。

「そんなわけでね？シュウイチロウと一緒に旅することになったのだけど、最初の頃は本当に苦労したわ。

だって、言葉は全くと言っていいほど通じないし、頼みの『意思疎通』の魔法もシュウイチロウには効かなかったのだもの。

子供に一から教えるよりもよっぽど難しかったかも知れないわね

「」

その後、二人は大きな窓が壁一面に取り付けられた談話室に通された。

気泡や傷一つない綺麗なガラスをふんだんに使った窓からは、初春の陽射しが降り注ぎ、まるで温室のように暖かい。

部屋の中央には白く塗装された鉄製のテーブルと椅子が置かれ、窓際の壁には様々な鉢植えの植物があるあたり、実際に温室としても使われているのだろう。

二人をもてなすハーベラは終始にこにことしていて、修一郎に出会った頃の出来事を思い返すようにソーンリヴに聞かせていた。

当の修一郎は、照れながらも困惑したような微妙な面持ちで、時々たま「いやあ」だの「そうでしたかね」だのと曖昧な返事を繰り返している。

「あの頃は、ちょうど私も一番下の子がお腹に居たものだから、あまり動けなくて。

セギユール……あ、一番上の子の名前なのだけど、あの子と旦那に修一郎のことは任せっきりにしていたの。

でも二人とも人にモノを教えることが下手でね？結局最後は、私とパルメル……これは三番目の子ね。

私とパルメルで教える羽目になってたわねえ」

当時を懐かしむように窓の外に一度視線を向けてから、ハーベラはティーカップに注がれた紅茶を口にした。

ジュブラン執事が淹れてくれた紅茶は、アーセナクトや王都で飲んだどの紅茶よりも香りが高く、渋みと仄かな甘みの調和が取れていて、口にする者の嗅覚と味覚を楽しませてくれる。

「そういえば、セギユール君たちは元気になっていますか？

フォーンロシエさんからは、騎士団や医術士になったと聞いています」

いい加減、自分の話題ばかりで居心地が悪くなったのか、修一郎が話題の転換を図った。

「それはもう元気にしているわよ。」

今、ジュブランに連絡を取るように言っているから、暫くしたら顔を見せるのではないかしら。

あの子たちもシュウイチロウが来たことを知ったら、喜ぶと思うわー」

一方は満面の笑みで、もう一方はいつもの頼りなさそうな笑顔に苦笑を滲ませて、それでも楽しげに会話する二人を見ながら、ソーンリヴは殆ど発言していない。

少し前に、久々の対面に積もる話もあるだろうから、と席を外そうとした彼女であったが、ハーベラの有無を言わせぬ笑顔と言葉によつて、修一郎と共に談話室の客となることを強いられている状態であった。

「ところで、ソーンリヴさん。シュウイチロウは職場ではどのような様子なの？」

何か失敗でも仕出かして、皆さんに迷惑をかけていないかしら？」

突然自分に振られた話に一瞬とまどったソーンリヴであったが、暫しの間を置くことなく、この世界での修一郎の母親と言つてよい女性を見つめて答える。

「彼は良くやってくれています。」

魔法が使えないことは、事務員として短所と言えば短所ですが、真面目ですし、彼が元居た世界での経験を仕事にも活かしているようですから、然したる問題ではないでしょう。

彼の人柄のおかげもあってか、店で働く者たちとも良い関係を築いています」

さすがに普段の男口調で喋ることはせず、落ち着いた女性のそれで、修一郎に対する評価を下すソーンリヴ。

それに、と付け加えるように、

「彼のもたらしたあちらの世界の技術や知識で、当店もかなりの利益を上げているようですし」

と、続けた。

「ちょ、ちょっと、ソーンリヴさん……」

隣で慌てる部下を見遣ると、深い藍色の髪をした上司はいつもの言葉遣いで平然と応じる。

「どうした？私は事実を言っているだけだぞ？

例え、お前が世話になった人物の前だろうが、私は使えなければ使えないと言う性格だ。

事実、お前は充分に役に立っているし、店の皆とも上手くやって
いるだろうが」

言い終えると、ソーンリヴは自分の目の前のティーカップを持ち、
口に運ぶ。

修一郎は気付かなかったが、紅茶の香気を愉しんでいるように見える上司の頬は、ほんの僅かに赤く染まっていた。

口ではああ言ったものの、事実とは言え、本人を目の前にして褒めることに幾らかの抵抗があったのかも知れない。

「そう！良かったわー。「あの人」の教育の賜物かしらね？
仕事もだけれど、シュウイチロウの交流関係が良好と分かっただけでも嬉しいわ」

心底安心したような明るい笑顔で、ハーベラが大袈裟に胸を撫で下ろす仕草を見せる。

先ほどの言動を見る限り、実年齢は五十歳に近いはずの、外見は三十代後半の容姿を持つこの女性は、その精神的活力によって若く見えるのではないだろうか、とソーンリヴは推察した。

「ヒトに恵まれたのは間違いないですね。コタールさんやハーベラさん、マリポーさんには感謝していますよ。」

あ、もちろんソーンリヴさんにも感謝しています」

台詞の前半分はハーベラに向かって、後半分はソーンリヴに向かって発せられたものだ。

「ふふつ。それに、グラナやフォーンロシエにも、でしょ？」

榛色はしほみの瞳に悪戯っぽい光を宿らせて、ハーベラが修一郎の言葉に付け足した。

そうでした、と笑いながら修一郎がティーカップに手を伸ばそうとしたその時、部屋の外から賑やかな声が響いてくる。

「シュウイチロウが来てるって！？どこに居るんだ、ジュブラン！」

少年と思しきその声は、確実にこちらに近づいているようだ。

ジュブラン執事が何かを言っているようだが、「分かってるよ」だの「いいから早く」だのと答えていることから、少年はいつものことと聞き流しているのだろう。

然して間を置かずに、談話室の扉がノックされる。

「はい。どうぞ?」

笑いを噛み殺した声で女主人が応えると、すぐに扉が開かれ、老執事が軽く一礼する姿が見えた。

「奥様、ランシユ様がお戻りになられま……っ!」

玄関先で繰り広げられた騒動を丸々再現するように、老執事の体が横に突き飛ばされる。

「シユウイチロウにーちゃん!」

変わりに姿を現したのは、王立学校の白い制服に身を包んだ十二歳ほどの、肩口まで伸ばしたくすんだ金髪に薄い茶色の活き活きとした瞳が印象的な少年であった。

背丈はソーニンリヴの肩あたりで、その年代の少年の平均身長よりは幾分低いようだ。

「ランシユ、久しぶりですね。また背が伸びましたか?」

座っていた椅子から立ち上がると、少年に向かって歩きながら修一郎が破顔する。

その言葉に、修一郎に飛びつこうとしていた少年の動きが止まった。

「分かってて言ってるだろ……にーちゃん。身長なんて殆ど伸びてないよ!」

自身の身長を気にしているのだろう、ランシュは恨みがましい目つきで長身の相手を見る。

「そんなことはありませんよ。二年……いや、あの時はランシュは学校に行っていて会っていませんから、三年半になりますか？」

あの頃に比べると、随分と大きくなっていますよ」

「そりゃそうだよ！あの頃はまだ十歳にもなっていないじゃないか！あれから成長してないなら、もう身長がどののという問題じゃないよー！」

噛み付くように言い募るランシュであったが、本気で怒っているようではないらしい。

「これ、ランシュ。お客様はシュウイチロウだけではないのよ。もう少しクレルミロン家の三男として振る舞いなさいな」

自分のことは遠くの棚に放り投げておいて、ハーベラが息子を窘める。

言われて気付いたのか、ランシュは、椅子に座って興味深げにこちらを見つめている深い藍色の髪的女性に慌てて頭を下げた。

それに合わせて少年の金髪がさらりと揺れる。

「あ、し、失礼しました。俺……じゃなかった、僕はランシュ・クレルミロンと言います。王立学校普通科に通う二年生です。

騒がしくしてしまい、申し訳ありません」

「……まったくです。ランシュ様にも、もう少しクレルミロン家の一員であることを自覚していただかないと困ります」

床に突き飛ばされていたジュブラン執事が起き上がり、咳払いを一つして、ハーベラに同調した。

「分かってるって。ジュブランは五月蠅いなあ」

口うるさい執事を一瞥すると、ランシュは修一郎に向き直り矢継ぎ早に質問を投げつける。

「にーちゃん、何時王都に来たの？どれくらい滞在するつもりなの？何の用事で来たの？もしかして俺達に会いに来てくれたとか？そう言えば、アーセナクトに家を買ったって聞いたけど本当？」

修一郎の胸のあたりまでしかない身長のため、ランシュは修一郎の顔を文字通り見上げながらの質問であった。

「王都に来たのは先月の中頃ですよ。仕事で来たのですが、それも終わりましたから、明日にはここを発ってアーセナクトに戻る予定です。」

今日は偶々時間が取れたので、ハーベラさんにお会いするために寄らせてもらったのですよ。

それから、家を買ったのは本当です。しかし、何時の間にそんな話を？」

久々の再会に興奮する少年に対し、馬鹿丁寧の一つ一つ答える修一郎は、それでもどこか嬉しそうに見える。

親子と言って良いほどに歳の離れた二人であったが、ランシュが生まれて物心ついてからも常に傍に居て面倒を見てくれた修一郎に対し、少年は実の兄よりも修一郎を慕っていると言っている。

そんな二人を見ながら、ソーンリヴはハーベラにだけ聞こえるようにそっと呟いた。

「シュウイチロウを慕っているようですね」

「そうねえ。あの子が生まれてからは、ずっとシュウイチロウが傍に居たからかしらね。」

一番上のセギユールは騎士見習いとして騎士団の寮に入って居なかつたし、二番目の子カーロンと三番目の子パルメルは、当時学校の寄宿舎に入ってたから……。

ランシュにとっては、私たち親の次に身近に居た年上だったのよ」

ハーベラのたおやかな指が、空になったティーカップを持ち上げる。

それに気付いた老執事が、お代わりの紅茶を注ぐ。

午後の陽射しが女性二人を優しく包み、その周囲だけ緩やかな時間が流れているような錯覚に囚われる。

二人して暫く修一郎とランシュの遣り取りを眺めていると、再び玄関から人の声が聞こえてきた。

「ジュブラン、ジュブランは居る？ シュウイチロウが来ていると聞いたのだけれど」

「こちらです、お嬢様」

談話室の入口に立っていた老執事が廊下の先に向かって、声をかけた。

「ありがとう。あ、ちょっと邪魔だからどいてくれるかしら？」

「パルメルお嬢様、邪魔とはどうい……っ！」

クレルミロン家の息女に向かって執事としての礼を欠かさぬジュブランが、声の主にお辞儀をしようとしたところを、押しのけて金髪の妙齡な女性が姿を現した。

医師士が愛用している白衣に身を包んだその女性は、談話室の中で会話を交わしている弟と、その相手の長身を男の姿を見て、相手を崩す。

「シュウイチロウ、お久しぶりね！元気にしてた？病気なんかしてないでしょうね？」

どうやらこの家族は執事に対して同じような行動を取るらしい。似たような光景を短時間のうちに三度も見せられては、そうしか思えないソーニンリヴであった。

同時に、他人事ながら、苦勞しているうであるジュブラン執事に僅かばかりの同情を覚える。

背丈はソーニンリヴと同じくらいであろうか、ランシュとは違い、緩く波打つ見事な金髪をした色白の美しい女性が談話室へと入ってくる。

「パルメル姉さん。医術院のほうはいいの？」

「あー、あつちは助手に任せて来ちゃった。急患もないし充分対応できるでしょ」

手をひらひらと振りながらさも問題ないといった口調で、弟に伝える女性に、修一郎が口を開いた。

「パルメルまで戻ってきたのですか！？そんな無理する必要はないと思います。」

まさかセギユールやカーロンまで集まって来るんじゃないでしょ

うね？」

「んー。セギユール兄さんはどうも抜け出せないみたいでね？多分戻るのには夜になるでしょうね。」

「カーロン兄さんも、今警護団で何か調査してるみたいで、今日は帰って来ないんじゃないかなあ。」

「まあ、その分私がこうやって来たんだから、それでいいじゃない？」

「ハーベラの子供二人が戻ってきたことで、ジユブラン執事を入れて四人であった談話室の人口が一・五倍に増えた。」

「談話室のテーブルに備え付けられている椅子は四脚しかないので、座って落ち着いて話せるような状況でもなくなってきている。」

「母親に窘められる前に、パルメルはソーンリヴに向かって手本となるようなお辞儀を見せ、ようこそ我が家へいらっしやいました、と告げた。」

「ソーンリヴが立ち上がって返礼をしようとした時、女主人であるハーベラの声が談話室に流れる。」

「そうね、あなたたちもシュウイチロウに積もる話もあるでしょうから、いっそのことパルメルの部屋でお話してきたらどうかしら？私とソーンリヴさんは、もう暫く、この談話室で女性同士の会話を楽しむことにするから」

「それを聞いたランシュ少年は、良い案だとばかりに、既に修一郎の手を引いて部屋から出て行くこうとしている。」

「いや、しかし……」

「なんとか抗議しようとした修一郎であったが、ハーベラの一言で

それを諦めるしかなかった。

「あら？子供たちが貴方と話したいと言っているのよ？」

それともシュウイチロウ。貴方はそんな子供たちの願いを聞き入れることが出来ないと言うのかしら？」

ハーベラの表情は相変わらずにこにこと笑顔が浮かんでいたが、身に纏う雰囲気は有無を言わせぬものがあるように修一郎には思われた。

「はあ……。分かりましたよ。」

ソーンリヴさん、そういうわけで少し席を外します。すぐに戻ってきますので……」

修一郎は諦めたようにため息を一つ吐くと、申し訳なさそうな表情で、ソーンリヴに断りを入れた。

「シュウイチロウは気にしなくていいの！女同士の会話を男性が聞くものではないわよ？」

ソーンリヴが口を開く前に、ハーベラがぴしゃりと言い切る。

「そ、それではちょっと行ってきます」

いつもの情けなさそうな表情のまま、ランシュとパルメルに引き摺られるように、修一郎が談話室から姿を消すと、先ほどまでの騒ぎが嘘であったかのように、室内に静寂が訪れた。

ジュブラン執事も、パルメルの部屋にお茶の準備をするべく、談話室から退室していった。

静かに閉じられた扉を見ていたソーンリヴは、ハーベラに視線を

移し、表情を消したまま口調だけを真剣なものに変える。

「人払いをされたということは、何か私に用件があると思って良いのでしょうか」

怜悯な人間族の女性は、ハーベラの意図することに気付いたようだ。

それを見たハーベラはにこにことした笑顔を変えることなく、言葉を発する。

「あら。気づいたのね。

ふふ……。さすがはシュウイチロウが信頼している女性というところかしら」

アオノシュ支店での一連の騒ぎに、クレルミロン運送が絡んでいるのかも思ったソーンリヴであったが、業種が違いうえに、マリボー商店の商業活動が停滞すれば、運送業としては損はあっても益はないと思われる。

実際に、マリボー商店が所有する荷馬車で積荷の搬送が対応できない時などは、クレルミロン運送を利用してもいるのだ。

マリボー商店にちよっかいを出しているのはクレルミロン運送ではない、とソーンリヴは結論付けた。

では、この豪商の夫人が自分に何の用件があると言うのか。表情には出さずに、ソーンリヴは心の中で警戒心を深めることにした。

「そんなに警戒しなくても大丈夫よー。シュウイチロウを理解してくれている人に、ちよっとした昔話をね、聞かせてあげようかなーって。

ほら、本人が居たら話せないことってあるじゃない？」

先ほどより更に砕けた口調になって、ハーベラが笑う。

しかし次の瞬間、その笑顔は見る間に消えて、どこか悲しげな、それでいて昔を懐かしむような表情に変わっていた。

「何となく……。何となくだけどね？ 貴女には知っていて貰いたい
と思ったの」

そして、ハーベラの長い昔話が始まった。

第十九話 コタールという商人

「お茶のおかわりはいかが？」

二人きりになった談話室で、ハーベラがお茶をソーンリヴに勧め
る。

「いただきます」

ジユブラン執事が退室する際に淹れなおしていた紅茶の入ったポ
ットから、ソーンリヴのティーカップに透明感のある赤い液体が静
かに注がれる。

立ち上る香気がソーンリヴの鼻腔をくすぐり、この家の客人であ
る深い藍色の女性は、その香りを愉しみつつ、ハーベラの言葉を待
った。

初春の陽は既に傾き始め、窓から差し込んでくる陽射しは、談話
室を淡いオレンジ色に染め上げていた。

もつじき、王城の大鐘に合わせるように教会の子鐘が四つ鳴る時
間帯である。

自分のカップにも紅茶を注ぎながら、ハーベラが口を開いた。

「さて、どこから話したのかしらね？」

私たちとシュウイチロウと出会った頃のお話はしたわよね？」

「ええ。シュウイチロウからも聞いています」

「そつ……。他には？」

「いいえ、これといっては。あちらの世界のことに多少尋ねたりはしましたが」

ソーンリヴがカップを受け皿に戻す際に鳴った小さな音は、談話室の中に響くことはなく、周囲の静寂に吸い込まれていく。

「ふふ……。あれだけ“あの人”から、迂闊に自分の居た世界のこととは他人に話すな、と言われていたのに相変わらずなのね、シユウイチロウは。」

それとも、余程貴女のことを信頼しているのかしら？」

「どうでしょう？アイツはどこか抜けているというか、適当なところがありますから。」

まあ、怖い上司と思われるのは確かでしょうね」

唇の片端を持ち上げるいつもの表情で、ソーンリヴは笑った。口やかましい上司という役を演じている自分に対して。

その様子を見ていたハーベラが、諭すように目の前の女性に言う。

「シユウイチロウのことですもの。きっと気付いていると思っわよ？」

何に、とは明言しない。

過去に行商人の妻として、現在はアーオノシユでも有数の大店を切り盛りする男の妻として生きてきたこの老年に差し掛かるうとしている女性には、ソーンリヴの言わんとしていることが理解できているようであった。

「だとしたら、少しばかり恥ずかしいですね」

言葉どおり、僅かに頬を上気させた頬でソーンリヴが応じる。

「そうかしら？そんな貴女だからこそ、私はお話したいと思ったのも。

“あの子”を含めた私たちの過去を、ね」

ハーベラ・クレルミロン……旧姓ハーベラ・アペンツェルは、我が子たちに質問攻めにさせている真つ最中であろう、異世界人の男の姿を思い浮かべて、一つ笑いを漏らすと話し始めた。

異世界の日本という国から、アルタスリーア王国にやって来た安来修一郎が、アペンツェル夫妻に拾われて一年半が過ぎようとしていた。

それまでは、殆どと言って良いほど通じない言葉に四苦八苦しなからの旅であった。

ハーベラやパルメルが身振り手振りで、何とか簡単なコミュニケーションを取ることが可能といった状態が数ヶ月続いた。

ハーベラの夫であるコタールも、どうやら修一郎が本物の異世界人であると結論付けたようで、都市から都市への移動の最中など手の空いた時間を使って、少しずつこの世界の言葉を教えるようになっていた。

コタールは、人間族、獣人族合わせて総勢二十人を超える隊商の隊長だった。

隊商とは、アルベロテス大陸中を旅し、その土地その土地で商品の仕入れや販売を行う、旅商人の集団だ。

それまではバンルーガ王国やルザル王国まで足を伸ばすこともあ

つたが、ハーベラが四人目を身籠ってからは、アルタスリーア国内の比較的大きな都市を主な商圏と定めたようであった。

後々判明することであったが、修一郎が現れた場所は、アルタスリーア王国の王都であるアオノシユとその南に位置する漁業の街スアバーを結ぶ公路の途中であつたらしい。

王都で日用品や衣服に用いる麻や木綿の生地などを仕入れ、スアバーでそれらを売り、そこで得た資金を元手にスアバー特産の魚の干物や海産加工品を仕入れて、王都へ戻る最中に修一郎に出くわしたとのことであつた。

ともあれ、ハーベラが無事四人目の子供を出産し、修一郎が片言ながら何とか簡単な会話が出来るようになった頃、コタールは一度隊商を解散させ、アオノシユに借りた一軒家にハーベラを住まわせるように手配した。

さすがに乳飲み子を連れての旅は、子供にも母親にも多大な負担をかけることになる。

十四歳になつた次男のカーロンと十三歳の長女パルメルに、母親のハーベラと生後二ヶ月の三男ランシユ、それに加えて異世界人の修一郎を託し、コタールは十七歳の長男セギュールを連れて行商を再開した。

当時、コタールはセギュールを自分の跡継ぎにしようと考えており、セギュール本人も父親の跡を継ぐつもりであつたからだ。

修一郎は、子供たちが愛読していた御伽噺や寓話の本を教材として、そしてカーロンやパルメルを教師として、大陸公用語を学んでいた。

コタールは一ヶ月から二ヶ月に一度は王都に戻り、妻や子の近況や修一郎の様子を把握するように努めていた。

「シユウイチロウ、どうだ？こちらの世界の言葉は覚えたか？」

コタールが戻る度に投げ掛けられている何回目かの公用語での質問に、修一郎も同じく公用語で答える。

「はい。とりあえず会話は問題ないと思います。ですが、読み書きはまだ不安が残ります」

カーロンが言う。

「うん。シュウイチロウが言うとおり、日常会話は大丈夫だと思う。文字の読み書きについても、俺と同じくらいには出来るようになったから、そこまで心配しなくてもいいんじゃないか」

「さすがに公の文書のような“お堅い”言葉遣いは、まだまだだけどね。

ねえ、父さん。今度、シュウイチロウに大人が読むような本を買ってあげて？

私たちが持っていた本は、どれも完璧に読めるようにはなかったから」

カーロンの言葉を補足しながらも、もう一人の教師役パルメルが父に強請る。

カーロンも勉強は嫌いではないのだが、どちらかと言うと体を動かすことを好み、修一郎の語学習得状況を正確に理解しているのは、パルメルのようにであった。

「そうは言うがね、パルメル。本はなかなか馬鹿にならない値段がするんだぞ？」

おいそれと買えるようなものでは……」

「でも、もしシュウイチロウがこの世界で生きて行かなくちゃならないなら、いつかは必要になるわ。」

公用語の文字が完全に習得できたなら、父さんの仕事だって手伝えることも出来るんだし」

渋るコタールにパルメルが畳み掛けるように言い、ハーベラが笑いを含んだ声で追い討ちをかける。

「いいじゃないの、あなた。パルメルは将来、魔法院で働きたいと言っているし、何もシュウイチロウだけが使うわけでもないもの。」

それに、もしかしたらこの子も勉学の道を選ぶかも知れない。そう思えば、高い出費ではないでしょう？」

胸の前に来るように位置を合わせた抱き紐の中で眠る、一歳半のランシユを見つめながら、四児の母であり行商人の妻でもある女性が柔らかな笑みを浮かべた。

「分かった、分かったよ。まったく、お前たちはシュウイチロウに甘いな。」

その代わり、文字の読み書きを習得したら、俺の仕事を手伝わせるからな？」

前半は妻子に向けて呆れたように、後半は修一郎に向けて投げ遣り気味に、コタールが応じる。

口では何だかんだと言うものの、結局のところ妻子には敵わない夫であった。

加えて、異世界人ながらもコタールの留守の間、子供たちと共に家を守ってくれている修一郎に対し、多少なりの信頼或いは感謝の念が芽生えているのかも知れない。

「シュウイチロウは事務の経験があるんだろ？ だったら、俺としても手伝ってもらえると嬉しいな。」

取引は俺と父さんが担当して、商品の在庫や売り上げ管理なんかをシュウイチロウに担当してもらえれば、かなり楽できそうだ」

事の成り行きを面白そうに黙って眺めていたセギユールが、父親が折れたのを見計らって発言する。

セギユールはセギユールなりに、修一郎を様々な面で観察し、会話から彼の性格や知識を聞き出すなどして、この異世界人を信用することにしようであった。

実際、この世界に於いては商人や学者でもない限り、加法・減法はともかくとして、二桁以上の乗法・除法を理解して扱うことができる者は稀である。

修一郎があちらの世界で就いていたと言つ、数字を扱う仕事に立つかも知れないのだ。

「俺が明日にでも街で見繕って買ってくるよ。シュウイチロウやパルメルに有用な本をね」

そう言い残して、セギユールは自分に割り当てられた部屋へと消えていった。

長男の背中を見送ったコタールは修一郎に視線を移すと、苦笑に似た表情を浮かべ、極々簡素な家族会議の結果を異世界人の男に告げる。

「そういう訳だ、シュウイチロウ。一日も早く、頑張つて言葉を覚えてくれよ。」

お前の世界にあるのかは知らないが、こちらの世界には“受けた恩を返さない者は一生半人前”という諺があるんだ。

それに、俺は商人だ。投資したカネは、利息を付けて回収するの

が当たり前の仕事をしている。

俺に拾われたことを幸運と取るか不幸と取るかはお前次第だが、異世界人のお前に対しても俺は商人として接するつもりだからな」

「はい。それは理解しています。

少なくとも、受けた恩を仇で返すような真似はしません。安心…

…じゃないな、ええと、信じてください」

いたって真面目な面持ちで返事をする修一郎に、パルメルが笑いながら小さな訂正をする。

「シユウイチロウ、惜しいけどちょっと違うわ。そういう時は『心配は要らない』と言うべきよ」

「そうでした」

尚も真剣な表情を崩さない異世界人の態度に、ついに耐えかねたのかハーベラが声を立てて笑った。

それに釣られるように、カーロンが、次いで指摘した本人のパルメルが笑い出し、状況を理解していないランシュまでもがハーベラの腕の中で無邪気な笑い声を上げている。

行商人の一家に転がり込んできた、青年というにはやや臺とが立っている男の、王都での生活はこの後一年半続いた。

末っ子のランシュが三歳になると、アペンツェル一家は再び全員で行商を再開することとなった。

修一郎がこの世界にやって来て、四年目の春の二の月のことである。

この頃になると、修一郎もこの世界……と言うよりこの大陸の公用語の会話や読み書きはほぼ完璧にこなせるようになっており、日常生活には何ら支障をきたさない程度には慣習や文化も理解していた。

だが、それに伴って、修一郎はどことなく投げ遣りな態度を時折り見せるようになり、それを目にしたコタールとハーベラは、一抹の不安を感じていることも確かであった。

この世界の言葉を解し、文化や歴史を知るにつれ、修一郎の中に「もう元の世界には戻れないのではないか」という、恐怖を伴った諦観が根を張っていったようだ。

どういった理由でこちらの世界に来る破目になったのかは、分からない。

だが、コタールや王都で知り合った人々に尋ねるうちに、異世界人は自分だけではないことが判明した。

この国に限って言えば、過去にも数人の異世界人が存在していたという記録や言い伝えが残っており、それを裏付けるように、修一郎の世界の言葉の一部はこの世界でも普通に使われているのだ。

それが分かった時には、修一郎は希望を抱いたのだが、記録や言い伝えの最後は、必ず“その異世界人はこの国で一生を終えた”という言葉で締め括られており、一瞬でも喜んだ分、その事実による反動は大きかった。

この世界に来た当初は、とにかく先ずは言葉の壁を何とか乗り越えねばならず、他のことに気を回す余裕がなかったこともあって、修一郎はその日その日を懸命に過ごすことで回帰の念を抱くことは殆どなかった。

しかし、ここに至って幾らかの精神的余裕が出てきたことが、逆に修一郎を追い詰める形になっていったのだ。

無論、今もアペンツェル一家の世話になっている状況であるから、普段は温和に振舞っている修一郎であったが、ふとした弾みに、どこか一歩引いた視点で物事を判断するような態度を見せるようになる。

っていた。

それを見かねたコタールが下した決断が、一家揃っての行商の再開であり、修一郎を旅に連れ出すことであつた。

この国で生まれ育つたコタールは、異世界人についての知識をある程度なら持つているのだが、それは飽くまでもアルタスリーア国内に居た異世界人に関してのことであり、他国や他大陸での異世界人に関する知識は皆無と言って良い。

ならば、行商で立ち寄る街や国で、異世界人に関する新たな情報が得られるかも知れないというのが、コタールの目論見の一つであつた。

ランシュがある程度大きくなるまではアルベロテス大陸を出るつもりはなかつたが、いずれは他の大陸に足を伸ばしても良いとまで考えている。

それは、修一郎のためだけでなく、コタールの商売の発展にも繋がることであつたため、ハーベラやセギュールも、コタールの考へに賛成してくれていた。

この大陸を巡り、他大陸でも情報を収集することで、修一郎の心境に少しでも変化をもたらすことが出来れば良い。それが、希望であつても、諦念であつても。

そこから先は、修一郎本人が決めることであり、コタールもハーベラも口を出すつもりはない。

運命を厭うてコタールたちの前から姿を消すなら仕方ないし、この世界に骨を埋めるつもりで生きていくならそれもまた良し。その際には、多少なりの助言は出来るだろう。

それが、修一郎を拾つた行商人夫妻の出した結論であつた。

行商を再開したコタールは、まずはクレルミロン運送で新たに荷馬車を一台調達した。

同行する人数が増えたことにより、荷台に商品を積む余裕が少なくなつたためだ。

店主のクロワバーシユは、コタールの古くからの友人で、ハーベラとも面識がある人物だった。

一台はコタールが手綱を握って家族を乗せ、もう一台はセギュールが商品を運ぶことになった。

その後、王都の商館にて隊商に参加する行商人を募り、一定数が集まった時点で、コタールは一路アーセナクトを目指した。

アーオノシユの特産となっている、これも異世界人がこの世界にもたらしたと言われている白磁の食器や、絹織物などを仕入れ、二十数名の行商人の集団が公路を進む。

「いいかね、シユウイチロウ。ここアルタスリーア王国では、政の中心はアーオノシユだが、商いの中心はアーセナクトにあるんだ。」

商人や商人を目指す者なら、一度は訪れておかなければならない街と言われている。

それに、様々な地域の商人が集まる場所ならば、シユウイチロウのような異世界人に関する情報なり手がかりなりが手に入るかも知れない。

幸い、アーセナクトには腐れ縁の知り合いも居る。奴との伝を作っておけば、今後何かと便利だろう」

御者台に並んで座る修一郎にコタールは馬車の手綱を渡し、自分のはのんびりと前方を見据えたまま話している。

アーオノシユと各主要都市を結ぶ公路は、国内に張り巡らされた多数の公路の中でも人通りの多い公路であることから、定期的に騎士団が巡視を行っているため、治安は良いと言える。

特に、アーオノシユとアーセナクトの間にある公路は、最も交通量が多く、最も安全な公路として知られており、魔獣や野盗といった外的脅威とは縁遠い道であった。

無論、公路から少しでも外れればその限りではないのだが、未だ陽が天高くある今の時間帯の公路を進む隊商には、穏やかな空気が

流れている。

馬の蹄鉄が路面を叩く小気味良い音に、馬車の車輪がたてる重く低い音、荷台で笑い声を上げるランシユとその兄弟たちの会話に、隊商に参加している他の行商人たちの会話。

空には雲雀に良く似た小鳥が数羽、これまた雲雀に良く似た声で囀っている。

「アーセナクトに着いたら、お前にも商売の手伝いをしてもらおうつもりだ。

だが、仕事の合間は好きにしてい。市庁舎を訪ねるなり、魔法院で過去の記録を閲覧させてもらうなり、自分のことに時間を使いなさい。

もちろん、仕事を覚えるつもりがあるなら、俺がみっちり叩き込んでやってもいいがね」

何か面白いことでもあったのか、荷台の中で笑い転げているカーロンとランシユ、ハーベラにすぎるようにして兄弟を睨んでいるパルメルを見遣って、コタールが続ける。

「お前の境遇に同情することは出来るが、手助けしてやれることとなるとそれほどあるわけでもない。

精々が、俺の持っている知識と人脈をお前に教えてやる程度だ。そこからどうするかはお前が決めることだからな。

まあ、それが分からないほど若いわけでもないのだから、これは言うまでもないことか」

「……………はい」

修一郎は前方に伸びる公路に目を向けたまま、一言だけ口にした。

「このまま行けば、陽が沈む前にアーセナクトに到着するはずだ。隊列の先頭をセギユールに交代させるから、馬車を二番手に下がらせなさい。」

俺はその間、少し休ませてもらう。シユウイチロウも疲れたら、カーロンに変わらせるから遠慮なく言うんだぞ」

コタールはそう言うと、御者台から危なげなく立ち上がり、後方に付いて来ていたセギユールが操る馬車に向けて声を上げた。

すぐさまセギユールと、コタールと昔から付き合いのある行商人の犬人族の二人が乗った荷馬車が、修一郎の操る馬車を追い越して前が出る。

馬車の速度を調節しながら、異世界人の男は何やら考え込んでいるようであった。

そんな修一郎を他所に、そのまま隊列は何の問題もなく進み、やがて一行はアーセナクトに到着した。

談話室が濃いオレンジ色に染まっている。

紅茶の香りと、いくつかの鉢植えが咲かせている花の香りが渾然となつて室内を満たし、歳の離れた二人の女性を包み込んでいた。

昼というには遅く、夜になるにはもう暫くはかかる時間である。

思い出話を途中で止めたこの屋敷の女主は椅子から立ち上がると、軽く伸びをして、話し相手である年下の女性に向き直る。

「そんな感じだね？シユウイチロウも一時期は、何というか、少し投げ遣り気味なときもあったのよ。」

今の“あの子”からは想像できないかも知れないけれど」

ハーベラが小さく笑うと、ソーンリヴは素直な感想を口にした。

「そうですね……。確かに、今のあいつとはすぐには結びつきません。

ですが、もし私があいつの立場になった場合を想像すると、同じような態度を取らないと言い切れません」

「そうねえ。私だってたった一人で全く知らない世界に放り出されたら、どうなるか分からないわ。

それは大抵のヒトに言えることでしょうね」

ハーベラも、修一郎の立場を自分に置き換えて想像したことはあるのだろう、自然な口調で応える。

その世界で生きてきた時間が長ければ長いほど、何らかの柵しかいみがヒトには付き纏う。

家族であったり、友人であったり、恋人であったり、そういった人間関係だけに留まらず、生活基盤や社会的地位なども含まれるだろう。

それらが何の前触れも、容赦も、本人の意思すらも関係なく、強引に断ち切られ、知らない世界に放り出されるのだ。

それで何の思いも抱かないほうがどうかしている。

「ですが、シユウイチロウはそれを乗り越えたのでしょうか？だから、今のあいつがある」

「うーん……。乗り越えた……。のかしらね？正直なところ、まだ私も確信は持ててないのよー」

どこか無理矢理おどけたような口調で、ハーベラは自信がないと

告げた。

でも……と、続ける。

「“あの子”がここに来たってことは、そういった一切のことを乗り越えた……いいえ、少なくとも飲み込んだからだと思いたいのだけれどね」

ポットの紅茶がなくなっていたため、部屋の外に待機していた老執事に新たな紅茶を持ってくるように命じると、ハーベラは再びソーンリヴと向き合うように椅子に座った。

第十九話 コタールという商人（後書き）

言い訳は活動報告にて。

とりあえず、更新が遅れてすみません……。。

第二十話 マリポーとグラナとフォーシロシエ

アーセナクトに到着し、行商人が良く利用されると言われている宿屋に部屋を取ったコタールは、子供たちと荷馬車を宿に残して、ハーベラと共に修一郎を街中へと連れ出した。

王都アーオノシュに比べ、若干ごつごつとした感触の石畳の上を歩きながら、コタールが今から向かおうとしている場所について説明する。

「奴は、俺たちとシユウイチロウが会う三年前まで隊商の代表者をやっていたのだよ。」

個人的なことを言えば、俺が行商人を始めてからの付き合いになるから、もう二十年以上になるか。昼にも言ったが腐れ縁というやつだな。

商売には貪欲だが、人を見る目も持っているし求心力もある。アーセナクトに店を構えて七年で、既に五人以上の従業員を雇うことが出来るまでに店を大きくした奴だ。

今後お前がどのような身の振り方をするつもりなのかは知らないが、王都やこの街をはじめ、主だった都市で人脈を確保しておくことは、いつか必ず役に立つだろう。」

春の二の月は、修一郎の世界で言うところと三月にあたる。この世界に春分という言葉はないが、それに該当する日は既に過ぎており、徐々にではあるが陽が天にある時間が長くなってきているのは、修一郎にも分かる。

王都ほど数は多くないものの、術石式の街灯も大通りが交わる場所に設置されており、魔法院から委託された吏員が街灯の一つ一つに術をかけて回っている。

もう子鐘半分もしないうちに陽は沈み、夜が訪れようという時間帯であった。

「ほう。お前さんがコタールの所に転がり込んできたという異世界人か。

上背はあるが、それだけのようだ。筋肉もろくに付いてないようだし、表情にも覇気が感じられん。

俺が聞いた、過去にこの国に居た異世界人のどれとも雰囲気は違うな。

ところで、こっちの言葉は覚えているのか？」

修一郎が連れて行かれた店の主人は、彼を見るなり、低いが良く透る声でそう言った。

砂色の髪と瞳を持つこの商人は、背丈こそコタールと殆ど変わらないものの、横幅はコタールの一・五倍近くあった。

「シュウイチロウ・ヤスキといいます。仰るとおり、コタールさんのところでご厄介になっています」

「ああ。俺は、マリボー・ワットだ。見て分かるだろうが、ここア―セナクトで雑貨屋をやっている。

どうせ、コタールの奴からはあることないこと吹き込まれているのだろう？」

丁寧な公用語と一礼で答える修一郎を見て、満足げな笑みを一瞬浮かべたマリボーは、その口許を僅かに歪めてコタールを一瞥した。

「あることないこととは失礼な奴だ。俺は本当のことしかシュウイチロウには伝えておらんぞ。

カネ儲けに目敏くて抜け目のない奴だが、それ以外は普通だ、と

な。

それにしてもマリポー。お前、また太ったんじゃないか？」

人の悪い笑いでコタールがやり返すが、コタールの旧くからの友人であるこの商人には一向に堪えていないようであった。

「そうでなければ、この商人の街で店など構えてられんのだ。」

特に、行商人上がりで、十年も経たないうちにここまで成り上がった俺のような者は、周りの商人からの風当たりもきつい。

まあ、この程度で折れているようでは、この先やって行けないかな。嫉み妬みそねねたは成功の証ってやつだ」

何代も続く商店の中には、行商人から店を構えるまでになった者を見下す風潮があり、商業都市又は商人の街と言われるここアーセナクトでは、それが顕著であった。

「俺に言わせれば、そいつらも数代前は小さな商店や行商人上がりだったんだ。そいつらに出来て俺に出来ない道理はないからな。」

言いたい奴には言わせておくさ。俺は商売でそういう輩を超えればいいだけの話だ」

そう豪語する精力溢れる商人は、付け加えるように「成功すれば美味しい物も食える。それに痩せ細った店主より恰幅の良い店主のほうが客としても安心できるからな」と、出っ張り始めている自らの腹の肉を摘んで豪快に笑った。

「まあ、こういう奴だ、シュウイチロウ。ヒトとしての性格は少々アレだが、商人としては信用していい。」

アーセナクトでの情報網もそれなりに持っている奴だから、お前の知りたいことが幾らかは分かるかも知れんぞ」

「何だ？ヤスキは何か探し物でもしているのか？」

コタールの言葉を聞き咎めたマリポーが表情を変えて尋ねてくる。商人にとつては、情報も立派な商品の一つであり、どのような情報にせよ商売に関する引き出しに保管しておくことは決して無駄にはならない。

コタールと修一郎を見つめるマリポーの目は、先ほどまでの単なる豪快な中年男の目から、商売人のそれに変わっていた。

「いえ、探し物というか……」

修一郎が事情を説明すると、マリポーは腕組みをしながら唸る。

「なるほど……。元の世界に戻る方法が……。残念ながら、今俺が持っている情報の中には該当するようなモノはないな。」

だが、俺も最近は何入れの関係で各地に行くことが多くなってきたからな。折を見て、異世界人に関する話がないか訊いてみよう」

「宜しく願います」

畏まって頭を下げる修一郎に、砂色の髪をした商人は、礼は向こうの世界の話でも教えてくれればいい、と笑う。

「こう見えても、マリポーさんは他人思いな所があるのよ。心配しなくてもいいわ、シユウイチロウ。」

次にこの街を訪れるときには、何か良い報せを持ってきてくれるわよ」

それまで黙って夫とその友人の遣り取りを聞いていたハーベラが、修一郎を励ますように口を開いた。

マリポーはそんな彼女に、太い眉毛を八の字にして抗議する。

「『こう見えても』とは酷いな、ハーベラ。俺ほど思いやりがあつて優しい男なぞ、そうは居ないぞ。

それに、相変わらず人使いが荒いことだ。分かったよ、何とか過去の異世界人について調べてみるさ」

「あら、人の使い方は貴方から学んだことよ？昔は、うちの人を散々こき使ってくれてたじゃない」

澄ました表情で応じたハーベラであつたが、すぐに悪戯っぽい笑顔に変わる。

コタールに及ばないものの、ハーベラもマリポーとは旧知の仲である。お互いに軽口を叩き合うのは、昔から日常の光景の一つであつた。

「まったく……。とんでもない女性を嫁さんにしたな、コタール。お前の日々の苦勞が窺えるよ」

「ふん。これでこそ行商人の妻だ。

悪いが、俺には褒め言葉にしか聞こえんね」

マリポーが肩を竦めながらコタールに話を振るが、その相手は一向に気にしたふうもなく、妻と同じように澄ました表情で答えただけであつた。

「いつまでもそうやって惚気てる。付き合っておれん」

長い付き合いの友人同士が交わす会話を、異世界人の男は眩しそうに見つめるだけだった。

その後、コタール率いる隊商は、アーセナクトから西の工業都市アーラドルへと向かい、そこから北へと進路を変えてティタテラ城塞、国境の街ゴステアへと足を伸ばし、ゴステアから引き返すようにアーセナクト、南の港湾都市ダリン、王都アーオノシユ、東の農業都市ナダルへと、アルタスリーア王国内で行商を続けた。

初めて訪れる街では、コタールが気を遣ってくれたのか、最低でも一週間は滞在することとなり、その間に修一郎は異世界人に関する話を訊いて回ることが出来たが、結果はいずれも修一郎を満足させることの出来るものではなく、長身黒髪の異世界人を落胆させた。

修一郎が淡い望みに縋ろうと、その度に落胆しようと、月日は容赦なく流れていく。

五度目のアーオノシユ来訪時には、コタールが行商を再開してから既に二年が経過していた。

アペンツェル家の長男セギユールは二十一歳になり、今ではコタールからある程度の仕入れ交渉を任されるまでになっている。

次男のカーロンは十八歳になり、隊商に参加している行商人の中で、剣を扱うことの出来る者に教えを請うて、そんな行商人たちと共に隊商の護衛を勤めるようになっていた。

十七歳の長女パルメルは少女から大人の女性を感じさせる体型へと変わり、自らの目標である魔法院に入るべく、旅の傍らに買い漁った本を読んで勉学に勤しんでいる。

三男で末っ子のランシユは、つい先日六歳になったばかりで、セギユールやカーロンに対するように修一郎に対しても“にーちゃん

”付けて呼び、本当の兄のように慕っている。

年齢から言うと、親子でも通りそうな歳の差であったが、“シユウイチロウおじさん”と呼ばれないだけ有難いと思いなさいな、とハーベラは笑ったものだ。

「そろそろ国外に足を伸ばしてみようと思う」

アーオノシユに取った宿の一室に、修一郎を含むアペンツェル一家の全員と主だった隊商の面子を集めて、コタールが切り出した。

隊商に参加している行商人の中には、バンルーガ王国出身の者も居り、そういった者たちからアルタスリーア国内で商売を続ける現状に不満の声が上がり始めたのだ。

隊商は目的を同じとする行商人の集まりであるので、その目的が違えばいつでも離脱可能であったが、コタールが率いる隊商は商機を的確に把握し、然るべき場合に然るべき商品を仕入れて需要がある街へ赴くので、単純に利益の面から考えると彼らに文句はなかった。

しかし、それ故に生まれ故郷……ひいては出身国にも何らかの益をもたらしたいと考える者が始めたことも事実であり、そういった者たちはコタールの隊商を抜けることなく、故国でも商売を成功させたいと望んでいるようであった。

また、三男のランシユも六歳になり、国を越えての長旅にも耐えられるようになったとコタールが判断したこと、アルタスリーア国内における異世界人の主だった情報を調べつくした修一郎が、他国の記録について考えを巡らせていることに気付いたことも、その要因であったようだ。

「私は構いませんよ。コタールさんの隊商について廻ればまず損はしないでしょうからね」

セギユールと仲の良い犬人族の行商人が、賛同の意を表した。

「正直なところ、俺はその言葉を待ってたんだ。もう国には六年も戻ってない。そろそろ一度戻って、家族に俺の成功した姿を見せたいと思っただけだから」

バンルーガ王国出身の人間族の行商人が、文字通り待ってましたと言わんばかりに膝を叩く。

「あたしゃどつちでも構わないよ。儲けさせてもらえるなら、どこへだって行くさ」

行商人では珍しい独り身の猫人族の女性が、自分の意見を述べる。行商人になる前は冒険者をやっていたようで、この商売に就いてからそれほど経っていなかったものの、なかなか商売上手で隊商の中では中堅といったところだ。

ちなみに、彼女はカーロンの剣の師匠でもあった。

部屋に集った行商人たちが各々自分の意見を口にする中、コタールが自分の家族に向かって尋ねる。

「お前たちはどうだね？もし、残ると言うのであれば、またここに家を確保するが」

「俺は当然父さんに付いて行くよ。他の国での商売のやり方を学ばないといけないしね」

セギユールは即答に近い早さで、父に同行する旨を伝えた。

「親父たちを護るのが俺の役目だからな。俺も兄貴と同じだ」

カーロンは腰に巻いた皮のベルトに手をやりながら応じる。旅の最中そのベルトに差している長剣は、騎士と警護団に所属する者を除いて街中では携行できないため、王都滞在中は警護団に預けてある。

「私は……そうね。魔法院に入るには後一年猶予があるから、これを最後の旅にしても良いかもね。

一度くらいは他の国も見てみたいし」

暫し考えた後、パルメルも二人の兄の意見に同意する。

「え？何？バンルーガに行くの？行く！俺も行く！」

「ふふ……。どうやら全員あなたについて行くつもりのような。

もちろん、私とシュウイチロウも行くわよ。ね？」

単に外国に行けることに喜ぶランシュを見て笑いながら、ハーベラが修一郎に視線を向ける。

その口調は、問い掛けというよりも意思確認に近い。

「はい」

自分の行動に関して有無を言わせずハーベラに決められた修一郎であったが、元々他の者が同行せずとも自分だけでもついて行くつもりであったらしく、何ら異議を唱えることはなかった。

結局、修一郎を含むアペンツェル一家は、今までどおり全員で行動することとなった。

隊商に参加している商人の中には、数名ながらアルタスリーア国内に留まることを望んだ者もいたため、その者たちは隊商から離脱し、コタールは商館にて隊商参加者の追加募集を行った。

また、国境を越えて北へ向かうことから、隊商を護衛する者の募集も併せて行っていた。

これは、アルタスリーア王国とバンルーガ王国の公路における治安の違いと、魔獣や野盗に遭遇する確率が高い山間部を通る可能性があることから、隊商参加者が兼任する護衛だけでは、本格的な戦闘になった場合にいささか心許ないためである。

冒険者組合から派遣されてきたのは、三人の冒険者であった。

彼らの中で対外交渉を担当していたのは、シルト・ラランドと名乗る人間族の少女で、特段整った顔立ちというわけではなかったが、やたら人懐こい笑顔が印象的であった。

残る二人は、グラナとフォーンロシエといい、それぞれ狼人族と人間族だとコタールに告げた。

狼人族のグラナは口数の少ない男性で、それに輪をかけて寡黙であったのがフォーンロシエだ。

グラナは話し掛けられれば簡素ながらも会話が成り立つのだが、フォーンロシエは無表情のまま態度で示すか、言葉を発しても「分かった」「断る」といった、あからさまに隔意を持った口調で応える程度であった。

その度にシルトが引き攣った笑顔で取り成していたが、旅を始めて三日も経つ頃には、コタールたち行商人もあいつた人物なのだと思うことにしたようで、それに合わせた対応をするようになっていた。

「ここで二日ほど商売をしたら、いよいよ国境を越えてバンルーガに入る。」

ラランドさん、貴女方もそのつもりで準備をしておいてもらいた
い」

国境の街ゴステアに到着し、市壁の審査所を何のトラブルもなく通過したコタールが、一同に向けて告げる。

季節は秋の三の月に変わり、国土の最北に位置するゴステア周辺では、朝晩の冷え込みが厳しくなってきた。

ここよりさらに北に位置するバンルーガ王国の山間部では、既に雪がちらつき始めているという話も聞いている。

アルタスリーア出身の者が行商を行うには、悪天候や公路を覆う雪で移動が困難になるといった辛い季節となるが、それだけに他国の商品は有難がられるため、商人たちの意気込みは高く、ゴステアに到着してすぐに、それぞれ目的の場所へ向かい商売を始めていく。

アーオノシユとアーセナクトで仕入れた商品の三分の一を売り捌き、ゴステアで仕入れた木炭やブドウ酒といった商品と併せて、残りはバンルーガで売るつもりの方が殆どだ。

コタールはハーベラと修一郎を連れて、得意先である数軒の商店を廻り、運んできた荷物を手際よく売っていく。

セギユールは、既に顔見知りの店を開拓しているようで、父親とは別行動で商売を行っていた。

三軒目の店を出たコタールは、修一郎に向き直り、懐から財布を取り出した。

「バンルーガは、アルタスリーアなど比較にならないほど寒冷な国だ。これで防寒具を整えて来なさい。」

ただし、適正な品物を見極められなければ、必要最低限のものすら揃えることが叶わない額しか渡さない。

お前も行商の仕事を傍で見ているのだから、それくらいは出来るはずだ。いや、出来ねば困る」

真剣な、と言うには厳しすぎる面持ちで十数枚の硬貨を渡すコタ

ールは、修一郎の目を見ながら続ける。

「お前が何を考えて日々を過ごしているのかは、あまり詮索してこなかったが、今後もこの世界で生きていくのならば、何らかの職に就かねばならないことは分かっているだろう。」

前にも言ったが、俺が教えてやれるのは行商人としての知識くらいなものだ。

行商人になるつもりがないのならば、お前とはここで別れたほうが良いと思っている。

もうこの世界で何年も暮らしているんだ。別に商人以外で生計を立てることも可能なはずだからな。

決めるのはお前だよ、シュウイチロウ」

手渡された硬貨に視線を落としたまま微動だにしない修一郎を、ハーベラは黙って見つめている。

彼女の子供たちは、幼いランシュはともかくとして、既にそれぞれの将来に向けて動いているのだ。

セギユールやカーロン、パルメルに出来て、成人である修一郎に出来ない道理はない。

世界は違えども、修一郎も一度は社会に出て自らの食い扶持を稼いでいたのだから。

「……ありがとうございます、コタールさん。お金は有難く“お借りします”。」

夜までには宿に戻りますので、心配しないでください」

暫く俯き加減で考え込んでいた修一郎であったが、やがて上げた顔には、どこか吹っ切れたような清しさを感ぜさせる表情が浮かんでいた。

「行つてらっしゃい、シユウイチロウ。」

晩ご飯はこの名物のシチューを食べる予定なのだから、あまり遅くならないようにね」

実の我が子にかけるものと同じ柔らかかな口調のハーベラと、彼女の横に立つコタールの顔には、優しい笑みが溢れていた。

国境の街並みに夜の闇と乾いた冷気が降り始める頃、修一郎は自らの言葉どおり宿に戻ってきた。

戻ってくることは疑いもしなかったアペンツェル夫妻であったが、長身黒髪の異世界人の後ろに立つ二つの人影を認めて、彼らは驚くことになった。

そこには、修一郎と自らの防寒具を担いだ狼人族の男性冒険者と、今まで見せたことのない笑顔を浮かべた人間族の女冒険者の姿があった。

何があつたのか、と訊ねるコタールに、

「途中でグラナさんとフォーンロシェさんに出会いました。」

ちょうど彼らも防寒具を買うようでしたので、ご一緒させていたいただきました」

と、にこやかに答える修一郎。

「おかげで、良い品物を手頃な値段で買えました」

そう言って呑気に笑う修一郎に、見事な黒髪の女冒険者が相槌を打つ。

「当然でしょ。一度に三人分も買ってあげたんだもの。あの程度の値引きじゃ足りないくらいよ」

「馬鹿者。彼らにも生活があるんだ。程々にしておけ」

豊満とは言えない胸を反らせて得意げに語る冒険者の頭を、狼人族の男性が軽く小突く。

「はは……。でも、あれだけ買っていただければ充分ですよ。予算内で全部揃えることが出来ましたし」

笑顔のまま、修一郎はズボンのポケットから三枚の硬貨を取り出すと、コタールに手渡した。

「これがお釣りになります。“お借り”した分は、いつか必ずお返ししますので」

そこそこの品質の物を揃えられれば上出来、最悪、外套と防寒靴程度しか買えないのではないかと考えていたコタールは、手の平に載せられた硬貨を見つめて言葉を失う。

「実を言うと、値段交渉の半分はこちらのフォンロシエさんに手伝ってもらったようなものなのです。

ですから、全て自力で何とかしたわけではなく、“ずる”をしたようで、いささか決まりが悪いのですが……」

表情を情けなさそうなものに変えて、修一郎が事情を説明した。

「それで、そのお礼と言っては何ですが、どうせなら晩飯も一緒にできないか、と私から持ちかけまして」

「邪魔であるならば言ってくれ。それで気を悪くするようなことはしない」

おずおずと切り出した修一郎を庇うように、グラナが口を開く。

「ま、冒険者なんかと一緒に飯を食べるか！って喚くヤツも居るしね」

どこか投げ遣りにフォンロシエがグラナに続いた。

「とんでもないわ。私たちは歓迎するわよ。
さあ、グラナさんたちも座って座って」

呆然としたままの夫と、その原因を作り出した修一郎たちを面白そうに眺めていたハーベラが、逸早く三人に席につくように勧める。

「これからも一緒に旅をする仲間ですもの。冒険者だとか行商人だとかは関係ないわよ。ね？あなた」

話を振られて漸く我に返ったコタールが、慌てて首肯する。

「あ、ああ、勿論だ。むしろ我々行商人は、様々な面で冒険者の世話になることが多い。

それに食事は」

「大勢で食べるほうが美味しい、でしょ？」

コタールに最後まで言わせることなく、ハーベラが結論を口にした。

「ありがとうございます」

修一郎は軽く頭を下げると、後ろを振り返ってグラナとフォーノンシエを見遣る。

「では、ご一緒させてもらおう」

「やった！シチューだー」

「はしゃぐな、馬鹿者」

騒がしく席につこうとする冒険者たちを笑顔で見つめていた修一郎に、ハーベラから声がかかる。

「じゃあ、シユウイチロウ。悪いけど、子供たちを呼んできてくれる？」

コタールたちが泊まっている宿は、一階部分が食堂、二階以上が宿泊施設となっているこの大陸の典型的なタイプであった。

分かりました、と答えて二階に続く階段を上がる修一郎の耳に、宿の主人を呼ぶハーベラの声が聞こえてくる。

皆で楽しく食事を始めて暫く経った頃、一人だけ放っておかれたシルトが半泣きで怒鳴り込んで来るのは、また別の話である。

余話・其の一 とある虎人族の日常（前書き）

このお話は、修一郎がアーオノシユに出張している間、留守を任されたグラナたちとルキーテのお話です。

ルキーテ（元・ルキドウ）が自分の素性を明かした後の修一郎の対応や、冒険者二人との遣り取りを書いたものです。

二十話までの本編同様、戦闘や大きな山場となるようなシーンはありません。

二十一話がなかなか思うように進まず、本当であれば本編終了後に書こうと思っていた外伝のお話を気分転換として、先に書かせていただきました。ある意味、現実逃避かも知れません。ごめんなさい。

これを読まなくとも本編を読むのには影響はありませんし、ネタバレ的な内容もありません。

それでも宜しければ、暇つぶしにでも読んでいただけると幸いです。

余話・其の一 とある虎人族の日常

あの夜、修一郎に自分の正体を明かしたルキドウは、自分が抱いていた恐怖が杞憂に終わったことに安堵した。

長身の人間族は、ルキドウの性別がどうであれ、保護者と被保護者の関係に変わりはない、と言い切ったのだ。

「君がここに居たくないと言うのなら、私は引き止めませんけどね」
言葉面だけ見れば、突き放したようにも取れる台詞であったが、その口調はいつもと変わらぬ柔らかなもので、彼の表情も同じく柔らかいものであった。

「シユウイチローを騙してたんだぞ？お、怒らないのか？許してくれるのか？」

それでも念を押さずには居られなかったルキドウに、修一郎は不思議なモノを見るような顔で、当然のように告げた。

「許すも何も、君が男の子か女の子かというだけでしょ？」

この際です。君の本当の名前を教えてくださいませんか。

それと、口調も元に戻してもいいんじゃないかと思えますよ」

「……もしかして、気付いてた？」

「なんとなく、ですけどね。」

ただ、虎人族に出会ったのが初めてだと言ったのは嘘ではありませんから、自信がなかったのも確かですね」

そもそも、こちらの世界に来て九年経っているとは言え、修一郎の生まれ育った世界では、獣人族という種族は存在していないのだ。犬や猫の性別を一見してすぐさま判別出来ないように、獣人族の性別も顔を見ただけでは未だに迷うことがあるくらいである。修一郎が一目で判別出来るのは、背中の翼以外は人間族そっくりな鳥人族だけだ。

体格や声、口調などから男性か女性かを判別できていたのも、成人した獣人族に対してであって、それが子供となると直接確かめるか、自己申告に頼るしかない。

しかし、直接確かめるとなると、そういった行為はこの世界でも犯罪にあたるため、結局は相手の言うことを信じるしかなかった。

「オレの……わたしの本当の名前は、ルキーテ。ブランの娘、ルキーテ」

人間族とは違い、獣人族に基本的に姓はない。エルフ族のクローフルテと同様に、氏族名か部族名、または誰々の息子・娘と表現する。

ルキーテの場合は、人間族風と言えば、ルキーテ・ブランということになるのだろう。

「ルキーテ、ですか。可愛らしい良い名前ですね。」

では、これからはルキーテと呼ぶことにしましょう。

ああ、口調は直ぐには戻せないようでしたら、以前のままで構いませんよ」

小さく笑って自分の名前を褒めてくれた修一郎に、ルキーテは素直に従うことにした。

「うん。そうする」

風呂から上がったルキーテは、長屋時代に修一郎が買い与えた服のままだったが、服から覗く手足は今までと違い、見事な黄と黒の縞模様であった。

長屋では、精々が盥たらいに湯を張つての湯浴み程度しか出来ていなかったため、体毛に染み付いた汚れを完全に落とすまでは至らなかったのだ、

だが、風呂に浸かり、石鹸を手にしたフォーンロシエに徹底的に体中を洗われたルキーテは、今や虎人族本来の毛並みを取り戻している。

生まれたばかりの時に生えていた産毛は見事に生え変わり、成人の虎人族と変わらない、目にも鮮やかな黄色と黒の、文字通りの虎縞であった、

「狼人族の毛並みもいいけど、虎人族のこの縞模様もいいわねー」

ルキーテと同様に風呂上りのフォーンロシエは、首にかけたタオルで自慢の黒髪についた水気を拭き取りながらも、片手でルキーテの頭を撫でつつ、上機嫌であった。

半袖のシャツに修一郎の世界で俗に言うパンティだけといった、あられもない格好であったが、本人は気にするふうでもなく、修一郎の目の前に立っている。

聞く所によると、この形状の下着も以前に異世界人が持ち込んだものの一つであるらしく、今ではこの大陸の女性にそれなりに受け入れられているようだ。それより前の主流は、所謂ドロワーズのような形状であったらしいが、これも数百年前に存在した異世界人が作った物であると聞いたことがある。

時間軸的に違和感を覚えた修一郎ではあったが、元の世界で女性用下着についてそこまで詳しく調べたことなどなかったため、あま

り深くは追求しないことにしたのであった。

それはともかくとして、だ。

修一郎は、出来るだけその姿を見ないようにしながら、女冒険者を窺める。

「ロシエ。ルキーテのことより、貴女はまず何か着てください。グラナに見つかって、また怒られても知りませんよ」

フォンロシエのこういった姿は初めてではないものの、修一郎も一応は成人した男性である。

幾分、女性らしさに乏しい体つきとは言え、若い女の下着姿を目にして平然としていられるほど、枯れてもいない。

「“お風呂”から出たばかりで暑いんだもん。素っ裸ってわけでもなし、気にし」

「いいですか、ルキーテ。君は、決してあのようになってはいけませんよ？」

彼女は特殊なんです。羞恥心だけは失くさないでくださいね」

フォンロシエが反論しようとするが、それを言い終わるより早く、修一郎がルキーテに向き直り言葉を発する。

「ちょっとお！あたしのお話を聴きなさいよ！

というか、特殊って何よ！第一、羞恥心くらいあたしにもあるわよー！」

「その格好のどこに羞恥心があるんですか……。」

とにかく、いいですねルキーテ。女の子なら慎み深くあるべきです。分かりましたね？」

修一郎の世界では時代遅れと呼ばれかねない発言であったが、幸か不幸かこの世界での女性観は、なんとかぎりぎりまで修一郎のそれと合致していたようである。

加えて、いつにない真剣……というより鬼気迫る表情の異世界人に、ルキーテは半ば無意識に頷いていた。

「う、うん。わ、わかった……」

虎人族の少女の答えに、満足げな笑みを浮かべる修一郎の後ろでは、未だフォーンロシエが抗議の声を上げていたが、修一郎は完全に聞き流している。

一度は自分に割り当てられた部屋に引っ込んだグラナが、階下の騒ぎを聞きつけて姿を現したのはその直後のことであった。

半ば本気で頭を叩かれ、涙目になりながらグラナの説教を受けているフォーンロシエに、ルキーテは同情しなかったが、保護者である修一郎から寝間着を羽織るように言われたので、二階にある自室へと足を向ける。

階段を上がりきったところで、黒髪の混血者が発した「だってえ」という情けない声が聞こえてきたが、

「だって何もあるか」

「だってではありません」

と、相方の狼人族と旧知の人間族が、異口同音に彼女の反論を封じたことに、ルキーテは小さく笑い声を漏らしたのだった。

修一郎の突然の王都行きが決まり、慌しく準備を終えて、旅立って行ったのが今朝方。

偶然というか運良くというか、グラナとフォーンロシエが暫くの間はアーセナクトに滞在する心積もりであったため、修一郎は寢床を提供する代わりに、ルキーテと家の面倒を二人の冒険者に託した。旧知の間柄とは言え、二人を拘束することに変わりはなく、修一郎は正式な依頼として報酬の話を持ち出したのだが、グラナもフォーンロシエも頑として金銭の受け取りを拒否した。

そこで折衷案として、修一郎が戻ってくるまでの間の食費を、修一郎が負担するという形で話は落ち着いたのだが、今度は誰が調理を担当するかで揉めることとなった。

修一郎の王都行きは、下手をすると一ヶ月近くになるかも知れない。その間、食事の全てを外食で賄うわけにもいかないのだ。

居間におかれたテーブルにグラナ、フォーンロシエ、ルキーテの三人が顔を突き合わせ、正にその議論の真^{なす}最中である。擦り付け合いと言い換えてもいい。

「そりゃあ、あたしも多少は料理できるよ？」

でもね？こういうのって、やっぱりちゃんと教えてもらったヒトがやるべきだと思うのよね」

いささか饒舌気味なのはフォーンロシエである。言い分は尤もであるが、暑くもないのに頬に流れる一筋の汗が彼女の心情を物語っている。

「俺が出来るのは、旅の間にする、“簡単な料理”と呼べるかすら怪しい料理くらいだ」

グラナは至って冷静に、自己の技量を正直に話す。

たしかに干し肉とその辺の食用可能な野草を放り込んだシチューもどきや、小麦粉を塩と水で練った塊を葉に包んで熾火で蒸し焼きにしたものを、まともな料理と呼んで良いのかは意見の分かれるところだろう。

良くも悪くも、フオーンロシエとグラナの習得している調理技術は、旅の道中、野営する際に役立つものであり、飽くまでも手早く作れ且つ適度に腹が膨れ、それで暖を取ることが出来る程度のものであった。

「オレ……わたしだって、まだシュウイチローから簡単な料理しか教わってないし、火を使う料理はシュウイチローが傍に居るときじゃないと出来なかつたし……」

ルキーテとしては、別段料理が苦手だとか面倒だとか感じているわけではない。好きか嫌いかで言えば、料理をするのは好きだ。ただ、自信がないのだ。

修一郎は料理が趣味であると曰ころから口に行っているように、こちらの世界の料理は勿論、向こうの世界の料理も何度もルキーテに披露し、教えてもいる。

だが、普段は修一郎の仕事があるため、なかなかまとまった時間が取れず、腰を据えて料理を教わったことは、ルキーテの片手に余る回数しかなかった。

大抵は、夕食を作る際に修一郎の傍で、その手順や味付けのコツなどを口頭で教えてもらうくらいである。

「少しでも修一郎の手ほどきを受けてるんでしょ？ だったらルキーテが料理するのがいいんじゃない？」

大丈夫よ、あたしたちも手伝ってあげるから。ね、グラナ？」

ここぞとばかりにフオーンロシエが畳み掛け、グラナに同意を求

める。

「俺が出来るのは食材の調達と薪の補充くらいだ」

明言こそしなかったものの、グラナもルキーテが調理を担当するのが最良であると判断したようだ。

単に言葉どおりのことしかするつもりがないのかも知れないが。

「うーっ……。分かったよ！

その代わり、味の保証はしないからな！どんな料理が出来上がったても文句言わずに食べるよな！」

どうやっても二対一のこの現状を覆せないと悟ったルキーテは、投げ遣りに応じた。

「りょーかいりょーかい。修一郎も暫くは帰って来れないみたいだし、気楽に行こうよ、ルキーテ。

あたしたちだって別に育ちがいいって訳でもないし、食べられればそれでいいんだからさ」

微妙に慰めになっていない慰めの言葉を口にしながら、フォーンロシエが笑顔で虎人族の少女の肩に手を置く。

「……じゃあ、フォーンロシエ。グラナと一緒に食材の買出しに行つてきて」

意趣返しとばかりに、ルキーテが悪戯小僧のような笑みを浮かべて早速指示を出す。

「ウチにある買い置き食材じゃ、今日の晩ご飯は作れないからね。

今から言うつモノを買ってきてよ。店の場所も教えるから。お金はシュウイチローから預かってるんでしょ？」

ルキーテは椅子から立ち上がると、台所へ向かって歩き出した。もうじき昼になるが、昼食は修一郎直伝のサンドイッチでいいだろう。

夕食はいきなり手の込んだ物を作って失敗なぞしようものなら、初日から立ち直れなくなりそうなので、簡単な煮込み料理とパンにするべきか。

そんなことをぶつぶつと呟きながら、調理台の下にある収納スペースに保存されている食材を確認するルキーテの後姿を見て、一人は感心したように小さく笑い、もう一人は呆気にとられた表情を浮かべる冒険者たちであった。

夕食は、ナズ河で獲れたマスに良く似た川魚と数種類の根菜のスープに、ハーブを練りこんだパン、フォーンロシエの独断で買った干し果物がデザートとしてテーブルに上った。

ちなみに、調理に関しては灰汁取りまで教わっていたルキーテに、フォーンロシエは手伝うどころか、逆に教わる始末であり、グラナを呆れさせた。

食事が終わり、食器の片付けも終えて虎人族の少女が台所から居間に戻ってくると、黒髪の女冒険者が待ち構えていた。

「さあ、お風呂の時間だよ！」

「あ、うん」

ルキーテは返事をしながら女冒険者の相方を探すが、居間にその

姿はない。

「ん？ああ、グラナ？アイツは今日も体を拭くだけでいいって。まったく、狼人族のお湯嫌いも困ったものよね」

ルキーテの表情から察したフォンロシエが、腰に手を充てて嘆息する。

そう言うフォンロシエも狼人族の血が混じっているのだが、それも遙か昔の先祖の話で、本人は外見も感性も殆ど人間族と変わらない。

「お風呂から上がってからでいいからさ、アイツ用にお湯を沸かしてやってくれないかな？」

あ、面倒ならお風呂のお湯を持って行ってもいいかな」

脱衣所がないため、居間で衣服を脱ぎ、修一郎が用意した脱衣籠へとそれらを放り込んだ二人は、タオルを片手に裸のまま風呂場へと向かう。

この光景を修一郎なりグラナなりが目にしていたら、間違いなく女性陣二人に対して小言が降り注いでいたことだろう。

浴槽の湯は、ルキーテが夕食の準備をしているうちに、グラナが沸かしてくれていたようだ。

風呂場の扉を開けると、僅かな湯気が廊下へと流れ込んでくる。予め、換気用の小窓は開けていたのだが、それでも風呂場の中は一目で分かるほどに湯気が立ち込めていた。

「このさ、“風呂場”に入った瞬間の、お湯の匂いっていうのかな？これ、好きだな」

フォンロシエに続いてルキーテが風呂場に入り、後ろ手で扉を

閉めると、黒髪の少女が湯気を吸い込むように鼻を鳴らした。

「盥に張ったお湯の匂いとも違うし、お湯に浸したタオルの匂いとも違うんだよねー」

湯船の縁に置かれていた木製の片手桶を持ち、中の湯を汲みながらフォンロシエが言う。

桶に汲んだ湯の温度を空いた手で確認し、肩口から全身に流す。それを三度ほど繰り返し返してから、フォンロシエは湯船へと、その小麦色の脚を浸した。所謂かけ湯と言う行為だ。

この辺りの“日本の浴室でのマナー”については、事前に修一郎からしつこいまでに釘を刺されており、奔放な性格のフォンロシエも律儀にそれを守っている。流石に、修一郎が実地で教えるわけにもいかず、口頭であったが。

フォンロシエから片手桶を渡されたルキーテも、同じようにかかけ湯をした後、湯船に浸かる。

かけ湯をした時点では、濡れて体に張り付いていた虎縞模様の体毛が、湯の中に入るとふわりと広がった。

「ふう……」

思わずため息を漏らした虎人族の少女に、混血者の少女が笑いながら問い掛ける。

「ルキーテも“お風呂”が気に入ったようね？」

「うん。元々水浴びとか好きだったし。

でも、寒い時期は“お風呂”のほうがいいね。上がった後で体を拭くのが大変だけど」

「ふふつ。廊下がびちゃびちゃになつちやうからね。」

修一郎が帰ってきたら、着替え用の小部屋を作つてもらつよう
お願いしよつか」

現状は風呂場の入口の前に大きめのタオルを敷き、事前にタオル
で体を拭いてから風呂場を出るものの、それでも廊下は濡れてしま
う。

加えて、入る前に衣服を脱ぐ場所がないため、今回のように居間
で脱いで裸で風呂場まで行くか、廊下で脱がなければならぬのだ。
いくら大つぴらなフオーンロシエでも、流石に裸で家の中を歩き
回って何も感じないほど無神経ではない。

王族や貴族が利用しているというサウナにも、脱衣所と呼ばれる
小部屋があると聞いている。

「でも、そんなことしたら、またお金かかるんじゃないかな……」

邸宅とは呼べないまでも、それなりに広く程度の良い家を購入し、
それに併せて家具も相当数新たに購入しているのだ。

いくら修一郎が実は裕福であったと言っても、御伽噺に出てくる
ような無尽蔵に力ネが湧き出る壺を持っているわけでもない。

子供心ながらに、修一郎の懐具合を心配するルキーテであった。

「お願いするだけならタダだからね。修一郎だつて家の中を水浸し
にされたくはないだろうし。」

ダメで元々つてヤツよ。少しくらいならあたしもお金出してもい
いしね」

湯船の中で綺麗な肢体を伸ばし、寛いでいたフオーンロシエは丸
きり他人事のような口調で応える。

ルキーテも風呂は気に入っていたので、気軽に使えるようになる

のは喜ばしいと思うのだが、なにせ被保護者の身の上である。

自分で力ネを稼ぐことが出来るようになれば、また違ってくるのだろうが、現状ではこの女冒険者のように思ったことを口にすることは躊躇われた。

独りになつて修一郎に出会うまでは、盗賊紛いの振る舞いをしていたルキーテであつたが、それは生きていくために仕方なしそうしていたのであつて、本来はどちらかと言えば大人しい性格である。

修一郎に自分の素性を明かしてからこっち、少女は元の姿に戻りつつあつた。

「お金……か……」

耳に湯が入らないように気をつけながら、湯船の中で全身を弛緩させている隣のフォンロシエのように身体を伸ばして、ルキーテが呟く。

「なに？ルキーテはお金が欲しいの？」

「うん……。あ、もちろん今までのような方法じゃなくて、ちゃんと働いて稼いだお金を、だけどね！」

過去の行いから邪なことを考えていると思われなくなつたのか、虎人族の少女が慌てて身体を起こす。

そのせいで、撥ねた湯がフォンロシエの顔にかかってしまったが、相手は気分を害した様子もなく、少女を宥めた。

「うぶつ。お、落ち着きなさいよ、ルキーテ。

あなたが良からぬことを考えてる、なんて思っていないから」

「あ、い、いめん……」

しよげ返るルキーテを湯気越しに見遣り、それを微笑ましく思いながらフォーンロシエが言う。

「修一郎に頼りきりになるのが嫌なの？それとも、一日も早くここを出て行きたいとか？」

「出て行きたいとは思ってないよ！
でも、シュウイチローに迷惑をかけるのは……なんか嫌なんだ」

最初こそ語勢は強かったものの、話すうちに次第にそれは弱弱しいものになっていく。

それがルキーテ個人としての思いなのか、虎人族としての矜持なのか、フォーンロシエにはすぐには判断がつかない。

恐らく、その両方なのだろうと、混血者の少女は推察して話を続けた。

「確かに、あなたくらいの歳で既に働いている子がいないわけではないわ。

あたしが冒険者に成り立ての頃に知り合った仲間にも、あなたの年齢と大して違わないくらいの娘がいたしね。

でもね？そんな子の殆どは、そうするしか生きる術がなかったからよ。ルキーテなら分かるでしょ？」

「……うん」

天井から滴り落ちた水滴が湯面に当たり、小さな音をたてる。

その音と同じくらいの、小さな返事がルキーテの口から発せられた。

「だけど、今のあなたには修一郎が居る。これが何を意味してるかも分かるわよね？」

「うん」

発した言葉は先ほどと全く同じであったが、今度はいくらかその声は大きい。

「それを“恩”と思うのはいいけれど、負い目に感じちゃだめ。恩ならいつか返せばいいだけのことなんだから。

焦る必要はないわよ。今は生きるための知識と力をしっかりと身に付ける時だと、あたしは思うけどな」

「それまでシュウイチローは待つてくれるかな。わたしが傍に居てもいいって言うてくれるかな」

思わず口をついて出てしまった言葉に、当の本人が驚く。

自分はいつの間に、ここまで修一郎を頼りにしていたのか。いつの間に修一郎の存在が自分の中でこれほど大きくなっていったのか。

だが、その思考は直後に頭からかけられた湯と言葉に、一瞬にして中断させられてしまう。

「なあにバカなこと言ってるのよ。修一郎がただの気まぐれでアンタを保護したとでも思ってるの？」

長いか短いかは分かんないけどさ、それでも他人の人生の一部に介入するってことは、そんな軽いものじゃないわよ」

ルキーテに湯をかけた相手の表情は、先日「修一郎を騙そうとしているのか」と、詰問してきた時と同じく険しいものであった。

「……………」

フォンロシエの発する氣勢に気圧されて、黙り込むルキーテ。

「……安心しなさいよ。修一郎はアンタをそんな簡単に放り出した
りしないって。」

あたしも、グラナも保証したげる」

幾分、口調を和らげて黒髪の冒険者が続ける。

世間一般には、冒険者の口約束などアテにする方がおかしいとま
で言われているが、ルキーテは素直に信じることにした。

グラナとフォンロシエの修一郎に対する態度は、旧知の間とか
そういったものを通り越して仲間として振舞っているように見えた。
三人がどうやってその関係を築いたのか、今のルキーテには知る
由もないが、そんな彼らが自分を弄ぶようなことはしないと直感的
に思えたのだ。

「分かった。今はとにかく色々頑張ってみる。」

将来、わたしが何を目指せばいいのか、それも含めて」

漸くいつもの調子に戻って、ルキーテが笑顔を浮かべると、フォ
ンロシエも彼女に笑顔を向けた。

「ええ。頑張んなさい。応援してあげるから」

「応援するだけならタダだから？」

「言っじゃない。がきんちよのくせに」

湯船から立ち上る湯気に、二人の笑い声加わった。

翌朝、朝食の準備をしていたルキーテの元に、子鐘一つほど遅く起きたフォーンロシエがやってきて、朝の挨拶をする。

「おはよう、ルキーテ。朝ごはん作るの手伝おっか？」

「ううん。いい。もう出来上がるから」

竈にかけて鍋の中身をかき混ぜながら、背中でルキーテが答える。

「グラナは？」

「裏で薪を割ってくれてるよ」

「そっか」

フォーンロシエはカウンターに寄りかかるようにして、ルキーテの作業を見つめている。

「ねえ、フォーンロシエ」

鍋を混ぜる手を止め、黒髪の冒険者に向き直ると、ルキーテが口を開く。

「んあー？はに？」

欠伸を噛み殺しながらフォーンロシエが応じると、虎人族の少女は決意に満ちた目で言葉を続けた。

「決めたよ。」

わたし、事務員になる。そのつもりでこれから勉強する」

七年後。

アーセナクトのマリポー商店に、三人目の事務員が雇われることになる。

黄色と黒の見事な縞模様の毛並みを持つ彼女は、他の従業員に対し、ルキーテ・ヤスキ・ブランと名乗った。

余話・其の一 とある虎人族の日常（後書き）

日常と言うには、極短期間のお話ですが、ルキーテがどのように自分の将来を考えるようになり、行動する切欠があったのかを書きたかったのです。

あとは、フォンロシエとの絡みとかフォンロシエとの絡みとか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5792x/>

街の事務員の日常

2012年1月14日12時53分発行